



# Acronis Backup & Recovery 11 Server for Linux

Update 0

ユーザーズ ガイド

Copyright © Acronis, Inc., 2000-2011. All rights reserved.

「Acronis」および「Acronis Secure Zone」は、Acronis Inc. の登録商品です。

「Acronis Compute with Confidence」、「Acronis リカバリ マネージャ」、「Acronis Active Restore」、および Acronis ロゴは、Acronis, Inc. の商標です。

Linux は、Linus Torvalds の登録商標です。

VMware および VMware Ready は、VMware, Inc. の米国ならびにその他の地域における商標または登録商標です。

Windows および MS-DOS は、Microsoft Corporation の登録商標です。

ここに記載されているその他すべての商標および著作権は、それぞれの権利所有者に帰属します。

著作権所有者の明示的な許可なく本ドキュメントの実質的な修正版を配布することは禁止されています。

著作権所有者からの事前の許可がない限り、いかなる形態(紙媒体など)であっても商業目的で本ドキュメントまたはその派生物を配布することは禁止されています。

ドキュメントは、「現状のまま」で提供され、商品性に対する黙示的保証、特定の目的に対する適合性、権利を侵害していないことなどを含む明示的または黙示的な条件、言明、および保証に関する責任を負いません(免責条項の範囲が法的に無効と見なす場合を除く)。

本ソフトウェアまたはサービスにサードパーティのコードが付属している場合があります。サードパーティのライセンス条項の詳細については、ルート インストール ディレクトリにある license.txt ファイルをご参照ください。本ソフトウェアまたはサービスと共に使用するサードパーティ コードおよび関連するライセンス条項の最新の一覧については、<http://kb.acronis.com/content/7696> をご参照ください。

# 目次

<b>1</b>	<b>Acronis Backup &amp; Recovery 11 の概要</b> .....	<b>7</b>
1.1	Acronis Backup & Recovery 11 の新機能 .....	7
1.2	Acronis Backup & Recovery 11 コンポーネント .....	8
1.2.1	エージェント for Linux .....	9
1.2.2	管理コンソール .....	9
1.2.3	ブータブル メディア ビルダ .....	9
1.3	サポートされるファイル システム .....	9
1.4	テクニカル サポート .....	10
<b>2</b>	<b>はじめに</b> .....	<b>11</b>
2.1	管理コンソールの使用 .....	12
2.1.1	[ナビゲーション] ペイン .....	13
2.1.2	ワークスペース、ビュー、アクション ページ .....	14
2.1.3	コンソール オプション .....	18
<b>3</b>	<b>Acronis Backup &amp; Recovery 11 について</b> .....	<b>21</b>
3.1	所有者とログイン情報 .....	21
3.2	管理対象のコンピュータ上のユーザー権限 .....	22
3.3	完全バックアップ、増分バックアップ、差分バックアップ .....	22
3.4	ディスクまたはボリュームのバックアップに保存される内容 .....	24
3.5	論理ボリュームと MD デバイスのバックアップおよび復元(Linux) .....	25
3.5.1	論理ボリュームのバックアップ .....	25
3.5.2	MD デバイスのバックアップ .....	26
3.5.3	ハードウェア RAID アレイのバックアップ(Linux) .....	26
3.5.4	リカバリする MD デバイスの構築(Linux) .....	27
3.5.5	MD デバイスと論理ボリュームのリカバリ .....	27
3.6	SNMP のサポート .....	31
<b>4</b>	<b>バックアップ</b> .....	<b>33</b>
4.1	今すぐバックアップ .....	33
4.2	バックアップ計画の作成 .....	33
4.2.1	バックアップするデータの選択 .....	35
4.2.2	ソースのアクセス ログイン情報 .....	36
4.2.3	バックアップから除外するファイル .....	37
4.2.4	アーカイブの保存先のアクセス ログイン情報 .....	38
4.2.5	バックアップ スキーム .....	39
4.2.6	バックアップの保存先の選択 .....	49
4.2.7	アーカイブのベリファイ .....	51
4.2.8	バックアップ計画のログイン情報 .....	51
4.2.9	ラベル(コンピュータのプロパティをバックアップに保持) .....	52
4.2.10	パスワードを要求される理由 .....	53
4.3	バックアップ ファイル名指定の簡略化 .....	54
4.3.1	使用例 .....	54
4.3.2	日付変数 .....	57
4.3.3	バックアップの分割でのファイル名前付けの簡略化 .....	58

4.4	スケジューリング .....	58
4.4.1	日単位のスケジュール .....	59
4.4.2	週単位のスケジュール .....	61
4.4.3	月単位のスケジュール .....	63
4.4.4	条件 .....	66
4.5	バックアップのコピーおよび保持 .....	68
4.5.1	サポートされる場所 .....	69
4.5.2	バックアップのコピーの設定 .....	70
4.5.3	バックアップの保持の設定 .....	70
4.5.4	カスタム スキームの保持ルール .....	71
4.5.5	コピー/クリーンアップの無効期間 .....	73
4.5.6	使用例 .....	73
4.6	デフォルトのバックアップ オプション .....	74
4.6.1	その他の設定 .....	76
4.6.2	アーカイブの保護 .....	77
4.6.3	バックアップのカタログ化 .....	78
4.6.4	バックアップのパフォーマンス .....	79
4.6.5	バックアップの分割 .....	80
4.6.6	圧縮レベル .....	81
4.6.7	災害復旧計画(DRP) .....	82
4.6.8	エラー処理 .....	83
4.6.9	イベント トレース .....	83
4.6.10	高速の増分/差分バックアップ .....	84
4.6.11	ファイル レベルのバックアップのスナップショット .....	84
4.6.12	LVM のスナップショット .....	85
4.6.13	メディア コンポーネント .....	86
4.6.14	通知 .....	86
4.6.15	バックアップ処理の前後に実行するコマンド .....	88
4.6.16	データ取り込みの前後に実行するコマンド .....	90
4.6.17	コピー/クリーンアップの無効期間 .....	92
4.6.18	セクタ単位のバックアップ .....	92
4.6.19	タスク失敗時の処理 .....	92
4.6.20	タスクの開始条件 .....	93
<b>5</b>	<b>復元 .....</b>	<b>95</b>
5.1	復元タスクの作成 .....	95
5.1.1	復元元 .....	96
5.1.2	場所のアクセス ログイン情報 .....	100
5.1.3	復元先のアクセス ログイン情報 .....	101
5.1.4	復元先 .....	101
5.1.5	復元の実行時期 .....	108
5.1.6	タスクのログイン情報 .....	108
5.2	Acronis Universal Restore .....	109
5.2.1	Universal Restore の入手方法 .....	109
5.2.2	Universal Restore の使用 .....	109
5.3	起動のトラブルシューティング .....	111
5.3.1	GRUB を再度アクティブ化して構成を変更する方法 .....	112
5.4	デフォルトの復元オプション .....	114
5.4.1	その他の設定 .....	115
5.4.2	エラー処理 .....	116
5.4.3	イベント トレース .....	117

5.4.4	ファイル レベルのセキュリティ.....	118
5.4.5	通知.....	118
5.4.6	処理の前後に実行するコマンド.....	120
5.4.7	復元の優先度.....	121
<b>6</b>	<b>バックアップ データの保存.....</b>	<b>122</b>
6.1	格納域.....	122
6.1.1	格納域の使用.....	123
6.1.2	個人用格納域.....	123
6.2	Acronis セキュア ゾーン.....	126
6.2.1	Acronis Secure Zone の作成.....	127
6.2.2	Acronis セキュア ゾーンの管理.....	129
<b>7</b>	<b>アーカイブおよびバックアップの操作.....</b>	<b>131</b>
7.1	アーカイブとバックアップのベリファイ.....	131
7.1.1	アーカイブの選択.....	132
7.1.2	バックアップの選択.....	133
7.1.3	格納域の選択.....	133
7.1.4	ソースのアクセス ログイン情報.....	133
7.1.5	ベリファイの実行時期.....	134
7.1.6	タスクのログイン情報.....	134
7.2	アーカイブとバックアップのエクスポート.....	135
7.2.1	アーカイブの選択.....	138
7.2.2	バックアップの選択.....	138
7.2.3	ソースのアクセス ログイン情報.....	138
7.2.4	保存先の選択.....	139
7.2.5	復元先のアクセス ログイン情報.....	140
7.3	イメージのマウント.....	141
7.3.1	アーカイブの選択.....	142
7.3.2	バックアップの選択.....	143
7.3.3	アクセス ログイン情報.....	143
7.3.4	ボリュームの選択.....	143
7.3.5	マウントされているイメージの管理.....	144
7.4	格納域で実行可能な操作.....	144
7.4.1	アーカイブの操作.....	145
7.4.2	バックアップの操作.....	145
7.4.3	完全バックアップへの変換.....	146
7.4.4	アーカイブとバックアップの削除.....	147
<b>8</b>	<b>ブータブル メディア.....</b>	<b>148</b>
8.1	Linux ベースのブータブル メディア.....	149
8.1.1	カーネル パラメータ.....	150
8.1.2	ネットワークの設定.....	151
8.1.3	ネットワーク ポート.....	152
8.2	メディアから起動したコンピュータへの接続.....	152
8.3	ブータブル メディア使用時の操作.....	153
8.3.1	ディスプレイ モードの設定.....	154
8.3.2	iSCSI デバイスと NDAS デバイスの構成.....	154
8.4	Linux ベースのブータブル メディアで使用できるコマンドとユーティリティの一覧.....	155
8.5	Acronis スタートアップ リカバリ マネージャ.....	156

<b>9</b>	<b>管理対象のコンピュータの管理</b> .....	<b>158</b>
9.1	バックアップの計画およびタスク .....	158
9.1.1	バックアップ計画およびタスクでの操作 .....	158
9.1.2	バックアップ計画およびタスクの状態およびステータス.....	161
9.1.3	バックアップ計画のエクスポートとインポート.....	163
9.1.4	バックアップ計画のファイルとしての配置 .....	166
9.1.5	バックアップ計画の詳細.....	168
9.1.6	タスク/アクティビティの詳細 .....	169
9.2	ログ .....	169
9.2.1	ログ エントリの操作.....	170
9.2.2	ログ エントリの詳細.....	171
9.3	アラート.....	171
9.4	システム情報の収集.....	172
9.5	コンピュータのオプション調整 .....	173
9.5.1	カスタマ エクスペリエンス プログラム.....	173
9.5.2	アラート.....	173
9.5.3	電子メールによる通知.....	174
9.5.4	イベント トレース.....	176
9.5.5	ログのクリーンアップ ルール.....	177
<b>10</b>	<b>用語集</b> .....	<b>178</b>

# 1 Acronis Backup & Recovery 11 の概要

## 1.1 Acronis Backup & Recovery 11 の新機能

Acronis Backup & Recovery 11 は、エンタープライズ クラスの機能を手頃な価格で使い勝手のよいパッケージとして小規模企業市場に展開した Acronis Backup & Recovery 10 の成功をベースに開発されました。

Acronis Backup & Recovery 11 では引き続き、物理、仮想、およびクラウド環境に対応したバックアップと復元の機能を拡張しています。次に、製品の新しい機能と改善点の概要を紹介します。

- **簡易化されたインストール**  
新しいインストーラでは、インストール手順が簡単かつわかりやすくなりました。
- **操作性の向上**  
再設計された UI では、より簡単、高速かつ直感的な操作を実行できます。
- **バックアップの高度なコピーおよび保持 (68ページ)**  
冗長性を得るため、複数の場所(オフサイトなど)にバックアップを格納できます。より安価なストレージまたはオフサイトのストレージへ自動的にバックアップを移動またはコピーできます。業務時間中にコピーまたは移動を実行しない場合は、コピーの時間枠を設定できます。
- **格納域のデータ ビュー (96ページ)**  
(**アーカイブ ビュー**で)アーカイブとバックアップを参照するか、(**データ ビュー**で)バックアップ済みデータを参照して、格納域からデータを選択します。
- **アラート通知 (171ページ)**  
ローカル管理および集中管理の両方に新しいアラート システムが導入されました。表示するアラートを選択します。さまざまな種類のアラートについて、電子メール通知を設定します。
- **GPT のサポート**  
パーティション スキームが GUID パーティション テーブル(GPT)であるディスクをバックアップおよび復元します。
- **4 KB ドライブのサポート (106ページ)**  
ディスクまたはボリュームの復元を実行すると、ボリュームの非アラインの問題(ボリューム クラスタがディスク セクタにアラインされていない状態)が自動的に解決されます。
- **パーティション(ボリューム)のアライメント (106ページ)**  
ソリッドステート ドライブ(SSD)で最適なパフォーマンスを得るには、特定のパーティションのアライメントを行う必要があります。必須アライメントは復元中に自動的に設定されますが、必要に応じて手動で変更することができます。
- **ディスク/ボリュームの自動マッピング (103ページ)**  
ディスクまたはボリュームを復元するとき、ソフトウェアは選択されたディスク/ボリュームを最適な方法で復元先ディスクに自動マッピングします。
- **復元せずに Acronis Universal Restore を適用する (109ページ)**  
ブータブル メディアを使用して、復元を実行せずにオペレーティング システムへ Acronis Universal Restore を適用できます。

- **Linux LVM のサポート (25ページ)**  
LVM 構造はバックアップに保存され、復元できます。
- **Linux システム向けの Acronis Universal Restore (110ページ)**  
異なるハードウェアで Linux を復元します。
- **バックアップ計画のエクスポートとインポート (163ページ)**  
.xml ファイルにバックアップ計画をエクスポートし、別のコンピュータへインポートします。
- **バックアップ計画のファイルとしての配置 (166ページ)**  
あるコンピュータからバックアップ計画をエクスポートし、.xml ファイル形式で複数のコンピュータに配置します。
- **災害復旧計画 (82ページ)**  
ソフトウェアで災害復旧計画を作成し、バックアップ作成後に電子メール経由で送信できます。計画には復元の詳細な手順書が含まれます。
- **完全バックアップへの変換 (146ページ)**  
増分バックアップまたは差分バックアップを完全バックアップに変換します。
- **新しいコマンド ライン**  
バックアップおよび復元を自動化します。リモート管理も含まれます。
- **アップデートの自動確認**  
管理コンソールは起動時にアップデートを自動確認し、新バージョンが利用可能な場合は通知します。

## 1.2 Acronis Backup & Recovery 11 コンポーネント

ここでは、Acronis Backup & Recovery 11 のコンポーネントとその機能の概要について説明します。

### 管理対象のコンピュータ用のコンポーネント(エージェント)

これらは、Acronis Backup & Recovery 11 によって管理されるコンピュータ上でデータのバックアップ、復元、その他の処理を実行するアプリケーションです。各管理対象のコンピュータ上でエージェントが処理を実行するにはライセンスが必要です。エージェントには追加の機能を実行できるようにする複数の機能またはアドオンが含まれているので、追加のライセンスが必要になることがあります。

### コンソール

コンソールには、エージェントに対するグラフィカル ユーザー インターフェイスがあります。コンソールの使用にライセンスは必要ありません。Acronis Backup & Recovery 11 のスタンドアロン エディションでは、コンソールはエージェントと一緒にインストールされるためエージェントから切断することはできません。

### ブータブル メディア ビルダ

ブータブル メディア ビルダを使用して、エージェントや他のレスキュー ユーティリティをレスキュー環境で使用するためのブータブル メディアを作成することができます。Acronis Backup & Recovery 11 のスタンドアロン エディションでは、ブータブル メディア ビルダはエージェントと一緒にインストールされます。インストールされた場合、エージェントへのすべてのアドオンがレスキュー環境で利用可能になります。

## 1.2.1 エージェント for Linux

このエージェントを使用して、Linux の下でディスク レベルおよびファイル レベルでデータを保護することができます。

### ディスク バックアップ

ディスク レベルのデータ保護では、ディスクまたはボリューム ファイル システム全体とオペレーティング システムの起動に必要なすべての情報のバックアップ、またはセクタ単位でのすべてのディスク セクタのバックアップ(RAW モード)が基本になります。ディスクまたはボリュームのコピーを含むパッケージ形式のバックアップは、ディスク(ボリューム) バックアップまたはディスク(ボリューム) イメージと呼ばれます。これらのバックアップからはディスクまたはボリュームの全体を復元することも個別のフォルダやファイルを復元することもできます。

### ファイル バックアップ

ファイル レベルのデータ保護では、エージェントがインストールされているコンピュータ上あるいは smb または nfs プロトコルを使用してアクセスされるネットワーク共有上に存在するファイルおよびディレクトリのバックアップが基本になります。ファイルは、元の場所にも別の場所にも復元できます。バックアップされたすべてのファイルとディレクトリを復元することも個別に選択して復元することもできます。

## Universal Restore

Universal Restore アドオンを使用すると、エージェントがインストールされているコンピュータ上で異なるハードウェアの復元機能を使用して、この機能を備えたブータブル メディアを作成することができます。Universal Restore は、ストレージ コントローラ、マザーボード、チップセットなどのオペレーティング システムの起動にとって重要なデバイスの相違に対応します。

## 1.2.2 管理コンソール

Acronis Backup & Recovery 11 管理コンソールは、Acronis Backup & Recovery 11 エージェントにローカルでアクセスするための管理ツールです。エージェントにはリモート接続できません。

## 1.2.3 ブータブル メディア ビルダ

Acronis ブータブル メディア ビルダは、ブータブル メディア (186ページ)を作成するための専用のツールです。Linux 上にインストールするメディア ビルダは、Linux カーネルをベースにしたブータブル メディアを作成できます。

Universal Restore (9ページ) アドオンを使用して、異なるハードウェアの復元機能を備えたブータブル メディアを作成することができます。Universal Restore は、ストレージ コントローラ、マザーボード、チップセットなどのオペレーティング システムの起動にとって重要なデバイスの相違に対応します。

## 1.3 サポートされるファイル システム

Acronis Backup & Recovery 11 は、次のファイル システムをバックアップおよびリカバリできますが、以下のような制限があります:

- FAT16/32。

- NTFS。
- Ext2/Ext3/Ext4。
- ReiserFS3 - Acronis Backup & Recovery 11 ストレージ ノード上に置かれているディスク バックアップから特定のファイルを選択してリカバリすることはできません。
- ReiserFS4 - ボリュームのリカバリにはボリューム サイズの変更機能がありません。Acronis Backup & Recovery 11 ストレージ ノード上に置かれているディスク バックアップから特定のファイルを選択してリカバリすることはできません。
- XFS - ボリュームのリカバリにはボリューム サイズの変更機能がありません。Acronis Backup & Recovery 11 ストレージ ノード上に置かれているディスク バックアップから特定のファイルを選択してリカバリすることはできません。
- JFS - Acronis Backup & Recovery 11 ストレージ ノード上に置かれているディスク バックアップから特定のファイルを選択してリカバリすることはできません。
- Linux SWAP。

Acronis Backup & Recovery 11 は、破損したファイル システムやサポートされていないファイル システムを、セクタ単位でバックアップおよびリカバリすることができます。

## 1.4 テクニカル サポート

### 保守サポート プログラム

Acronis に関するサポートが必要な場合には、<http://www.acronis.co.jp/support/> にアクセスしてください。

### 製品アップデート

マイ アカウント(<https://www.acronis.co.jp/my>)にログインし、製品を登録していただきますと、お客様がお使いのすべての Acronis ソフトウェアの最新アップデートを弊社ウェブサイトよりダウンロードすることができます。Acronis 製品をウェブサイトで登録するには(英語) (<http://kb.acronis.com/content/4834>)およびアクロニス ウェブ サイトのユーザーガイド(日本語) (<http://kb.acronis.com/ja/content/18590>)をご参照ください。

## 2 はじめに



### 手順 1. インストール

 以下のインストール手順を実行すると、製品の使用をすぐに開始できます。インストールの方法および手順の詳細については、インストール マニュアルを参照してください。

インストールを開始する前に、次のことを確認してください。

- ハードウェアがシステム要件を満たしている。
- インストールする製品エディションのプロダクト キーを取得している。
- セットアップ プログラムがある。セットアップ プログラムはアクロニスの Web サイトからダウンロードできます。
- RPM パッケージ マネージャ(RPM)と Linux パッケージの gcc、kernel、kernel-headers、および kernel-devel がインストールされていることを確認してください。これらのパッケージの名前は、Linux ディストリビューションによって異なります。

### Acronis Backup & Recovery 11 をインストールするには

**AcronisBackupRecoveryServerLinux.i686** または  
**AcronisBackupRecoveryServerLinux.x86\_64** インストール ファイルを実行し、画面の指示に従います。



### 手順 2. 実行

ルートまたは通常のユーザーとしてログインし、必要に応じてユーザーを切り替えます。次のコマンドを使用してコンソールを起動します。

```
/usr/sbin/acronis_console
```

 GUI 要素の詳細については、「管理コンソールの使用 (12ページ)」を参照してください。



### 手順 3. ブータブル メディア

起動に失敗したオペレーティング システムを復元したり、ベア メタル状態のディスクにオペレーティング システムを配置したりできるように、ブータブル メディアを作成します。

1. メニューで  **[ツール]** →  **[ブータブル メディアの作成]** を選択します。
2. [ようこそ] 画面で **[次へ]** をクリックします。コンポーネントの一覧が表示されるまで **[次へ]** を繰り返しクリックします。
3. 「Linux ベースのブータブル メディア (149ページ)」の操作説明に従って続行します。



### 手順 4. バックアップ



#### 今すぐバックアップ (33ページ)

**[今すぐバックアップ]** をクリックすると、1 回限りのバックアップを簡単に実行できます。必要な手順を実行すると、直ちにバックアップ処理が開始されます。

コンピュータをファイルに保存するには:

[バックアップの保存先] で [場所] をクリックし、バックアップの保存先を選択します。[OK] をクリックして、選択を確定します。ウィンドウ下部の [OK] をクリックして、バックアップを開始します。

ヒント: ブータブル メディアを使用すると、オペレーティング システムの場合と同じ方法でオフライン(コールド)バックアップを実行できます。



### バックアップ計画の作成 (33ページ)

バックアップのスキーム、スケジュール、および条件、バックアップの適時削除、さまざまな場所へのバックアップの移動などを含む長期的なバックアップ戦略が必要な場合は、バックアップ計画を作成します。



## 手順 5. 復元



### 復元 (95ページ)

データを復元するには、バックアップされたデータとデータ復元先を選択する必要があります。選択すると、復元タスクが作成されます。

オペレーティング システムによってロックされているボリュームにディスクまたはボリュームを復元する場合は、システムの再起動が必要です。復元が完了すると、復元されたオペレーティング システムが自動的にオンラインになります。

コンピュータの再起動に失敗した場合、またはベア メタル状態のディスクにシステムを復元する場合は、ブータブル メディアを使用してコンピュータを起動し、復元タスクの場合と同じ方法で復元処理を設定します。



## 手順 6. 管理

[ナビゲーション] ペイン(コンソールの左側の部分)を使用して、別の管理目的で使用する製品ビュー内を移動できます。

-  [バックアップの計画およびタスク] ビューを使用して、バックアップの計画とタスクを管理できます。具体的には、計画およびタスクを実行、編集、停止、削除したり、それらの状態や進行状況を表示したりできます。
-  [アラート] ビューを使用して、問題をすみやかに特定および解決します。
-  [ログ] ビューを使用して、操作ログを参照します。
- バックアップ アーカイブを保存する場所は、格納域 (187ページ)と呼ばれます。  [格納域] (122ページ) ビューに移動して、格納域に関する情報を表示します。さらに特定の格納域に移動して、バックアップおよびその内容を表示します。復元するデータを選択し、バックアップの処理(マウント、ベリファイ、削除)を手動で実行することもできます。

## 2.1 管理コンソールの使用

コンソールが管理対象コンピュータ (188ページ)または管理サーバー (187ページ)に接続されると同時に、コンソールのワークスペースに個々の項目(メニュー、[ようこそ] 画面が表示されるメイン領域、または [ナビゲーション] ペイン)が表示され、エージェント固有またはサーバー固有の操作を実行できるようになります。



Acronis Backup & Recovery 11 管理コンソール: [ようこそ] 画面

## 管理コンソール ワークスペースの主要な要素

	名前	説明
1	[ナビゲーション] ペイン	ナビゲーション ツリーとショートカットを表示します。各種ビューを表示できます。詳細については、「[ナビゲーション] ペイン (13ページ)」を参照してください。
2	メイン領域	バックアップの設定、監視、復元、およびその他の操作を行います。メイン領域には、メニューや [ナビゲーション] ツリーで選択した項目に基づいて、各種ビューおよびアクション ページ (14ページ) が表示されます。
3	メニューバー	ウィンドウの上部に表示されます。Acronis Backup & Recovery 11 の操作の大部分を実行できます。メニュー項目は、[ナビゲーション] ツリーおよびメイン領域で選択した項目によって動的に変わります。

### 2.1.1 [ナビゲーション] ペイン

[ナビゲーション] ペインには、[ナビゲーション] ツリーと [ショートカット] バーがあります。

#### [ナビゲーション] ツリー

[ナビゲーション] ツリーを使用して、各プログラム ビューに移動することができます。[完全リスト] ビューまたは [簡易リスト] ビューのいずれかを選択できます。[簡易リスト] には、[完全リスト] で最も頻繁に使用されているビューが含まれます。

[簡易リスト] には、次が表示されます。

- **[コンピュータ名]**: これはツリーのルートで、[ようこそ] 画面とも呼ばれます。コンソールが現在接続されているコンピュータの名前が表示されます。このビューを使用して、管理対象のコンピュータ上で使用できる主な操作にすばやくアクセスすることができます。

-  **[バックアップの計画およびタスク]:** 計画とタスクの実行、編集、停止、削除、およびそれらの進行状況の表示など管理対象のコンピュータ上のバックアップ計画およびタスクを管理するには、このビューを使用します。
-  **[格納域]:** 個人用格納域およびそこに保存されるアーカイブの管理、新しい格納域の追加、既存の格納域の名前変更と削除、格納域のベリファイ、バックアップの内容の調査、アーカイブおよびバックアップに対する処理の実行などには、このビューを使用します。コンピュータが管理サーバーに登録されている場合、集中管理用格納域を参照し、適切な権限を持っているアーカイブに対して操作を実行できます。
-  **[アラート]:** 管理対象のコンピュータの警告メッセージを参照するには、このビューを使用します。

[完全リスト] には、この他に次が表示されます。

-  **[ディスクの管理]:** コンピュータのハード ディスク ドライブに関する操作を実行するには、このビューを使用します。
-  **[ログ]:** 管理対象のコンピュータ上でプログラムによって実行された処理に関する情報を調べるには、このビューを使用します。
-  **[マウントされたイメージ]:** ボリュームが 1 つ以上マウントされると、このノードが表示されます。マウントされたイメージを管理するには、このビューを使用します。

## [ショートカット] バー

[ショートカット] バーは、[ナビゲーション] ツリーの下に表示されます。このバーにショートカットとしてコンピュータを追加することで、必要なときに簡単にコンピュータに接続できます。

### コンピュータにショートカットを追加するには

1. コンソールを管理対象のコンピュータに接続します。
2. [ナビゲーション] ツリーでコンピュータの名前([ナビゲーション] ツリーのルート要素)を右クリックし、[ショートカットの作成] をクリックします。

コンソールとエージェントが同じコンピュータにインストールされているときは、このコンピュータのショートカットが **[ローカル コンピュータ [コンピュータ名]]** として [ショートカット] バーに自動的に追加されます。

## ペインの操作

### ペインの展開または最小化の方法

デフォルトでは、[ナビゲーション] ペインは展開された状態で表示されます。追加のワークスペースを空けるためにペインを最小化する場合があります。最小化するには、山形ボタン()をクリックします。ペインが最小化され、山形ボタンの向きが変わります()。山形ボタンをもう一度クリックするとペインが展開されます。

### ペインの境界の変更方法

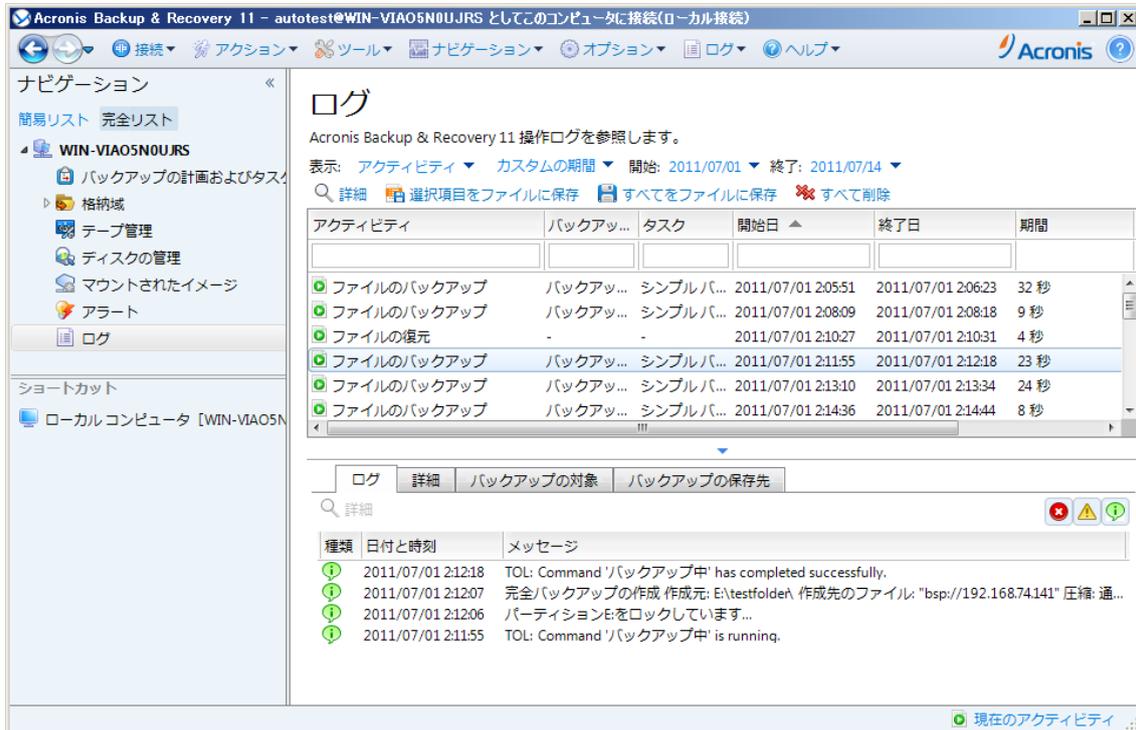
1. ペインの境界をポイントします。
2. ポインタが二重矢印になったら、ポインタをドラッグして境界を移動します。

## 2.1.2 ワークスペース、ビュー、アクション ページ

コンソールの操作の大半はワークスペースで行います。ここで、バックアップ計画、復元タスクの作成、編集、管理、およびその他の操作を実行します。ワークスペースには、メニューまたは [ナビゲーション] ツリーで選択した項目に応じて、異なるビューとアクション ページが表示されます。

## ビュー

ビューは、[ナビゲーション] ペイン (13ページ) の [ナビゲーション] ツリーで任意の項目をクリックするとワークスペースに表示されます。



### [ログ] ビュー

#### 一般的なビューの操作方法

一般的に、すべてのビューに項目のテーブル、ボタンを備えたテーブル ツールバー、および [情報] パネルが含まれています。

- テーブルで必要な項目を検索するには、フィルタと並べ替え (15ページ) の機能を使用します。
- テーブルで目的の項目を選択します。
- [情報] パネル(デフォルトでは折りたたまれています)に項目の詳細が表示されます。パネルを展開するには、矢印(▲)をクリックします。
- 選択した項目についての操作を実行します。次のように、選択した項目について同じ操作を実行する方法がいくつかあります。
  - テーブル ツールバーのボタンをクリックする。
  - [アクション] メニューの項目を選択する。
  - 項目を右クリックし、コンテキスト メニューで操作を選択する。

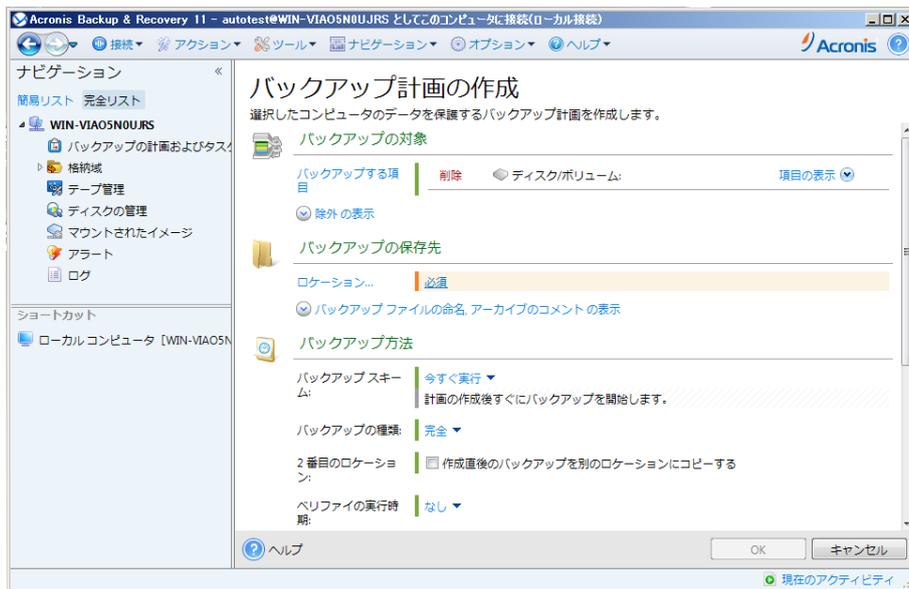
#### テーブルの項目のソート、フィルタリング、および設定

すべてのビューにおけるテーブル項目のソート、フィルタ、構成の方法は、次のとおりです。

操作目的	手順
列を基準とした項目の並び替え	列のヘッダーをクリックすると、項目が昇順で並び替えられます。 再度クリックすると、項目は降順で並び替えられます。
事前定義された列の値を基準とした項目のフィルタ	対応する項目のヘッダーの下にあるドロップダウン リストから必要な値を選択します。
入力された値を基準とした項目のフィルタ	対応する列のヘッダーの下にあるフィールドに値を入力します。 この結果、名前が入力した値と完全に一致するか、部分的に一致する値の一覧が表示されます。
事前定義されたパラメータを基準とした項目のフィルタ	ビューによって、いくつかの事前定義されたパラメータでテーブル項目をフィルタできます。フィルタするには、テーブル上部の対応するボタンまたはリンクをクリックします。 たとえば、次のようになります。 <ul style="list-style-type: none"> <li>▪ <b>[ログ]</b> ビューでは、結果の <b>[正常終了]</b>、<b>[警告を伴う正常終了]</b>、または <b>[失敗]</b> に関連付けられているボタンをクリックしてイベント エントリをフィルタできます。</li> <li>▪ <b>[ログ]</b> ビューではアクティビティ開始時間がデフォルトのパラメータに設定されており、このパラメータでアクティビティをフィルタするための事前定義された設定が 3 つ (<b>[すべて使用可能]</b>、<b>[過去 3 か月間]</b>、または <b>[カスタムの期間]</b>) 用意されており、<b>[ログ]</b> ビューの上部に配置されています。</li> </ul>
テーブルの列の表示または非表示	デフォルトでは、全テーブルの列の固定番号は表示され、その他は非表示になっています。必要に応じて、表示されている項目を非表示にしたり、非表示の項目を再表示したりすることができます。 列を表示または非表示にする手順は、次のとおりです。 <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 項目のヘッダーを右クリックしてコンテキスト メニューを開きます。</li> <li>2. 表示/非表示を切り換える項目をクリックします。</li> </ol>

## アクション ページ

アクション ページは **[アクション]** メニュー内のアクション項目のいずれかをクリックすると、メイン領域に表示されます。このページには、タスクやバックアップ計画などを作成して開始するために実行する必要のある手順が表示されます。



アクション ページ: [バックアップ計画の作成]

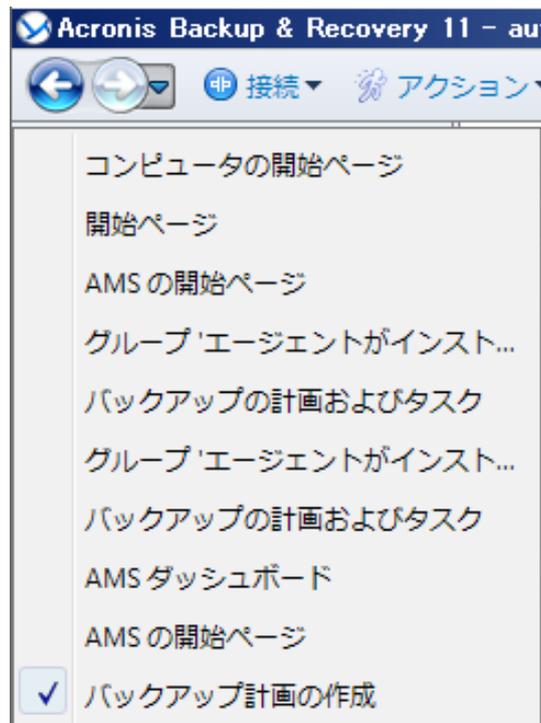
## コントロールの使用と設定の指定

アクティブ コントロールを使用して、バックアップ計画、または復元タスク設定およびパラメータを指定します。デフォルトでは、ログイン情報、オプション、コメントなどのフィールドは非表示になっています。ほとんどの設定は **[表示...]** リンクをそれぞれクリックすることで設定できます。設定によっては、ドロップダウン リストから選択するか、ページのフィールドに手動で入力します。



アクション ページ: 制御

Acronis Backup & Recovery 11 では、アクション ページで行った変更が記憶されます。たとえば、バックアップ計画の作成を開始した後で、計画の作成が完了する前に何らかの理由で別のビューに切り替えた場合、メニューで **[戻る]** ナビゲーション ボタンをクリックできます。または、いくつかの手順を進めた場合、下矢印をクリックして、計画の作成を開始したページを一覧から選択できます。このようにして、残りの手順を実行し、バックアップ計画の作成を完了することができます。



ナビゲーション ボタン

### 2.1.3 コンソール オプション

コンソール オプションでは、Acronis Backup & Recovery 11 のグラフィカル ユーザー インターフェイスに情報を表示する方法を定義します。

コンソール オプションにアクセスするには、トップ メニューから[オプション]→[コンソール オプション]を選択します。

#### アラート表示のオプション

このオプションは、[アラート] ビューに表示または非表示にするアラートを指定します。

デフォルトの設定は、[すべてのアラート] です。

アラートを表示(非表示)するには、個々のアラートの種類の横にあるチェックボックスをオン(オフ)にします。

#### ログイン情報のキャッシュ

このオプションでは、管理コンソールの使用中に入力されたログイン情報を保存するかどうかを指定します。

デフォルトの設定は、[無効] です。

このオプションが無効の場合、コンソール セッションでユーザーが入力したさまざまな場所のアクセス ログイン情報は、コンソールを閉じるまで保存されます。

このオプションが有効な場合、後のセッションで使用するためにログイン情報が保存されます。Windows では、ログイン情報は Windows 資格情報マネージャに保存されます。Linux では、ログイン情報は暗号化された特殊なファイルに保存されます。

## フォント

このオプションでは、Acronis Backup & Recovery 11 のグラフィカル ユーザー インターフェイスで使用するフォントを定義します。**[メニュー フォント]** の設定は、ドロップ ダウン メニューとコンテキスト メニューに影響します。**[アプリケーション フォント]** の設定は、その他の GUI 要素に影響します。

メニューとアプリケーションのインターフェイス項目に関する両方のデフォルトの設定は、**[システム デフォルト]** です。

選択するには、それぞれのコンボボックスからフォントを選択し、フォントのプロパティを設定します。右の **[参照]** ボタンをクリックすると、フォントの表示をプレビューできます。

## ポップアップ メッセージ

このオプションは、コンソールが管理対象のコンピュータまたは管理サーバーに接続されている場合に有効です。

### **[ユーザーによる操作が必要なタスク] ダイアログ**

このオプションでは、ユーザーによる操作を必要とする 1 つ以上のアクティビティがある場合にポップアップ ウィンドウを表示するかどうかを定義します。このウィンドウによって、同じ場所のすべてのアクティビティに対して再起動の確認やディスク領域を解放した後の再試行などの設定を指定できます。少なくとも 1 つのアクティビティでユーザーの操作が必要になるまで、管理対象のコンピュータの初期画面からいつでもこのウィンドウを開くことができます。または、**[バックアップの計画およびタスク] ビュー**でタスクの実行状態を確認し、それぞれのタスクに対する設定を **[情報] ペイン**で指定することもできます。

デフォルトの設定は、**[有効]** です。

選択するには、**[ユーザーによる操作が必要なタスク] ダイアログ** チェックボックスをオンまたはオフにします。

### **[ご意見/ご質問の確認] ダイアログ**

このオプションでは、システムでエラーが発生した場合にポップアップ ウィンドウでその情報を表示するかどうかを定義します。この情報は Acronis テクニカル サポートに送信できます。

デフォルトの設定は、**[有効]** です。

選択するには、「**ご意見/ご質問の確認**」ダイアログ」チェックボックスをオンまたはオフにします。

### **ブータブル メディアが作成されない場合に通知する**

このオプションは、管理コンソールがコンピュータ上で起動され、そのコンピュータ上に作成済みのブータブル メディアが存在しない場合に、ポップアップ ウィンドウを表示するかどうかを定義します。

デフォルトの設定は、**[有効]** です。

選択するには、**[ブータブル メディアが作成されない場合に通知する]** チェックボックスをオンまたはオフにします。

## 管理コンソールが、別バージョンのコンポーネントに接続された場合に通知する

このオプションは、コンソールがエージェントまたは管理サーバーに接続したとき、互いのバージョンが異なっていた場合、ポップアップ ウィンドウを表示するかどうかを定義します。

デフォルトの設定は、**[有効]** です。

選択するには、**[管理コンソールが、別バージョンのコンポーネントに接続された場合に通知する]** チェックボックスをオンまたはオフにします。

## タスクの実行結果の通知

このオプションは、コンソールが管理対象のコンピュータに接続されている場合にのみ有効です。

このオプションでは、タスクの実行結果に関するポップアップ メッセージ(正常終了、失敗、または警告を伴った正常終了)を表示するかどうかを定義します。ポップアップ メッセージの表示を無効にした場合、タスクの実行状態と結果は、**[バックアップの計画およびタスク]** ビューで確認できます。

デフォルトの設定は、すべての結果に対して **[有効]** です。

それぞれの結果(正常終了、失敗、または警告を伴った正常終了)に対して個々に設定するには、それぞれのチェックボックスをオンまたはオフにします。

## スタートアップ ページ

このオプションでは、管理サーバーへのコンソール接続で **[ようこそ]** 画面と **[ダッシュボード]** ビューのどちらを表示するのかを定義します。

デフォルトの設定は **[ようこそ]** 画面です。

選択するには、**[ダッシュボード ビューを表示する]** チェックボックスをオンまたはオフにします。

またこのオプションは、**[ようこそ]** 画面で設定できます。**[ようこそ]** 画面の **[起動時に現在のビューの代わりにダッシュボードを表示する]** チェックボックスをオンにすると、この選択に応じて上記の設定がアップデートされます。

## 3 Acronis Backup & Recovery 11 について

この説明では、製品について明確に理解し、詳細な手順の説明がなくてもさまざまな状況で製品を使用できるようになることを目標としています。

### 3.1 所有者とログイン情報

ここでは、「所有者」の概念と、バックアップ計画(タスク)のログイン情報の意味について説明します。

#### 計画(タスク)の所有者

ローカルのバックアップ計画の所有者は、その計画を作成したユーザーまたは最後に変更したユーザーです。

集中管理用バックアップ計画の所有者とは、集中管理用バックアップ計画を作成または最後に変更した管理サーバーの管理者のことです。

バックアップ計画に属するタスクは、ローカル タスクか集中管理タスクかを問わず、バックアップ計画の所有者によって所有されます。

復元タスクなど、バックアップ計画に属さないタスクは、そのタスクを作成したユーザーまたは最後に変更したユーザーによって所有されます。

#### 別のユーザーが所有する計画(タスク)の管理

コンピュータで管理者権限を持っているユーザーは、オペレーティング システムに登録されている任意のユーザーが所有するタスクおよびローカルのバックアップ計画を変更できます。

別のユーザーが所有する計画またはタスクを編集のために開くと、そのタスクに設定されていたすべてのパスワードが消去されます。これにより、「設定を変更して、パスワードはそのまま残す」トリックが防止されます。別のユーザーによって変更された計画(タスク)を編集しようとするたびに、警告が表示されます。警告が表示された場合、次の 2 つの選択肢があります。

- **[キャンセル]** をクリックし、独自の計画またはタスクを作成します。元のタスクはそのまま残されます。
- 編集を続けます。その計画またはタスクの実行に必要なすべてのログイン情報を入力する必要があります。

#### アーカイブの所有者

アーカイブの所有者は、そのアーカイブを保存場所に保存したユーザーです。より正確に言うと、これは、バックアップ計画を作成したときに **[バックアップの保存先]** の手順でログイン情報にアカウントが指定されたユーザーです。デフォルトでは、計画のログイン情報が使用されます。

#### 計画のログイン情報とタスクのログイン情報

コンピュータで実行されるタスクはすべて、ユーザーの代わりに実行されます。計画またはタスクを作成するときには、計画またはタスクの実行に使用するアカウントを明示的に指定するオプションを使用できます。このオプションを使用するかどうかは、計画またはタスクを手動で開始するか、スケジュールに従って実行するかによって異なります。

## 手動による開始

**[計画(タスク)のログイン情報]** の手順は省略できます。タスクを開始するたびに、ログオンした際のログイン情報を使ってタスクが実行されます。コンピュータで管理者権限を持っているすべてのユーザーも、タスクを開始できます。タスクはそのユーザーのログイン情報を使って実行されます。

タスクのログイン情報を明示的に指定した場合、そのタスクは、実際にタスクを開始したユーザーにかかわらず、常に同じログイン情報を使用して実行されます。タスクを明示的に指定するには、計画(タスク)の作成ページで、次の操作を行います。

1. **[計画のパラメータ]**(または **[タスクのパラメータ]**)セクションで、**[計画のログイン情報、コメント、ラベルを表示]**(または **[タスクのログイン情報の表示]**)をクリックします。
2. **[計画(タスク)のログイン情報]** をクリックします。
3. 計画(タスク)を実行するログイン情報を入力します。

## スケジュールされた開始または延期された開始

計画(タスク)のログイン情報は必須です。ログイン情報の手順を省略した場合、計画(タスク)の作成終了後にログイン情報の入力を求められます。

## ログイン情報を指定する必要がある理由

スケジュールされたタスクまたは延期されたタスクは、任意のユーザーまたはタスクの所有者以外のユーザーがログオンしている、ログオンしていないにかかわらず(Windows の[ようこそ] 画面が表示された状態になっている場合など)、実行される必要があります。これには、スケジュールされたタスクの開始時刻にコンピュータの電源がオンになっていれば(つまり、スタンバイや休止状態ではなければ)十分です。Acronis スケジューラでタスクを開始するのに、明示的に指定されたログイン情報が必要であるのはこのためです。

## 3.2 管理対象のコンピュータ上のユーザー権限

Linux を実行しているコンピュータを管理する場合、ユーザーはルート権限を保有または取得しているはずなので、以下を実行できます。

- 任意のデータまたはコンピュータ全体をバックアップまたは復元する。この際、コンピュータ上で、Acronis Backup & Recovery 11 エージェントのすべての操作とログ ファイルを完全に制御できます。
- オペレーティング システムに登録された任意のユーザーの所有するバックアップの計画およびタスクを管理する。

日常的にルートとしてシステムにログオンするのを避けるために、ルート ユーザーは一般ユーザーの資格でログオンしてから、必要に応じてユーザーの種類を切り替えることができます。

## 3.3 完全バックアップ、増分バックアップ、差分バックアップ

Acronis Backup & Recovery 11 には、GFS (Grandfather-Father-Son)やハノイの塔などのよく使われるバックアップ スキームを使用する機能が用意されています。また、カスタムのバックアップ スキームを作成することもできます。すべてのバックアップ スキームは、完全バックアップ、増分バックアップ、差分バックアップの方法に基づいています。「スキーム」という用語は、実際には、これらのバックアップ方法を適用するアルゴリズムとアーカイブのクリーンアップを行うアルゴリズムを示しています。

これらのバックアップ方法は 1 つのバックアップ スキームの中でチームとして機能するため、それぞれの方法を相互に比較してもあまり意味がありません。これらのバックアップ方法は、それぞれの長所に応じて特定の役割を果たします。すべてのバックアップ方法の長所を生かし、すべてのバックアップ方法の短所の影響を軽減することにより、優れたバックアップ スキームとなります。たとえば、週単位の差分バックアップでは、そのバックアップに依存する日単位の増分バックアップの 1 週間分のセットと共にアーカイブを簡単に削除できるため、アーカイブのクリーンアップが容易になります。

完全バックアップ、増分バックアップ、または差分バックアップの方法でバックアップを行うと、それぞれに応じた種類のバックアップ (184ページ) が作成されます。

## 完全バックアップ

完全バックアップでは、バックアップ対象に選択されたすべてのデータが保存されます。完全バックアップはすべてのアーカイブの基礎となり、増分バックアップと差分バックアップのベースを形成します。1 つのアーカイブに複数の完全バックアップが含まれる場合も、アーカイブが完全バックアップだけで構成される場合もあります。1 つの完全バックアップはそれ自体で完結しているので、完全バックアップからデータを復元するために、それ以外のバックアップにアクセスする必要はありません。

一般的に、完全バックアップは作成時間が最も長く、復元時間が最も短いバックアップ方法であるとみなされています。Acronis テクノロジーでは、増分バックアップからの復元が完全バックアップからの復元と同じくらい高速な場合もあります。

完全バックアップが最適なのは次の場合です。

- システムを最初の状態に戻す必要がある場合
- この最初の状態が頻繁に変更されることはなく、定期的なバックアップが必要ない場合

例: インターネット カフェや学校の教室では、利用者や学生が加えた変更を管理者が元に戻すことが多く、ベースとなるバックアップを更新することがほとんどありません(インストール後はソフトウェアの更新のみが行われます)。この場合、バックアップに要する時間は重要ではなく、完全バックアップからシステムを復元するため復元時間は最短となります。信頼性向上のために、管理者が完全バックアップのコピーを複数用意することもできます。

## 増分バックアップ

増分バックアップは、**前回のバックアップ**に対するデータの変更点を保存します。増分バックアップからデータを復元するには、同じアーカイブの他のバックアップにアクセスする必要があります。

増分バックアップが最適なのは次の場合です。

- 保存した複数の状態のいずれかに戻せるようにする必要がある場合
- データの合計サイズと比べて、データの変更量が少ない傾向にある場合

一般的に、増分バックアップは完全バックアップより信頼性が低いとみなされています。これは、「チェーン」内の 1 つのバックアップが破損した場合、それ以降のバックアップが使用できなくなるためです。ただし、データの以前のバージョンを複数保存する必要がある場合、完全バックアップを複数保存する方法は選択肢にはなりません。これは、アーカイブが大きすぎることで信頼性の問題が大きくなるためです。

例: データベースのトランザクション ログのバックアップ。

## 差分バックアップ

差分バックアップは、前回の完全バックアップに対するデータの変更点を保存します。差分バックアップからデータを復元するには、対応する完全バックアップにアクセスする必要があります。差分バックアップが最適なのは次の場合です。

- 最新のデータの状態だけを保存できればよい場合
- データの合計サイズと比べて、データの変更量が少ない傾向にある場合

一般的には、差分バックアップは作成時間が長くて復元時間が短く、増分バックアップは作成時間が短くて復元時間が長いと見なされています。実際には、同じ時点で同じ完全バックアップに追加された増分バックアップと差分バックアップに物理的な違いはありません。前述の違いは、複数の増分バックアップの作成後に(または作成する代わりに)差分バックアップを作成することを意味します。

---

ディスクの最適化後に作成された増分バックアップや差分バックアップのサイズが、通常より大幅に大きくなることがあります。これは、最適化によってディスク上のファイルの位置が変更され、バックアップにそれらの変更が反映されるためです。ディスクの最適化後に、完全バックアップを再作成することをお勧めします。

---

次の表は、一般的知識に基づいた、各バックアップ種類の長所と短所を示しています。実際には、これらのパラメータは、データ変更の量、速度、パターンのほか、データの性質、デバイスの物理的な仕様、設定したバックアップ/復元オプションなどの多くの要因に左右されます。最適なバックアップ スキームを選択するうえで最も参考になるのは実践結果です。

パラメータ	完全バックアップ	差分バックアップ	増分バックアップ
ストレージ領域	最大	中程度	最小
作成時間	最大	中程度	最小
復元時間	最小	中程度	最大

## 3.4 ディスクまたはボリュームのバックアップに保存される内容

ディスクまたはボリュームのバックアップには、ディスクまたはボリュームのファイル システム全体と、オペレーティング システムを起動するうえで必要なすべての情報が保存されます。これらのバックアップからはディスクまたはボリュームの全体をリカバリすることも個別のフォルダやファイルをリカバリすることもできます。

セクタ単位(RAW モード)のオプションをオンにすると、ディスクのバックアップには、ディスクのセクタがすべて保存されます。

サポートされているファイル システムのディスクまたはボリュームのバックアップでは、セクタ単位のオプションをオフにした場合、データを含むセクタのみが保存されます。これにより、作成されるバックアップのサイズが小さくなり、バックアップとリカバリの処理速度が向上します。

### Windows

スワップ ファイル(pagefile.sys)およびコンピュータが休止状態になったときに RAM の内容を保存するファイル(hiberfil.sys)はバックアップされません。リカバリ後は、それらのファイルが適切な場所にサイズ 0 で再作成されます。

ボリューム バックアップには、隠しファイル、システム ファイルなどの属性に関係なく、選択されたボリュームのすべてのファイルとフォルダ、ブート レコード、存在する場合はファイル アロケーション テーブル(FAT)、マスタ ブート レコード(MBR)を含むハード ディスクのルート トラ

ックとゼロトラックが保存されます。GPT ボリュームのブート コードはバックアップされません。

ディスク バックアップには、ベンダの保守パーティションなどの隠しボリュームを含む、選択されたディスクのすべてのボリュームと、マスタ ブート レコードを含むゼロトラックが保存されます。

## Linux

ボリューム バックアップでは、属性に関係なく、選択されたボリュームのすべてのファイルとフォルダ(ブート レコード、ファイル システム スーパー ブロック)が保存されます。

ディスク バックアップにはすべてのディスク ボリュームとマスタ ブート レコードを含むゼロトラックが保存されます。

## 3.5 論理ボリュームと MD デバイスのバックアップおよび復元 (Linux)

ここでは、Linux LVM(Logical Volume Manager)によって管理されるボリューム(論理ボリューム)と、マルチディスク(MD)デバイス(Linux ソフトウェア RAID)を、バックアップおよびリカバリする方法について説明します。

LVM の詳細については、<http://tldp.org/HOWTO/LVM-HOWTO/> または [http://www.centos.org/docs/5/html/5.1/Deployment\\_Guide/ch-lvm.html](http://www.centos.org/docs/5/html/5.1/Deployment_Guide/ch-lvm.html) を参照してください。

### 3.5.1 論理ボリュームのバックアップ

Acronis Backup & Recovery 11 エージェント for Linux では、Linux with 2.6.x カーネルまたは Linux ベースのブータブル メディアでの実行時に、論理ボリュームのアクセス、バックアップ、および復元を行うことができます。

#### バックアップ

Acronis Backup & Recovery 11 GUI では、論理ボリュームは **[ダイナミック ボリューム]** のバックアップ可能なボリュームの一覧の最後に表示されます。バックアップに論理ボリュームを選択すると、論理ボリュームの構造がボリュームの内容と共にバックアップに保存されます。Linux ベースのブータブル メディアでこれらのボリュームを復元する際に、この構造が自動的に再作成されます。

利用可能なすべてのディスクをバックアップするには、すべての論理ボリュームと、論理ボリュームに属さないベーシック ボリュームを指定します。これは、**[バックアップ計画の作成]** ページを開いた場合のデフォルトの選択です。

論理ボリュームに含まれるベーシック ボリュームは、一覧で **[ファイル システム]** 列が **[なし]** で表示されます。このようなボリュームを選択すると、ボリュームはセクタ単位でバックアップされます。通常では、セクタ単位のバックアップを作成する必要はありません。

#### 復元

論理ボリュームを復元する場合は、次のいずれかの方法を選択できます。

- **ボリュームの内容のみを復元します。** 復元先ボリュームの種類やその他のプロパティは変更されません。

この方法は、オペレーティング システム使用時とブータブル メディア使用時の両方で選択できます。

次の場合に便利です。

- ボリューム上の一部のデータが失われたが、ハード ディスクを交換していない場合です。
- 論理ボリュームをベーシック ディスクまたはボリュームに復元する場合。この場合は、復元結果のボリュームのサイズを変更できます。

---

論理ボリュームのバックアップからベーシック ディスクに復元したシステムでは、カーネルがルートファイル システムを論理ボリュームからマウントしようとするので、起動できません。システムを起動するには、LVM を使用しないようにローダー設定と `/etc/fstab` を変更し、ブート ローダーを再度有効 (112ページ) にします。

---

- ベーシック ボリュームまたは論理ボリュームを、以前作成した論理ボリュームに復元する場合です。これは、`lvm` ユーティリティを使用して論理ボリュームの構造を手動で作成する (28ページ) 場合などが該当します。

- **論理ボリュームの構造と内容の両方を復元します。**

これは、ベア メタルでの復元や、ボリューム構造が異なるコンピュータでの復元などが該当します。論理ボリュームの構造を、復元時に自動的に作成 (27ページ) することができます。

この方法は、ブータブル メディア使用時にのみ選択できます。

論理ボリュームを復元する方法の詳細については、「MD デバイスと論理ボリュームのリカバリ (27ページ)」を参照してください。

### 3.5.2 MD デバイスのバックアップ

Linux ソフトウェア RAID と呼ばれる MD デバイスは、複数のボリュームを組み合わせて、まとまったブロック デバイス (`/dev/md0`, `/dev/md1`, ..., `/dev/md31`) を作成します。MD デバイスに関する情報は、`/etc/raidtab` またはこれらのボリュームの専用領域に保存されます。

アクティブな(マウントされた)MD デバイスは、論理ボリュームと同じ方法でバックアップできます。MD デバイスは、バックアップ可能なボリュームの一覧で最後に表示されます。バックアップに MD を選択すると、MD デバイスの構造がデバイス内容と共にバックアップされます。

MD デバイスに含まれているボリュームは復元できないので、MD デバイスがマウントされている場合は、このようなボリュームをバックアップする意味はありません。

ブータブル メディアで MD デバイスを復元する際、MD デバイスの構造を自動的に再作成することができます。ブータブル メディアを使用した MD デバイスの復元の詳細については、「MD デバイスと論理ボリュームのリカバリ (27ページ)」を参照してください。

Linux で復元を実行する際の MD デバイスの構築の詳細については、「リカバリする MD デバイスの構築(Linux) (27ページ)」を参照してください。

### 3.5.3 ハードウェア RAID アレイのバックアップ(Linux)

Linux のハードウェア RAID アレイでは、複数の物理ドライブを結合して、パーティション操作が可能な 1 つのディスクを作成します。ハードウェア RAID アレイに関連したファイルは、通常 `/dev/ataraid` にあります。ハードウェア RAID アレイは、一般のハード ディスクと同じ方法でバックアップできます。

ハードウェア RAID アレイの一部である物理ドライブは他のディスクと共に表示されますが、パーティション テーブルが破損しているか、またはパーティション テーブルがないように表示されます。このようなディスクをバックアップしても、リカバリできないので意味がありません。

### 3.5.4 リカバリする MD デバイスの構築(Linux)

Linux でディスク バックアップから既存の MD デバイス(Linux ソフトウェア RAID デバイスとも呼ばれます)へのリカバリを実行する際には、リカバリ時にこのデバイスが構築済みであることを確認してください。

デバイスが構築済みでない場合は、**mdadm** ユーティリティを使用して構築してください。以下に 2 つの例を示します。

**例 1:** 次のコマンドは、ボリューム `/dev/sdb1` と `/dev/sdc1` を組み合わせたデバイス `/dev/md0` を構築します。

```
mdadm --assemble /dev/md0 -ayes /dev/sdb1 /sdc1
```

**例 2:** 次のコマンドは、ディスク `/dev/sdb` と `/dev/sdc` を組み合わせたデバイス `/dev/md0` を構築します。

```
mdadm --assemble /dev/md0 -ayes /dev/sdb /dev/sdc
```

リカバリでコンピュータの再起動が必要な場合(通常、リカバリするボリュームにブート パーティションが含まれている場合)は、次のガイドラインに従ってください。

- MD デバイスのすべての部分がボリュームの場合は(最初の例と同様に、典型的な実例です)、各ボリュームの種類(パーティションの種類またはシステム ID と呼ばれます)が **Linux raid automount** であり、このパーティションの種類の 16 進コードが `0xFD` であることを確認してください。これにより、再起動後にデバイスが自動的に構築されることが保証されます。パーティションの種類を表示または変更するには、**fdisk** などのディスク パーティション ユーティリティを使用します。
- それ以外の場合(2 番目の例など)は、ブータブル メディアからリカバリを実行します。この場合、再起動は必要ありません。ブータブル メディアでは、必要に応じて MD デバイスを手動または自動で作成します(「MD デバイスと論理ボリュームのリカバリ (27ページ)」を参照)。

### 3.5.5 MD デバイスと論理ボリュームのリカバリ

LVM(論理ボリュームマネージャ)によって作成された MD デバイスやボリュームの復元では、対応するボリューム構成が再作成されることが前提です。

Linux ベースのブータブル メディアでは、次のバックアップからの復元時に、ボリューム構成を自動的に作成する (27ページ)ことができます。

- Acronis Backup & Recovery 11 によって作成されたバックアップ。
- Acronis Backup & Recovery 10 によって作成されたバックアップ。ただし、ボリューム構成情報がバックアップ内に保存されている必要があります(デフォルトで保存されています)。

その他の場合、復元前に **mdadm** ユーティリティおよび **lvm** ユーティリティを使用して、ボリューム構成を手動で作成する (28ページ)必要があります。

#### 自動によるボリューム構成の作成

Linux ベースのブータブル メディアにボリューム構成を作成するには、次の手順に従います。

---

**注意:** Acronis Backup & Recovery 10 によって作成されたバックアップからボリュームを復元する場合、この手順はボリューム構成の情報がバックアップ内に保存されている場合のみ有効です(デフォルトで保存されています)。

---

**注意:** 次の手順を実行すると、コンピュータの現在のボリューム構成は、アーカイブに保存されたボリューム構成に置き換えられます。これにより、コンピュータのハード ディスクの一部またはすべてに現在保存されているデータが消去されます。

---

**ディスク構成が変更された場合:**MD デバイスまたは論理ボリュームは、1 つ以上のディスクに存在します。各ディスクのサイズは異なります。バックアップと復元の間にディスクを交換した場合(またはボリュームを別のコンピュータに復元する場合)は、新しいディスク構成のディスク サイズで元のディスク以上の十分なサイズを確保してください。

### 自動でボリューム構成を作成するには

1. Linux ベースのブータブル メディアからコンピュータを起動します。
2. **[Acronis ブータブル エージェント]** をクリックします。次に、**[管理コンソールの実行]** をクリックします。
3. 管理コンソールで、**[復元]** をクリックします。  
アーカイブの内容の下に、ボリューム構成に関する情報が Acronis Backup & Recovery 11 によって検出されたことを示すメッセージが表示されます。
4. メッセージが表示されている領域で **[詳細]** をクリックします。
5. ボリューム構成を確認し、**[RAID/LVM の適用]** をクリックして作成します。

### 手動によるボリューム構成の作成

Linux ベースのブータブル メディアを使用して MD デバイスと論理ボリュームを復元するときの一般的な手順と、その復元の例を次に示します。Linux でも同様の手順を使用できます。

### 手動でボリューム構成を作成するには

1. Linux ベースのブータブル メディアからコンピュータを起動します。
2. **[Acronis Backup & Recovery 11]** をクリックします。次に、**[管理コンソールの実行]** をクリックします。
3. ツールバーの **[アクション]** をクリックし、**[シェルの開始]** をクリックします。または、Ctrl+Alt+F2 キーを押します。
4. 必要に応じて、**acrocmd** ユーティリティを使用して、アーカイブに保存されているボリュームの構造を調べます。また、このユーティリティを使用して、1 つ以上のボリュームを通常のボリュームと同様にマウントすることもできます(後述の「バックアップ ボリュームのマウント」を参照)。
5. **mdadm** ユーティリティ(MD デバイスの場合)、**lvm** ユーティリティ(論理ボリュームの場合)、またはその両方を使用して、アーカイブ内の構造に従ってボリューム構成を作成します。

---

**注意:** **pvcreate** や **vgcreate** などの LVM(論理ボリュームマネージャ) ユーティリティ(通常は Linux に存在しています)は、ブータブル メディア環境には含まれていません。そのため、対応するコマンドを使用して、**lvm** ユーティリティを使用する必要があります。**lvm pvcreate**、**lvm vgcreate**、および **lvm lvcreate** などがあります。

---

6. 以前に **acrocmd** ユーティリティを使用してバックアップをマウントしてある場合は、もう一度このユーティリティを使用してバックアップをマウント解除します(後述の「バックアップ ボリュームのマウント」を参照)。
7. ALT+F1 キーを押して、管理コンソールに戻ります。

(この時点でコンピュータを再起動しないでください。再起動すると、ボリューム構成をもう一度作成しなければならなくなります。)

8. **[復元]** をクリックし、アーカイブのパスとその他の必要なパラメータを指定して、**[OK]** をクリックします。

---

**注意:** リモートから Acronis Backup & Recovery 11 ブータブル エージェントに接続している場合はコマンドシェルを使用できないため、この手順は実行できません。

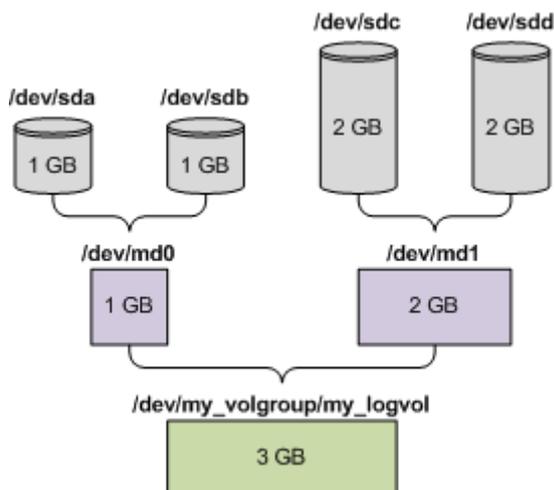
---

## 例

以前に、次のディスク構成のコンピュータのディスクレベル バックアップを実行したことがあるとします。

- コンピュータに 2 台の 1 GB SCSI ハード ディスクと 2 台の 2 GB SCSI ハード ディスクがあり、それぞれ `/dev/sda`、`/dev/sdb`、`/dev/sdc`、および `/dev/sdd` にマウントされています。
- 1 番目と 2 番目のハード ディスク ペアは、共に RAID-1 構成の 2 台の MD デバイスとして設定され、それぞれ `/dev/md0` と `/dev/md1` にマウントされています。
- 論理ボリュームは 2 台の MD デバイスに基づいており、`/dev/my_volgroup/my_logvol` にマウントされています。

この設定を次の図に示します。



次の手順を実行して、このアーカイブからデータをリカバリします。

### 手順 1: ボリューム構成の作成

1. Linux ベースのブータブル メディアからコンピュータを起動します。
2. 管理コンソールで、`Ctrl+Alt+F2` キーを押します。
3. 次のコマンドを実行して、MD デバイスを作成します。

```
mdadm --create /dev/md0 --level=1 --raid-devices=2 /dev/sd[ab]
mdadm --create /dev/md1 --level=1 --raid-devices=2 /dev/sd[cd]
```

4. 次のコマンドを実行して、論理ボリューム グループを作成します。

**注意:** `pvcreate` コマンドを実行すると、`/dev/md0` および `/dev/md1` デバイス上のデータがすべて消去されます。

```
lvm pvcreate /dev/md0 /dev/md1
lvm vgcreate my_volgroup /dev/md0 /dev/md1
lvm vgdisplay
```



type: disk					
Num	Partition	Flags	Size	Type	GUID
-----	-----	-----	-----	-----	-----
Dyn1	my_volgroup-my_lo...		4 GB	Ext 3	
Dyn2	md0		2.007 GB	Ext 2	
Disk 1	sda		16 GB	DT_FIXED	
1-1	sda1	Act,Pri	203.9 MB	Ext 2	
1-2	sda2	Pri	11.72 GB	Reiser	
1-3	sda3	Pri	1.004 GB	Linux swap	
Disk 2	sdb		8 GB	DT_FIXED	
2-1	sdb1	Pri	2.007 GB	Ext 2	
2-2	sdb2	Pri	2.007 GB	None	
Disk 3	sdc		1 GB	DT_FIXED	
Disk 4	sdd		8 GB	DT_FIXED	
4-1	sdd1	Pri	2.007 GB	Ext 2	
4-2	sdd2	Pri	2.007 GB	None	

2. `acrocmd mount` コマンドを使用して、`--volume` パラメータにボリュームの名前を指定します。たとえば、次のようになります。

```
acrocmd mount --loc=\\server\backups --arc=linux_machine --mount_point=/mnt --volume=DYN1
```

このコマンドで、論理ボリューム DYN1 が、マウント ポイント /mnt にマウントされます。

**バックアップ ボリュームのマウントを解除する手順は、次のとおりです。**

- `acrocmd umount` コマンドを使用して、ボリュームのマウント ポイントをパラメータとして指定します。たとえば、次のようになります。

```
acrocmd umount --mount_point=/mnt
```

## 3.6 SNMP のサポート

### SNMP オブジェクト

Acronis Backup & Recovery 11 は、次の簡易ネットワーク管理プロトコル(SNMP)オブジェクトを SNMP 管理アプリケーションに送信します。

- イベントの種類  
オブジェクト識別子(OID): 1.3.6.1.4.1.24769.100.200.1.0  
構文: OctetString  
値は、「Information」、「Warning」、「Error」、「Unknown」のいずれかになります。「Unknown」が送信されるのはテスト メッセージだけです。
- イベントの説明テキスト  
オブジェクト識別子(OID): 1.3.6.1.4.1.24769.100.200.2.0  
構文: OctetString  
値には、イベントの説明テキストが含まれます(Acronis Backup & Recovery 11 でログに記録されるメッセージと同様のものです)。

**varbind 値の例:**

```
1.3.6.1.4.1.24769.100.200.1.0:Information
```

```
1.3.6.1.4.1.24769.100.200.2.0:I0064000B
```

## サポートされる操作

Acronis Backup & Recovery 11 でサポートされるのはトラップ操作のみです。GET- および SET- リクエストを使用して Acronis Backup & Recovery 11 を管理することはできません。つまり、トラップ メッセージを受信するには、SNMP トラップ レシーバを使用する必要があります。

## 管理情報ベース(MIB)について

MIB ファイル **acronis-abr.mib** は、Acronis Backup & Recovery 11 インストール ディレクトリにあります。デフォルトでは、%ProgramFiles%\Acronis\BackupAndRecovery(Windows)および /usr/lib/Acronis/BackupAndRecovery(Linux)に保存されています。

このファイルは、MIB ブラウザまたは簡単なテキスト エディタ(メモ帳や vi など)で開くことができます。

## テスト メッセージについて

SNMP 通知を設定する場合は、テスト メッセージを送信して、設定が正しいかどうかを確認できます。

テスト メッセージのパラメータは、次のようになります。

- イベントの種類  
OID: 1.3.6.1.4.1.24769.100.200.1.0  
値: 「Unknown」
- イベントの説明テキスト  
OID: 1.3.6.1.4.1.24769.100.200.2.0  
値: 「?00000000」

## 4 バックアップ

### 4.1 今すぐバックアップ

簡単ないくつかの手順でワンタイム バックアップを設定および実行するには、**[今すぐバックアップ]**を使用します。必要な手順を実行して **[OK]** をクリックすれば、即座にバックアップ処理が開始されます。

スケジュールと条件を使用して適時バックアップを削除したり、さまざまな場所に移動したりするような、長期間にわたるバックアップ ストラテジの場合は、バックアップ計画の作成を検討してください。

即座に実行するバックアップの設定は、次の点がバックアップ計画の作成 (33ページ)とは異なります。

- バックアップをスケジュールしたり、保持ルールを設定したりするオプションはありません。
- バックアップ先がサポートしている場合は、簡易バックアップ ファイル名 (54ページ)が使用されます。サポートされない場合、標準のバックアップ名が使用されます。  
次の場所では、簡易ファイル名はサポートされていません。管理対象の格納域、Acronis セキュア ゾーンまたは Acronis Online Backup Storage。
- ディスクレベルのバックアップの仮想コンピュータへの変換は、バックアップ操作の一部としては使用できません。作成されたバックアップを後で変換することは可能です。

### 4.2 バックアップ計画の作成

最初のバックアップ計画 (184ページ)を作成する前に、Acronis Backup & Recovery 11 で使用される基本的な概念について理解しておいてください。

バックアップ計画を作成する手順は、次のとおりです。

#### バックアップの対象

##### バックアップする項目 (35ページ)

バックアップするデータの種別を選択して、データ項目を指定します。データの種別はコンピュータにインストールされているエージェントによって異なります。

##### アクセス ログイン情報、除外

この設定にアクセスするには、**[アクセス ログイン情報、除外を表示する]** をクリックします。

##### アクセス ログイン情報 (36ページ)

計画のアカウントがデータにアクセスする権限を持っていない場合は、ソース データのログイン情報を指定します。

##### 除外 (37ページ)

バックアップから除外するファイルの種別を設定します。

#### バックアップ先

##### 場所 (49ページ)

バックアップ アーカイブの保存先のパスとアーカイブ名を指定します。アーカイブの名前はその場所内で一意である必要があります。一意でない場合、新しく作成されたバックアップ

計画のバックアップは、別のバックアップ計画に所属する既存のアーカイブに保存されます。デフォルトのアーカイブ名は Archive(N) です。N は、選択した保存先内のアーカイブの連番です。

#### **バックアップ ファイルの命名、アクセス ログイン情報、アーカイブのコメント**

これらの設定にアクセスするには、[バックアップ ファイルの命名、アクセス ログイン情報、アーカイブのコメントを表示する] をクリックします。

##### **ファイルの命名 (54ページ)**

(オプション)アーカイブのバックアップに対して簡易ファイル名を使用する場合、[Acronis True Image Echo のアーカイブ名を使用してバックアップ ファイルに名前を指定する(自動生成された名前は使用しない)] チェックボックスをオンにします。

管理対象の格納域、テープ、Acronis セキュア ゾーンへのバックアップでは使用できません。

##### **アクセス ログイン情報 (38ページ)**

(オプション)計画のアカウントが保存先にアクセスする権限を持っていない場合は、保存先のログイン情報を指定します。

##### **アーカイブのコメント**

(オプション)アーカイブのコメントを入力します。

### **バックアップ方法**

#### **バックアップ スキーム (39ページ)**

データのバックアップの実行時期と実行間隔を指定し、作成したバックアップ アーカイブを選択した保存先に保存する期間を定義して、アーカイブのクリーンアップ処理のスケジュールを設定します(以下の「コピーおよび保持の設定」をご参照ください)。GFS(Grandfather-Father-Son)、ハノイの塔などのよく知られた最適化されたバックアップスキームを使用して、カスタム バックアップ スキームを作成するか、データを 1 回だけバックアップします。

##### **コピーおよび保持の設定 (68ページ)**

簡易バックアップ ファイル名 (54ページ)を選択した場合、使用できません。

バックアップを別の場所にコピーするかどうか、また、バックアップを保持ルールに従って移動または削除するかどうかを定義します。使用できる設定は、バックアップ スキームによって異なります。

#### **2 番目のロケーション、ベリファイ**

これら設定にアクセスするには、[2 番目のロケーションの表示、ベリファイ、仮想コンピュータへの変換] をクリックします。

##### **2 番目のロケーション**

(オプション)バックアップのコピーを設定するには、[作成直後のバックアップを別のロケーションにコピーする] チェック ボックスをオンにします。バックアップのコピーに関する詳細は、「バックアップのコピーの設定 (70ページ)」を参照してください。

##### **ベリファイの実行時期 (51ページ)**

(オプション)選択したバックアップ スキームに応じて、ベリファイの実行時期と実行間隔、およびアーカイブ全体またはアーカイブ内の前回のバックアップのどちらをベリファイするかを定義します。

## 計画のパラメータ

### 計画名

(オプション)バックアップ計画の一意の名前を入力します。わかりやすい名前にするると他の計画と区別することができます。

### バックアップ オプション

(オプション)バックアップの前後に実行するコマンド、バックアップ ストリームに割り当てられるネットワークの最大帯域幅、バックアップ アーカイブの圧縮レベルなどのバックアップ操作のパラメータを設定します。このセクションで何も指定しない場合は、デフォルト値 (74ページ) が使用されます。

いずれかの設定をデフォルト値から変更すると、新しい行に新しく設定した値が表示されます。設定のステータスが **[デフォルト]** から **[デフォルトにリセット]** に変更されます。設定を再度変更すると、新しい値がデフォルト値以外であれば、行に表示されます。デフォルト値が設定されると、この行が表示されなくなります。この結果、このセクションでは、常にデフォルト値とは異なる設定のみが表示されます。

すべての設定をデフォルト値にリセットするには、**[デフォルトにリセット]** をクリックします。

### 計画のログイン情報、コメント、ラベル

この設定にアクセスするには、**[アクセス ログイン情報、コメント、ラベルを表示する]** をクリックします。

#### 計画のログイン情報 (51ページ)

(オプション)バックアップ計画は、計画を作成したユーザーの代わりに実行されます。計画のログイン情報は、必要に応じて変更することができます。

#### コメント

(オプション)バックアップ計画の説明を入力します。

#### ラベル (52ページ)

(オプション)バックアップするコンピュータのテキスト ラベルを入力します。ラベルを使用すると、さまざまな場面でコンピュータを識別できます。

すべての必要な処理を実行したら、**[OK]** をクリックしてバックアップ計画を作成します。

その後で、パスワード (53ページ)を要求される場合があります。

作成した計画は、**[バックアップの計画およびタスク]** (158ページ) ビューでアクセスして参照および管理できます。

## 4.2.1 バックアップするデータの選択

### バックアップするデータを選択するには

1. **[バックアップするデータ]** 項目で、バックアップするデータの種類を選択します。使用可能なデータの種類の一覧は、コンピュータで実行しているエージェントおよびライセンスの種類によって異なります。

#### [ディスクボリューム]

Acronis Backup & Recovery 11 エージェント for Windows または Acronis Backup & Recovery 11 エージェント for Linux がインストールされている場合に使用できます。

物理コンピュータ全体、またはそのディスクまたはボリュームのそれぞれをバックアップするには、このオプションを選択します。このデータをバックアップするには、Administrator または Backup Operator の権限が必要です。

ディスクレベルのバックアップを実行すると、深刻なデータ損傷やハードウェア障害が発生した場合にシステム全体を復元できます。バックアップ手順はファイルのコピーよりも高速で、大量のデータをバックアップする場合にバックアップ処理を大幅に高速化できます。

#### **[フォルダ/ファイル]**

Acronis Backup & Recovery 11 エージェント for Windows または Acronis Backup & Recovery 11 エージェント for Linux がインストールされている場合に使用できます。

特定のファイルとフォルダをバックアップするには、このオプションを選択します。

ファイルレベルのバックアップでは、オペレーティング システムの復元には不十分です。特定のデータ(現在のプロジェクトなど)だけを保護する予定の場合、ファイル バックアップを選択します。これによりアーカイブ サイズが減少するので、ストレージ領域を節約できます。

オペレーティング システムに加え、すべての設定とアプリケーションを復元するには、ディスク バックアップを実行する必要があります。

2. **[バックアップするデータ]** 項目の下のツリーで、アイテムの横にあるチェック ボックスをオンにして、バックアップする項目を選択します。

あるコンピュータのチェック ボックスをオンにすると、そのコンピュータのディスクがすべてバックアップされます。個々のディスクやボリュームを選択するには、コンピュータのアイテムを拡張して、ディスクやボリュームの横にあるチェック ボックスをオンにします。

#### **ディスク/ボリュームに関する注意**

- オペレーティング システムとローダーが別のボリュームにあるときは、必ず両方のボリュームをバックアップに含めてください。また、ボリュームはまとめて復元する必要があります。そうしないと、オペレーティング システムが起動しなくなる危険性があります。
- Linux ユーザーの場合: 論理ボリュームおよび MD デバイスは、**[ダイナミック ボリューム]** の下に表示されます。これらのボリュームとデバイスのバックアップの詳細については、「論理ボリュームと MD デバイスのバックアップおよび復元(Linux) (25ページ)」を参照してください。
- Linux ユーザーの場合: ボリュームのバックアップを開始する前に、ext2 ファイル システムなどの非ジャーナリング ファイル システムが格納されているボリュームをすべてマウント解除しておくことをお勧めします。マウント解除しないと、復元時に破損したファイルが含まれる可能性があり、サイズ変更を伴うこれらのボリュームの復元が失敗することがあります。

3. バックアップするデータを指定したら、**[OK]** をクリックします。

## **4.2.2 ソースのアクセス ログイン情報**

バックアップするデータにアクセスするために必要なログイン情報を指定します。

### **ログイン情報を指定するには**

1. 次のいずれかを選択します。

- **[計画のログイン情報を使用する]**

**[計画のパラメータ]** セクションで指定されたバックアップ計画のアカウントのログイン情報を使用して、ソース データにアクセスします。

- **[次のログイン情報を使用する]**

ユーザーが指定するログイン情報を使用して、そのデータ ソースにアクセスします。

計画のアカウントがデータにアクセスする権限を持っていない場合にこのオプションを使用します。

次の項目を指定します。

- **[ユーザー名]** - Active Directory ユーザー アカウントの名前を入力する場合は、ドメイン名(DOMAIN\ユーザー名またはユーザー名@ドメイン)も指定してください。
- **[パスワード]** - アカウントのパスワード。

2. **[OK]**をクリックします。

### 4.2.3 バックアップから除外するファイル

このオプションは、Windows と Linux オペレーティング システム、およびブータブル メディアで有効です。

このオプションは、ディスク レベルのバックアップでは、NTFS ファイル システムと FAT ファイル システムのみで有効です。このオプションは、ファイル レベルのバックアップでは、サポートされているすべてのファイル システムに対して有効です。

このオプションでは、バックアップ処理中にスキップして、バックアップする項目の一覧から除外するファイルとフォルダを定義します。

デフォルトの設定 - **[次の条件に一致するファイルを除外: \*.tmp、\*.\*、\*.bak]**

**除外するファイルおよびフォルダを指定する手順は、次のとおりです。**

次のいずれかのパラメータを設定します。

- **すべての隠しファイルおよびフォルダを除外**

このオプションは、Windows でサポートされているファイル システムでのみ有効です。隠しファイル属性が指定されているファイルとフォルダをスキップする場合は、このチェックボックスをオンにします。フォルダに隠しファイル属性が指定されている場合、フォルダの内容は隠しファイルになっていないファイルも含めてすべて除外されます。

- **すべてのシステム ファイルおよびフォルダを除外**

このオプションは、Windows でサポートされているファイル システムでのみ有効です。システム属性が指定されているファイルとフォルダをスキップする場合は、このチェックボックスをオンにします。フォルダにシステム属性が指定されている場合、フォルダの内容はシステム属性が指定されていないファイルも含めてすべて除外されます。

---

**attrib** コマンドを使用してファイルまたはフォルダのファイル/フォルダ プロパティ内の属性を表示することができます。詳細については、Windows の **[ヘルプとサポート]** をご参照ください。

---

- **次の条件に一致するファイルを除外**

一覧内のいずれかの条件(ファイル マスクと呼ばれます)に一致するファイルとフォルダをスキップする場合は、このチェックボックスをオンにします。ファイル マスクの一覧を作成するには、**[追加]**、**[編集]**、**[削除]**、および **[すべて削除]** ボタンを使用します。

1 つ以上のワイルドカード文字(\* および ?)を ファイル マスク内で使用することができます。

アスタリスク(\*)はファイル名内の 0 個以上の文字の代用として使用します。たとえば、ファイル マスク Doc\*.txt は Doc.txt、Document.txt などの文字と一致します。

疑問符(?)はファイル名内の厳密に 1 文字の代用として使用します。たとえば、ファイルマスク Doc?.txt は Doc1.txt、Docs.txt などのファイルと一致しますが、Doc.txt、Doc11.txt などのファイルとは一致しません。

ドライブ文字を含むパスで指定したフォルダを除外するには、条件のフォルダ名にバックスラッシュ (\)を追加します。たとえば、C:\Finance\ のようになります。

#### 除外の例

条件	例	説明
<b>Windows と Linux</b>		
名前	F.log F	「F.log」という名前のファイルをすべて除外します。 「F」という名前のファイルをすべて除外します。
マスク(*)	*.log F*	.log 拡張子の付いたファイルをすべて除外します。 「F」で始まる名前のファイルとフォルダをすべて除外します(フォルダ F、F1、ファイル F.log、F1.log など)。
マスク (?)	F????.log	「F」で始まる 4 文字の名前の .log ファイルをすべて除外します。
<b>Windows</b>		
ファイルパス	C:\Finance\F.log	C:\Finance フォルダに置かれている「F.log」という名前のファイルを除外します。
フォルダパス	C:\Finance\F\	フォルダ C:\Finance\F を除外します(ドライブ文字で始まるフル パスを指定する必要があります)。
<b>Linux</b>		
ファイルパス	/home/user/Finance/F.log	/home/user/Finance フォルダに置かれている「F.log」という名前のファイルを除外します。
フォルダパス	/home/user/Finance/	/home/user/Finance フォルダを除外します。

上記の設定は、明示的にバックアップ対象として選択されたファイルまたはフォルダには適用されません。たとえば、MyFolder というフォルダとこのフォルダの外部にある MyFile.tmp というファイルをバックアップ対象に選択して、すべての .tmp ファイルをスキップするように選択したとします。この場合、バックアップ処理中に MyFolder フォルダ内のすべての .tmp ファイルはスキップされませんが、MyFile.tmp ファイルはスキップされません。

#### 4.2.4 アーカイブの保存先のアクセス ログイン情報

バックアップ アーカイブの保存先にアクセスするために必要なログイン情報を指定します。名前が指定されたユーザーがアーカイブの所有者と見なされます。

##### ログイン情報を指定するには

1. 次のいずれかを選択します。

- **[計画のログイン情報を使用する]**

**[計画のパラメータ]** セクションで指定されたバックアップ計画のアカウントのログイン情報を使用して、ソース データにアクセスします。

- **[次のログイン情報を使用する]**

ユーザーが指定するログイン情報を使用して、そのデータ ソースにアクセスします。

計画のアカウントがその場所に対するアクセス許可を持っていない場合は、このオプションを使用します。ネットワーク共有またはストレージ ノードの格納域に対しては、特別なログイン情報を指定する必要がある場合があります。

次の項目を指定します。

- **[ユーザー名]** - Active Directory ユーザー アカウントの名前を入力する場合は、ドメイン名(DOMAIN\ユーザー名またはユーザー名@ドメイン)も指定してください。
- **[パスワード]** - アカウントのパスワード。

2. **[OK]**をクリックします。

---

**警告:** FTP 仕様の原文に記載されているように、FTP サーバーにアクセスするのに必要なログイン情報は、ネットワーク上をテキスト形式で転送されます。このことは、ユーザー名とパスワードが、パケット スニファを使用した盗聴者によって傍受される可能性があることを意味します。

---

## 4.2.5 バックアップ スキーム

次の使用可能なバックアップ スキームのいずれかを選択します。

- **[シンプル]:** データのバックアップの実行時期と実行間隔をスケジュールし、保持ルールを指定します。
- **[今すぐ実行]:** **[OK]** ボタンをクリックすると、すぐにバックアップを実行します。
- **[Grandfather-Father-Son]:** GFS(Grandfather-Father-Son)バックアップ スキームを使用します。このスキームでは、1 日に 2 回以上データのバックアップを行うことはできません。日単位のバックアップを実行する曜日を設定し、それらの日の中から週単位または月単位のバックアップの日を選択します。次に、日単位(「Son」と呼ばれます)、週単位(「Father」と呼ばれます)、月単位(「Grandfather」と呼ばれます)のバックアップの保持期間を設定します。期限切れになったバックアップは自動的に削除されます。
- **[ハノイの塔]:** ハノイの塔バックアップ スキームを使用します。このスキームでは、バックアップ (セッション)の時期と頻度をスケジュールし、バックアップ レベル数(最大 16)を選択することができます。1 日に複数回データをバックアップすることができます。バックアップ スケジュールを設定し、バックアップ レベルを選択することによって、ロールバック期間(いつでも戻ることができる保証されたセッション数)が自動的に取得されます。自動クリーンアップ メカニズムは、期限切れになったバックアップを削除し、各レベルの最新のバックアップを保持することによって必要なロールバック期間を維持します。
- **[カスタム]:** カスタム スキームを作成して、会社には最適なバックアップ戦略を自由に設定することができます。異なるバックアップの種類に対する複数のスケジュールの指定、条件の追加、保持ルールの指定を行います。
- **[手動による開始]:** 手動で開始するバックアップ タスクを作成するか、将来 1 回のみ実行するタスクをスケジュールします。
- **[初期シード]:** Acronis Online Backup Storage が最終的な保存先となる完全バックアップをローカルに保存します。

### シンプル スキーム

シンプル バックアップ スキームでは、データをバックアップするタイミングと頻度のみをスケジュールリングします。その他の手順は任意です。

シンプル バックアップ スキームを設定するには、次の項目に適切な値を指定します。

## スケジュール

データをバックアップする実行時期と実行間隔を設定します。スケジュール設定の詳細については、「スケジュール (58ページ)」をご参照ください。

## 保持ルール

保存先にバックアップを保持する期間、および、それらのバックアップを後に移動または削除するかどうかを指定します。保持ルールは、バックアップの作成後に適用されます。デフォルトでは、**[バックアップを無期限に保存する]** が設定されています。つまり、バックアップが自動的に削除されることはありません。保持ルールの詳細については、「バックアップの保持の設定 (70ページ)」をご参照ください。

## バックアップの種類

この設定にアクセスするには、**[バックアップの種類、2番目のロケーションの表示、ベリファイ、仮想コンピュータへの変換]** をクリックします。

バックアップの種類を選択します。

- **完全:** すべてのバックアップ保存先に対してデフォルトで選択されています (Acronis Online Backup Storage を除きます)。
- **増分:** 1回目は完全バックアップが作成されます。以降のバックアップは増分になります。Acronis Online Backup Storage の場合、唯一のバックアップの種類として選択されます。

**注意:** 統合 (191ページ) を使用してアーカイブをクリーンアップする保持ルールと共に、バックアップの種類として増分を選択した場合、さらに時間がかかり、リソースが集中的に使用されます。

## 今すぐバックアップ スキーム

今すぐバックアップ スキームでは、**[バックアップ計画の作成]** ページの下部にある **[OK]** ボタンをクリックすると、即座にバックアップが実行されます。

**[バックアップの種類]** フィールドで、作成するバックアップの種類を、完全バックアップ、増分バックアップ、または差分バックアップ (22ページ) の中から選択します。

## GFS(Grandfather-Father-Son スキーム)

### 概要

- 日単位の増分バックアップ(「Son」)、週単位の差分バックアップ(「Father」)、月単位のバックアップ(「Grandfather」)
- 週単位および月単位のバックアップのカスタム日付
- 各種類のバックアップのカスタム保持期間

### 説明

日単位(D)、週単位(W)、および月単位(M)の一連のバックアップを定期的に生成するバックアップ計画を設定すると仮定します。通常は次のような方法でこれを実行します。次の表に、2 か月間の計画例を示します。

	月	火	水	木	金	土	日
1/1~1/7	D	D	D	D	W	-	-
1/8~1/14	D	D	D	D	W	-	-
1/15~1/21	D	D	D	D	W	-	-

1/22~1/28	D	D	D	D	M	-	-
1/29~2/4	D	D	D	D	W	-	-
2/5~2/11	D	D	D	D	W	-	-
2/12~2/18	D	D	D	D	W	-	-
2/19~2/25	D	D	D	D	M	-	-
2/26~3/4	D	D	D	D	W	-	-

日単位のバックアップは、金曜日を除くすべての平日に実行され、金曜日には週単位および月単位のバックアップが実行されます。月単位のバックアップは毎月第 4 金曜日に実行され、週単位のバックアップは他のすべての金曜日に実行されます。

## パラメータ

GFS(Grandfather-Father-Son)スキームでは、次のパラメータを設定できます。

<b>バックアップの開始時刻:</b>	バックアップを開始する時刻を指定します。デフォルト値は午後 12 時です。
<b>バックアップの実行日</b>	バックアップを実行する日付を指定します。デフォルト値は平日です。
<b>週単位/月単位</b>	[バックアップの実行日] フィールドで選択した日のうちどの日を週単位または月単位のバックアップ用に予約するかを指定します。月単位のバックアップは毎月その曜日の 4 週目に実行されます。デフォルト値は金曜日です。
<b>バックアップの保持期間:</b>	バックアップをアーカイブ内に保存する期間を指定します。期間は、時間単位、日単位、週単位、月単位、年単位で設定できます。月単位のバックアップでは、無期限に保存する場合は [無期限に保持] を選択することもできます。 各バックアップの種類別のデフォルト値は次のとおりです。 日単位: 5 日間(推奨最小期間) 週単位: 7 週間 月単位: 無期限 週単位のバックアップの保持期間は日単位のバックアップより長くする必要があり、月単位のバックアップの保持期間は週単位のバックアップの保持期間より長くする必要があります。 日単位のバックアップの保持期間を 1 週間以上に設定することをお勧めします。
<b>バックアップの種類</b>	日単位、週単位、月単位のバックアップの種類を指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>▪ <b>[常に完全]:</b> すべての日単位、週単位、および月単位のバックアップが常に完全バックアップになります。テープドライブがバックアップ先として選択されている場合、デフォルトで選択されます。</li> <li>▪ <b>完全/差分/増分:</b> 日単位バックアップは増分、週単位は差分、月単位は完全になります。</li> </ul>
<b>詳細設定</b>	集中管理用バックアップ計画を作成する際に Acronis Backup & Recovery 11 のアドバンスドエディションでのみ設定できます。詳細については、「スケジュールの詳細設定」をご参照ください。

バックアップは、そのバックアップに直接依存しているすべてのバックアップも削除対象になるまで削除されません。このため、有効期限が数日経過した週単位または月単位のバックアップがアーカイブ内に残っている場合があります。

---

スケジュールによって最初に日単位または週単位のバックアップが開始される場合は、代わりに完全バックアップが作成されます。

---

## 例

### 先週の各曜日、先月の各週

多くのユーザーが役立つと考える GFS バックアップ スキームについて考えてみましょう。

- 週末を含む毎日ファイルをバックアップする。
- 過去 7 日間の任意の日付のファイルを復元できる。
- 先月の週単位のバックアップにアクセスできる。
- 月単位のバックアップを無期限に保存する。

バックアップ スキームのパラメータを次のように設定できます。

- バックアップの開始時刻: **午後 11:00**
- バックアップの実行日: **毎日**
- 週単位/月単位: **土曜日(例)**
- バックアップの保存期間:
  - 日単位: **1 週間**
  - 週単位: **1 か月**
  - 月単位: **無期限**

結果として、日単位、週単位、月単位のバックアップのアーカイブが作成されます。日単位のバックアップは作成後 7 日間使用できます。たとえば、1 月 1 日(日曜日)の日単位のバックアップは次の 1 月 8 日(日曜日)まで使用できます。1 月 7 日(土曜日)の最初の週単位のバックアップは、2 月 7 日までシステムに保存されます。月単位のバックアップは削除されません。

### ストレージの制限

大きなアーカイブを保存するために膨大なサイズの格納域を用意したくない場合は、バックアップの保存期間が短くなるように GFS スキームを設定し、同時に不測のデータ損失が発生した場合に情報を復元できるようにすることができます。

次のような要件があると仮定します。

- 各平日の最後にバックアップを実行する。
- 誤って削除されたかまたは不注意で変更されたファイルを、比較的早期に見つかった場合に復元できる。
- 週単位のバックアップに作成後 10 日間アクセスできる。
- 月単位のバックアップを半年間保存する。

バックアップ スキームのパラメータを次のように設定できます。

- バックアップの開始時刻: **午後 6:00**
- バックアップの実行日: **平日**
- 週単位/月単位: **金曜日**
- バックアップの保存期間:
  - 日単位: **1 週間**
  - 週単位: **10 日**

- 月単位: 6 か月

このスキームを使用すると、破損したファイルの以前のバージョンを日単位のバックアップから 1 週間にわたり復元でき、週単位のバックアップに 10 日間アクセスできます。それぞれの月単位の完全バックアップは、作成日から 6 か月間使用できます。

## 作業スケジュール

非常勤の会計コンサルタントとして、火曜日と木曜日に会社で作業をしているとします。これらの日には、自分のラップトップ コンピュータで会計文書や財務諸表の変更、スプレッドシートの更新などを行います。このデータをバックアップするために、次の作業を行います。

- 火曜日と木曜日に行った財務諸表やスプレッドシートなどに対する変更の追跡(日単位の増分バックアップ)。
- 先月以降のファイルの変更に関する週単位の要約の作成(金曜日の週単位の差分バックアップ)。
- 月単位のファイルの完全バックアップ。

また、日単位のバックアップを含め、最近 6 か月のすべてのバックアップにアクセスできるようにします。

このような目的には、次の GFS スキームが適しています。

- バックアップの開始時刻: 午後 11 時 30 分
- バックアップの実行日: 火曜日、木曜日、金曜日
- 週単位/月単位: 金曜日
- バックアップの保存期間:
  - 日単位: 6 か月
  - 週単位: 6 か月
  - 月単位: 5 年

これで、火曜日と木曜日に日単位の増分バックアップが作成され、金曜日は週単位と月単位のバックアップが実行されます。**[週単位/月単位]**フィールドで**[金曜日]**を選択するには、まず**[バックアップの実行日]**フィールドでその曜日を選択しておく必要があります。

このようなアーカイブを作成すると、作業の最初の日と最後の日の会計文書の比較、すべての文書の 5 年間にわたる履歴の保持などを行うことができます。

## 日単位のバックアップなし

次のような少し変わった GFS スキームについて考えてみます。

- バックアップの開始時刻: 午後 12:00
- バックアップの実行日: 金曜日
- 週単位/月単位: 金曜日
- バックアップの保存期間:
  - 日単位: 1 週間
  - 週単位: 1 か月
  - 月単位: 無期限

このスキームでは、バックアップは金曜日にものみ実行されます。これにより、金曜日に週単位または月単位のバックアップが実行され、日単位のバックアップを行う他の曜日は残っていません。そのた

め、作成される "祖父-父" アーカイブは、週単位の差分バックアップと月単位の完全バックアップのみで構成されます。

GFS を使用するとこのようなアーカイブを作成することもできますが、この状況にはカスタム スキームのほうがより柔軟に対応できます。

## カスタム バックアップ スキーム

### 概要

- 各種類のバックアップのカスタム スケジュールと条件
- カスタムのスケジュールと保持ルール

### パラメータ

パラメータ	意味
<b>完全バックアップのスケジュール</b>	完全バックアップを実行するスケジュールと条件を指定します。 たとえば、毎週日曜日の午前 1 時にすべてのユーザーがログオフした後すぐに完全バックアップを実行するように設定することができます。
<b>増分バックアップのスケジュール</b>	増分バックアップを実行するスケジュールと条件を指定します。 タスクを実行したときにアーカイブにバックアップが格納されていない場合は、増分バックアップの代わりに完全バックアップが作成されます。
<b>差分バックアップのスケジュール</b>	差分バックアップを実行するスケジュールと条件を指定します。 タスクを実行したときにアーカイブに完全バックアップが格納されていない場合は、差分バックアップの代わりに完全バックアップが作成されます。
<b>アーカイブのクリーンアップ</b>	古いバックアップを取り除く方法として、保持ルール (71 ページ) を定期的に適用するか、またはバックアップ先の領域が不足したら、バックアップ中にアーカイブをクリーンアップするかのいずれかを指定します。  デフォルトでは、保持ルールは指定されません。したがって、古いバックアップは自動的に削除されません。  <b>保持ルールの使用</b> 保持ルールと、保持ルールを適用するタイミングを指定します。 この設定は、バックアップ先が共有フォルダや集中管理用格納域などの場合にお勧めします。  <b>バックアップ時に領域が不足した場合</b> アーカイブは、バックアップ中に新しいバックアップを作成するための領域が不足した場合にのみクリーンアップされます。この場合、本ソフトウェアは次のように動作します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>▪ 最も古い完全バックアップおよび依存するすべての増分/差分バックアップを削除します。</li> <li>▪ 1 つの完全バックアップのみが残っていて、完全バックアップが進行中である場合、前回の完全バックアップと依存するすべての増分/差分バックアップを削除します。</li> <li>▪ 1 つの完全バックアップのみが残っていて、増分バックアップまたは差分バックアップが進行中である場合は、使用可能な領域が不足していることを示すエラーが表示されます。</li> </ul> この設定は、USB ドライブまたは Acronis セキュア ゾーンにバックアップする場合にお勧めします。管理対象格納域、FTP サーバー、および SFTP サーバーには使用できま

	<p>せん。</p> <p>この設定により、ストレージ デバイスに複数のバックアップを保持できない場合に備えてアーカイブ内に存在する前回のバックアップを削除することができます。ただし、何らかの理由により新しいバックアップが作成できない場合、バックアップがまったく存在しなくなる恐れがあります。</p>
<p><b>保持ルール</b>の適用 (保持のルールが設定されている場合のみ)</p>	<p>保持ルール (71ページ)を適用するタイミングを指定します。</p> <p>たとえば、各バックアップ後およびスケジュールされた日時にクリーンアップ処理を実行するように設定することができます。</p> <p>このオプションは、<b>[保持のルール]</b> に 1 つ以上の保持ルールを設定している場合にのみ使用可能です。</p>
<p>クリーンアップ スケジュール (<b>[スケジュールに従う]</b> が選択されている場合のみ)</p>	<p>アーカイブ クリーンアップのスケジュールを指定します。</p> <p>たとえば、各月の最後の日に開始されるようにクリーンアップをスケジュールすることができます。</p> <p>このオプションは、<b>[保持ルール]</b> の適用で <b>[スケジュールに従う]</b> を選択した場合にのみ使用可能です。</p>
<p><b>2 番目のロケーション、3 番目のロケーションなど</b></p>	<p>現在場所からのバックアップのコピーまたは移動 (68ページ)先を指定します。</p> <p>このオプションは、<b>[バックアップ方法]</b> の <b>[作成直後のバックアップを別のロケーションにコピーする]</b> チェックボックスか、または、<b>[保持のルール]</b> ウィンドウの <b>[最も古いバックアップを別の場所に移動する]</b> をオンにした場合にのみ使用できます。</p>

## 例

### 週単位の完全バックアップ

次のバックアップ スキームでは、毎週金曜日の夜に完全バックアップが実行されます。

**完全バックアップ:** スケジュール: **週単位、金曜日ごと、午後 10:00**

ここでは、**[完全バックアップ]**の**[スケジュール]**以外のパラメータはすべて空白のままになります。アーカイブ内のすべてのバックアップは無期限に保持されます(アーカイブのクリーンアップは実行されません)。

### 完全バックアップおよび増分バックアップとクリーンアップ

次のようなスキームを使用したアーカイブは、毎週の完全バックアップと毎日の増分バックアップで構成されます。完全バックアップを開始するには、すべてのユーザーがログオフする必要があります。

**完全バックアップ:** スケジュール: **週単位、金曜日ごと、午後 10:00**

**完全バックアップ:** 条件: **ユーザーのログオフ**

**増分:** スケジュール: **週単位、すべての平日、午後 9:00**

さらに、1 年以上経過しているすべてのバックアップをアーカイブから削除し、新しいバックアップを作成する際にクリーンアップを実行します。

**保持ルール:** **12 か月経過したバックアップを削除**

**ルールの適用:** **バックアップ後**

デフォルトでは、1 年以上経過している完全バックアップは、これに依存するすべての増分バックアップが削除対象にならない限り削除されません。詳細については、「保持ルール (71ページ)」をご参照ください。

## 月単位の完全バックアップ、週単位の差分バックアップ、および日単位の増分バックアップとクリーンアップ

この例は、カスタム スキームで利用できるすべてのオプションの使用方を示しています。

月単位で完全バックアップ、週単位で差分バックアップ、および日単位で増分バックアップを作成するスキームが必要だとします。このときのバックアップ スケジュールは次のようになります。

**完全バックアップ:** スケジュール: 月単位、毎月の最終日曜日、午後 9:00

**増分:** スケジュール: 週単位、すべての平日、午後 7:00

**差分:** スケジュール: 週単位、土曜日ごと、午後 8:00

さらに、バックアップ タスクを開始するための条件を追加することができます。この条件は、それぞれのバックアップの種類に[条件]フィールドに設定します。

**完全バックアップ:** 条件: ロケーションが使用可能

**増分:** 条件: ユーザーのログオフ

**差分:** 条件: ユーザーがアイドル状態

これにより、本来は午後 9:00 にスケジュールされている完全バックアップが、実際にはそれより遅く、バックアップ ロケーションが使用できるようになった直後に開始されることがあります。同様に、増分バックアップと差分バックアップのバックアップ タスクはそれぞれ、すべてのユーザーがログオフするまで、およびユーザーがアイドル状態になるまで待機します。

最後に、アーカイブの保持ルールを作成します。作成後 6 か月以内のバックアップのみを保持し、各バックアップ タスクの終了後および毎月の最終日にクリーンアップを実行します。

**保持ルール:** 6 か月経過したバックアップを削除

**ルールの適用:** バックアップ後、スケジュールに従う

**クリーンアップ スケジュール:** 月単位、毎月の最終日、午後 10:00

デフォルトでは、バックアップは、そのバックアップに依存し、保持する必要があるバックアップがあるときは削除されません。たとえば、完全バックアップが削除の対象となっても、そのバックアップに依存する増分バックアップまたは差分バックアップがあるときは、依存するバックアップもすべて削除できるようになるまで、完全バックアップの削除は延期されます。

詳細については、「保持ルール (71ページ)」をご参照ください。

## ハノイの塔スキーム

### 概要

- 最大 16 レベルの完全バックアップ、差分バックアップ、および増分バックアップ
- 次のレベルのバックアップは、前レベルのバックアップの 2 倍希薄
- 一度に 1 つ各レベルのバックアップを保存

- 新しいバックアップほど密度が高い

## パラメータ

ハノイの塔スキームでは、次のパラメータを設定できます。

スケジュール	日単位 (59ページ)、週単位 (61ページ)、または月単位 (63ページ)のスケジュールを設定します。スケジュール パラメータを設定すれば、単純なスケジュール(単純な日単位スケジュールの例: バックアップ タスクが 1 日 1 回 10 AM に実行される)も、複雑なスケジュール(複雑な日単位のスケジュールの例: タスクが、1 月 15 日から 3 日ごとに実行される。指定された日には、10 AM から 10 PM まで 2 時間ごとにタスクが繰り返される)も作成できます。このように、複雑なスケジュールではスキームを実行するセッションを指定します。下の説明では、「日」を「スケジュールされたセッション」に置き換えることができます。
レベル数	2 から 16 までのバックアップ レベルを選択します。詳細については、以下の例をご参照ください。
ロールバック期間	アーカイブ内でいつでも戻ることができる保証されたセッション数です。スケジュールのパラメータと選択したレベル数に応じて自動的に計算されます。詳細については、以下の例をご参照ください。
バックアップの種類	各バックアップ レベルのバックアップの種類を指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>▪ <b>常に完全:</b> すべてのレベルのバックアップが完全バックアップになります。テープ ドライブがバックアップ先として選択されている場合、デフォルトで選択されます。</li> <li>▪ <b>完全/増分/差分:</b> 各レベルのバックアップが異なる種類のバックアップになります。 <ul style="list-style-type: none"> <li>- 最後のレベルを完全バックアップ</li> <li>- 中間レベルを差分バックアップ</li> <li>- 最初のレベルは増分バックアップ</li> </ul> </li> </ul>

## 例

スケジュール パラメータが次のように設定されています。

- 繰り返し: 1 日に 1 回
- 間隔: 次の時間に 1 回のみ: 6 PM

レベル数: 4

バックアップの種類: 完全/差分/増分

このスキームのスケジュールの最初の 14 日間(14 セッション)は次のようになります。色のついたセルの数字はバックアップ レベルを示します。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
4	1	2	1	3	1	2	1	4	1	2	1	3	1

レベルが異なるバックアップは種類が異なります。

- 最後のレベル(この場合はレベル 4)のバックアップは完全です。
- 中間レベル(2, 3)のバックアップは差分です。
- 最初のレベル(1)のバックアップは増分です。

クリーンアップ メカニズムにより、各レベルの最新のバックアップのみが保持されます。次に、新しい完全バックアップを作成する前の日である 8 日目のアーカイブの状態を示します。

1	2	3	4	5	6	7	8
4	1	2	1	3	1	2	1

このスキームではデータ ストレージを効率よく利用できます。バックアップは現時点に近づくほど蓄積されていきます。4 つのバックアップがあれば、今日、昨日、半週前、または 1 週間前のデータを復元できます。

## ロールバック期間

アーカイブ内で戻ることができる日数は、日によって異なります。保証されている最少日数はロールバック期間と呼ばれます。

次の表は、さまざまなレベルのスキームの完全バックアップとロールバック期間を示しています。

レベル数	完全バックアップの周期	復元可能日数	ロールバック期間
2	2 日	1 ~ 2 日	1 日
3	4 日	2 ~ 5 日	2 日
4	8 日	4 ~ 11 日	4 日
5	16 日	8 ~ 23 日	8 日
6	32 日	16 ~ 47 日	16 日

レベルが 1 つ増えると完全バックアップおよびロールバックの期間が 2 倍になります。

復元可能日数が異なる理由を確認するために、もう一度前の例を見てみましょう。

12 日目には次のバックアップがあります(背景が灰色の数字は削除されたバックアップを表します)。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
4	1	2	1	3	1	2	1	4	1	2	1

新しいレベル 3 の差分バックアップはまだ作成されていないので、5 日目のバックアップがまだ保存されています。このバックアップは 1 日目の完全バックアップに依存しているので、この完全バックアップも使用可能です。これにより 11 日前まで戻ることが可能になるので、これが最善のシナリオです。

ただし、次の日には、新しい第 3 レベルの差分バックアップが作成され、古い完全バックアップは削除されます。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
4	1	2	1	3	1	2	1	4	1	2	1	3

これにより、復元可能日は 4 日間のみとなるので、これは最悪のシナリオです。

14 日目の復元可能日は 5 日間です。復元可能日は再び減少に変わるまで後続の日にも増加していきます。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
4	1	2	1	3	1	2	1	4	1	2	1	3	1

ロールバック期間は、最悪の状況でも保証されている日数を示します。4 レベルのスキームの場合は 4 日間です。

## 手動による開始

**[手動による開始]** スキームを使用する場合、バックアップ計画を指定する必要はありません。バックアップ計画は、後からいつでも **[計画およびタスク]** ビューから手動で起動することが可能です。

次を参照して適切な設定を指定します。

### バックアップの種類

バックアップの種類を選択

- **完全:** すべてのバックアップ保存先に対してデフォルトで選択されています (Acronis Online Backup Storage を除きます)。
- **増分:** 1 回目は完全バックアップが作成されます。以降のバックアップは増分になります。Acronis Online Backup Storage の場合、唯一のバックアップの種類として選択されます。
- **差分:** 1 回目は完全バックアップが作成されます。以降のバックアップは差分になります。

## 4.2.6 バックアップの保存先の選択

アーカイブを保存する場所を指定します。

### 1. 保存先の選択

**[パス]** フィールドで、保存先のフル パスを入力するか、「バックアップ先の選択 (50ページ)」の説明に従って、場所ツリーでバックアップ先を選択します。

### 2. アーカイブ テーブルの使用

正しい保存先を選択できるように、選択した各場所に格納されたアーカイブの名前がテーブルに表示されます。アーカイブの保存場所の内容を確認しているとき、別のユーザーまたはスケジュール設定された処理によって、アーカイブが追加、削除、または変更されることがあります。**[更新]** ボタンを使用すると、アーカイブの一覧を更新できます。

### 3. 新しいアーカイブの名前付け

アーカイブの保存先を選択すると、プログラムにより新しいアーカイブの名前が生成され、**[名前]** フィールドに表示されます。名前は一般に「Archive(N)」のように表示されます(「N」は連番)。生成された名前は、選択した場所内で一意です。自動的に生成された名前をそのまま使用する場合は、**[OK]** をクリックします。使用しない場合、別の一意の名前を入力します。

### 既存のアーカイブへのバックアップ

既存のアーカイブにバックアップするバックアップ計画を設定できます。バックアップ計画を設定するには、アーカイブ テーブルでアーカイブを選択するか、アーカイブ名を **[名前]** フィールドに入力します。アーカイブがパスワードで保護されている場合、パスワードの入力を求めるポップアップ ウィンドウが表示されます。

既存のアーカイブを選択すると、そのアーカイブを使用する別のバックアップ計画の領域に影響を与えることとなります。別の計画が中止されている場合は、このことは問題にはなりませんが、通常は「1 つのバックアップ計画に対して 1 つのアーカイブを使用する」というルールに従う必要があります。このルールに従わなくてもプログラムは機能しますが、いくつかの特別な場合を除き、実用的または効率的ではありません。

## 2 つ以上の計画を同じアーカイブにバックアップすべきではない理由

- 異なるソースを同じアーカイブにバックアップすると、操作性の観点からアーカイブの使用が困難になります。復元する際には、少しでも早く復元を完了させることが重要になりますが、異なるソースが同じアーカイブにバックアップされていると、復元すべきアーカイブの内容の見極めが複雑になってしまいます。

同じアーカイブを操作するバックアップ計画は、同じデータ項目をバックアップする必要があります(たとえば、両方の計画がボリューム C をバックアップする)。

- 複数の保持ルールをアーカイブに適用すると、アーカイブの内容が予測不能になります。それぞれのルールがアーカイブ全体に適用されるので、あるバックアップ計画に含まれるバックアップは、別のバックアップ計画に含まれるバックアップとともに簡単に削除されてしまう可能性があります。GFS およびハノイの塔のバックアップ スキームの標準的な動作は期待すべきではありません。

通常、複雑なバックアップ計画はそれぞれ独自のアーカイブにバックアップします。

## バックアップ先の選択

Acronis Backup & Recovery 11 では、データをさまざまな物理ストレージにバックアップすることができます。

バックアップ 詳細 先	
 個人用	個人用格納域にデータをバックアップするには、 <b>[格納域]</b> グループを展開して、格納域をクリックします。 Acronis セキュア ゾーンは、システムにログイン可能なすべてのユーザーが使用できる個人用格納域です。
 コンピュータ	ローカル コンピュータ
 ローカルフォルダ	コンピュータ上のローカル フォルダにデータをバックアップするには、 <b>[&lt;コンピュータ名&gt;]</b> グループを展開し、目的のフォルダを選択します。
 CD、DVD など	CD や DVD などの光学メディアにデータをバックアップするには、 <b>[&lt;コンピュータ名&gt;]</b> グループを展開し、目的のドライブを選択します。
 テープデバイス	ローカル接続したテープ デバイスにデータをバックアップするには、 <b>[&lt;コンピュータ名&gt;]</b> グループを展開し、目的のデバイスをクリックします。 テープ デバイスは Acronis Backup & Recovery 10 からアップグレードした場合のみ使用できます。テープの使用の詳細については、製品ヘルプの「テープ デバイス」セクションを参照してください。
 ネットワークフォルダ	ネットワーク フォルダにデータをバックアップするには、 <b>[ネットワーク フォルダ]</b> グループを展開し、目的のネットワーク コンピュータを選択して、共有フォルダをクリックします。 ネットワーク共有がアクセス ログイン情報を必要とする場合は、それらの情報が要求されます。  <b>注意:</b> /mnt/share などのマウント ポイントにマウントされている CIFS(Common Internet File System)のネットワーク共有を指定するには、ネットワーク共有そのものではなく、このマウント ポイントを選択します。
 FTP、SFTP	FTP または SFTP にデータをバックアップするには、 <b>[パス]</b> フィールドにサーバー名またはアドレスを次のように入力します。

## バックアップ 詳細 先

	<p><b>ftp://ftp_server:&lt;ポート番号&gt; または sftp://sftp_server:&lt;ポート番号&gt;</b></p> <p>ポート番号が指定されていない場合、ポート 21 が FTP 用に、ポート 22 が SFTP 用に使用されます。</p> <p>アクセス ログイン情報を入力すると、サーバー上のフォルダが使用できるようになります。サーバー上の適切なフォルダをクリックします。</p> <p>匿名アクセスがサーバーによって許可されている場合、匿名ユーザーとしてサーバーにアクセスすることができます。匿名ユーザーとしてアクセスするには、ログイン情報を入力する代わりに、<b>[匿名アクセスを使用する]</b> をクリックします。</p> <hr/> <p><b>注意:</b> FTP 仕様の原文に記載されているように、FTP サーバーにアクセスするのに必要なログイン情報は、ネットワーク上をテキスト形式で転送されます。このことは、ユーザー名とパスワードが、パケット スニファを使用した盗聴者によって傍受される可能性があることを意味します。</p>
 NFS ドライブ	NFS 共有にデータをバックアップするには、 <b>[NFS ドライブ]</b> グループを展開し、フォルダをクリックします。

### 4.2.7 アーカイブのベリファイ

バックアップ データが復元可能かどうかを確認するにはベリファイ タスクを設定します。バックアップのベリファイ結果が不合格の場合は、ベリファイ タスクが失敗し、バックアップ計画がのステータスがエラーになります。

ベリファイを設定するには、次のパラメータを指定します。

1. **[ベリファイの実行時期]** - ベリファイを実行する時期を選択します。ベリファイは多くのリソースを使用する処理なので、管理対象のコンピュータのピーク時以外にベリファイをスケジュールするのが効果的です。これに対し、ベリファイがデータ保護戦略の主要な部分になっていて、バックアップされたデータに破損がなく正常に復元できるかどうかをすぐに知りたい場合は、バックアップ作成後すぐにベリファイを開始することを検討してください。
2. **[ベリファイの対象]** - アーカイブ全体またはアーカイブ内の前回のバックアップのどちらかをベリファイするかを選択します。ファイル バックアップのベリファイでは、バックアップからダミーの復元先に対してすべてのファイルの復元を疑似的に実行します。ボリューム バックアップのベリファイでは、バックアップに保存されているすべてのデータ ブロックのチェックサムを計算します。アーカイブのベリファイでは、すべてのアーカイブのバックアップをベリファイするので、長い時間がかかり多くのシステム リソースを使用する場合があります。
3. **[ベリファイのスケジュール]**(手順 1 でスケジュールに従うように選択した場合のみ表示されます) - ベリファイのスケジュールを設定します。詳細については、「スケジュール (58ページ)」をご参照ください。

### 4.2.8 バックアップ計画のログイン情報

計画のタスクを実行するアカウントのログイン情報を指定します。

ログイン情報を指定する手順は、次のとおりです。

1. 次のいずれかを選択します。
  - **現在のログイン情報を使用する**

タスクは、タスクを起動するユーザーがログインしたときのログイン情報を使用して実行されます。スケジュールに従っていずれかのタスクを実行する必要がある場合は、計画の作成を完了する際に現在のユーザーのパスワードを入力するよう求められます。

- **次のログイン情報を使用する**

タスクは、手動で開始されるか、スケジュールに従って実行されるかにかかわらず、常にユーザーが指定するログイン情報を使用して実行されます。

次の項目を指定します。

- **[ユーザー名]** - Active Directory ユーザー アカウントの名前を入力する場合は、ドメイン名(DOMAIN\ユーザー名またはユーザー名@ドメイン)も指定してください。
- **[パスワード]** - アカウントのパスワード。

2. **[OK]**をクリックします。

ユーザー権限に応じて使用可能になる操作の詳細については、「管理対象のコンピュータ上のユーザー権限 (22ページ)」をご参照ください。

## 4.2.9 ラベル(コンピュータのプロパティをバックアップに保持)

コンピュータ上のデータをバックアップすると、コンピュータ名、オペレーティング システム、Windows の Service Pack、およびセキュリティ識別子(SID)に関する情報がユーザー定義のテキスト ラベルと共にバックアップに追加されます。ラベルには、部門やコンピュータの所有者名など、タグまたはキーとして使用できる情報が含まれています。

エージェント for ESX(i) を使用してコンピュータを VMware ESX(i) サーバーに復元 (95ページ) したり、バックアップを ESX(i) 仮想コンピュータに変換したりすると、これらのプロパティは仮想コンピュータの構成に転送されます。プロパティは、仮想コンピュータの設定で確認できます。**[設定の編集] > [オプション] > [詳細] > [全般] > [構成パラメータ]** の順に選択します。これらのカスタム パラメータを利用して、仮想コンピュータを選択、並べ替え、およびグループ化できます。これはさまざまな場面で役に立ちます。

例:

オフィスまたはデータセンターを仮想環境に移行すると仮定します。VMware API を介して構成パラメータにアクセスできるサードパーティ製ソフトウェアを使用すると、電源を入れる前でも、各コンピュータにセキュリティ ポリシーを自動的に適用できます。

テキスト ラベルをバックアップに追加する手順は、次のとおりです。

1. **[バックアップ計画の作成]** (33ページ) ページで、**[計画のログイン情報、コメント、ラベルの表示]** をクリックします。
2. **[ラベル]** に、テキスト ラベルを入力するかドロップダウン メニューから選択します。

### パラメータの指定

パラメータ	値	説明
acronisTag.label	<string>	ユーザー定義のラベル ラベルは、バックアップ計画を作成する際にユーザーが設定できます。
acronisTag.hostname	<string>	ホスト名(FQDN)
acronisTag.os.type	<string>	オペレーティング システム

<b>acronisTag.os.servicepack</b>	0, 1, 2...	システムにインストールされている Service Pack のバージョン Windows OS の場合のみ
<b>acronisTag.os.sid</b>	<string>	コンピュータの SID 例: S-1-5-21-874133492-782267321-3928949834 Windows OS の場合のみ

### "acronisTag.os.type" パラメータの値

Windows NT 4	winNTGuest
Windows 2000 Professional	win2000ProGuest
Windows 2000 Server	win2000ServGuest
Windows 2000 Advanced Server	win2000ServGuest
Windows XP 全エディション	winXPProGuest
Windows XP 全エディション(64 ビット)	winXPPro64Guest
Windows Server 2003 全エディション	winNetStandardGuest
Windows Server 2003 全エディション(64 ビット)	winNetStandard64Guest
Windows 2008	winLonghornGuest
Windows 2008(64 ビット)	winLonghorn64Guest
Windows Vista	winVistaGuest
Windows Vista(64 ビット)	winVista64Guest
Windows 7	windows7Guest
Windows 7(64 ビット)	windows7_64Guest
Windows Server 2008 R2(64 ビット)	windows7Server64Guest
Linux	otherLinuxGuest
Linux(64 ビット)	otherLinux64Guest
その他のオペレーティング システム	otherGuest
その他のオペレーティング システム(64 ビット)	otherGuest64

### 例

```
acronisTag.label = "DEPT:BUCH; COMP:SUPERSERVER; OWNER:EJONSON"
acronisTag.hostname = "superserver.corp.local"
acronisTag.os.type = "windows7Server64Guest"
acronisTag.os.servicepack = "1"
acronisTag.os.sid = "S-1-5-21-874133492-782267321-3928949834"
```

## 4.2.10 パスワードを要求される理由

スケジュールされたタスクまたは延期されたタスクは、ログオンしているユーザーに関係なく実行される必要があります。タスクを実行するログイン情報を明示的に指定していない場合は、プログラムによって、現在ログオンしているユーザーのアカウントが提示されます。パスワードを入力するか、別のアカウントを指定するか、またはスケジュールされたタスクを手動で開始するタスクに変更します。

## 4.3 バックアップ ファイル名指定の簡略化

バックアップ計画の作成 (33ページ)時に、標準バックアップ ファイル名または簡易バックアップ ファイル名を選択できます。

[アーカイブ名を使用してバックアップ ファイルに名前を指定する...] チェック ボックスを選択した場合:

- アーカイブの最初の(完全)バックアップのファイル名は、アーカイブ名で構成され、**MyData.tib** のようになります。それに続く(増分または差分)バックアップのファイル名にはインデックスが付きます。**MyData2.tib**、**MyData3.tib** などです。

このシンプルな名前付けスキームにより、取り外し可能なメディア上にコンピュータのポータブルイメージを作成したり、スクリプトを使用してバックアップを別の場所に移動させたりすることができます。

- 新しい完全バックアップが作成される前に、アーカイブ全体が削除され、新しいアーカイブが開始されます。

この動作は、USB ハード ドライブを交代で使用して各ドライブに1つの完全バックアップ (55ページ)を保存したり1週間で作成されたバックアップ (56ページ)すべてを保存したりする場合に役立ちます。ただし、ドライブが1台しかない場合に完全バックアップに失敗すると、バックアップなしという状態になってしまいます。

この状態に陥るのを防ぐために、アーカイブ名に日付変数 (57ページ)を追加します。

[アーカイブ名を使用してバックアップ ファイルに名前を指定する...] チェック ボックスを選択しなかった場合:

- 各バックアップには、正確なタイム スタンプとバックアップの種類が含まれた一意のファイル名が付けられます。**MyData\_2010\_03\_26\_17\_01\_38\_960D.tib** のようになります。この標準ファイル名前付けにより、バックアップ保存先とバックアップ スキームの範囲が広がります。

### 制限事項

ファイル名前付けの簡略化を使用する場合は、次の機能を使用できません。

- 1つのバックアップ計画内での完全、増分、および差分バックアップの設定。バックアップの種類ごとにバックアップ計画を作成する必要があります。
- 管理対象の格納域、テープ、Acronis セキュア ゾーン、Acronis Online Backup Storage へのバックアップ
- 保持ルールの設定
- 仮想コンピュータにバックアップを定期的に変換する設定

---

ヒント:FAT16、FAT32、および NTFS ファイル システムでは、ファイル名にバックスラッシュ(\)、スラッシュ(/)、コロン(:)、アスタリスク(\*)、疑問符(?)、二重引用符(")、小なり記号(<)、大なり記号(>)、パイプ(|)を使用できません。

---

### 4.3.1 使用例

このセクションでは、ファイル名前付けの簡略化の使用例について説明します。

#### 例 1: 古いバックアップを置き換える日単位のバックアップ

次のようなシナリオについて考えてみます。

- コンピュータの完全バックアップを毎日実行する場合。
- バックアップをローカルのファイル **MyMachine.tib** に保存する場合。
- 新しいバックアップごとに古いバックアップを置き換える場合。

このシナリオでは、日単位のバックアップ計画を作成します。バックアップ計画の作成では、アーカイブ名を **MyMachine** と指定した後、**[アーカイブ名を使用してバックアップ ファイルに名前を指定する...]** チェックボックスをオンにして、バックアップの種類を **[完全]** にします。

**結果** - アーカイブは、1 つのファイル MyMachine.tib で構成されます。このファイルは、新しいバックアップを作成する前に削除されます。

## 例 2: 日付スタンプ付きの日単位の完全バックアップ

次のようなシナリオについて考えてみます。

- コンピュータの完全バックアップを毎日実行する場合。
- スクリプトを使用して古いバックアップをリモートの場所に移動させる場合。

このシナリオでは、日単位のバックアップ計画を作成します。バックアップ計画の作成では、アーカイブ名を **MyMachine-[日付]** と指定した後、**[アーカイブ名を使用してバックアップ ファイルに名前を指定する...]** チェックボックスをオンにして、バックアップの種類を **[完全]** にします。

**結果:**

- 2011 年 1 月 1 日のバックアップは MyMachine-1.1.2011.tib、2011 年 1 月 2 日のバックアップは MyMachine-1.2.2011.tib というように保存されます。
- スクリプトでは、日付スタンプに基づいて古いバックアップを移動できます。

「日付変数 (57ページ)」も参照してください。

## 例 3: 1 日の時間単位のバックアップ

次のようなシナリオについて考えてみます。

- サーバーの重要なファイルを毎日、時間単位でバックアップする場合。
- 毎日、初回のバックアップは完全バックアップで午前 0 時に実行し、その後のバックアップは差分バックアップで毎時間実行する場合。
- 古いバックアップをアーカイブに保存する場合。

このシナリオでは、日単位のバックアップ計画を作成します。バックアップ計画の作成では、アーカイブ名を **ServerFiles([日付])** と指定し、**[アーカイブ名を使用してバックアップ ファイルに名前を指定する...]** チェックボックスをオンにし、バックアップの種類を **[差分]** にして、午前 0 時から毎時間バックアップを実行するようにスケジュールします。

**結果:**

- 2011 年 1 月 1 日のバックアップは、ServerFiles(1.1.2011).tib から開始され、ServerFiles(1.1.2011)2.tib が続き、ServerFiles(1.1.2011)24.tib まで、24 のファイルに保存されます。
- 翌日のバックアップは、完全バックアップの ServerFiles(1.2.2011).tib から開始されます。

「日付変数 (57ページ)」も参照してください。

## 例 4: ドライブを毎日スワップする場合の日単位の完全バックアップ

次のようなシナリオについて考えてみます。

- コンピュータの完全バックアップを、外部ハード ディスク ドライブにあるファイル **MyMachine.tib** に毎日実行する場合。
- 外部ハード ディスク ドライブが 2 つある場合。コンピュータに接続したとき、どちらかのドライブにドライブ文字に **D** が割り当てられています。
- 各バックアップの前にドライブをスワップする場合。これにより、一方のドライブに今日のバックアップ、もう一方に昨日のバックアップが保存されます。
- 新しいバックアップごとに、現在接続されているドライブのバックアップと置き換える場合。

このシナリオでは、日単位のバックアップ計画を作成します。バックアップ計画の作成では、アーカイブ名を **MyMachine**、アーカイブ場所を **D:\** と指定した後、**[アーカイブ名を使用してバックアップ ファイルに名前を指定する...]** チェックボックスをオンにして、バックアップの種類を **[完全]** にします。

**結果** - 各ハード ディスク ドライブに、完全バックアップが 1 つ含まれます。1 つのドライブをコンピュータに接続している場合に、もう 1 つのドライブをサイト外に保管して、データを保護することができます。

### 例 5: ドライブを毎週スワップする場合の日単位のバックアップ

次のようなシナリオについて考えてみます。

- コンピュータのバックアップを毎日実行する場合。毎週月曜日に完全バックアップを実行し、火曜日～日曜日は増分バックアップを実行します。
- 外部ハード ディスク ドライブにあるアーカイブ **MyMachine** にバックアップする場合。
- 外部ハード ディスク ドライブが 2 つある場合。コンピュータに接続したとき、オペレーティング システムでどちらかのドライブにドライブ文字に **D** が割り当てられています。
- 毎週月曜日にドライブをスワップする場合。これにより、一方のドライブに現在の週(月曜日～日曜日)のバックアップ、もう一方に前の週のバックアップが保存されます。

このシナリオでは、次のように 2 つのバックアップ計画を作成する必要があります。

- a) 最初のバックアップ計画の作成では、アーカイブ名を **MyMachine**、アーカイブ場所を **D:\** と指定し、**[アーカイブ名を使用してバックアップ ファイルに名前を指定する...]** チェックボックスをオンにし、バックアップの種類を **[完全]** にし、毎週月曜日にバックアップを実行するようにスケジュールします。
- b) 2 つ目のバックアップ計画の作成では、最初のバックアップ計画と同じ設定値を使用しますが、バックアップの種類を **[増分]** にし、毎週火曜日～日曜日にバックアップを実行するようにスケジュールします。

**結果:**

- 最初のバックアップ計画によって月曜日のバックアップが作成される前に、現在接続されているドライブからすべてのバックアップが削除されます。
- 1 つのドライブをコンピュータに接続している場合に、もう 1 つのドライブをサイト外に保管して、データを保護することができます。

### 例 6: 業務時間内のバックアップ

次のようなシナリオについて考えてみます。

- サーバーの重要なファイルを毎日バックアップする場合。
- 毎日の最初の完全バックアップを午前 1 時に実行する場合。
- 業務時間中の差分バックアップを午前 8 時～午後 5 時に毎時間実行する場合。

- バックアップ ファイル名に作成日を含める場合。

このシナリオでは、次のように 2 つのバックアップ計画を作成する必要があります。

- a) 最初のバックアップ計画の作成では、アーカイブ名を **ServerFiles([日付])**と指定し、**[アーカイブ名を使用してバックアップ ファイルに名前を指定する...]** チェックボックスをオンにし、バックアップの種類を **[完全]** にし、毎日午前 1 時にバックアップを実行するようにスケジュールします。
- b) 2 つ目のバックアップ計画の作成では、最初のバックアップ計画と同じ設定値を使用しますが、バックアップの種類を **[差分]** にし、次のようにバックアップをスケジュールします。
  - **タスクの実行: 日単位**
  - **次の間隔で実行: 1 時間**
  - **開始時刻: 08:00:00 AM**
  - **終了時刻: 05:01:00 PM**

#### 結果:

- 2011 年 1 月 31 日の完全バックアップは、ServerFiles(1.31.2011).tib に保存されます。
- 2011 年 1 月 31 日の差分バックアップは、ServerFiles(1.31.2011)2.tib から開始され、ServerFiles(1.31.2011)3.tib が続き、ServerFiles(1.31.2011)11.tib まで、10 のファイルに保存されます。
- 翌日 2 月 1 日のバックアップは、完全バックアップの ServerFiles(2.1.2011).tib から開始されます。差分バックアップは、ServerFiles(2.1.2011)2.tib から開始されます。

「日付変数 (57ページ)」も参照してください。

### 4.3.2 日付変数

アーカイブ名に日付変数を指定すると、各バックアップのファイル名にバックアップの作成日が含まれます。

この変数を使用すると、新しい日付の最初のバックアップは完全バックアップになります。次の完全バックアップが作成される前に、その日それまでに取得されたバックアップはすべて削除されず、その日の前に取得されたバックアップは保持されます。つまり、増分バックアップをしないにもかかわらず複数の完全バックアップを保存することができますが、1 日に可能な完全バックアップは 1 つだけです。バックアップは、手動またはスクリプトを使用して、日付で並べ替えたり、コピー、移動、削除したりすることができます。

日付の形式は m.d.yyyy です。たとえば、2011 年 1 月 31 日は 1.31.2011 です (先頭に 0 は付きません)。

この変数は、アーカイブ名の任意の位置に置くことができます。この変数では、大文字と小文字の両方を使用できます。

#### 例

**例 1:** 2011 年 1 月 31 日から 2 日間、増分バックアップを 1 日に 2 回(午前 0 時と正午)実行すると仮定します。アーカイブ名を **MyArchive-[日付]-** にします。2 日目が終わった後のバックアップ ファイルの一覧は次のようになります。

**MyArchive-1.31.2011-.tib**(完全、1 月 31 日午前 0 時に作成)

**MyArchive-1.31.2011-2.tib**(増分、1 月 31 日正午に作成)

**MyArchive-2.1.2011-.tib**(完全、2月1日午前0時に作成)

**MyArchive-2.1.2011-2.tib**(増分、2月1日正午に作成)

例 2: 例 1 と同じスケジュールおよび同じアーカイブ名で完全バックアップを実行すると仮定します。2日目が終わった後のバックアップファイルの一覧は次のようになります。

**MyArchive-1.31.2011-.tib**(完全、1月31日正午に作成)

**MyArchive-2.1.2011-.tib**(完全、2月1日正午に作成)

午前0時に作成された完全バックアップは、同日に実行された新しい完全バックアップに置き換えられました。

### 4.3.3 バックアップの分割でのファイル名前付けの簡略化

バックアップが [バックアップの分割] (80ページ) の設定に従って分割されると、バックアップの各部分の名前付けにも同じインデックスが使用されます。次のバックアップのファイル名には、次に使用可能なインデックスが付きます。

たとえば、アーカイブ **MyData** の初回のバックアップが2つの部分に分割されたとします。このバックアップのファイル名は、**MyData1.tib** と **MyData2.tib** です。2回目のバックアップ(分割されていないと仮定)は、**MyData3.tib** という名前になります。

## 4.4 スケジューリング

Acronis スケジューラを使用すると、管理者は、バックアップ計画を組織の日常業務および社員の作業スタイルに適合させることができます。計画のタスクは、重要なデータを安全に保護しながら、体系的に開始されます。

スケジューリングを使用できるのは、シンプル、カスタム、またはハノイの塔のうちのいずれかのバックアップ スキームを使用してバックアップ計画を作成 (33ページ)した場合です。スケジュールをベリファイ タスク (131ページ)に設定することもできます。

このスケジューラでは、バックアップ計画が設定されているコンピュータのローカル時刻を使用します。スケジュールを作成する前に、コンピュータの日付と時刻を正しく設定してください。

### スケジュール

タスクを実行する時刻を定義するには、1つ以上のイベントを指定する必要があります。いずれかのイベントが発生するとすぐに、タスクが開始されます。Linux オペレーティング システムで指定できるイベントを次の表に示します。

イベント
時間: 日単位、週単位、月単位
最後の正常なバックアップが完了してから経過した時間 (経過時間を指定)
システムの起動

### 条件

バックアップ操作のみの場合は、イベントの他に1つ以上の条件を指定できます。いずれかのイベントが発生すると、スケジューラは条件をチェックし、その条件が満たされるときはタスクを実行しま

す。複数の条件が指定されているときにタスクを実行するには、それらの条件のすべてが同時に満たされる必要があります。Linux オペレーティング システムで指定できる条件を次の表に示します。

タスクを実行するための必須条件
保存先のホストが使用可能
タスクの実行日時が指定された期間内に存在する
最後の正常なバックアップが完了してから指定された期間が経過した

イベントが発生しても 1 つの条件(または複数の条件のいずれか)を満たさないときのスケジューラの動作は、[タスクの開始条件] (93ページ) バックアップ オプションで定義します。

### よく寄せられる質問

- 前のタスクの実行が完了していないときにイベントが発生すると(および条件が指定されているときはそれを満たすと)どうなりますか。  
イベントは無視されます。
- スケジューラが前のイベントに必要な条件が満たされるのを待っているときに別のイベントが発生した場合はどうなりますか。  
イベントは無視されます。
- 条件が長時間にわたって満たされなかったときはどうなりますか。  
バックアップの遅れによって問題が発生する可能性があるときは、強制的に条件を満たす(ログオフするようにユーザーに通知する)か手動でタスクを実行します。この状況に自動的に対処するために、指定した時間が経過したら条件に関係なくタスクを実行するように設定できます。

## 4.4.1 日単位のスケジュール

日単位のスケジュールは、Windows および Linux オペレーティング システムで有効です。

日単位のスケジュールを指定する手順は、次のとおりです。

[スケジュール]領域で、次のように適切なパラメータを選択します。

<...> 日に 1 回	何日ごとにタスクを実行するかを設定します。たとえば、[2 日に 1 回]と設定すると、1 日おきにタスクが開始されます。
--------------	--

[タスク実行日の実行間隔...]領域で、次のいずれかを選択します。

次の時間に 1 回のみ: <...>	タスクを 1 回実行する時刻を設定します。
間隔: <...> 開始時刻: <...> 終了時刻: <...>	指定した時間内にタスクを再実行する回数を設定します。たとえば、タスクの頻度を「1 時間ごと、午前 10:00:00 から午後 10:00:00 まで」に設定すると、午前 10 時から午後 10 時の間にタスクが 12 回実行されます。

[有効期間...]領域で、次のように設定します。

開始: <...>	スケジュールが有効になる日付を設定します(発効日)。このチェックボックスがオフのときは、上で指定した日時に最も近い時刻にタスクが開始されます。
終了: <...>	スケジュールが無効になる日付を設定します。このチェックボックスがオフのときは、無期限にタスクが実行されます。

詳細なスケジュール設定は、Acronis Backup & Recovery 11 管理サーバーに登録されたコンピュータに対してのみ使用できます。これらの設定を指定するには、**[詳細設定]**領域の**[変更]**をクリックします。

設定した内容はすべて、ウィンドウの下部にある**[スケジュール]**フィールドに表示されます。

## 例

### "単純な" 日単位のスケジュール

毎日午後 6 時にタスクを実行します。

スケジュールのパラメータは次のように設定します。

1. **[間隔:]** 1 日ごと。
2. **[次の時間に 1 回のみ:]** 午後 06:00:00 に 1 回。
3. **[有効期間...]**

**[開始日:]** 設定なし。タスクが午後 6 時までに作成されたときは、その日にタスクが開始されます。午後 6 時すぎにタスクが作成されたときは、次の日の午後 6 時に開始されます。

**[終了日:]** 設定なし。タスクは無期限に実行されます。

### "3 時間の間隔で 3 か月間継続する" スケジュール

タスクを 3 時間ごとに実行します。タスクは特定の日付(たとえば、2009 年 9 月 15 日)に開始され、3 か月後に終了します。

スケジュールのパラメータは次のように設定します。

1. **[間隔:]** 1 日ごと。
2. **[次の間隔で実行:]** 3 時間ごと

**[開始時刻:]** 午前 12:00:00(深夜)**[終了時刻:]** 午後 09:00:00 - つまり、タスクは 3 時間の間隔で 1 日 8 回実行されます。午後 9 時でその日の最後の反復実行が終了した後、翌日になると深夜の午前 0 時からタスクの反復実行が再開されます。

3. **[有効期間...]**

**[開始日:]** 2009 年 9 月 15 日。たとえば、タスクの作成日が今日 2009 年 9 月 15 日で、タスクの作成時刻が午後 1 時 15 分のとき、この例では、最も近い間隔である午後 3 時になると、タスクが開始されます。

**[終了日:]** 2009 年 12 月 15 日。タスクの実行はこの日付で終了しますが、タスク自体は引き続き**[タスク]**ビューに表示されます。

### 1 つのタスクに対する複数の日単位のスケジュール

1 日に複数回のタスクの実行が必要になり、それらを実行する間隔が異なる場合もあります。このようなときは、1 つのタスクに複数のスケジュールを追加します。

たとえば、2009 年 9 月 20 日から 3 日ごとに 1 日 5 回タスクを実行する必要があるとします。

- 1 回目午前 8 時
- 2 回目午後 12 時(正午)
- 3 回目午後 3 時
- 4 回目午後 5 時

- 5 回目午後 7 時

わかりやすい方法は、5 つの単純なスケジュールを追加することです。しかし、少し考えてみると、より適切な方法があることがわかります。つまり、1 回目と 2 回目のタスクの間隔は 4 時間で、3 回目、4 回目、および 5 回目の間隔はそれぞれ 2 時間です。この例では、2 つのスケジュールをタスクに追加する次の方法が最適です。

### 最初の日単位のスケジュール

1. [間隔:] 3 日ごと。
2. [次の間隔で実行:] 4 時間ごと。  
[開始時刻:] 午前 08:00:00 [終了時刻:] 午後 12:00:00。
3. [有効期間...]  
[開始日:] 2009 年 09 月 20 日。  
[終了日:] 設定なし。

### 2 番目の日単位のスケジュール

1. [間隔:] 3 日ごと。
2. [次の間隔で実行:] 2 時間ごと。  
[開始時刻:] 午後 03:00:00 [終了時刻:] 午後 19:00:00。
3. [有効期間...]  
[開始日:] 2009 年 09 月 20 日。  
[終了日:] 設定なし。

## 4.4.2 週単位のスケジュール

週単位のスケジュールは、Windows および Linux オペレーティング システムで有効です。

週単位のスケジュールを指定する手順は、次のとおりです。

[スケジュール]領域で、次のように適切なパラメータを選択します。

間隔: <...> 週 ごと: <...>	何週間ごとの何曜日にタスクを実行するかを指定します。たとえば、[2 週間に 1 回、月曜日]と設定すると、1 週間おきの月曜日にタスクが実行されます。
--------------------------	---

[タスク実行日の実行間隔...]領域で、次のいずれかを選択します。

次の時間に 1 回のみ: <...>	タスクを 1 回実行する時刻を設定します。
次の間隔で実行: <...> 開始時刻: <...> 終了時刻: <...>	指定した期間内にタスクを実行する回数を設定します。たとえば、タスクの頻度を「1 時間ごと、午前 10:00:00 から午後 10:00:00 まで」に設定すると、午前 10 時から午後 10 時の間にタスクが 12 回実行されます。

[有効期間...]領域で、次のように設定します。

開始日: <...>	スケジュールが有効になる日付を設定します(発効日)。このチェックボックスがオフのときは、上で指定した日時に最も近い時刻にタスクが開始されます。
終了日: <...>	スケジュールが無効になる日付を設定します。このチェックボックスがオフのときは、無期限にタスクが実行されます。

詳細なスケジュール設定は、Acronis Backup & Recovery 11 管理サーバーに登録されたコンピュータに対してのみ使用できます。これらの設定を指定するには、**[詳細設定]**領域の**[変更]**をクリックします。

設定した内容はすべて、ウィンドウの下部にある**[スケジュール]**フィールドに表示されます。

## 例

### "曜日" スケジュール

特定の日付(たとえば、2009 年 5 月 14 日)から 6 か月間にわたり、毎週金曜日の午後 10 時にタスクを実行します。

スケジュールのパラメータは次のように設定します。

1. [間隔:] 1 週ごと、**金曜日**。
2. [次の時間に 1 回のみ:] **午後 10:00:00** に 1 回。
3. [有効期間...]

[開始日:] **2009 年 05 月 13 日**。タスクは、最も近い金曜日の午後 10 時に開始されます。

[終了日:] **2009 年 11 月 13 日**。タスクの実行はこの日付で終了しますが、タスク自体はこの日付以降も引き続き[タスク]ビューに表示されます (この日付が金曜日でないときは、この日付より前の最後の金曜日で実行が終了します)。

このスケジュールは、カスタム バックアップ スキームを作成するときによく使用します。たとえば、"曜日" 指定のスケジュールを完全バックアップに追加し、増分バックアップを平日に実行するようにスケジュールします。詳細については、「カスタム バックアップ スキーム (44ページ)」の「完全バックアップおよび増分バックアップとクリーンアップ」の例をご参照ください。

### "平日" スケジュール

毎週、月曜日から金曜日の平日にタスクを実行します。平日は、午後 9 時の 1 回のみタスクを開始します。

スケジュールのパラメータは次のように設定します。

1. [間隔:] 1 週ごと、**<平日>** - [**平日**>]チェックボックスをオンにすると、対応するチェックボックス([**月曜日**]、[**火曜日**]、[**水曜日**]、[**木曜日**]、および[**金曜日**])が自動的にオンになり、残りの曜日はオフのままになります。
2. [次の時間に 1 回のみ:] **午後 09:00:00** に 1 回。
3. [有効期間...]

[開始日:] **空白**。たとえば、月曜日の午前 11 時 30 分にタスクを作成すると、同じ日の午後 9 時にタスクが開始されます。たとえば金曜日の午後 9 時すぎにタスクが作成されたときは、最も近い平日(この例では月曜日)の午後 9 時にタスクが開始されます。

[終了日:] **空白**。タスクは無期限に再実行されます。

このスケジュールは、カスタム バックアップ スキームを作成するときによく使用します。たとえば、"平日" のようなスケジュールを増分バックアップに追加して、完全バックアップを特定の曜日に実行するようにスケジュールします。詳細については、「カスタム バックアップ スキーム (44ページ)」の「完全バックアップおよび増分バックアップとクリーンアップ」の例をご参照ください。

## 1 つのタスクに対する複数の週単位のスケジュール

異なる曜日に異なる間隔でタスクを実行する必要があるときは、対象となる曜日ごとにスケジュールを追加します。

たとえば、次のスケジュールでタスクを実行する必要があるとします。

- 月曜日: 午後 12 時(正午)と午後 9 時の 2 回
- 火曜日: 午前 9 時から午後 9 時までの間 3 時間ごと
- 水曜日: 午前 9 時から午後 9 時までの間 3 時間ごと
- 木曜日: 午前 9 時から午後 9 時までの間 3 時間ごと
- 金曜日: 午後 12 時と午後 9 時の 2 回(月曜日と同じ)
- 土曜日: 午後 9 時に 1 回
- 日曜日: 午後 9 時に 1 回

同じ時刻を組み合わせるにより、次の 3 つのスケジュールをタスクに追加することができます。

### 最初のスケジュール

1. [間隔:] 1 週ごと、月曜日、金曜日。
2. [次の間隔で実行:] 9 時間ごと  
[開始時刻:] 午後 12:00:00 [終了時刻:] 午後 09:00:00。
3. [有効期間...]  
[開始日:] 設定なし。  
[終了日:] 設定なし。

### 2 番目のスケジュール

1. [間隔:] 1 週ごと、火曜日、水曜日、木曜日。
2. [次の間隔で実行:] 3 時間ごと  
[開始時刻:] 午前 09:00:00 [終了時刻:] 午後 09:00:00
3. [有効期間...]  
[開始日:] 設定なし。  
[終了日:] 設定なし。

### 3 番目のスケジュール

1. [間隔:] 1 週ごと、土曜日、日曜日。
2. [次の時間に 1 回のみ:] 午後 09:00:00 に 1 回。
3. [有効期間...]  
[開始日:] 設定なし。  
[終了日:] 設定なし。

## 4.4.3 月単位のスケジュール

月単位のスケジュールは、Windows および Linux オペレーティング システムで有効です。

月単位のスケジュールを指定する手順は、次のとおりです。

[スケジュール]領域で、次のように適切なパラメータを選択します。

月: <...>	タスクを実行する特定の月を選択します。
日: <...>	選択した月の、タスクを実行する特定の日を選択します。実際の日付ではなく、月の最終日を選択することもできます。
実行曜日: <...> <...>	タスクを実行する特定の曜日を選択します。

[タスク実行日の実行間隔...]領域で、次のいずれかを選択します。

次の時間に 1 回のみ: <...>	タスクを 1 回実行する時刻を設定します。
次の間隔で実行: <...> 開始時刻: <...> 終了時刻: <...>	指定した期間内にタスクを実行する回数を設定します。たとえば、タスクの頻度を「1 時間ごと、午前 10:00:00 から午後 10:00:00 まで」に設定すると、午前 10 時から午後 10 時の間にタスクが 12 回実行されます。

[有効期間...]領域で、次のように設定します。

開始日: <...>	スケジュールが有効になる日付を設定します(発効日)。このチェックボックスがオフのときは、上で指定した日時に最も近い時刻にタスクが開始されます。
終了日: <...>	スケジュールが無効になる日付を設定します。このチェックボックスがオフのときは、無期限にタスクが実行されます。

詳細なスケジュール設定は、Acronis Backup & Recovery 11 管理サーバーに登録されたコンピュータに対してのみ使用できます。これらの設定を指定するには、[詳細設定]領域の[変更]をクリックします。

設定した内容はすべて、ウィンドウの下部にある[スケジュール]フィールドに表示されます。

## 例

### "毎月の最終日" スケジュール

毎月の最終日の午後 10 時に 1 回タスクを実行します。

スケジュールのパラメータは次のように設定します。

1. [月:] <毎月>。
2. [日:] 最終日。実際の日付ではなく、毎月の最終日にタスクを実行します。
3. [次の時間に 1 回のみ:] 午後 10:00:00 に 1 回。
4. [有効期間...]  
[開始日:] 空白。  
[終了日:] 空白。

このスケジュールは、カスタム バックアップ スキームを作成するときによく使用します。たとえば、"毎月の最終日" スケジュールを完全バックアップに追加し、差分バックアップを週に 1 回、増分バックアップを平日に実行するようにスケジュールします。詳細については、「カスタム バックアップ スキーム (44 ページ)」の「月単位の完全バックアップ、週単位の差分バックアップ、日単位の増分バックアップとクリーンアップ」の例をご参照ください。

## "季節" スケジュール

2009 年と 2010 年の北半球の秋にあたるすべての平日にタスクを実行します。平日は、午前 0 時(真夜中)から午後 6 時まで 6 時間ごとにタスクを実行します。

スケジュールのパラメータは次のように設定します。

1. [月:] 9 月、10 月、11 月。
2. [実行曜日:] <すべて>の<平日>。
3. [次の間隔で実行:] 6 時間ごと。  
[開始時刻:] 午前 12:00:00 [終了時刻:] 午後 06:00:00。
4. [有効期間...]  
[開始日:] 2009 年 08 月 30 日。タスクが実際に開始されるのは、9 月の最初の平日です。この日付を設定することにより、2009 年にタスクを開始することを定義しています。  
[終了日:] 2010 年 12 月 01 日。タスクが実際に終了するのは、11 月の最後の平日です。この日付を設定することにより、北半球の秋が終わると、2010 年までタスクを中断することを定義しています。

### 1 つのタスクに対する複数の月単位のスケジュール

月ごとに別の日または別の週に異なる時間間隔でタスクを実行する必要があるときは、対象となる月ごとにスケジュールを追加します。

次のタスクが 2009 年 11 月 1 日に有効になるとします。

- 北半球の冬にあたる平日は、毎日午後 10 時にタスクを 1 回実行します。
- 北半球の春と秋にあたる平日は、毎日 12 時間ごとにタスクを実行します。
- 北半球の夏の間は、毎月 1 日と 15 日の午後 10 時にタスクを実行します。

この例では、次の 3 つのスケジュールをタスクに追加します。

#### 最初のスケジュール

1. [月:] 12 月、1 月、2 月。
2. [実行曜日:] <すべて>の<平日>
3. [次の時間に 1 回のみ:] 午後 10:00:00 に 1 回。
4. [有効期間...]  
[開始日:] 2009 年 11 月 01 日。  
[終了日:] 設定なし。

#### 2 番目のスケジュール

1. [月:] 3 月、4 月、5 月、9 月、10 月、11 月
2. [実行曜日:] <すべて>の<平日>
3. [次の間隔で実行:] 12 時間ごと  
[開始時刻:] 午前 12:00:00 [終了時刻:] 午後 12:00:00。
4. [有効期間...]  
[開始日:] 2009 年 11 月 01 日。  
[終了日:] 設定なし。

### 3 番目のスケジュール

1. [月:] 6月、7月、8月。
2. [日:] 1日と15日。
3. [次の時間に1回のみ:] 午後 10:00:00 に1回。
4. [有効期間...]  
[開始日:] 2009年11月01日。  
[終了日:] 設定なし。

#### 4.4.4 条件

条件を使用すると、スケジュールで特定の条件に従ってより柔軟にバックアップ タスクを実行できるようになります。指定したイベントが発生すると(使用可能なイベントの一覧は「スケジュールリング (58ページ)」を参照)、スケジュールは指定された条件をチェックし、条件が満たされるとタスクを実行します。

イベントが発生しても条件(または複数の条件のいずれか)を満たさないときのスケジュールの動作は、**[タスクの開始条件]** (93ページ) バックアップ オプションで定義します。このオプションで、バックアップ方針に対する条件の重要度を指定できます。

- 条件は必須 - すべての条件が満たされるまで、バックアップ タスクの実行は保留されます。
- 条件は必須ではないが、バックアップ タスク実行の優先度は高 - 指定された期間内は、タスクの実行が保留されます。指定された期間が経過すると、条件が満たされなくてもタスクが実行されます。この設定では、長期間にわたって条件が満たされず、それ以上の遅延は望ましくないときに、プログラムによってその状況に自動的に対応します。
- バックアップ タスクの開始時刻が重要 - バックアップ タスクを開始する時刻に条件が満たされていない場合、タスクはスキップされます。タスクの実行をスキップする方法は、特にイベントが比較的頻繁に発生する場合など、指定された時刻を厳密に守ってデータのバックアップを開始する必要があるときに適しています。

---

条件を設定できるのは、カスタム バックアップ スキーム (44ページ)を使用している場合だけです。完全バックアップ、増分バックアップ、および差分バックアップの条件をそれぞれ設定できます。

---

#### 複数の条件の追加

タスクを実行するには、複数の条件が同時に満たされる必要があります。

#### 保存先のホストが使用可能

---

適用対象: Windows、Linux

---

"保存先のホストが使用可能" は、ネットワーク上のドライブでアーカイブの保存先をホストしているコンピュータが使用可能であることを示します。

#### 例:

ネットワーク上の保存先に対するデータのバックアップを、平日の午後 9 時に実行します。その時点で、保守作業などのために保存先のホストを使用できないときは、バックアップをスキップし、次の平日まで待ってからタスクを実行します。バックアップに失敗する可能性があるときは、バックアップ タスクを開始しないことが前提となります。

- イベント: **週単位、1 週間ごとの <平日>、午後 09:00:00 に 1 回。**
- 条件: **保存先のホストが使用可能**
- タスクの開始条件: **タスクの実行をスキップする。**

結果は次のようになります。

(1)午後 9 時に保存先のホストを使用できる場合、時間どおりにバックアップ タスクが開始されま  
す。

(2)午後 9 時の時点でホストを使用できない場合、次の平日にホストを使用できれば、その時点で  
バックアップ タスクが開始されます。

(3)平日の午後 9 時に保存先のホストを使用できない限り、タスクは開始されません。

## 期間の範囲内に収める

---

適用対象: Windows、Linux

---

バックアップ タスクを開始する時刻を、指定した期間内に制限します。

### 例

ある企業では、ユーザー データとサーバーのバックアップ用に、同じ NAS (Network Attached Storage)上の異なる場所を使用しています。就業時間は午前 8 時から午後 5 時までです。ユーザーのデータはユーザーがログオフしたらすぐにバックアップする必要がありますが、実行できる時間は午後 4:30 から午後 10 時までの間です。毎日午後 11 時に会社のサーバーをバックアップします。このため、ネットワークの帯域幅をすべて利用できるように、この時刻までにすべてのユーザー データのバックアップが完了すると理想的です。上限を午後 10 時に指定すると、ユーザーデータのバックアップ時間は 1 時間を超えないことが前提となります。指定した期間内にユーザーがまだログオンしているとき、またはその期間以外の時刻にログオフしても、ユーザー データをバックアップしません。つまり、タスクの実行をスキップします。

- イベント: **ログオフするとき、次のユーザー: すべてのユーザー**
- 条件: **期間の範囲内に収める、午後 04:30:00 から午後 10:00:00 まで。**
- タスクの開始条件: **タスクの実行をスキップする。**

結果は次のようになります。

(1)ユーザーが午後 4 時半から午後 10 時の間にログオフすると、ログオフの直後にバックアップ  
タスクが開始されます。

(2)ユーザーがその期間以外の時刻にログオフすると、タスクはスキップされます。

### その他の例

タスクが特定の時刻に実行されるようにスケジュールされていて、この時刻が指定された期間の範  
囲外の場合

たとえば、次のように設定されているとします。

- イベント: **日単位、1 日ごと、午後 03:00:00 に 1 回。**
- 条件: **期間の範囲内に収める、午後 06:00:00 から午後 11:59:59 まで。**

この例では、タスクが実行されるかどうかおよび時刻は、タスクの開始条件によって異なります。

- タスクの開始条件が[タスクの実行をスキップする]の場合は、タスクが実行されることはありません。
- タスクの開始条件が[条件が満たされるまで待機する]で、[次の時間が経過するとタスクを実行する]チェックボックスがオフの場合は、タスク(午後 3 時に実行するようにスケジュール)は、条件が満たされる午後 6 時に開始されます。
- タスクの開始条件が[条件が満たされるまで待機する]で、[次の時間が経過するとタスクを実行する]チェックボックスがオン、待機時間が 1 時間の場合、タスク(午後 3 時に実行するようにスケジュール)は、待機期間が終了する午後 4 時に開始されます。

## 前回のバックアップからの経過時間

適用対象: Windows、Linux

前回バックアップが正常に完了してから指定された期間が経過するまで、バックアップ タスクの実行を保留にすることができます。

### 例:

最後の正常なバックアップが完了してから 12 時間以上経過した場合のみ、システムの起動時にバックアップ タスクを実行します。

- イベント: **起動時**(コンピュータの起動時にタスクを開始する)
- 条件: **前回のバックアップからの経過時間**(前回のバックアップから 12 時間経過した場合)
- タスクの開始条件: **条件が満たされるまで待機する**

結果は次のようになります。

(1)最後の正常なバックアップが完了してから 12 時間以内にコンピュータを再起動すると、スケジュールは 12 時間が経過するまで待機してから、タスクを開始します。

(2)最後の正常なバックアップが完了してから 12 時間経過してコンピュータを再起動すると、バックアップ タスクはただちに開始されます。

(3)コンピュータを再起動しないと、タスクも開始されません。必要な場合は、[バックアップの計画およびタスク] ビューで、バックアップを手動で開始することができます。

## 4.5 バックアップのコピーおよび保持

バックアップ計画の作成 (33ページ)時に、バックアップを保存する 1 番目の場所指定します。さらに、次の設定を行うこともできます。

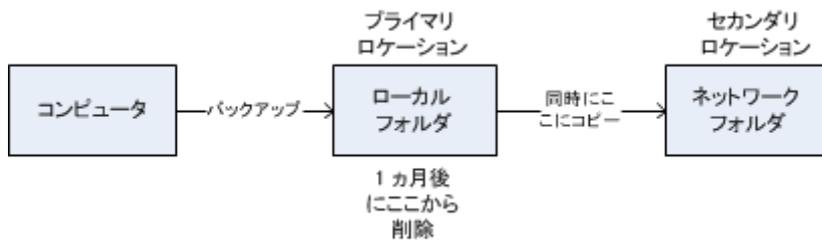
- 作成直後に各バックアップを 2 番目の場所にコピーする。
- 指定した保持ルールに従ってバックアップを保持した後、2 番目の場所に移動するか、削除する。

同様に、バックアップを 2 番目の場所から 3 番目の場所へコピーまたは移動できます。連続して 5 番目の場所までのコピーまたは移動がサポートされています。

**注意:** このコピー機能は、Acronis Backup & Recovery 10 における [二重化の保存先] オプションに代わるものであり、機能が強化されています。

例:コンピュータをローカル フォルダにバックアップします。バックアップは、ネットワーク フォルダにすぐにコピーされます。元のローカル フォルダで、バックアップが 1 ヶ月間だけ保存されます。

この例を次の図に示します。



## 使用例

- **信頼性の高い災害復旧計画 (73ページ)**  
 オンサイト(その場での復元)とオフサイト(ローカル ストレージの障害や自然災害などからのバックアップの保護)の両方でバックアップを保存します。
- **最新の復元ポイントのみを保存 (74ページ)**  
 コストの高いストレージ領域を使い過ぎないようにするために、保持ルールに従って、高速ストレージから古いバックアップを削除します。
- **バックアップ データを保存するコストの削減**  
 バックアップにアクセスする必要性が高い間は、高速ストレージに保存します。次に、コストが低い長期保存用のストレージに移動します。これにより、データ保持に関する法的要件を満たすことができます。

## 各種バックアップ スキームにおけるコピーおよび保持

次の表に、各種バックアップ スキームで使用できるコピーおよび保持ルールを示します。

バックアップ スキーム	バックアップのコピー	バックアップの移動	バックアップの削除
今すぐ実行 (40ページ)	○	X	X
手動による開始 (49ページ)	○	X	X
シンプル (39ページ)	○	○	○
GFS(Grandfather-Father-Son) (40ページ)	○	X	○
ハノイの塔 (46ページ)	○	X	○
カスタム (44ページ)	○	○	○
初期シード	X	X	X

### 注意:

- 同じ場所からのバックアップのコピーと移動の両方を設定することはできません。
- 簡易バックアップ ファイル名 (54ページ)を使用する場合、保持ルールのコピーも使用できません。

## 4.5.1 サポートされる場所

次の場所からバックアップをコピーまたは移動できます。

- 固定ドライブまたはリムーバブル ドライブ上のローカル フォルダ
- ネットワーク フォルダ
- FTP または SFTP サーバー
- Acronis セキュア ゾーン

次の場所にバックアップをコピーまたは移動できます。

- 固定ドライブまたはリムーバブル ドライブ上のローカル フォルダ
- ネットワーク フォルダ
- FTP または SFTP サーバー

次の場所にコピーまたは移動されたバックアップは、元の場所に残っているバックアップからは独立しています。また、その反対の場合もバックアップは独立しています。他の場所にアクセスすることなく、すべてのバックアップからデータを復元できます。

### 制限事項

- 光学ディスク(CD、DVD、ブルーレイ ディスク)から/へのバックアップをコピーまたは移動はサポートされていません。
- 同じ場所を複数回指定することはできません。たとえば、あるフォルダから別のフォルダにバックアップを移動してから、元のフォルダに戻すことはできません。

## 4.5.2 バックアップのコピーの設定

バックアップのコピーは、バックアップ計画の作成 (33ページ) 時に設定できます。

- 1 番目の場所からのコピーを設定するには、**[作成直後のバックアップを別のロケーションにコピーする]** チェック ボックスをオンにします。
- 2 番目以降の場所からのコピーを設定するには、**[バックアップがこのロケーションに作成されたらすぐに、バックアップを別のロケーションにコピーする]** チェック ボックスをオンにします。

次に、バックアップのコピー先を選択します。バックアップは、前の場所からコピーされると同時に次の場所にコピーされます。

バックアップ スキームによって許可されている場合、各場所からバックアップを自動的に削除するタイミングを指定することも可能です。

## 4.5.3 バックアップの保持の設定

バックアップの作成 (33ページ) 時にバックアップの保持ルールを設定することができます。指定できる保持ルールは、選択したバックアップ スキームによって異なります。

保持ルールの適用は、**[コピー/クリーンアップの無効期間]** (73ページ) オプションで制限することができます。

### シンプル スキーム

各バックアップは、保持期間が指定した制限を超えるまで保持されてから、削除または移動されます。

バックアップの削除を設定するには

- **【保持ルール】** で、**【次より古いバックアップは削除する:】** を選択してから、保持期間を指定します。

バックアップの移動を設定するには

- **【保持ルール】** で、**【次より古いバックアップは移動する:】** を選択してから、保持期間を指定します。**【バックアップのコピー先または移動先】** で、場所を指定します。

保持ルールは、バックアップの作成後に適用されます。2 番目以降の場所では、バックアップを作成するということは、前の場所からバックアップをコピーまたは移動することを意味します。

## GFS(Grandfather-Father-Son)スキーム

各種類(毎日、毎週、および毎月)のバックアップは、**【バックアップの保持期間】** で指定した期間保持されてから、削除されます。

保持ルールは、バックアップの作成後に適用されます。これらのルールは、1 番目の場所、2 番目の場所、その次の場所という順番で適用されます。

## ハノイの塔スキーム

各バックアップは、そのレベル (46ページ) に基づいて保持されてから、削除されます。**【レベルの数】** でレベルの数を指定します。

保持ルールは、バックアップの作成後に適用されます。これらのルールは、1 番目の場所、2 番目の場所、その次の場所という順番で適用されます。

## カスタム スキーム

各バックアップは、指定したルールの条件を満たすまで保持されてから、削除または移動されます。

バックアップの削除を設定するには

- **【アーカイブのクリーンアップ】** で、**【保持ルールの使用】** を選択します。**【保持ルール】** ウィンドウ (71ページ) で、ルールを指定し、**【指定した条件が満たされている場合: 最も古いバックアップを削除する】** を選択します。
- **【保持ルールの適用】** で、ルールを適用するタイミングを指定します。

バックアップの移動を設定するには

- **【アーカイブのクリーンアップ】** で、**【保持ルールの使用】** を選択します。**【保持ルール】** ウィンドウ (71ページ) で、ルールを指定し、**【指定した条件が満たされている場合: 最も古いバックアップを別の場所に移動する】** を選択します。**【OK】** をクリックしてから、**【バックアップのコピー先または移動先】** で場所を指定します。
- **【保持ルールの適用】** で、ルールを適用するタイミングを指定します。

保持ルールを適用するタイミングを、バックアップの作成前、バックアップの作成後、スケジュールに従う、またはこれらのオプションの組み合わせ、の中から選択できます。2 番目以降の場所では、バックアップを作成するということは、前の場所からバックアップをコピーまたは移動することを意味します。

### 4.5.4 カスタム スキームの保持ルール

**【保持ルール】** ウィンドウで、保存場所にバックアップを保存する期間と、それらのバックアップを後に移動するかまたは削除するのを選択します。

保持ルールは、特定のコンピュータで取得されたすべてのバックアップに適用され、この特定のバックアップ計画によって特定の場所で実行されます。Acronis Backup & Recovery 11 では、このようなバックアップのセットはアーカイブと呼ばれます。

### バックアップの保持ルールを設定するには

- 次の(オプション(a)および(b)を同時に選択することはできません)いずれかを指定します。
  - [次より古いバックアップ:]** および/または **[次のサイズを超えるアーカイブ サイズ:]**  
バックアップが、指定した条件(または両方の条件)を満たすまで保存されます。  
**例:**  
**[次より古いバックアップ: 5 日]**  
**[次のサイズを超えるアーカイブ サイズ: 100 GB]**  
このように設定すると、バックアップは、5 日間を経過し、かつ、そのバックアップを含んでいるアーカイブのサイズが 100 GB を超えるまで保存されます。
  - [アーカイブ内のバックアップの数が次の数を超える:]**  
バックアップの数が指定した値を超えると、最も古いバックアップが 1 つ以上移動または削除されます。最小の設定は 1 です。
- 指定した条件が満たされた場合にバックアップを削除するのか別の場所に移動するのかを選択します。  
**[OK]** をクリックした後に、バックアップの移動先を指定し、その場所の保持ルールを設定することができます。

### アーカイブ内の最後のバックアップの削除

この保持ルールは、アーカイブに複数のバックアップが含まれる場合に有効です。これにより、保持ルール違反が検出された場合でも、アーカイブ内の最後のバックアップは保持されます。バックアップ前に保持ルールを適用して、1 つしかないバックアップを削除しようとししないでください。この操作は行えません。1 つしかないバックアップを失ってもかまわない場合は、この代わりに **[アーカイブのクリーンアップ]** > **[バックアップ時に領域が不足した場合]** (44ページ) を選択します。

### 依存関係を持つバックアップの削除または移動

この設定を使用するには、**[保持ルール]** ウィンドウの **[詳細設定を表示]** をクリックします。

保持ルールは、一部のバックアップが削除または移動され、その他のバックアップが保持されることを想定しています。アーカイブ内に、相互に依存している増分および差分のバックアップや、それらのバックアップの基になった完全バックアップが含まれている場合はどうなるでしょうか。たとえば、古くなった完全バックアップを削除し、その増分の「子」を保持することはできません。

バックアップの削除または移動が他のバックアップに影響を与える場合、次のいずれかのルールが適用されます。

- **依存するすべてのバックアップが削除の対象になるまでバックアップを保持する(移動)**  
古くなったバックアップは、それに依存するすべてのバックアップも古くなるまで保持されます。すべてが古くなると、通常のクリーンアップ中に、チェーン全体が一度に削除されます。古くなったバックアップの次の場所への移動を選択した場合、バックアップは直ちにコピーされます。現在の場所からの削除のみが延期されます。  
このモードは、長い時間がかかる可能性のある統合の回避に役立ちますが、削除を延期されたバックアップの保存領域が追加で必要になります。アーカイブのサイズやバックアップの保持期間または数が、ユーザーの指定した値を超える場合があります。

#### ■ バックアップを統合する

削除または移動の対象となるバックアップは、依存関係がある次のバックアップと統合されます。たとえば、保持ルールで、完全バックアップを削除しても、次の増分バックアップは保持する必要があります。バックアップは 1 つの完全バックアップに結合され、そのバックアップに増分バックアップの日付が付けられます。チェーンの中間から増分または差分のバックアップが削除されると、結果として残されるバックアップの種類は増分になります。

このモードでは、クリーンアップが実行されるたびに、アーカイブのサイズとバックアップの保持期間または数がユーザー指定の範囲内になります。ただし、統合は多くの時間とシステム リソースを消費する場合があります。統合中に作成される一時ファイルのために、格納域に追加の領域も必要です。

#### 統合に関する注意点

統合は削除の 1 つの方法に過ぎず、削除に代わる手段ではないことに注意してください。統合した後のバックアップには、削除されたバックアップ内には存在していて、保持された増分バックアップや差分バックアップには存在していなかったデータは含まれません。

### 4.5.5 コピー/クリーンアップの無効期間

このオプションは、バックアップのコピーまたは保持ルール (68ページ)を設定する場合のみ有効です。

このオプションによって、コピーの開始または保持ルールの適用を許可しない期間を定義します。これらの処理は、コンピュータの電源がオンになっていれば、無効期間が終了した時点で実行されます。無効期間が始まる前に開始された処理は、中断されることなく続行されます。

非作業期間は、プライマリを含むすべての場所に適用されます。

デフォルトの設定は、[無効] です。

非作業期間を指定するには、[以下の時間内はバックアップのコピー/クリーンアップを開始しない] チェック ボックスをオンにし、日時を選択します。

#### 使用例

このオプションを使用して、コピーまたはクリーンアップとバックアップ処理を分離できます。たとえば、コンピュータを日中、ローカルにバックアップし、バックアップをネットワーク フォルダにコピーするとします。非作業期間に営業時間を含めます。営業時間の後、つまりネットワークの負荷が低い時間帯にコピーが実行されます。

### 4.5.6 使用例

ここでは、バックアップをコピーし、それらのバックアップの保持ルールを設定する方法について説明します。

#### 例 1: ネットワーク フォルダへのバックアップのコピー

次のようなシナリオについて考えてみます。

- コンピュータの完全バックアップを手動で実行します。
- コンピュータ上の Acronis セキュア ゾーン (126ページ)にバックアップを保存します。
- ネットワーク フォルダにバックアップのコピーを保存します。

このシナリオでは、**[手動による開始]** スキームを使用したバックアップ計画を作成します。バックアップ計画の作成時に、**[パス]** フィールドで Acronis セキュア ゾーンを指定し、**[バックアップの種類]** フィールドで **[完全]** を選択し、**[作成直後のバックアップを別のロケーションにコピーする]** チェックボックスをオンにしてから、**[2 番目の場所]** フィールドで、ネットワーク フォルダを指定します。

- 結果:**
- すぐに入手できるローカル バックアップからコンピュータのボリュームまたはファイルを復元できます。このバックアップは、ハード ディスクの専用領域に保存されています。
  - コンピュータのハード ディスク ドライブに障害が発生した場合、ネットワーク フォルダからコンピュータを復元できます。

## 例 2: 保存されたバックアップの期間および合計サイズを制限する

次のようなシナリオについて考えてみます。

- コンピュータの完全バックアップを毎週実行します。
- 1 ヶ月未満のバックアップをすべて保持します。
- 1 ヶ月が過ぎたバックアップがあっても、すべてのバックアップの合計サイズが 200 GB を下回っている場合には保存する。

このシナリオでは、**カスタム** スキームを使用したバックアップ計画を作成します。バックアップ計画を作成する際、完全バックアップの週単位スケジュールを指定します。**[アーカイブのクリーンアップ]** で、**[保持ルールの使用]** を選択します。

**[保持ルール]** で、**[次より古いバックアップ:]** チェック ボックスおよび **[次のサイズを超えるアーカイブ サイズ:]** チェック ボックスをオンにして、それぞれに **[1 ヶ月]** と **[200 GB]** を指定します。**[指定した条件が満たされている場合:]** で、**[最も古いバックアップを削除する]** を選択します。

**[OK]** をクリックします。**[保持ルールの適用]** で、**[バックアップ後]** チェック ボックスをオンにします。

**結果:**

- 合計サイズにかかわらず、1 ヶ月未満のバックアップが保持されます。
- 1 ヶ月が過ぎたバックアップが保持されるのは、(経過期間を問わず)すべてのバックアップの合計サイズが 200 GB を超えていない場合のみです。超えている場合、1 ヶ月が過ぎたバックアップの一部またはすべてが、最も古いものから削除されます。

## 4.6 デフォルトのバックアップ オプション

各 Acronis エージェントには、それぞれデフォルトのバックアップ オプションがあります。エージェントがインストールされると、デフォルトのオプションは、ドキュメントで**デフォルトの設定**と呼ばれる、あらかじめ定義された値が割り当てられます。バックアップ計画を作成する場合は、デフォルトのオプションを使用するか、この計画のみで固有なカスタムの値でデフォルトのオプションを上書きできます。

あらかじめ定義された値を変更して、デフォルトのオプション自体をカスタマイズすることもできます。新しい値は、後でこのコンピュータで作成するすべてのバックアップ計画に対してデフォルトで使用されます。

デフォルトのバックアップ オプションを表示して変更するには、コンソールを管理対象のコンピュータに接続し、トップ メニューから **[オプション] > [デフォルトのバックアップと復元のオプション] > [デフォルトのバックアップ オプション]** を選択します。

## 使用可能なバックアップ オプション

使用可能なバックアップ オプションのセットは次の項目によって異なります。

- エージェントが動作する環境(Linux、ブータブル メディア)
- バックアップするデータの種類(ディスク、ファイル)
- バックアップの保存先(ネットワーク上の場所またはローカル ディスク)
- バックアップ スキーム(手動による開始、またはスケジューラの使用)

次の表は、使用可能なバックアップ オプションを示しています。

	エージェント for Linux		ブータブル メディア (Linux ベースまたは PE ベース)	
	ディスクのバックアップ	ファイルのバックアップ	ディスクのバックアップ	ファイルのバックアップ
その他の設定 (76ページ):				
リムーバブル メディアへのバックアップ時に最初のメディアを要求する	保存先: リムーバブル メディア	保存先: リムーバブル メディア	保存先: リムーバブル メディア	保存先: リムーバブル メディア
FTP をアクティブ モードで使用する	保存先: FTP サーバー	保存先: FTP サーバー	保存先: FTP サーバー	保存先: FTP サーバー
アーカイブ ビットをリセットする	-	-	-	+
バックアップ処理の終了後にコンピュータを自動的に再起動する	-	-	+	+
アーカイブの保護 (77ページ) (パスワードと暗号化)	+	+	+	+
バックアップのカタログ化 (78ページ)	+	+	-	-
バックアップのパフォーマンス:				
バックアップの優先度 (79ページ)	+	+	-	-
HDD 書き込み速度 (79ページ)	保存先: HDD	保存先: HDD	保存先: HDD	保存先: HDD
ネットワークの接続速度 (80ページ)	保存先: ネットワーク共有	保存先: ネットワーク共有	保存先: ネットワーク共有	保存先: ネットワーク共有
バックアップの分割 (80ページ)	+	+	+	+
圧縮レベル (81ページ)	+	+	+	+
災害復旧計画 (82ページ)	+	+	-	-
エラーの処理 (83ページ):				
処理中にメッセージやダイアログを表示しない(サイレント モード)	+	+	+	+
エラーが発生した場合は再試行する	+	+	+	+
不良セクタを無視する	+	+	+	+

	エージェント for Linux		ブータブル メディア (Linux ベースまたは PE ベース)	
	ディスクのバックアップ	ファイルのバックアップ	ディスクのバックアップ	ファイルのバックアップ
イベント トレース:				
SNMP (83ページ)	+	+	-	-
高速の増分/差分バックアップ (84ページ)	+	-	+	-
ファイル レベルのバックアップのスナップショット (84ページ)	-	+	-	-
LVM のスナップショット (85ページ)	+	-	-	-
メディア コンポーネント (86ページ)	保存先: リムーバブル メディア	保存先: リムーバブル メディア	-	-
通知:				
電子メール (86ページ)	+	+	-	-
ポップアップ ウィンドウ (87ページ)	+	+	-	-
バックアップの前後に実行するコマンド (88ページ)	+	+	PE のみ	PE のみ
データ取り込みの前後に実行するコマンド (90ページ)	+	+	-	-
コピー/クリーンアップの無効期間 (73ページ)	+	+	-	-
セクタ単位のバックアップ (92ページ)	+	-	+	-
タスク失敗時の処理 (92ページ)	+	+	-	-
タスクの開始条件 (93ページ)	+	+	-	-

#### 4.6.1 その他の設定

次のチェックボックスをオンまたはオフにして、バックアップ処理のその他の設定を指定します。

##### リムーバブル メディアへのバックアップ時に最初のメディアを要求する

このオプションは、リムーバブル メディアにバックアップする場合にのみ有効です。

リムーバブル メディアにバックアップする際に **[最初のメディアの挿入]** というメッセージを表示するかどうかを定義します。

デフォルトの設定は、**[有効]** です。

このオプションをオンにした場合、メッセージ ボックスの [OK] がクリックされるまで実行が待機されるため、ユーザーがコンピュータから離れているとリムーバブル メディアへのバックアップを実行できない場合があります。したがって、リムーバブル メディアへのバックアップをスケジュールする場合は、このメッセージを無効にする必要があります。メッセージを無効にしておくと、DVD がドライブに挿入されている場合など、リムーバブル メディアが使用可能な場合は、タスクを無人で実行できます。

### アーカイブ ビットをリセットする

このオプションは、Windows オペレーティング システムおよびブータブル メディアのファイル レベルのバックアップでのみ有効です。

デフォルトの設定は、**[無効]** です。

Windows オペレーティング システムでは、各ファイルの属性は **[ファイルをアーカイブ可能にする]** になっています。使用するには、**[ファイル]** -> **[プロパティ]** -> **[全般]** -> **[詳細設定]** -> **[アーカイブ属性およびインデックス属性]** を選択します。この属性はアーカイブ ビットとも呼ばれ、オペレーティング システムによってファイルが変更されるたびに設定されます。また、バックアップ アプリケーションがそのファイルをバックアップに保存するたびにリセットできます。アーカイブ ビット値は、データベースなどのさまざまなアプリケーションによって使用されます。

**[アーカイブ ビットをリセットする]** チェックボックスをオンにすると、Acronis Backup & Recovery 11 はバックアップするすべてのファイルのアーカイブ ビットをリセットします。Acronis Backup & Recovery 11 自体は、アーカイブ ビット値を使用しません。増分バックアップまたは差分バックアップを実行する場合は、前回ファイルが保存されたときのファイル サイズと日付/時刻によって、ファイルが変更されたかどうか判断されます。

### バックアップ処理の終了後にコンピュータを自動的に再起動する

このオプションは、ブータブル メディアから起動した場合にのみ使用できます。

デフォルトの設定は、**[無効]** です。

このオプションをオンにすると、バックアップ処理の完了後、Acronis Backup & Recovery 11 によってコンピュータが再起動されます。

たとえば、デフォルトでコンピュータがハード ディスク ドライブから起動される場合、このチェックボックスをオンにすると、ブータブル エージェントによるバックアップの作成後、すぐにコンピュータが再起動され、オペレーティング システムが起動されます。

### FTP をアクティブ モードで使用する

デフォルトの設定は、**[無効]** です。

FTP サーバーがアクティブ モードをサポートしていて、ファイル転送にアクティブ モードを使用する場合は、このオプションを有効にします。

## 4.6.2 アーカイブの保護

このオプションは、Windows と Linux オペレーティング システム、およびブータブル メディアで有効です。

このオプションは、ディスクレベルとファイルレベルの両方のバックアップに対して有効です。

このオプションでは、アーカイブをパスワードで保護するかどうか、アーカイブの内容を暗号化するかどうかを指定します。

このオプションは、アーカイブに既にバックアップが含まれている場合には使用できません。たとえば、以下の場合、このオプションは使用できません。

- バックアップ計画の保存先として、既存のアーカイブが既に指定されている場合
- 既にバックアップに含まれているバックアップ計画を編集する場合

デフォルトの設定は、[無効] です。

**権限のないアクセスからアーカイブを保護する手順は、次のとおりです。**

1. [アーカイブにパスワードを設定する] チェックボックスをオンにします。
2. [パスワードの入力] フィールドにパスワードを入力します。
3. [パスワードの確認入力] フィールドにパスワードを再入力します。
4. 次のいずれかを選択します。
  - [暗号化しない]: アーカイブはパスワードのみで保護されます
  - [AES 128]: アーカイブは、128 ビット キーの AES(Advanced Encryption Standard)アルゴリズムを使用して暗号化されます
  - [AES 192]: アーカイブは、192 ビット キーの AES アルゴリズムを使用して暗号化されます
  - [AES 256]: アーカイブは、256 ビット キーの AES アルゴリズムを使用して暗号化されます
5. [OK] をクリックします。

AES 暗号化アルゴリズムは、暗号ブロック連鎖(CBC)モードで動作し、ランダムに生成されるキーを使用します。キーの長さは 128、192、または 256 ビットからユーザーが指定できます。キーのサイズが大きいほどアーカイブを暗号化する時間は長くなりますが、データの安全性は高まります。

次に、暗号化キーは、パスワードの SHA-256 ハッシュをキーとして使用して、AES-256 で暗号化されます。パスワード自体はディスクまたはバックアップ ファイルに保存されませんが、パスワードのハッシュがベリファイには使用されます。この 2 段階のセキュリティにより、バックアップ データは権限のないアクセスから保護されますが、失われたパスワードを復元することはできません。

### 4.6.3 バックアップのカタログ化

バックアップをカタログ作成すると、バックアップの内容がデータ カタログに追加されます。データ カタログを使用すると、簡単に目的のバージョンのデータを検索して、復元用に選択することができます。

**[バックアップのカタログ化]** オプションによって、バックアップが作成されると同時に自動的にカタログ作成するかどうかを定義できます。

デフォルトの設定は、[有効] です。

カタログ作成が完了するとカタログに、作成されたばかりのバックアップ内に格納されているすべてのデータが表示されます。次のデータが含まれます。

- ディスクレベルのバックアップの場合: ディスク、ボリューム、ファイル、およびフォルダです。
- ファイルレベルのバックアップの場合: ファイルおよびフォルダです。

管理対象コンピュータのパフォーマンスに悪影響を与える傾向がある場合、またはバックアップ ウィンドウが短すぎる場合は、自動カタログ化を無効にする必要がある場合もあります。**[バックアップのカタログ化]** オプションをオフにすると、カタログに次のデータが表示されます。

- ディスクレベルのバックアップの場合: ディスクとボリュームだけです。
- ファイル レベルのバックアップの場合: 何も表示されません。

既存のバックアップの内容全体をカタログに追加するには、適切な時間に手動でカタログ化を開始します。

データ カatalogの使用に関する詳細については、「データ カatalog (98ページ)」を参照してください。

#### 4.6.4 バックアップのパフォーマンス

このグループのオプションを使用して、バックアップ処理に割り当てるネットワークとシステムのリソース量を指定します。

[バックアップのパフォーマンス]オプションは、バックアップの処理速度に顕著な影響を及ぼす場合があります。バックアップの処理速度は、システム全体の構成やバックアップ時に入出力を行うデバイスの物理的な特性に依存します。

#### バックアップの優先度

このオプションは、Windows および Linux オペレーティング システムの両方で有効です。

システムで実行されるプロセスの優先度によって、そのプロセスに割り当てられる CPU やシステムのリソース量が決まります。バックアップの優先度を下げると、他のアプリケーションのためのリソースを増やすことができます。バックアップの優先度を上げると、バックアップ アプリケーションに割り当てる CPU などのリソースを増やすようにオペレーティング システムに要求することによって、バックアップの処理速度が上がる場合があります。ただし、その効果は、全体的な CPU の使用率およびディスク入出力速度、ネットワーク トラフィックなどのその他の要素に依存します。

デフォルトの設定 - **[低]**

**バックアップ処理の優先度を指定する手順は、次のとおりです。**

次のいずれかを選択します。

- **[低]** - より多くのリソースをコンピュータ上で動作する他のプロセスのために残し、バックアップ処理が占有するリソースを最小限にします。
- **[通常]** - 他のプロセスと同等のリソースを割り当て、通常でバックアップ処理を実行します。
- **[高]** - 他のプロセスからリソースを取り上げることによって、バックアップの処理速度を最大にします。

#### HDD 書き込み速度

このオプションは、Windows と Linux オペレーティング システム、およびブータブル メディアで有効です。

このオプションは、バックアップされるコンピュータの内蔵(固定)ハード ディスクがバックアップ保存先として選択された場合に使用できます。

Acronis セキュア ゾーンなどの固定ハード ディスクへのバックアップは、大量のデータをディスクに書き込む必要があるため、オペレーティング システムやアプリケーションのパフォーマンスを低下させる場合があります。バックアップ処理によるハード ディスクの使用を必要なレベルまで制限することができます。

デフォルトの設定は**[最大]**です。

**HDD 書き込み速度をバックアップ用に設定する手順は、次のとおりです。**

次のいずれかを実行します。

- **[書き込み先ハード ディスクの最大速度を 100% とする書き込み速度]**をクリックし、スライダをドラッグするか、またはボックスでパーセント値を選択します。
- **[KB/秒で指定する書き込み速度]**をクリックし、書き込み速度を KB/秒の単位で入力します。

### ネットワークの接続速度

このオプションは、Windows と Linux オペレーティング システム、およびブータブル メディアで有効です。

このオプションは、バックアップ保存先としてネットワーク上の場所(ネットワーク共有、管理対象の格納域、または FTP/SFTP サーバー)が選択された場合に使用できます。

このオプションでは、バックアップ データの転送に割り当てるネットワーク接続の帯域幅を定義します。

デフォルトで速度は**[最大]**に設定されます。つまり、バックアップ データの転送時に使用可能なすべてのネットワーク帯域幅が使用されます。このオプションを使用すると、他のネットワーク活動のためにネットワーク帯域幅の一部を予約できます。

デフォルトの設定 - **[最大]**

**バックアップのためのネットワークの接続速度を設定する手順は、次のとおりです。**

次のいずれかを実行します。

- **[ネットワーク接続の推定最大速度の割合として示される転送速度]**をクリックし、スライダをドラッグするか、またはボックスでパーセント値を選択します。
- **[KB/秒で示される転送速度]**をクリックし、バックアップ データ転送時の帯域幅制限値を KB/秒の単位で入力します。

### 4.6.5 バックアップの分割

このオプションは、Windows と Linux オペレーティング システム、およびブータブル メディアで有効です。

このオプションでは、バックアップを分割する方法を定義します。

デフォルトの設定 - **[自動]**

次の設定を使用できます。

#### **[自動]**

この設定を使用すると、Acronis Backup & Recovery 11 は次のように動作します。

- **ハード ディスクにバックアップする場合**

推定されるファイル サイズをバックアップ保存先ディスクのファイル システムが許容できる場合、単一のバックアップ ファイルが作成されます。

推定されるファイル サイズをバックアップ保存先ディスクのファイル システムが許容できない場合、バックアップは自動的に複数のファイルに分割されます。このような状況は、最大ファイル サイズに 4GB の制限がある FAT16 および FAT32 ファイル システムにバックアップを保存する場合に発生します。

バックアップの作成中にバックアップ保存先ディスクの空き領域が不足すると、タスクは[ユーザーによる操作が必要]状態に移行します。領域をさらに解放して、操作を再試行できます。この場合、生成されるバックアップは再試行の前後で分割されます。

- **リムーバブル メディアにバックアップする場合**(CD、DVD、またはテープ デバイスが管理対象のコンピュータにローカル接続されている)

タスクは[ユーザーによる操作が必要]状態に移行し、前のメディアがいっぱいになると新しいメディアを要求します。

### [固定サイズ]

必要なファイル サイズを入力するか、ドロップダウン リストから選択します。バックアップは、指定したサイズの複数のファイルに分割されます。この機能は、後で複数の CD または DVD にバックアップを書き込むことを目的としている場合に役立ちます。FTP サーバーから直接データを復元するには、バックアップ ファイルを 2GB 以内のサイズに分割する必要があるため、FTP サーバーに保存するバックアップも分割することが必要となる場合があります。

## 4.6.6 圧縮レベル

このオプションは、Windows と Linux オペレーティング システム、およびブータブル メディアで有効です。

このオプションでは、バックアップするデータに適用される圧縮レベルを定義します。

デフォルトの設定 - **[標準]**

最適なデータの圧縮レベルは、バックアップされるデータの種類によって異なります。たとえば、既に圧縮されている .jpg、.pdf、.mp3 などの形式のファイルがアーカイブに含まれている場合は、最高の圧縮レベルを適用してもアーカイブのサイズはそれほど縮小されません。ただし、.doc、.xls などの形式のファイルは圧縮効果が高くなります。

**圧縮レベルを指定する手順は、次のとおりです。**

次のいずれかを選択します。

- **[なし]** - データは圧縮されずにコピーされます。最終的なバックアップ サイズは最大になります。
- **[標準]** - ほとんどの場合にお勧めします。
- **[高い]** - 最終的なバックアップ サイズは、一般に**[標準]**より小さくなります。
- **[最大]** - データは可能な限り圧縮されます。バックアップ時間は最も長くなります。リムーバブルメディアにバックアップする場合は、**[最大]**を選択すると空のリムーバブル ディスクの必要枚数を減らすことができます。

## 4.6.7 災害復旧計画(DRP)

このオプションは、Windows および Linux で有効ですが、ブータブル メディアには適用されません。

災害復旧計画(DRP)には、バックアップされるデータ アイテムおよびバックアップからそれらのアイテムを復元する処理をユーザーに示す詳細な指示が含まれています。

**[災害復旧計画(DRP)]** オプションが有効になっている場合、バックアップ計画によって最初の正常なバックアップが実行された後に、DRP が作成され、指定されたユーザーの一覧に電子メールで送信されます。次の場合、最初の正常なバックアップの後に、DRP がもう一度作成されて送信されます。

- バックアップ計画が編集され、DRP のパラメータが変更された場合に送信されます。
- バックアップに新しいデータ アイテムが含まれるか、以前にバックアップされたアイテムが含まれていない場合に送信されます(このようなデータ アイテムがファイルまたはフォルダの場合には適用されません)。

複数のコンピュータがバックアップ計画で保護されている場合、個別の DRP が各コンピュータに送信されます。

### DRP およびバックアップ後に実行するコマンド

バックアップ計画内にあるバックアップ後に実行するコマンドがバックアップを元の場所からコピーまたは移動する場合、DRP は自動的に変更されないことに注意してください。DRP は、バックアップ計画で指定された場所のみを示します。

### DRP テンプレートへの情報の追加

XML および HTML に関する詳しい知識がある場合は、DRP テンプレートに情報を追加することができます。DRP テンプレートのデフォルトのパスは次のとおりです。

- `%ProgramFiles%\Acronis\BackupAndRecovery\drp.xml` - 32 ビット Windows の場合
- `%ProgramFiles(x86)\Acronis\BackupAndRecovery\drp.xml` - 64 ビット Windows の場合
- `/usr/lib/Acronis/BackupAndRecovery/drp.xml` - Linux の場合

### DRP の送信を設定するには

1. **[災害復旧計画を送信する]** チェック ボックスをオンにします。
2. **[電子メール アドレス]** フィールドに電子メール アドレスを入力します。複数の電子メール アドレスをセミコロンで区切って入力することもできます。
3. (オプション)必要に応じて、**[件名]** フィールドのデフォルト値を変更します。  
複数のコンピュータを 1 つの集中管理用バックアップ計画でバックアップし、各コンピュータのユーザーには、そのコンピュータに限定された個別の DRP 電子メールを送信する場合:
  - a. 電子メールの件名に特定のコンピュータの名前を表示するには、`%MachineName%` 変数を使用します。
  - b. **[件名]** フィールドを使用して、電子メールのフィルタリングや転送を実行するように、メール サーバーまたはクライアントを設定します。
4. SMTP サーバーにアクセスするためのパラメータを入力します。詳細については、「電子メールによる通知 (118ページ)」を参照してください。
5. (オプション)**[テスト メールを送信中]** をクリックし、設定が正しいかどうかを確認します。

## 4.6.8 エラー処理

これらのオプションは、Windows と Linux オペレーティング システム、およびブータブル メディアで有効です。

これらのオプションによって、バックアップ中に発生する可能性があるエラーを処理する方法を指定できます。

### 処理中にメッセージやダイアログを表示しない(サイレント モード)

デフォルトの設定は、**[無効]** です。

サイレント モードをオンにすると、ユーザーによる操作を必要とする場面で処理が自動的に行われます(不良セクタへの対応は別のオプションとして定義されているため、この設定では制御されません)。ユーザーによる操作なしに処理を続行できない場合、その処理は失敗します。処理の詳細(エラーがある場合は、それも含む)は、処理のログに記載されます。

### エラーが発生した場合は再試行する

デフォルトの設定は、**[有効]** です。試行回数は **30 回**、試行間隔は **30 秒**です。

復元可能なエラーが発生した場合、失敗した処理が再試行されます。試行間隔および試行回数を設定できます。試行は、処理が成功するか、または指定した回数の試行が行われると停止します。

たとえば、ネットワーク上のバックアップ保存先が使用できないか、接続できない場合、30 秒ごとに 5 回までバックアップ保存先への接続が試行されます。試行は、接続が再開されるか、または指定された回数の試行が行われると停止します。

### 不良セクタを無視する

デフォルトの設定は、**[無効]** です。

このオプションをオフにすると、不良セクタが検出されるたびに、バックアップ処理を続行するか中止するかの判断をユーザーに求めるポップアップウィンドウが表示されます。障害が急速に深刻化しているディスクから有効な情報をバックアップするには、**[不良セクタを無視する]** をオンにします。残りのデータはバックアップされるため、作成されたディスク バックアップをマウントして有効なファイルを別のディスクに取り出すことができます。

## 4.6.9 イベントトレース

管理対象のコンピュータで実行されるバックアップ処理のイベントを、指定した SNMP マネージャに送信できます。

### SNMP 通知

このオプションは、Windows および Linux オペレーティング システムの両方で有効です。

このオプションは、ブータブル メディアから起動した場合には使用できません。

このオプションでは、管理対象のコンピュータで動作するエージェントが、バックアップ処理のイベントを指定した簡易ネットワーク管理プロトコル(SNMP)マネージャに送信する必要があるかどうかを定義します。送信するイベントの種類を選択できます。

Acronis Backup & Recovery 11 での SNMP の使用の詳細については、「SNMP のサポート (31ページ)」を参照してください。

デフォルトの設定 - [コンピュータ オプションの設定を使用する]

バックアップ処理のイベントを SNMP マネージャに送信するかどうかを選択する手順は、次のとおりです。

次のいずれかを選択します。

- [コンピュータ オプションの設定を使用する] - コンピュータ オプションで指定された設定を使用します。詳細については、「コンピュータ オプション」をご参照ください。
  - [バックアップ処理イベントに対して個別に SNMP 通知を送信する] - 指定した SNMP マネージャにバックアップ処理のイベントを送信します。
    - [送信するイベントの種類] - [すべてのイベント]、[エラーと警告]、または[エラーのみ]のいずれかから送信するイベントの種類を選択します。
    - [サーバー名/IP] - メッセージの送信先となる SNMP 管理アプリケーションを実行するホストの名前または IP アドレスを入力します。
    - [コミュニティ] - SNMP 管理アプリケーションを実行するホストと送信元コンピュータの両方が所属する SNMP コミュニティの名前を入力します。一般的なコミュニティは "public" です。
- [テスト メッセージを送信する]をクリックし、設定が正しいかどうかを確認します。
- [SNMP 通知を送信しない] - バックアップ処理イベントの SNMP マネージャへの送信を無効にします。

#### 4.6.10 高速の増分/差分バックアップ

このオプションは、Windows と Linux オペレーティング システム、およびブータブル メディアで有効です。

このオプションは、ディスク レベルの増分/差分バックアップで有効です。

このオプションでは、ファイルの変更をファイル サイズとタイム スタンプを使用して検出するか、ファイルの内容をアーカイブに保存されているファイルと比較することによって検出するかを定義します。

デフォルトの設定 - オン

増分/差分バックアップは、変更されたデータのみを取り込みます。バックアップ処理を高速化するため、ファイルが変更されたかどうかの判定は、ファイルが最後に保存されたときの日付/時刻とファイル サイズに基づいて行われます。この機能を無効にすると、ファイル全体の内容がアーカイブに保存されている内容と比較されます。

#### 4.6.11 ファイル レベルのバックアップのスナップショット

このオプションは、ファイル レベルのバックアップのみで有効です。Windows と Linux オペレーティング システム。

このオプションでは、ファイルを 1 つずつバックアップするか、またはデータのインスタント スナップショットを作成するかを定義します。

---

**注意:** ネットワーク共有に保存されているファイルは、常に 1 つずつバックアップされます。

---

#### デフォルトの設定 - [可能な場合はスナップショットを作成する]

次のいずれかを選択します。

- **[常にスナップショットを作成する]**

スナップショットでは、排他アクセスで開かれているファイルを含む、すべてのファイルをバックアップできます。同一時点のファイルがバックアップされます。この設定は、これらの要素が不可欠である場合にのみ、つまりスナップショットなしでファイルをバックアップすることは意味がない場合にのみ選択してください。スナップショットを使用するには、バックアップ計画を Administrator または Backup Operator の権限を持つアカウントで実行する必要があります。スナップショットを作成できない場合、バックアップは失敗します。

- **[可能な場合はスナップショットを作成する]**

スナップショットを作成できない場合は、直接ファイルをバックアップします。

- **[スナップショットを作成しない]**

常に直接ファイルをバックアップします。Administrator または Backup Operator 権限は必要ありません。排他アクセスで開かれているファイルをバックアップしようとする、読み取りエラーになります。バックアップに含まれるファイルの時間的な整合性が失われることがあります。

### 4.6.12 LVM のスナップショット

このオプションは、Linux オペレーティング システムで Linux の LVM(論理ボリュームマネージャ)が管理するボリュームをバックアップする際のみ有効です。このようなボリュームは、論理ボリュームとも呼ばれます。

このオプションは、論理ボリュームのスナップショットの取得および使用方法を定義します。スナップショットを使用することによって、バックアップ処理中にデータが変化する可能性がある複数ボリュームを、時間的な整合性を保ってバックアップすることができます。

デフォルト設定は、[Acronis Backup & Recovery 11] です。

---

**ヒント:** 論理ボリュームのバックアップに問題が発生した場合にのみデフォルトを変更することをお勧めします。

---

次を設定できます。

#### Acronis Backup & Recovery 11

Acronis Backup & Recovery 11 が独自のメカニズムを使用して、スナップショットを取得し、バックアップ中にそのスナップショットを使用します。

#### LVM(論理ボリュームマネージャ)

Acronis Backup & Recovery 11 が Linux の LVM(論理ボリュームマネージャ)を使用して、スナップショットを取得し、バックアップ中にそのスナップショットを使用します。この方法では、Acronis のメカニズムを使用する場合よりボリュームのバックアップの効率性が低下する可能性があります。

LVM(論理ボリュームマネージャ)によってスナップショットを取得できない場合、Acronis Backup & Recovery 11 は、**Acronis Backup & Recovery 11** 設定が選択された場合と同じように動作します。

スナップショットを取得した後に、そのスナップショットが使用できなくても、別のスナップショットは取得されません。これはどちらの設定にも当てはまります。

### 4.6.13 メディア コンポーネント

このオプションは、バックアップ保存先がリムーバブル メディアの場合、Windows と Linux のオペレーティング システムの両方で有効です。

リムーバブル メディアにバックアップする場合は、追加のコンポーネントを書き込むことによって、このメディアを通常の Linux ベースのブータブル メディア (186ページ) のように機能させることができます。その結果、個別のブータブル メディアは必要なくなります。

デフォルトの設定は、**[ブータブル コンポーネントを配置しない]** です。

ブータブル メディアに保存するために次のコンポーネントのいずれかを選択します。

- **[Acronis ブータブル エージェント]**は、Acronis Backup & Recovery 11 エージェントのほとんどの機能を含む Linux カーネル ベースのブータブル レスキュー ユーティリティです。復元中にさらに多くの機能を必要とする場合は、このコンポーネントをメディアに書き込んでください。通常のブータブル メディアと同様に、Active Restore または Universal Restore を使用して復元処理を設定できます。メディアが Windows で作成されている場合、ディスク管理機能も使用することができます。
- **Acronis ブータブル エージェントとワンクリック リストア**。ワンクリック リストアがリムーバブルメディアに保存されるディスク バックアップに追加されているだけで、このバックアップからの復元が容易になります。メディアからコンピュータを起動し、**[Acronis ワンクリック リストアの実行]**をクリックすると、同じメディア上に含まれるバックアップからディスクが直ちに復元されます。

**注意:** ワンクリック操作では、復元するボリュームを選択する場合などのユーザーによる選択は想定されていないため、Acronis ワンクリック リストアでは、常にディスク全体が復元されます。ディスクに複数のボリュームがあるときに Acronis ワンクリック リストアを使用する場合は、バックアップにすべてのボリュームを含めるようにします。バックアップに含まれないボリュームはすべて失われます。

### 4.6.14 通知

Acronis Backup & Recovery 11 には、電子メールまたはメッセージング サービスによってバックアップの完了をユーザーに通知する機能があります。

#### 電子メール

このオプションは、Windows および Linux オペレーティング システムで有効です。

このオプションは、ブータブル メディアから起動した場合には使用できません。

このオプションによって、タスクの完全なログと共に、バックアップ タスクの正常終了、失敗、またはユーザーによる操作が必要な場合について通知する電子メールを受け取ることができます。

デフォルトの設定は、**[無効]** です。

電子メールによる通知を設定する手順は、次のとおりです。

1. **[電子メールによる通知を送信する]** チェック ボックスをオンにして、通知を有効にします。
2. **[電子メールによる通知を送信する]** で、次の中から適切なチェック ボックスをオンにします。
  - **[バックアップが正常に終了したとき]:** バックアップ タスクが正常終了した場合に通知を送信します。
  - **[バックアップが失敗したとき]:** バックアップ処理が失敗した場合に通知を送信します。
  - **[ユーザーによる操作が必要なとき]:** 処理中、ユーザーによる操作が必要である場合に通知を送信します。
3. 電子メール メッセージにバックアップに関連するログ エントリを含める場合は、**[完全なログを通知に含める]** チェックボックスをオンにします。
4. **[電子メール アドレス]** フィールドに、通知の送信先の電子メール アドレスを入力します。複数のアドレスをセミコロンで区切って入力することもできます。
5. **[件名]** フィールドに、通知の件名を入力するか、デフォルト値のままにします。
6. **[SMTP サーバー]** フィールドに、**SMTP サーバーの名前**を入力します。
7. **[ポート]** フィールドに、SMTP サーバーのポートを設定します。デフォルトでは、ポートは **25** に設定されます。
8. **[ユーザー名]** フィールドにユーザー名を入力します。
9. **[パスワード]** フィールドにパスワードを入力します。
10. **[その他の電子メール パラメータ...]** をクリックして、次に示すその他の電子メール パラメータを設定します。
  - a. **[差出人]:** メッセージの送信元となるユーザーの電子メール アドレスを入力します。このフィールドが空白の場合、差出人アドレスには宛先アドレスが使用されます。
  - b. **[暗号化を使用する]:** メール サーバーへの暗号化された接続を選択できます。SSL 暗号化または TLS 暗号化のいずれかの種類を選択できます。
  - c. 一部のインターネット サービス プロバイダでは、送信が許可される前に受信メール サーバーによる認証が要求されます。その場合は、**[受信メール サーバーへのログオン]** チェック ボックスをオンにして POP サーバーを有効にし、次の設定を行います。
    - **[受信メール サーバー(POP)]:** POP サーバーの名前を入力します。
    - **[ポート]:** POP サーバーのポートを設定します。デフォルトでは、ポートは **110** に設定されます。
    - **[ユーザー名]:** ユーザー名を入力します。
    - **[パスワード]:** パスワードを入力します。
  - d. **[OK]** をクリックします。
11. **[テスト メールを送信中]** をクリックし、設定が正しいかどうかを確認します。

### メッセージャー サービス(WinPopup)

このオプションは、送信元コンピュータのオペレーティング システムが Windows または Linux で、受信コンピュータのオペレーティング システムが Windows の場合のみ利用できます。

このオプションは、ブータブル メディアから起動した場合には使用できません。

このオプションによって、バックアップ タスクの正常終了、失敗、またはユーザーによる操作が必要な場合について、ポップアップウィンドウによる通知を受け取ることができます。

デフォルトの設定は、**[無効]** です。

ポップアップウィンドウによる通知を設定する前に、タスクを実行するコンピュータとメッセージを受け取るコンピュータの両方で Messenger サービスが開始されていることを確認します。

Microsoft Windows Server 2003 ファミリでは、Messenger サービスはデフォルトでは開始されません。サービスのスタートアップの種類を**[自動]**に変更してからサービスを開始します。

ポップアップウィンドウによる通知を設定する手順は、次のとおりです。

1. **[ポップアップウィンドウによる通知を送信する]**チェックボックスをオンにします。
2. **[コンピュータ名]**フィールドに、通知の送信先となるコンピュータの名前を入力します。複数の名前はサポートされていません。

**[送信する通知]**で、次の中から適切なチェックボックスをオンにします。

- **[バックアップが正常に終了したとき]:** バックアップ操作が正常終了した場合に通知を送信します。
- **[バックアップが失敗したとき]:** バックアップ操作が失敗した場合に通知を送信します。
- **[ユーザーによる操作が必要なとき]:** バックアップの実行時に、ユーザーによる操作が必要になった場合に通知を送信します。

**[テスト メッセージを送信する]** をクリックし、設定が正しいかどうかを確認します。

#### 4.6.15 バックアップ処理の前後に実行するコマンド

このオプションは、Windows と Linux オペレーティング システム、および PE ベースのブータブル メディアで有効です。

このオプションによって、バックアップ処理の前後に自動的に実行されるコマンドを定義できます。

次の図に、バックアップ処理の前後に実行するコマンドが実行されるタイミングを示します。

バックアップ前に実行するコマンド	バックアップ	バックアップ後に実行するコマンド
------------------	--------	------------------

バックアップ処理の前後に実行するコマンドを使用する方法の例:

- バックアップを開始する前に、ディスクから一時ファイルを削除する
- バックアップを開始する前に、毎回サードパーティのアンチウイルス製品を実行するように設定する
- バックアップの終了後にアーカイブを別の場所にコピーする

「pause」などのユーザーの入力を必要とするような対話型のコマンドはサポートされません。

バックアップ処理の前後に実行するコマンドを指定する手順は、次のとおりです。

1. 次のオプションをオンにして、バックアップ処理の前後に実行するコマンドの実行を有効にします。
  - **[バックアップの前に実行]**
  - **[バックアップの後に実行]**
2. 次のいずれかを実行します。
  - **[編集]**をクリックして、新しいコマンドまたはバッチ ファイルを指定する
  - 既存のコマンドまたはバッチ ファイルをドロップ ダウン リストから選択する
3. **[OK]**をクリックします。

## バックアップ前に実行するコマンド

バックアップ処理を開始する前に実行するコマンド/バッチ ファイルを指定する手順は、次のとおりです。

1. [コマンド]フィールドにコマンドを入力するか、またはバッチ ファイルを選択します。「pause」などのユーザーの入力を必要とするような対話型のコマンドはサポートされません。
2. [作業ディレクトリ]フィールドで、コマンド/バッチ ファイルを実行するディレクトリのパスを指定します。
3. [引数]フィールドで、必要に応じて、コマンドを実行する際の引数を指定します。
4. 処理内容に応じて、次の表で説明するオプションから、適切なオプションを選択します。
5. [コマンドのテスト]をクリックして、コマンドが正しいかどうかを確認します。

チェック ボックス	選択内容			
	オン	オフ	オン	オフ
[コマンドの実行に失敗した場合、復元タスクを失敗させる]*				
[コマンドの実行が完了するまでバックアップを行わない]				
結果				
	デフォルト コマンドが正常に実行された後にのみバックアップを実行します。コマンドの実行に失敗した場合、タスクを中止します。	コマンドの実行の失敗または成功にかかわらず、コマンドの実行後にバックアップを実行します。	なし	コマンドの実行結果にかかわらず、コマンドの実行と並行してバックアップを実行します。

\* 終了コードがゼロでない場合、コマンドは失敗したと認識されます。

## バックアップ後に実行するコマンド

バックアップの完了後に実行するコマンド/実行可能ファイルを指定する手順は、次のとおりです。

1. [コマンド] フィールドにコマンドを入力するか、またはバッチ ファイルを参照します。
2. [作業ディレクトリ] フィールドで、コマンド/バッチ ファイルを実行するディレクトリのパスを指定します。
3. [引数] フィールドで、必要に応じて、コマンドを実行する際の引数を指定します。
4. コマンドが正常に実行されることが必須である場合、[コマンドの実行に失敗した場合、復元タスクを失敗させる] チェック ボックスをオンにします。終了コードがゼロでない場合、コマンドは失敗したと認識されます。コマンドの実行が失敗した場合、結果として生成される TIB ファイルと一時ファイルが削除され(可能な場合)、タスクの実行結果が [失敗] として設定されます。  
このチェック ボックスがオフになっていると、コマンドの実行結果はタスクの実行の失敗または成功に影響しません。コマンドの実行結果は、ログまたは [ログ] ビューに表示されるエラーと警告を確認することによって追跡できます。
5. コマンドが正しいかどうかを確認するには、[コマンドのテスト] をクリックします。

## 4.6.16 データ取り込みの前後に実行するコマンド

このオプションは、Windows および Linux オペレーティング システムの両方で有効です。

このオプションによって、データ取り込み(つまり、データのスナップショット作成)の前後に自動的に実行されるコマンドを定義できます。データ取り込みは、バックアップ処理の開始時に Acronis Backup & Recovery 11 によって実行されます。

次の図に、データ取り込みの前後に実行するコマンドが実行されるタイミングを示します。



[ボリューム シャドウ コピー サービス(VSS)] オプションを有効にした場合、コマンドの実行と Microsoft VSS アクションの順序は次のようになります。

「データ取り込み前」のコマンド → VSS の一時停止 → データ取り込み → VSS の再開 → 「データ取り込み後」のコマンド

データ取り込みの前後に実行するコマンドを使用すると、VSS と互換性のないデータベースまたはアプリケーションの停止と再開を行うことができます。バックアップ処理の前後に実行するコマンド(88ページ)とは異なり、データ取り込みの前後に実行するコマンドは、データ取り込み処理の前後に実行されます。この処理には数秒間かかります。バックアップ処理全体は、バックアップするデータ量に応じて、さらに長い時間がかかる場合があります。このため、データベースまたはアプリケーションのアイドル時間は最小になります。

データ取り込みの前後に実行するコマンドを指定する手順は、次のとおりです。

- 次のオプションをオンにして、データ取り込みの前後に実行するコマンドの実行を有効にします。
  - [データ取り込みの前に実行する]
  - [データ取り込みの後に実行する]
- 次のいずれかを実行します。
  - [編集] をクリックして、新しいコマンドまたはバッチ ファイルを指定する
  - 既存のコマンドまたはバッチ ファイルをドロップ ダウン リストから選択する
- [OK] をクリックします。

### データ取り込みの前に実行するコマンド

データ取り込みの前に実行するコマンド/バッチ ファイルを指定する手順は、次のとおりです。

- [コマンド]フィールドにコマンドを入力するか、またはバッチ ファイルを選択します。「pause」などのユーザーの入力を必要とするような対話型のコマンドはサポートされません。
- [作業ディレクトリ]フィールドで、コマンド/バッチ ファイルを実行するディレクトリのパスを指定します。
- [引数]フィールドで、必要に応じて、コマンドを実行する際の引数を指定します。
- 処理内容に応じて、次の表で説明するオプションから、適切なオプションを選択します。
- [コマンドのテスト]をクリックして、コマンドが正しいかどうかを確認します。

チェック ボックス	選択内容			
	オン	オフ	オン	オフ
[コマンドの実行に]	オン	オフ	オン	オフ

失敗した場合、バックアップ タスクを失敗させる]*				
[コマンドの実行が完了するまでデータ取り込みを実行しない]	オン	オン	オフ	オフ
<b>結果</b>				
	<b>デフォルト</b> コマンドが正常に実行された場合にのみデータ取り込みを実行します。コマンドの実行に失敗した場合、タスクを中止します。	コマンドの実行の失敗または成功にかかわらず、コマンドの実行後にデータ取り込みを実行します。	なし	コマンドの実行結果にかかわらず、コマンドの実行と並行してデータ取り込みを実行します。

\* 終了コードがゼロでない場合、コマンドは失敗したと認識されます。

### データ取り込みの後に実行するコマンド

データ取り込みの後に実行するコマンド/バッチ ファイルを指定する手順は、次のとおりです。

1. [コマンド]フィールドにコマンドを入力するか、またはバッチ ファイルを選択します。「pause」などのユーザーの入力を必要とするような対話型のコマンドはサポートされません。
2. [作業ディレクトリ]フィールドで、コマンド/バッチ ファイルを実行するディレクトリのパスを指定します。
3. [引数]フィールドで、必要に応じて、コマンドを実行する際の引数を指定します。
4. 処理内容に応じて、次の表で説明するオプションから、適切なオプションを選択します。
5. [コマンドのテスト]をクリックして、コマンドが正しいかどうかを確認します。

チェック ボックス	<b>選択内容</b>			
[コマンドの実行に失敗した場合、復元タスクを失敗させる]*	オン	オフ	オン	オフ
[コマンドの実行が完了するまでバックアップを行わない]	オン	オン	オフ	オフ
<b>結果</b>				
	<b>デフォルト</b> コマンドが正常に実行された場合にのみバックアップを続行します。コマンドの実行に失敗した場合、TIB ファイルと一時ファイルを削除してタスクを中止します。	コマンドの実行の失敗または成功にかかわらず、コマンドの実行後にバックアップを続行します。	なし	コマンドの実行結果にかかわらず、コマンドの実行と並行してバックアップを続行します。

\* 終了コードがゼロでない場合、コマンドは失敗したと認識されます。

#### 4.6.17 コピー/クリーンアップの無効期間

このオプションは、バックアップのコピーまたは保持ルール (68ページ)を設定する場合のみ有効です。

このオプションによって、コピーの開始または保持ルールの適用を許可しない期間を定義します。これらの処理は、コンピュータの電源がオンになっていれば、無効期間が終了した時点で実行されます。無効期間が始まる前に開始された処理は、中断されることなく続行されます。

非作業期間は、プライマリを含むすべての場所に適用されます。

デフォルトの設定は、**[無効]** です。

非作業期間を指定するには、**[以下の時間内はバックアップのコピー/クリーンアップを開始しない]** チェック ボックスをオンにし、日時を選択します。

##### 使用例

このオプションを使用して、コピーまたはクリーンアップとバックアップ処理を分離できます。たとえば、コンピュータを日中、ローカルにバックアップし、バックアップをネットワーク フォルダにコピーするとします。非作業期間に営業時間を含めます。営業時間の後、つまりネットワークの負荷が低い時間帯にコピーが実行されます。

#### 4.6.18 セクタ単位のバックアップ

このオプションは、ディスクレベルのバックアップのみで有効です。

ディスクまたはボリュームの物理レベルでの厳密なコピーを作成するには、**[セクタ単位でバックアップする]** チェックボックスをオンにします。生成されるバックアップのサイズはバックアップされるディスクと同じになります(圧縮レベル (81ページ) オプションが **[なし]** に設定されている場合)。セクタ単位のバックアップは、認識されないまたはサポートされないファイル システムや他の独自のデータ形式を使用しているドライブをバックアップするときに使用します。

#### 4.6.19 タスク失敗時の処理

このオプションは、Windows および Linux オペレーティング システムで有効です。

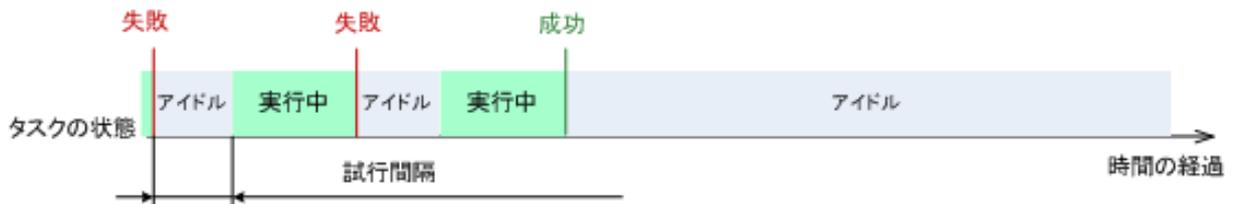
このオプションは、ブータブル メディアから起動した場合には使用できません。

このオプションでは、バックアップ計画のいずれかのタスクが失敗した場合の動作を指定します。

デフォルトは**失敗したタスクを再び開始しない**です。

**[失敗したタスクを再び開始する]**チェックボックスをオンにして、再試行の回数と間隔を指定してすると、失敗したタスクの実行が試行されます。試行は、試行が正常終了するか、または指定した回数の試行が行われると停止します。

#### **N=3: 2 回目の試行が成功**



#### **N=3: すべての試行が失敗**



バックアップ計画の誤りによってタスクが失敗した場合は、タスクがアイドル状態の間に計画を編集できます。タスクが実行中の場合は、バックアップ計画を編集する前にタスクを停止する必要があります。

## 4.6.20 タスクの開始条件

このオプションは、Windows および Linux オペレーティング システムで有効です。

このオプションは、ブータブル メディアから起動した場合には使用できません。

このオプションでは、バックアップ タスクの開始時(スケジュールされた時刻になるか、またはスケジュールで設定したイベントが発生した場合)に 1 つ以上の条件が満たされていない場合の動作を指定します。条件の詳細については、「[スケジュールリング \(58ページ\)](#)」と「[条件 \(66ページ\)](#)」をご参照ください。

デフォルトの設定 - **[条件が満たされるまで待機する]**

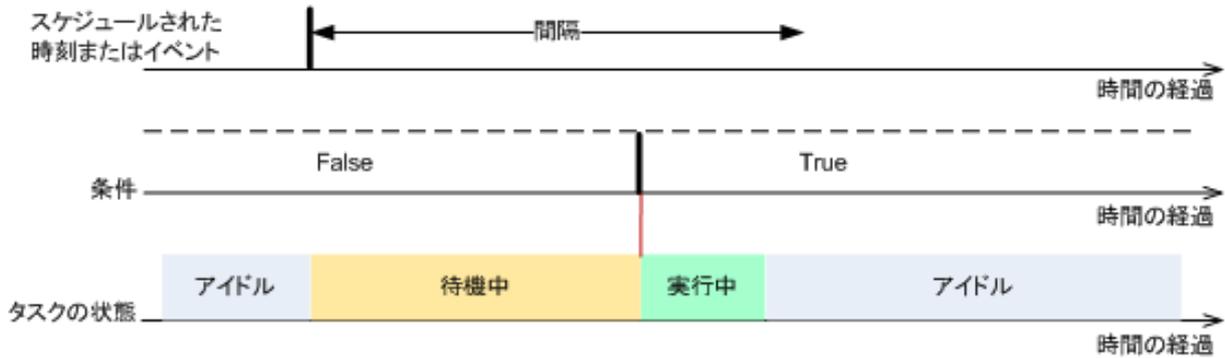
### **[条件が満たされるまで待機する]**

この設定では、スケジューラは条件の監視を開始し、条件が満たされると直ちにタスクを起動します。条件が満たされない場合、タスクは起動されません。

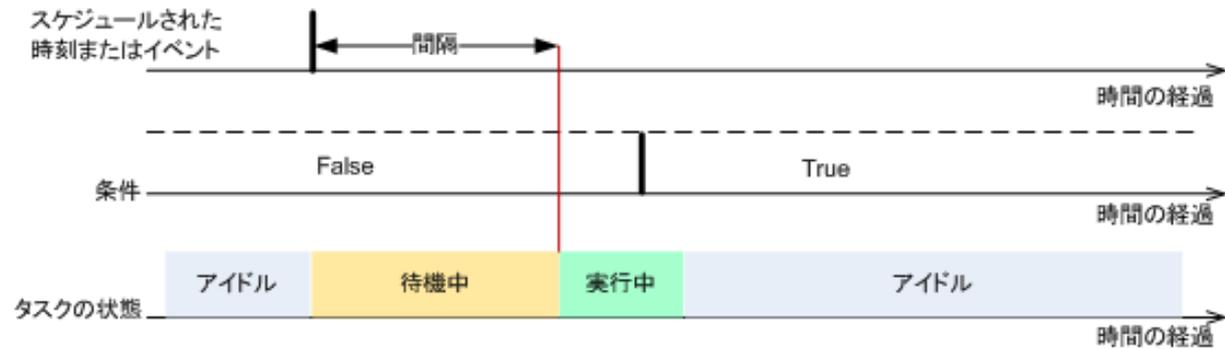
長期間条件が満たされず、バックアップの遅延による危険性が高まっている場合に、条件にかかわらずタスクを実行するまでの間隔を設定できます。**[次の時間が経過するとタスクを実行する]**チェックボックスをオンにし、間隔を指定します。条件が満たされるか、または最大遅延時間が経過すると、タスクが起動されます。

## 時間に関する説明図: 条件が満たされるまで待機する

### 間隔 > 条件を待機中



### 間隔 > 条件を待機中



## [タスクの実行をスキップする]

指定した時間ちょうどにデータをバックアップする必要がある場合など、バックアップの遅延を容認できない場合もあります。特に、比較的頻繁にイベントが発生するような場合は、条件が満たされるまで待たずにバックアップをスキップすることには意味があります。

## 5 復元

データを復元する場合は、まずコンソールを管理対象のオペレーティング システムを実行中のコンピュータに接続し、復元タスクを作成するという最も機能的な方法を検討します。

管理対象のコンピュータのオペレーティング システムが起動しない場合またはデータをベア メタルに復元する必要がある場合は、ブータブル メディア (186ページ)からまたは Acronis スタートアップ リカバリ マネージャを使用してコンピュータを起動します。次に、復元タスクを作成します。

LVM(論理ボリュームマネージャ)によって作成された Linux ソフトウェア RAID デバイスおよびボリュームの復元の詳細については、「MD デバイスと論理ボリュームのリカバリ (27ページ)」を参照してください。

### 5.1 復元タスクの作成

復元タスクを作成する手順は、次のとおりです。

#### 復元元

##### データの選択 (96ページ)

復元するデータを選択します。

##### アクセス ログイン情報 (100ページ)

(オプション)タスク アカウントがアーカイブ保存先でのアクセス権限を持っていない場合は、アーカイブ保存先のログイン情報を入力します。このオプションにアクセスするには、**[アクセス用ログイン情報を表示する]** をクリックします。

#### 復元先

このセクションは、目的のバックアップが選択され、復元するデータの種類が定義された後に表示されます。ここで指定するパラメータは、復元するデータの種類によって異なります。

##### ディスク (101ページ)

##### ボリューム (103ページ)

##### ファイル (106ページ)

##### アクセス ログイン情報 (101ページ)

(オプション)タスクのログイン情報によって選択したデータの復元が有効にならない場合は、復元先のログイン情報を指定します。このオプションにアクセスするには、**[詳細ビュー]** チェックボックスをオンにします。

#### 復元の実行時期

##### 復元 (108ページ)

復元を開始する時期を選択します。タスクは、作成直後に開始するか、後で指定した日時に実行するようにスケジュールするか、または手動で実行するために保存することもできます。

#### タスクのパラメータ

##### タスク名

(オプション)復元タスクの固有名を入力します。わかりやすい名前を付けることによって、そのタスクをすばやく探すことができます。

### 復元オプション

(オプション)復元操作の前後に実行するコマンド、復元の優先度、エラーの処理または通知オプションなどの復元オプションをカスタマイズします。このセクションでなにもしない場合、デフォルト値 (114ページ) が使用されます。

何らかの設定がデフォルト値から変更されると、新しく設定された値が表示される新しい行が表示されます。また、設定のステータスは、[デフォルト] から [カスタム] に変わります。設定を再度変更すると、新しい値がデフォルト値の場合を除いて、その行には新しい値が表示されます。デフォルト値を設定すると行の表示は消えます。そのため、このセクションでは、デフォルト値とは異なる設定のみが表示されることとなります。

[デフォルトにリセット] をクリックすると、すべての設定がデフォルト値にリセットされます。

### タスクのログイン情報

(オプション)タスクは、タスクを作成したユーザーの代わりに実行されます。タスクのログイン情報は、必要に応じて変更することができます。このオプションにアクセスするには、[タスクのログイン情報の表示] をクリックしてください。

## (オプション)Acronis Universal Restore

適用対象: システム ディスクまたはボリュームの復元

### Universal Restore (109ページ)

異なるハードウェアでオペレーティング システムを復元および起動する場合は、Acronis Universal Restore を使用します。

必要なすべての手順を完了したら、[OK] をクリックして復元タスクの作成をコミットします。

## 5.1.1 復元元

### 1. アーカイブの保存先の指定

[データ パス] フィールドにアーカイブの保存先のパスを指定するか、[参照] をクリックし、「バックアップ アーカイブの保存先 (97ページ)」の説明に従って目的の場所を選択します。

Acronis Backup & Recovery 11 のアドバンスド エディションでは、上記のようにアーカイブの保存先のパスを指定するか、集中管理用データ カタログを使用するかを選択することが可能です。

### 2. データの選択

バックアップ データは、[データ ビュー] タブまたは [アーカイブ ビュー] タブを使用して選択できます。[データ ビュー] タブには、選択したアーカイブの保存先内におけるすべてのバックアップ データがバージョン(バックアップを作成した日付時刻)ごとに表示されます。[アーカイブ ビュー] タブには、アーカイブごとのバックアップ データが表示されます。

---

**注意:** エージェント for ESX(i) またはエージェント for Hyper-V を使用してファイルレベルで復元することはできません。

---

## [データ ビュー] を使用したデータの選択

[データ ビュー] タブとデータ カタログは同じ機能を備えているので、[データ ビュー] タブにおけるデータの選択は、カタログと同じ方法で実行されます。データの選択に関する詳細については、「データ カタログ (98ページ)」をご参照ください。

## [アーカイブ ビュー] を使用したデータの選択

1. 目的のアーカイブを展開して、作成日付時刻に基づいて、連続するバックアップの中の 1 つを選択します。これにより、ディスクのデータの状態を特定の時点に戻すことができます。  
アーカイブの一覧が長すぎる場合、表示するアーカイブの種類を選択して、アーカイブをフィルタリングすることができます。フィルタリングするには、[表示] リストでアーカイブの種類を選択します。
2. ディスクまたはボリュームのバックアップの場合のみ: [バックアップ内容] のドロップダウン ボックスから表示するデータの種類を選択します。
  - [ディスク]: (すべてのボリュームを含む)ディスク全体を復元します。
  - [ボリューム]: 個々のベーシック ボリュームおよび/またはダイナミック ボリュームを復元します。
  - [ファイル]: 個々のファイルおよびフォルダを復元します。
3. [バックアップ内容] で、復元が必要な項目のチェックボックスをオンにします。
4. [OK] をクリックします。

## MBR の選択

システム ボリュームを復元する際、通常、次の場合にディスクの MBR を選択します。

- オペレーティング システムを起動できない。
- ディスクが新しいため、MBR が存在しない。
- カスタム ブート ローダーまたは Windows 以外のブート ローダーを復元する(LILO、GRUB など)。
- ディスクのジオメトリがバックアップに保存されているジオメトリと異なる。

MBR の復元が必要になる状況は他にもありますが、上記のような状況が最も一般的です。

MBR をディスク間で復元する場合、Acronis Backup & Recovery 11 はトラック 0 を復元しますが、このことにより復元先ディスクのパーティション テーブルとパーティション レイアウトが影響を受けることはありません。Acronis Backup & Recovery 11 は、復元後に Windows ローダーを自動的に更新するため、MBR が破損していない場合は、Windows システムで MBR とトラック 0 を復元する必要はありません。

## バックアップ アーカイブの保存先

場所	詳細
 個人用	アーカイブが個人用格納域に保存されている場合は、[個人用] グループを展開し、目的の格納域をクリックします。
 集中管理用	アーカイブが集中管理用格納域に保存されている場合は、[集中管理] グループを展開し、適切な格納域をクリックします。
 コンピュータ名	ローカル コンピュータの名前です。
 ローカルフォルダ	アーカイブがコンピュータ上のローカル フォルダに保存されている場合は、[<コンピュータ名>] グループを展開し、目的のフォルダをクリックします。

場所	詳細
ダ	
 CD、DVD など	CD や DVD などの光学メディアにアーカイブが保存されている場合は、[<コンピュータ名>] グループを展開し、目的のドライブを選択します。最初に最後の DVD を挿入します。その後、指示に従って最初のディスクから順番にディスクを挿入します。
 テープデバイス	ローカル接続したテープ デバイスにアーカイブが保存されている場合は、[テープ ドライブ] グループを展開し、目的のデバイスをクリックします。 テープ デバイスは Acronis Backup & Recovery 10 からアップグレードした場合のみ使用できます。テープの使用方法の詳細については、製品ヘルプの「テープ デバイス」セクションを参照してください。
 ネットワークフォルダ	アーカイブがネットワーク共有に保存されている場合は、[ネットワーク フォルダ] グループを展開し、ネットワーク上の必要なコンピュータを選択して、共有フォルダをクリックします。ネットワーク共有がアクセス ログイン情報を必要とする場合は、それらの情報が要求されます。  <b>注意:</b> /mnt/share などのマウント ポイントにマウントされている CIFS(Common Internet File System)のネットワーク共有を指定するには、ネットワーク共有そのものではなく、このマウント ポイントを選択します。
 FTP、SFTP	アーカイブが FTP または SFTP サーバーに保存されている場合は、[パス] フィールドにサーバー名またはアドレスを次のように入力します。 <b>ftp://ftp_server:&lt;ポート番号&gt; または sftp://sftp_server:&lt;ポート番号&gt;</b> ポート番号が指定されていない場合、ポート 21 が FTP 用に、ポート 22 が SFTP 用に使用されます。 アクセス ログイン情報を入力すると、サーバー上のフォルダが使用できるようになります。サーバー上の適切なフォルダをクリックします。 匿名アクセスがサーバーによって許可されている場合、匿名ユーザーとしてサーバーにアクセスすることができます。匿名ユーザーとしてアクセスするには、ログイン情報を入力する代わりに、[匿名アクセスを使用する] をクリックします。  FTP 仕様の原文に記載されているように、FTP サーバーにアクセスするのに必要なログイン情報は、ネットワーク上をテキスト形式で転送されます。このことは、ユーザー名とパスワードが、パケットスニファを使用した盗聴者によって傍受される可能性があることを意味します。
 NFS ドライブ	アーカイブが NFS 共有に保存されている場合は、[NFS ドライブ] グループを展開し、フォルダをクリックします。

## データ カタログ

データ カタログを使用すると、必要なバージョンのデータを簡単に見つけて復元対象として選択することができます。管理対象のコンピュータ上では、このコンピュータからアクセス可能な任意の格納域の [データ ビュー] タブからデータ カタログ機能を使用することができます。管理サーバー上では、[データ ビュー] と集中管理される [データ カタログ] の両方からカタログ機能を使用できます。集中管理されるデータ カタログは、集中管理格納域に保存されているすべてのデータを一元的に表示します。

### 復元するバックアップ済みデータの選択

1. 次のいずれかを実行します。

- **[データ ビュー]** タブにアクセスするには、コンソールをコンピュータまたは管理サーバーに接続し、**格納域ビュー**に移動して、目的の格納域をクリックします。
  - **データ カタログ**にアクセスするには、コンソールを管理サーバーに接続し、**[ナビゲーション]** ツリーの **[データ カタログ]** を選択します。
2. **[表示]** フィールドで、表示するデータの種類を選択します。
    - ディスクレベルのバックアップ内のディスク全体やボリューム全体を参照および検索するには、**[コンピュータ/ディスク/ボリューム]** を選択します。
    - ファイルレベルとディスクレベルのバックアップ内のファイルやフォルダを参照および検索するには、**[フォルダ/ファイル]** を選択します。
  3. **[バックアップされたデータを以下の条件で表示]** フィールドで、バックアップ済みデータを表示する対象期間を指定します。
  4. 次のいずれかを実行します。
    - カタログ ツリー内またはカタログ ツリーの右側のテーブル内から復元するデータを選択します。
    - 検索文字列に目的のデータ アイテムを識別する情報(コンピュータ名、ファイル名、フォルダ名、ディスク ラベルなど)を入力し、**[検索]** をクリックします。アスタリスク(\*)と疑問符(?)をワイルドカードとして使用できます。

これにより、**[検索]** ウィンドウに、名前の一部または全部が入力した値と一致するバックアップ済みデータ アイテムの一覧が表示されます。結果の一覧が長すぎる場合は、バックアップが作成された日付または時間の範囲、およびバックアップ アイテムのサイズの範囲を指定することで検索条件を絞り込むことができます。目的のデータが見つかったら、そのデータを選択し、**[OK]** をクリックして、**データ カタログ/データ ビュー**に戻ります。
  5. **[バージョン]** の一覧を使用して、データを戻す時点を選択します。デフォルトでは、手順 3 で選択した期間内の最後の利用可能な時点にデータが戻されます。
  6. 目的のデータを選択し、**[復元]** をクリックして復元操作のパラメータを設定します。

## カタログまたはデータ ビューにデータが表示されない場合

次のような原因が考えられます。

**間違った期間が設定されている。**

**[バックアップされたデータを以下の条件で表示]** コントロールで設定された期間内に目的のデータがバックアップされていない。

**解決策:** 対象期間の範囲を広げます。

**カタログ作成がオフになっている。**

データが部分的に表示されるかまったく表示されない場合に最も考えられる原因は、バックアップ中にバックアップのカタログ化オプション (78ページ)が無効されていることです。

**解決策:**

- **[今すぐカタログを作成]** をクリックして、手動でカタログを作成します。**データ カタログ**の場合、管理対象格納域に保存されているバックアップすべてのカタログが作成されます。**データ ビュー**の場合、選択した格納域に保存されているバックアップのみのカタログが作成されます。既にカタログが作成されたバックアップのカタログが再度作成されることはありません。
- 大量のバックアップ済みデータのカタログ作成には時間がかかるので、それぞれの格納域の**アーカイブ ビュー**を使用することもできます。アーカイブ ビューの使用の詳細については、

「格納域の操作 (123ページ)」セクションの「格納域の内容の参照およびデータの選択」を参照してください。

### カタログをサポートしないデータ

次のデータはカタログまたはデータ ビューに表示できません。

- 暗号化されパスワードで保護されたアーカイブのデータ。
- CD、DVD、BD、アイオメガ REV ドライブなどのリムーバブル メディアにバックアップされたデータ。
- Acronis Online Backup Storage にバックアップされたデータ。
- Acronis True Image Echo 以前の製品バージョンを使用してバックアップされたデータ。
- 簡易バックアップ名を使用してバックアップされたデータ。

**解決策:** 前述のデータを参照するには、それぞれの格納域の **[アーカイブ ビュー]** タブを使用します。

### データが集中管理されるカタログに含まれない

個人用格納域 (123ページ) のデータは集中管理されるカタログに表示されません。

**解決策:** 前述のデータを参照するには、コンピュータに直接接続し、目的の個人用格納域を選択して、**[データ ビュー]** を選択します。

## 5.1.2 場所のアクセス ログイン情報

バックアップの保存先にアクセスするために必要なログイン情報を指定します。

### ログイン情報を指定するには

1. 次のいずれかを選択します。

- **[タスクのログイン情報を使用する]**

**[タスクのパラメータ]** セクションで指定されたタスク アカウントのログイン情報を使用して、その場所にアクセスします。

- **[次のログイン情報を使用する]**

ユーザーが指定するログイン情報を使用して、その場所にアクセスします。タスク アカウントがその場所に対するアクセス許可を持っていない場合は、このオプションを使用します。ネットワーク共有またはストレージ ノードの格納域に対しては、特別なログイン情報を指定する必要がある場合があります。

次の項目を指定します。

- **[ユーザー名]** - Active Directory ユーザー アカウントの名前を入力する場合は、ドメイン名(DOMAIN\ユーザー名またはユーザー名@ドメイン)も指定してください。
- **[パスワード]** - アカウントのパスワード。

2. **[OK]**をクリックします。

---

FTP 仕様の原文に記載されているように、FTP サーバーにアクセスするのに必要なログイン情報は、ネットワーク上をテキスト形式で転送されます。このことは、ユーザー名とパスワードが、パケット スニファを使用した盗聴者によって傍受される可能性があることを意味します。

---

### 5.1.3 復元先のアクセス ログイン情報

ログイン情報を指定するには

1. 次のいずれかを選択します。

- **[タスクのログイン情報を使用する]**

[タスクのパラメータ] セクションで指定されたタスク アカウントのログイン情報を使用して、復元先にアクセスします。

- **[次のログイン情報を使用する]**

ユーザーが指定するログイン情報を使用して、復元先にアクセスします。タスク アカウントがその復元先に対するアクセス許可を持っていない場合は、このオプションを使用します。

次の項目を指定します。

- **[ユーザー名]** - Active Directory ユーザー アカウントの名前を入力する場合は、ドメイン名(DOMAIN\ユーザー名またはユーザー名@ドメイン)も指定してください。

- **[パスワード]** - アカウントのパスワード。

2. **[OK]**をクリックします。

### 5.1.4 復元先

選択したデータを復元する復元先を指定します。

#### 復元先ディスクの選択

使用できるディスクまたはボリュームの復元先は、コンピュータで動作しているエージェントによって異なります。

**復元先:**

**物理コンピュータ**

Acronis Backup & Recovery 11 エージェント for Windows またはエージェント for Linux がインストールされている場合に選択できます。

選択したディスクは、コンソールが接続されているコンピュータの物理ディスクにリカバリされます。これを選択した場合は、次に示す通常のディスク マッピングの手順に進みます。

**ディスクボリューム**

**自動マッピング**

「自動マッピングの動作 (103ページ)」の説明のとおり、Acronis Backup & Recovery 11 によって、選択したディスクの復元先ディスクに対するマッピングが試行されます。マッピング結果に満足できない場合は、手動でディスクの再マッピングを実行できます。再マッピングを実行するには、ディスクのアンマップを逆順で実行する(最後にマッピングしたディスクを最初にアンマップする)必要があります。次に、下の説明に従って、手動でディスクのマッピングを実行します。

**ディスク番号:**

**ディスク番号(モデル) (102ページ)**

各ソース ディスクに対して、復元先ディスクを選択します。

**NT シグネチャ (102ページ)**

復元するディスクのシグネチャの処理方法を選択します。ディスクのシグネチャは、Windows および Linux カーネルのバージョン 2.6 以降によって使用されます。

## 復元先ディスク

復元先のディスクを指定する手順は、次のとおりです。

1. 選択したディスクの復元先となるディスクを選択します。復元先のディスク領域には、少なくとも圧縮されていないイメージ データと同じサイズが必要です。
2. **[OK]**をクリックします。

---

復元先のディスクに保存されているすべてのデータは、バックアップ データで置き換えられるため、復元先に存在するバックアップされていない必要なデータに注意してください。

---

## NT シグネチャ

NT シグネチャは、MBR に保存されるレコードです。このシグネチャにより、ディスクがオペレーティング システムに対して一意に識別されます。

システム ボリュームを含むディスクを復元する場合、ターゲット ディスクの NT シグネチャをどのように操作するかを選択できます。次のパラメータのいずれかを選択します。

- **[自動的に選択する]**

バックアップに保存されているものと同じ NT シグネチャである場合、ターゲット ディスクの NT シグネチャがそのまま保持されます(言い換えると、バックアップされた同じディスクにディスクを復元する場合)。それ以外の場合、ターゲット ディスクに対して、新しい NT シグネチャが生成されます。

これは、ほとんどの場合に推奨されるデフォルトの選択です。どうしても必要な場合のみ、次の設定を使用してください。

- **[新規作成]**

ターゲット ハード ディスクに対して新しい NT シグネチャが生成されます。

- **[バックアップから復元]**

ターゲット ハード ディスクの NT シグネチャは、ディスク バックアップにあるシグネチャで置き換えられます。

---

**注意:** このコンピュータの既存のディスクに同じ NT シグネチャがないことを必ず確認してください。同じ NT シグネチャがあると、起動時に最初のディスクからオペレーティング システムが実行され、2 番目のディスクで同じシグネチャが検出されるので、新しい一意の NT シグネチャが自動的に生成されて 2 番目のディスクに割り当てられます。その結果、2 番目のディスク上のすべてのボリュームはそのドライブ文字を失います。ドライブ文字がないため、そのディスクに対するパスはすべて無効となり、プログラムからそのディスク上のファイルは見えなくなります。そのディスク上のオペレーティング システムは起動できなくなります。

---

次のような理由により、ディスクのシグネチャの復元が必要になります。

- Acronis Backup & Recovery 11 は、ソース ハード ディスクのシグネチャを使用してタスクをスケジュールします。同じディスク シグネチャを復元する場合は、前に作成されたタスクを再作成または編集する必要はありません。
  - インストールされたアプリケーションには、ライセンス管理やその他の目的にディスク シグネチャを使用するものもあります。
- **[既存のものを保持]**  
ターゲット ハード ディスクの NT シグネチャはそのまま残されます。

## 自動マッピングの動作

Acronis Backup & Recovery 11 は、システムのブータビリティが維持できる場合に復元先のディスクにディスクまたはボリュームを自動マッピングします。維持できない場合、自動マッピングはキャンセルされるため、ディスクまたはボリュームを手動でマッピングする必要があります。

このほか、ボリュームが Linux 論理ボリュームまたは Linux ソフトウェア RAID (MD デバイス) の場合も、手動でマッピングする必要があります。論理ボリュームおよび MD デバイスの復元の詳細は、「MD デバイスと論理ボリュームのリカバリ (27ページ)」を参照してください。

自動マッピングは、次のとおり実行されます。

1. ディスクまたはボリュームが元の場所に復元されると、マッピングでは元のディスクまたはボリュームのレイアウトが再現されます。

---

ディスクまたはボリュームの元の場所とは、まったく同じディスクまたはボリュームのバックアップのことを指します。バックアップ後にボリュームのサイズ、場所、または他の物理的なパラメータが変更された場合、元のボリュームとは見なされません。ボリュームのドライブ文字またはラベルを変更しても、そのボリュームは認識されます。

---

2. ディスクまたはボリュームが別の場所に復元された場合は、次のとおりに処理します。

- **ディスクを復元する場合:** ソフトウェアは復元先ディスクのサイズとボリュームをチェックします。復元先ディスクにはボリュームが格納されておらず、サイズは復元するディスクを配置するのに十分な大きさが必要です。初期化されていない復元先ディスクは、自動的に初期化されます。

必要なディスクが見つからない場合、ディスクは手動でマッピングする必要があります。

- **ボリュームを復元する場合:** ソフトウェアは復元先ディスクの未割り当て領域をチェックします。

十分な未割り当て領域がある場合、ボリュームは「そのまま」復元されます。

復元先ディスクの未割り当て領域が復元するボリュームのサイズよりも小さい場合、未割り当て領域に合わせて(空き領域を減らすことで)ボリュームが縮小されます。縮小されても未割り当て領域に合わない場合は、手動でボリュームをマッピングする必要があります。

## 復元先ボリュームの選択

使用できるボリュームのリカバリ先は、コンピュータで動作しているエージェントによって異なります。

### 復元先:

#### 物理コンピュータ

Acronis Backup & Recovery 11 エージェント for Windows またはエージェント for Linux がインストールされている場合に選択できます。

選択したボリュームは、コンソールが接続されているコンピュータの物理ディスクにリカバリされます。これを選択した場合は、次に示す通常のボリューム マッピングの手順に進みます。

#### ディスク/ボリューム

##### 自動マッピング

「自動マッピングの動作 (103ページ)」の説明のとおり、Acronis Backup & Recovery 11 によって、選択したボリュームの復元先ディスクに対するマッピングが試行されます。マッピングの結果に満足できない場合は、ボリュームを手動で再度マッピングできます。そのためには、逆の順番にボリュームのマッピングを解除する必要があります。つまり、最後にマッピングしたボリュームを最初に解除します。その後、以下の説明に従って、ボリュームを手動でマッピングします。

**MBR のリカバリ先(ディスク番号): (マスター ブート レコードがリカバリ対象として選択されている場合)**

**ディスク番号** (104ページ)

マスタ ブート レコードの復元先ディスクを選択します。

**NT シグネチャ:** (102ページ)

処理する MBR に含まれるディスクのシグネチャの処理方法を選択します。ディスクのシグネチャは、Windows および Linux カーネルのバージョン 2.6 以降によって使用されます。

**復元先(ボリューム)(ドライブ文字):**

**[ディスク番号/ボリューム]**

それぞれのソース ボリュームを復元先ディスクのボリュームまたは未割り当て領域に連続してマップします。

**サイズ:** (104ページ)

(オプション)復元するボリュームのサイズ、場所、およびその他のプロパティを変更します。

## MBR の復元先

復元先のディスクを指定する手順は、次のとおりです。

1. MBR の復元先ディスクを選択します。
2. **[OK]**をクリックします。

## ボリュームの復元先

復元先のボリュームまたは未割り当て領域を選択するには

1. 選択したボリュームを復元するボリュームまたは未割り当て領域を選択します。復元先のボリューム/未割り当て領域には、少なくとも圧縮されていないイメージ データと同じサイズが必要です。
2. **[OK]** をクリックします。

---

復元先のボリュームに保存されているすべてのデータは、バックアップ データで置き換えられるため、復元先に存在するバックアップされていない必要なデータに注意してください。

---

## ブータブル メディアを使用する場合

Windows スタイルのブータブル メディアで表示されるディスクのドライブ文字は、Windows で識別されるドライブと異なる場合があります。たとえば、起動用ユーティリティにおける D: ドライブが、Windows では E: に対応することがあります。

---

注意！安全のために、各ボリュームに一意の名前を割り当てておくことをお勧めします。

---

Linux スタイルのブータブル メディアでは、ローカル ディスクとボリュームがマウント解除(sda1、sda2...)として表示されます。

## ボリュームのプロパティの変更

### サイズと場所

ボリュームをベーシック MBR ディスクにリカバリする場合は、ボリュームまたはボリュームの境界をマウスでドラッグするか、該当するフィールドに対応する値を入力すると、ボリュームのサイズや

位置を変更できます。この機能を使用すると、リカバリされるボリューム間でハード ディスク領域を再配分することができます。この場合、縮小するボリュームを最初にリカバリする必要があります。

**注意:** セクタ単位オプションを使用してバックアップされたボリュームのサイズを変更することはできません。

**ヒント:** 複数のリムーバブル メディアに分割されたバックアップから復元する場合は、ボリュームのサイズを変更できません。ボリュームのサイズを変更するには、バックアップのすべての部分をハード ディスク上の 1 つの場所にコピーします。

## [種類]

ベーシック MBR ディスクには、最大 4 つまでのプライマリ ボリュームまたは最大 3 つまでのプライマリ ボリュームと複数の論理ドライブを含めることができます。デフォルトでは、元のボリュームの種類が選択されます。この設定は、必要に応じて変更できます。

- **[プライマリ]** -プライマリ ボリュームに関する情報は、MBR パーティション テーブルに含まれています。ほとんどのオペレーティング システムは、最初のハード ディスクのプライマリ ボリュームからのみ起動が可能ですが、プライマリ ボリュームの数には制限があります。  
ベーシック MBR ディスクにシステム ボリュームをリカバリする場合は、[アクティブ]チェックボックスをオンにします。アクティブなボリュームは、オペレーティング システムの読み込みに使用されます。オペレーティング システムがインストールされていないボリュームに対して[アクティブ]を選択すると、コンピュータが起動できなくなります。論理ドライブまたはダイナミック ボリュームをアクティブに設定することはできません。
- **[論理]** -論理ボリュームに関する情報は、MBR ではなく拡張パーティション テーブルにあります。単一のディスク上の論理ボリュームの数に制限はありません。論理ボリュームをアクティブに設定することはできません。独自のボリュームとオペレーティング システムを含むシステム ボリュームを別のハード ディスクにリカバリする場合は、一般にデータのみが必要になります。この場合は、ボリュームを論理ボリュームとしてリカバリすることで、データのみにアクセスします。

## ファイル システム

デフォルトでは、復元されたボリュームには、元のボリュームと同じファイル システムが作成されます。必要に応じて、復元中にボリュームのファイル システムを変更できます。

Acronis Backup & Recovery 11 では、次のようにファイル システムを変換できます。FAT 16 -> FAT 32 および Ext2 -> Ext3。その他の形式をベースにしたファイル システムを使用するボリュームに対しては、このオプションは使用できません。

古い、容量の少ない FAT16 ディスクから新しいディスクにボリュームをリカバリするとします。大容量のハード ディスクでは、FAT16 は効率的ではなく、設定できない場合もあります。これは、FAT16 が最大 4 GB までのボリュームしかサポートしておらず、ファイル システムを変更することなく、FAT16 ボリュームに対するこの 4 GB の制限を超えるボリュームに復元することはできないためです。そこで、FAT16 から FAT32 にファイル システムを変更することが意味を持ちます。

古いオペレーティング システム(MS-DOS、Windows 95、Windows NT 3.x、4.x)は FAT32 をサポートしないため、ボリュームをリカバリした後にファイル システムを変更しても動作しません。これらは、一般に FAT16 ボリュームのみにリカバリできます。

## ボリューム(パーティション)のアライメント

ボリューム クラスタがディスク セクタにアラインされていない場合、Acronis Backup & Recovery 11 によって非アラインが自動的に除去されます。非アラインは、シリンダ/ヘッド/セクタ(CHS)のアドレッシング スキームで作成されたボリュームを、セクタ サイズが 4 KB のハードディスク ドライブ (HDD)またはソリッドステート ドライブ(SSD)に復元する場合に発生します。CHS アドレッシング スキームは、Windows Vista より前のすべての Windows オペレーティング システムなどで使用されています。

非アラインが発生した場合、クラスタは正しくアラインされている場合に占有するよりも多くの物理セクタと重複します。そのため、データが変更されるたびに、消去および再度書き込む必要がある物理セクタが増えていきます。このような冗長な読み取り/書き込み操作は、ディスク速度と全体的なシステム パフォーマンスを著しく低下させます。SSD ドライブでは、非アラインによりシステム パフォーマンスが低下するだけでなく、ドライブの寿命が短くなります。SSD メモリ セルは、一定量の読み取り/書き込み操作に合わせて設計されているので、冗長な読み取り/書き込み操作は、SSD ドライブの劣化を早めます。

LVM(論理ボリュームマネージャ)を備えた Linux で作成されたダイナミック ボリュームおよび論理ボリュームを復元する場合、適切なアライメントは自動的に設定されます。

ベーシック MBR ディスクおよび GPT ボリュームを復元する際に、何らかの理由により自動アライメントでは不十分な場合、アライメント方法を手動で選択できます。次のから選択できます。

- **[自動選択]:** (デフォルト)推奨ソースおよびターゲット ディスク/ボリューム プロパティを基にして、適切なアライメントが自動的に設定されます。  
どうしても必要な場合のみ、次のオプションを使用してください。
  - **[CHS(63 セクタ)]:** 復元したボリュームが、各物理セクタが 512 バイトのディスク上の Microsoft Windows XP および Windows Server 2003(またはそれ以前)環境下で使用される場合、このオプションを選択します。
  - **[VMWare VMFS(64 KB)]:** ボリュームを、VMware 仮想コンピュータ ファイル システム パーティションとして復元する場合、このオプションを選択します。
  - **[Vista のアライメント(1 MB)]:** 復元したボリュームが Windows Vista 以降の Windows オペレーティング システム環境下で使用される場合、または、ボリュームをセクタ サイズが 4 KB である HDD または SSD ドライブに復元する場合、このオプションを選択します。
  - **[カスタム]:** ボリュームのアライメントを手動で指定します。値は、物理セクタ サイズの倍数にすることを勧めます。

## ファイルおよびフォルダの復元先の選択

### 復元先

#### バックアップ先

バックアップ ファイルを復元する場所を選択します。

- **元の場所**  
ファイルおよびフォルダが、バックアップ内におけるパスと同じパス(複数可)に復元されます。たとえば、C:\Documents\Finance\Reports\ にあるすべてのファイルとフォルダをバックアップした場合、ファイルは同じパスに復元されます。フォルダが存在しない場合は、自動的に作成されます。
- **新しい場所**

ファイルはツリーで指定した場所に復元されます。**[フル パスを復元しない]** チェックボックスをオフにしないかぎり、ファイルとフォルダはフル パスを再作成せずに復元されます。

## 復元エージェント

ファイルの復元を実行する Acronis エージェントを選択します。ファイルを復元するコンピュータでエージェントが自動的に検出されなかった場合にのみ、エージェントを選択できます。

## 上書き

このオプションは、リカバリ先フォルダに、バックアップ アーカイブにあるファイルと同じファイル名が見つかった場合の処理を選択します。

- **[既存のファイルを上書きする]:** ハード ディスクのファイルより、バックアップにあるファイルを優先します。
- **[既存のファイルが古い場合は上書きする]:** バックアップまたはディスクのどちらかに格納されているかにかかわらず、最新のファイル修正を優先します。
- **[既存のファイルを上書きしない]:** バックアップにあるファイルより、ハード ディスクのファイルを優先します。

ファイルの上書きを許可する場合でも、復元処理から除外することによって、特定のファイルの上書きを防止できます。

## リカバリからの除外 (107ページ)

復元しないファイルおよびフォルダを指定します。

## リカバリからの除外

リカバリから除外するファイルを設定します。

ファイル マスクの一覧を作成するには、**[追加]**、**[編集]**、**[削除]**、および **[すべて削除]** ボタンを使用します。名前がいずれかのマスクに一致するファイルはリカバリ中にスキップされます。

1 つ以上のワイルドカード文字(\* および ?)を ファイル マスク内で使用することができます。

- アスタリスク(\*)はファイル名内の 0 個以上の文字の代用として使用します。たとえば、ファイル マスク Doc\*.txt は Doc.txt、Document.txt などの文字と一致します。
- 疑問符(?)はファイル名内の厳密に 1 文字の代用として使用します。たとえば、ファイルマスク Doc?.txt は Doc1.txt、Docs.txt などのファイルと一致しますが、Doc.txt、Doc11.txt などのファイルとは一致しません。

## 除外の例

条件	例	説明
<b>Windows と Linux</b>		
名前	F.log F	「F.log」という名前のファイルをすべて除外します。 「F」という名前のファイルをすべて除外します。
マスク(*)	*.log F*	.log 拡張子の付いたファイルをすべて除外します。 「F」で始まる名前のファイルとフォルダをすべて除外します(フォルダ F、F1、ファイル F.log、F1.log など)。

マスク (?)	F????.log	「F」で始まる 4 文字の名前の .log ファイルをすべて除外します。
<b>Windows</b>		
ファイル パス	Finance\F.log	「Finance」という名前のすべてのフォルダから「F.log」という名前の ファイルを除きます。
フォルダ パス	Finance\F または Finance\F	「Finance」という名前のすべてのフォルダから「F」という名前のフ ォルダを除きます。
<b>Linux</b>		
ファイル パス	/home/user/Finance/F.log	/home/user/Finance フォルダに置かれている「F.log」という名前 のファイルを除きます。

上記の設定は、明示的にリカバリ対象として選択されたファイルまたはフォルダには適用されません。たとえば、MyFolder というフォルダとこのフォルダの外部にある MyFile.tmp というファイルをバックアップ対象に選択して、すべての .tmp ファイルをスキップするように選択したとします。この場合、リカバリ処理中に MyFolder フォルダ内のすべての .tmp ファイルはスキップされますが、MyFile.tmp ファイルはスキップされません。

### 5.1.5 復元の実行時期

復元タスクを開始する時期を選択します。

- **[今すぐ]: [データの復元]** ページで **[OK]** をクリックした直後に復元タスクが開始されます。
- **[後で]:** 復元タスクは後で手動で開始されます。タスクをスケジュールする必要がある場合、**[タスクを手動で開始する]** チェックボックスをオフにして、目的の日時を指定します。

### 5.1.6 タスクのログイン情報

タスクを実行するアカウントのログイン情報を指定します。

ログイン情報を指定する手順は、次のとおりです。

1. 次のいずれかを選択します。

- **現在のログイン情報を使用する**

タスクは、タスクを起動するユーザーがログインしたときのログイン情報を使用して実行されます。スケジュールを設定してタスクを実行する場合は、タスクの作成を完了する際に現在のユーザーのパスワードを入力するよう求められます。

- **次のログイン情報を使用する**

タスクは、手動で開始されるか、スケジュールに従って実行されるかにかかわらず、常にユーザーが指定するログイン情報を使用して実行されます。

次の項目を指定します。

- **[ユーザー名]** - Active Directory ユーザー アカウントの名前を入力する場合は、ドメイン名(DOMAIN\ユーザー名またはユーザー名@ドメイン)も指定してください。
- **[パスワード]** - アカウントのパスワード。

2. **[OK]**をクリックします。

Acronis Backup & Recovery 11 のログイン情報の詳細については、「所有者とログイン情報 (21 ページ)」をご参照ください。

ユーザー権限に応じて使用可能になる操作の詳細については、「管理対象のコンピュータ上のユーザー権限」をご参照ください。

## 5.2 Acronis Universal Restore

Acronis Universal Restore は、異なるハードウェアや仮想コンピュータでのオペレーティング システムの復元と起動を支援するアクロニス独自のテクノロジーです。Universal Restore は、ストレージコントローラ、マザーボード、チップセットなどのオペレーティング システムの起動にとって重要なデバイスの相違に対応します。

Universal Restore は、次のような場合に非常に役に立ちます。

1. さまざまなハードウェアで障害が発生したシステムを迅速に復元する場合です。
2. ハードウェアに依存しないオペレーティング システムをクローン作成および配置する場合です。
3. 物理コンピュータから物理コンピュータ、物理コンピュータから仮想コンピュータ、および仮想コンピュータから物理コンピュータに移行する場合です。

### 5.2.1 Universal Restore の入手方法

オンライン ストレージからシステムを復元する場合、Universal Restore をいつでも使用することができます。

Universal Restore は Acronis Backup & Recovery 11 Advanced Server SBS Edition および Virtual Edition に無料で同梱されています。

他の製品エディションの Universal Restore は、別途ご購入ください。Universal Restore には固有のライセンスがあります。

管理対象のコンピュータ上で Universal Restore を有効にするには、次のいずれかの手順を実行します。

- 製品のインストール パッケージから Universal Restore をインストールします(加えて、エージェント for Windows、エージェント for Linux、またはブータブル メディア ビルダもインストールします)。
- エージェントがすでにインストールされていて、管理コンソールをコンピュータに接続できる場合、[ヘルプ] > [ライセンスの変更] をクリックして、プロダクト キー、または Universal Restore のライセンスを取得するライセンス サーバーを指定します。

新しくインストールしたアドオンを起動用の環境で機能させるには、ブータブル メディアを再作成する必要があります。

### 5.2.2 Universal Restore の使用

#### 復元中

選択したディスクまたはボリュームに Windows または Linux オペレーティング システムが存在している場合、ディスクまたはボリュームの復元の設定時に Universal Restore を使用することができます。複数のオペレーティング システムを選択する場合、すべての Windows システム、すべての Linux システム、または Windows システムと Linux システムの両方に Universal Restore を適用できます。

バックアップ内にオペレーティング システムが存在しているかどうかを検出されない場合、オペレーティング システムが存在するわずかな可能性に備えて、Universal Restore を使用することをお勧めします。次のようなケースがあります。

- バックアップが複数のファイルに分割されている場合。
- バックアップが、非重複化された格納域、Acronis Online Backup Storage、FTP/SFTP サーバー、テープ、CD、または DVD に存在している場合。

サポート対象の仮想コンピュータに必要なドライバまたはモジュールが自動的に認識されたために Universal Restore がバックグラウンドで使用される場合があります。次のようなケースがあります。

- 新しい仮想コンピュータへのシステムを復元する場合
- エージェント for ESX(i) またはエージェント for Hyper-V によって任意の仮想コンピュータへシステムを復元する場合

次の場合は Universal Restore を使用できません。

- バックアップが Acronis セキュア ゾーンにある場合
- Acronis Active Restore (178ページ) を使用するよう選択した場合

これは、これらの機能が主に同じコンピュータ上での簡単なデータ リカバリを目的としているためです。

## 復元なし

ブータブル メディアでは、メディアの初期画面で **[Universal Restore の適用]** をクリックすることによって、復元せずに Universal Restore を使用することもできます。Universal Restore が、コンピュータ上にすでに存在しているオペレーティング システムに適用されます。複数のオペレーティング システムが存在する場合、Universal Restore を適用するオペレーティング システムを選択するように求められます。

## Linux における Universal Restore

Universal Restore を Linux オペレーティング システムに対して使用すると、初期 RAM ディスクという一時ファイル システムが更新されます (initrd)。これにより、オペレーティング システムを新しいハードウェアで起動できるようになります。

Universal Restore によって、新しいハードウェアのモジュール (デバイス ドライバを含む) が、初期 RAM ディスクに追加されます。ルールでは、回復するオペレーティング システムの **/lib/modules** ディレクトリに必要なモジュールが検索されます。Universal Restore によって必要なモジュールが検索できない場合、そのモジュールのファイル名がログ (169ページ) に記録されます。

Universal Restore によって、GRUB ブート ローダーの設定が変更される場合があります。たとえば、新しいコンピュータのボリューム レイアウトが元のコンピュータとは異なる場合、システムのブータビリティを確保するために、この変更が必要となる可能性があります。

Universal Restore によって Linux カーネルが変更されることはありません。

## 元の初期 RAM ディスクへの復元

必要に応じて、元の初期 RAM ディスクに復元できます。

初期 RAM ディスクは、コンピュータ上のファイル内に保存されています。初めて初期 RAM ディスクを更新する前に、Universal Restore によって、ディスクのコピーが同じディレクトリに保存され

まず、コピーの名前は、ファイルの名前の後に **\_acronis\_backup.img** という接尾辞が付いたものです。複数回 Universal Restore を実行(たとえば、不足していたドライバを追加した後など)しても、このコピーは上書きされません。

元の初期 RAM ディスクに復元するには、次の手順のいずれかを実行します。

- 適宜、コピーの名前を変更します。たとえば、次のようなコマンドを実行します。  

```
mv initrd-2.6.16.60-0.21-default_acronis_backup.img initrd-2.6.16.60-0.21-default
```
- GRUB ブート ローダ設定 (112ページ)の **initrd** 行で、コピーを指定します。

## 複数のオペレーティング システムに対する Universal Restore の適用

復元中に、すべての Windows、すべての Linux システム、またはその両方に Universal Restore を使用できます。

復元するボリュームの選択に複数の Windows システムを含めると、1 つのリスト内でそれらのシステムのすべてのドライバを指定できます。各ドライバは、対象となるオペレーティング システムにインストールされます。

## 5.3 起動のトラブルシューティング

システムがバックアップ時に起動可能であれば、復元後にも起動できると予期されます。ただし、ボリュームのサイズ、場所、または復元先のドライブを変更する場合は特に、オペレーティング システムが保存して起動に使用する情報が復元する際には古くなっている可能性があります。復元の実行後、Acronis Backup & Recovery 11 によって Windows ローダーが自動的にアップデートされます。他のローダーも修復される場合がありますが、ローダーを再度アクティブ化する必要がある場合もあります。特に Linux のボリュームを復元する場合は、Linux が正しく起動して読み込むことができるように、修正を適用するか、または起動を変更する必要もあります。

次に、ユーザーによる追加の操作を必要とする一般的な状況について示します。

復元したオペレーティング システムを起動できない理由

- **コンピュータの BIOS によって別の HDD から起動するように構成されている**  
解決策: オペレーティング システムが存在する HDD から起動するように BIOS を構成します。
- **システムが異なるハードウェアに復元されたため、新しいハードウェアはバックアップに含まれているほとんどの重要なドライバと互換性がない**  
解決策: ブータブル メディアを使用してコンピュータを起動し、Acronis Universal Restore を適用 (109ページ)して適切なドライバとモジュールをインストールします。
- **起動できないダイナミック ボリュームに Windows が復元された**  
解決策: ベーシック ボリューム、シンプル ボリューム、またはミラー ボリュームに Windows を復元します。
- **MBR が存在しないディスクにシステム ボリュームが復元された**  
MBR が存在しないディスクにシステム ボリュームを復元するように構成する場合は、システム ボリュームと共に MBR を復元するかどうかを確認するメッセージが表示されます。システムを起動可能にしない場合にのみ、復元しないことを選択してください。

**解決策:** 対応するディスクの MBR と共にボリュームを再度復元します。

■ **システムは Acronis OS Selector を使用している**

マスタ ブート レコード(MBR)はシステムの復元中に変更できるため、MBR を使用する Acronis OS Selector が動作しなくなる場合があります。この場合は、次のようにして Acronis OS Selector を再度アクティブ化します。

**解決策:** Acronis Disk Director のブータブル メディアからコンピュータを起動し、メニューで [ツール] → [OS Selector のアクティブ化] を選択します。

■ **システムは GRUB(GRand Unified Bootloader)を使用して、(raw、つまりセクタごとではなく)通常のバックアップから復元された**

GRUB ロードーの一部が、ディスクまたはボリュームの先頭のいくつかのセクタに存在しています。残りは、いずれかのボリュームのファイル システム上に存在しています。システムの起動は、GRUB がディスクの先頭のいくつかのセクタ、および直接アクセス可能なファイル システムに存在する場合にのみ自動的に復元できます。それ以外の場合は、ユーザーは手動でブート ロードーを再度アクティブ化する必要があります。

**解決策:** ブート ロードーを再度アクティブ化します。構成ファイルの修正が必要になる場合があります。

■ **システムは LILO(Linux Loader)を使用して、(raw、つまりセクタごとではなく)通常のバックアップから復元された**

LILO には、絶対セクタ番号に対する一連の参照が含まれているため、ソース ディスクと同じ絶対セクタ番号を持っているセクタにすべてのデータが復元される場合を除いて、自動的に修復することはできません。

**解決策:** ブート ロードーを再度アクティブ化します。前の項目で説明した理由により、ロードー構成ファイルの修正が必要になる場合があります。

■ **システム ロードーが誤ったボリュームをポイントする**

この現象は、システム ボリュームまたはブート ボリュームが元の場所に復元されない場合に発生する可能性があります。

**解決策:** boot.ini または bootbcd ファイルを変更すると、Windows ロードーに対するこの問題を修正できます。Acronis Backup & Recovery 11 では、この処理を自動的に実行するため、問題はほとんど発生しません。

GRUB ロードーと LILO ロードーに関しては、GRUB 構成ファイルを修正する必要があります。Linux ルート パーティションの数が変更された場合は、SWAP ボリュームに正しくアクセスできるように、/etc/fstab を変更することもお勧めします。

■ **Linux が LVM ボリュームのバックアップからベーシック MBR ディスクに復元された**

そのようなシステムのカーネルは、LVM ボリュームにルート ファイル システムをマウントしようとするため、システムを起動できません。

**解決策:** LVM を使用しないようにロードーの構成と /etc/fstab を変更し、ブート ロードーを再度アクティブ化します。

### 5.3.1 GRUB を再度アクティブ化して構成を変更する方法

一般に、適切な手順についてはブート ロードーのマニュアルを参照する必要があります。また、対応する Knowledge Base の記事を Acronis Web サイトで参照することもできます。

システム ディスク(ボリューム)を同じハードウェアに復元した場合に GRUB を再度アクティブ化する方法の例を次に示します。

1. Linux を起動するかブータブル メディアから起動し、[Ctrl]+[Alt]+[F2]を押します。
2. 復元するシステムをマウントします。

```
mkdir /mnt/system/  
mount -t ext3 /dev/sda2 /mnt/system/ # root partition  
mount -t ext3 /dev/sda1 /mnt/system/boot/ # boot partition
```

3. **proc** および **dev** ファイル システムを、復元するシステムにマウントします。

```
mount -t proc none /mnt/system/proc/  
mount -o bind /dev/ /mnt/system/dev/
```

4. 次のいずれかのコマンドを実行して、GRUB メニュー ファイルを保存します。

```
cp /mnt/system/boot/grub/menu.lst /mnt/system/boot/grub/menu.lst.backup
```

または

```
cp /mnt/system/boot/grub/grub.conf /mnt/system/boot/grub/grub.conf.backup
```

5. **/mnt/system/boot/grub/menu.lst** ファイル(Debian、Ubuntu、および SUSE Linux ディストリビューション)または **/mnt/system/boot/grub/grub.conf** ファイル(Fedora および Red Hat Enterprise Linux ディストリビューション)を編集します。たとえば、次のように編集します。

```
vi /mnt/system/boot/grub/menu.lst
```

6. **menu.lst** ファイル(または **grub.conf**)内で、復元するシステムに対応するメニュー項目を見つけます。このメニュー項目は次のような形式になっています。

```
title Red Hat Enterprise Linux Server (2.6.24.4)  
  root (hd0,0)  
  kernel /vmlinuz-2.6.24.4 ro root=/dev/sda2 rhgb quiet  
  initrd /initrd-2.6.24.4.img
```

これらの行は **title**、**root**、**kernel**、および **initrd** で始まっており、それぞれ次の内容を表します。

- メニュー項目のタイトル。
  - Linux カーネルが置かれているデバイス。通常、これはブート パーティションまたはルートパーティションで、この例では **root (hd0,0)** です。
  - デバイス上にあるカーネルとルート パーティションのパス。この例では、カーネルのパスは **/vmlinuz-2.6.24.4** で、ルート パーティションは **/dev/sda2** です。ルート パーティションは、ラベル(**root=LABEL=** など)、識別子(**root=UUID=some\_uuid** の形式)、またはデバイス名(**root=/dev/sda2** など)で指定できます。
  - デバイスの **initrd** サービスのパス。
7. ファイル **/mnt/system/etc/fstab** を編集して、復元の結果として変更されたデバイスの名前を修正します。
  8. 次のいずれかのコマンドを実行して、GRUB シェルを開始します。

```
chroot /mnt/system/ /sbin/grub
```

または

```
chroot /mnt/system/ /usr/sbin/grub
```

9. GRUB が置かれているディスクを指定します。通常は、ブート パーティションまたはルートパーティションです。

```
root (hd0,0)
```

10. GRUB をインストールします。たとえば、GRUB を最初のディスクのマスタ ブート レコード (MBR)にインストールするには、次のコマンドを実行します。

```
setup (hd0)
```

11. GRUB シェルを終了します。

```
quit
```

12. マウントしたファイル システムのマウントを解除し、再起動します。

```
umount /mnt/system/dev/  
umount /mnt/system/proc/  
umount /mnt/system/boot/  
umount /mnt/system/  
reboot
```

13. ツールと、使用している Linux ディストリビューションのドキュメントを使用して、ブート ロードーを再設定します。たとえば、Debian および Ubuntu では、**/boot/grub/menu.lst** ファイル内のコメント行を編集して、**update-grub** スクリプトを実行する必要がある場合があります。これを行わないと、変更は有効になりません。

## 5.4 デフォルトの復元オプション

各 Acronis エージェントには、それぞれデフォルトの復元オプションがあります。エージェントがインストールされると、デフォルトのオプションは、ドキュメントで**デフォルトの設定**と呼ばれる、あらかじめ定義された値が割り当てられます。復元タスクを作成する場合は、デフォルトのオプションを使用するか、このタスクのみで固有なカスタムの値でデフォルトのオプションを上書きできます。

あらかじめ定義された値を変更して、デフォルトのオプション自体をカスタマイズすることもできます。新しい値は、後でこのコンピュータで作成するすべての復元タスクに対してデフォルトで使用されます。

デフォルトの復元オプションを表示して変更するには、コンソールを管理対象のコンピュータに接続し、トップ メニューから **[オプション] > [デフォルトのバックアップと復元のオプション] > [デフォルトの復元オプション]** を選択します。

### 使用可能な復元オプション

使用可能な復元オプションのセットは次の項目によって異なります。

- エージェントが動作する環境(Linux、ブータブル メディア)
- 復元するデータの種類(ディスク、ファイル)
- ディスク バックアップから復元されるオペレーティング システム

次の表は、使用可能な復元オプションを示しています。

	エージェント for Linux		ブータブル メディア (Linux ベースまたは PE ベース)	
	ディスクの復元	ファイルの復元 (ディスク バックアップからの復元も含む)	ディスクの復元	ファイルの復元 (ディスク バックアップからの復元も含む)
その他の設定 (115ページ):				

	エージェント for Linux		ブータブル メディア (Linux ベースまたは PE ベース)	
	ディスクの復元	ファイルの復元 (ディスク バックアップからの復元も含む)	ディスクの復元	ファイルの復元 (ディスク バックアップからの復元も含む)
復元前にバックアップ アーカイブをベリファイする	+	+	+	+
FTP をアクティブ モードで使用する	+	+	+	+
復元処理が必要な場合、自動的にコンピュータを再起動する	+	+	-	-
復元処理の終了後にコンピュータを自動的に再起動する	-	-	+	+
復元後にファイル システムをチェックする	+	-	+	-
復元したファイルに現在の日時を設定する	-	+	-	+
エラーの処理 (116ページ):				
処理中にメッセージやダイアログを表示しない(サイレント モード)	+	+	+	+
エラーが発生した場合は再試行する	+	+	+	+
イベント トレース:				
SNMP (117ページ)	+	+	-	-
ファイル レベルのセキュリティ (118ページ):				
セキュリティ設定付きでファイルを復元する	-	+	-	+
通知:				
電子メール (118ページ)	+	+	-	-
ポップアップ ウィンドウ (119ページ)	+	+	-	-
復元処理の前後に実行するコマンド (120ページ)	+	+	PE のみ	PE のみ
復元の優先度 (121ページ)	+	+	-	-

### 5.4.1 その他の設定

次のチェックボックスをオンまたはオフにして、復元処理のその他の設定を指定します。

#### 復元前にバックアップ アーカイブをベリファイする

デフォルトの設定は **[無効]** です。

このオプションでは、データをバックアップから復元する前にバックアップが破損していないことをベリファイするかどうかを定義します。

### **FTP をアクティブ モードで使用する**

デフォルトの設定は、[無効] です。

FTP サーバーがアクティブ モードをサポートしていて、ファイル転送にアクティブ モードを使用する場合は、このオプションを有効にします。

### **復元処理で必要な場合、自動的にコンピュータを再起動する**

このオプションは、オペレーティング システムを実行するコンピュータ上で復元を実行する場合に有効です。

デフォルトの設定は [無効] です。

このオプションでは、復元が必要な場合に、自動的にコンピュータを再起動するかどうかを定義します。これは、復元するボリュームがオペレーティング システムによってロックされている場合などが該当します。

### **復元処理の終了後にコンピュータを自動的に再起動する**

このオプションは、ブータブル メディアから起動した場合に使用できます。

デフォルトの設定は [無効] です。

このオプションによって、ユーザーによる操作なしに復元されたオペレーティング システムでコンピュータを再起動できます。

### **復元後にファイル システムをチェックする**

このオプションは、ディスクまたはボリュームを復元する場合にのみ有効です。

ブータブル メディアから起動した場合、このオプションは NTFS ファイル システムに対しては使用できません。

デフォルトの設定は [無効] です。

このオプションでは、ディスクまたはボリュームを復元した後に、ファイル システムの整合性を確認するかどうかを定義します。

### **復元したファイルに現在の日時を設定する**

このオプションは、ファイルを復元する場合にのみ有効です。

デフォルトの設定は [有効] です。

このオプションでは、ファイルの日付/時刻をアーカイブから復元するか、現在の日付/時刻を割り当てるかを定義します。

## **5.4.2 エラー処理**

これらのオプションは、Windows と Linux オペレーティング システム、およびブータブル メディアで有効です。

これらのオプションによって、復元中に発生する可能性があるエラーを処理する方法を指定できます。

### 処理中にメッセージやダイアログを表示しない(サイレント モード)

デフォルトの設定は、[無効] です。

サイレント モードをオンにすると、ユーザーによる操作を必要とする状況が可能な限り自動的に処理されます。ユーザーによる操作なしに処理を続行できない場合、その処理は失敗します。処理の詳細(エラーがある場合は、それも含む)は、処理のログに記載されます。

### エラーが発生した場合は再試行する

デフォルトの設定は、[有効] です。試行回数は 30 回、試行間隔は 30 秒です。

復元可能なエラーが発生した場合、失敗した処理が再試行されます。試行間隔および試行回数を設定できます。試行は、処理が成功するか、または指定した回数の試行が行われると停止します。

たとえば、ネットワーク上の場所が使用できない場合、30 秒ごとに 5 回までその場所への接続が試行されます。試行は、接続が再開されるか、または指定された回数の試行が行われると停止します。

## 5.4.3 イベントトレース

管理対象のコンピュータで実行される復元処理のイベントを、指定した SNMP マネージャに送信できます。

### SNMP 通知

このオプションは、Windows および Linux オペレーティング システムの両方で有効です。

このオプションは、ブータブル メディアから起動した場合には使用できません。

このオプションでは、管理対象のコンピュータで動作するエージェントが、指定した簡易ネットワーク管理プロトコル(SNMP)マネージャに復元処理のイベントを送信する必要があるかどうかを定義します。送信するイベントの種類を選択できます。

Acronis Backup & Recovery 11 での SNMP の使用の詳細については、「SNMP のサポート (31ページ)」を参照してください。

デフォルトの設定 - [コンピュータ オプションの設定を使用する]

復元処理のイベントを SNMP マネージャに送信するかどうかを選択する手順は、次のとおりです。

次のいずれかを選択します。

- [コンピュータ オプションの設定を使用する] - コンピュータ オプションで指定された設定を使用します。詳細については、「コンピュータ オプション」をご参照ください。
- [復元処理イベントに対して個別に SNMP 通知を送信する] - 指定した SNMP マネージャに復元処理のイベントを送信します。
  - [送信するイベントの種類] - [すべてのイベント]、[エラーと警告]、または[エラーのみ]のいずれかから送信するイベントの種類を選択します。

- **[サーバー名/IP]** - メッセージの送信先となる SNMP 管理アプリケーションを実行するホストの名前または IP アドレスを入力します。
- **[コミュニティ]** - SNMP 管理アプリケーションを実行するホストと送信元コンピュータの両方が所属する SNMP コミュニティの名前を入力します。一般的なコミュニティは "public" です。

**[テスト メッセージを送信する]**をクリックし、設定が正しいかどうかを確認します。

**[SNMP 通知を送信しない]** - 復元処理イベントの SNMP マネージャへの送信を無効にします。

#### 5.4.4 ファイル レベルのセキュリティ

このオプションは、Windows ファイルのファイル レベルのバックアップからの復元のみで有効です。

このオプションでは、ファイルに対する NTFS のアクセス許可をファイルと共に復元するかどうかを定義します。

デフォルトの設定 - **[セキュリティ設定付きでファイルを復元する]**

ファイルに対する NTFS アクセス許可がバックアップ中に保持されていた場合、アクセス許可を復元するか、ファイルを復元するフォルダから NTFS アクセス許可を継承するかを選択できます。

#### 5.4.5 通知

Acronis Backup & Recovery 11 には、電子メールまたはメッセージング サービスによって復元の完了をユーザーに通知する機能があります。

##### 電子メール

このオプションは、Windows および Linux オペレーティング システムで有効です。

このオプションは、ブータブル メディアから起動した場合には使用できません。

このオプションによって、タスクの完全なログと共に、復元タスクの正常終了、失敗、またはユーザーによる操作が必要な場合について通知する電子メールを受け取ることができます。

デフォルトの設定は、**[無効]** です。

**電子メールによる通知を設定する手順は、次のとおりです。**

1. **[電子メールによる通知を送信する]** チェック ボックスをオンにして、通知を有効にします。
2. **[電子メールによる通知を送信する]** で、次の中から適切なチェック ボックスをオンにします。
  - **[復元が正常に終了したとき]:** 復元タスクが正常終了した場合に通知を送信します。
  - **[復元が失敗したとき]:** 復元処理が失敗した場合に通知を送信します。
  - **[ユーザーによる操作が必要なとき]:** 処理中、ユーザーによる操作が必要である場合に通知を送信します。
3. **[電子メール アドレス]** フィールドに、通知の送信先の電子メール アドレスを入力します。複数のアドレスをセミコロンで区切って入力することもできます。
4. **[件名]** フィールドに、通知の件名を入力するか、デフォルト値のままにします。
5. **[SMTP サーバー]** フィールドに、**SMTP サーバーの名前**を入力します。

6. **[ポート]** フィールドに、SMTP サーバーのポートを設定します。デフォルトでは、ポートは **25** に設定されます。
7. **[ユーザー名]** フィールドにユーザー名を入力します。
8. **[パスワード]** フィールドにパスワードを入力します。
9. **[その他の電子メール パラメータ...]** をクリックして、次に示すその他の電子メール パラメータを設定します。
  - a. **[差出人]**: メッセージの送信元となるユーザーの電子メール アドレスを入力します。このフィールドが空白の場合、差出人アドレスには宛先アドレスが使用されます。
  - b. **[暗号化を使用する]**: メール サーバーへの暗号化された接続を選択できます。SSL 暗号化または TLS 暗号化のいずれかの種類を選択できます。
  - c. 一部のインターネット サービス プロバイダでは、送信が許可される前に受信メール サーバーによる認証が要求されます。その場合は、**[受信メール サーバーへのログオン]** チェック ボックスをオンにして POP サーバーを有効にし、次の設定を行います。
    - **[受信メール サーバー(POP)]**: POP サーバーの名前を入力します。
    - **[ポート]**: POP サーバーのポートを設定します。デフォルトでは、ポートは **110** に設定されます。
    - **[ユーザー名]**: ユーザー名を入力します。
    - **[パスワード]**: パスワードを入力します。
  - d. **[OK]** をクリックします。
10. **[テスト メールを送信中]** をクリックし、設定が正しいかどうかを確認します。

### メッセンジャー サービス(WinPopup)

このオプションは、Windows および Linux オペレーティング システムで有効です。

このオプションは、ブータブル メディアから起動した場合には使用できません。

このオプションによって、復元タスクの正常終了、失敗、またはユーザーによる操作が必要な場合について、ポップアップウィンドウによる通知を受け取ることができます。

デフォルトの設定は、**[無効]** です。

ポップアップウィンドウによる通知を設定する前に、タスクを実行するコンピュータとメッセージを受け取るコンピュータの両方で Messenger サービスが開始されていることを確認します。

Microsoft Windows Server 2003 ファミリーでは、Messenger サービスはデフォルトでは開始されません。サービスのスタートアップの種類を**[自動]**に変更してからサービスを開始します。

**ポップアップウィンドウによる通知を設定する手順は、次のとおりです。**

1. **[ポップアップウィンドウによる通知を送信する]**チェックボックスをオンにします。
2. **[コンピュータ名]**フィールドに、通知の送信先となるコンピュータの名前を入力します。複数の名前はサポートされていません。
3. **[送信する通知]**で、次の中から適切なチェックボックスをオンにします。
  - **[復元が正常に終了したとき]**: 復元タスクが正常終了した場合に通知を送信します。
  - **[復元が失敗したとき]**: 復元処理が失敗した場合に通知を送信します。
  - **[ユーザーによる操作が必要なとき]** チェックボックス: バックアップの実行時に、ユーザーによる操作が必要になった場合に通知を送信します。

4. [テスト メッセージを送信する] をクリックし、設定が正しいかどうかを確認します。

## 5.4.6 処理の前後に実行するコマンド

このオプションは、Windows と Linux オペレーティング システム、および PE ベースのブータブル メディアで有効です。

このオプションによって、データ復元の前後に自動的に実行されるコマンドを定義できます。

処理の前後に実行するコマンドを使用する方法の例:

- **Checkdisk** コマンドを起動し、復元の開始前または終了後に論理ファイル システムのエラー、物理エラー、または不良セクタを見つけて修復します。

「pause」などのユーザーの入力を必要とするような対話型のコマンドはサポートされません。

再起動を伴う復元の場合、復元後に実行するコマンドは実行されません。

処理の前後に実行するコマンドを指定する手順は、次のとおりです。

1. 次のオプションをオンにして、処理の前後に実行するコマンドの実行を有効にします。
  - [復元の前に実行する]
  - [復元後に実行する]
2. 次のいずれかを実行します。
  - [編集]をクリックして、新しいコマンドまたはバッチ ファイルを指定する
  - 既存のコマンドまたはバッチ ファイルをドロップ ダウン リストから選択する
3. [OK]をクリックします。

### 復元前に実行するコマンド

復元処理を開始する前に実行するコマンド/バッチ ファイルを指定する手順は、次のとおりです。

1. [コマンド]フィールドにコマンドを入力するか、またはバッチ ファイルを選択します。「pause」などのユーザーの入力を必要とするような対話型のコマンドはサポートされません。
2. [作業ディレクトリ]フィールドで、コマンド/バッチ ファイルを実行するディレクトリのパスを指定します。
3. [引数]フィールドで、必要に応じて、コマンドを実行する際の引数を指定します。
4. 処理内容に応じて、次の表で説明するオプションから、適切なオプションを選択します。
5. [コマンドのテスト]をクリックして、コマンドが正しいかどうかを確認します。

チェック ボックス	選択内容			
[コマンドの実行に失敗した場合、復元タスクを失敗させる]*	オン	オフ	オン	オフ
[コマンドの実行が完了するまで復元を行わない]	オン	オン	オフ	オフ
<b>結果</b>				
	デフォルト	コマンド実行の失敗また	なし	コマンドの実行結果に

	コマンドが正常に実行された後にのみ復元を実行します。コマンドの実行に失敗した場合、タスクを中止します。	は成功にかかわらず、コマンドの実行後に復元を実行します。	かかわらず、コマンドの実行と並行して復元を実行します。
--	---	------------------------------	-----------------------------

\* 終了コードがゼロでない場合、コマンドは失敗したと認識されます。

## 復元後に実行するコマンド

復元の完了後に実行するコマンド/実行可能ファイルを指定する手順は、次のとおりです。

1. **[コマンド]** フィールドにコマンドを入力するか、またはバッチ ファイルを参照します。
2. **[作業ディレクトリ]** フィールドで、コマンド/バッチ ファイルを実行するディレクトリのパスを指定します。
3. **[引数]** フィールドで、必要に応じて、コマンドを実行する際の引数を指定します。
4. コマンドが正常に実行されることが必須である場合、**[コマンドの実行に失敗した場合、復元タスクを失敗させる]** チェック ボックスをオンにします。終了コードがゼロでない場合、コマンドは失敗したと認識されます。コマンドの実行に失敗した場合、タスクの実行結果は **[失敗]** として設定されます。

このチェック ボックスがオフになっていると、コマンドの実行結果はタスクの実行の失敗または成功に影響しません。コマンドの実行結果は、**[ログ]** ビューを確認することによって追跡できます。

5. コマンドが正しいかどうかを確認するには、**[コマンドのテスト]** をクリックします。

---

再起動を伴う復元の場合、復元後に実行するコマンドは実行されません。

---

## 5.4.7 復元の優先度

このオプションは、Windows および Linux オペレーティング システムの両方で有効です。

このオプションは、ブータブル メディアから起動した場合には使用できません。

システムで実行されるプロセスの優先度によって、そのプロセスに割り当てられる CPU やシステムのリソース量が決まります。復元処理の優先度を下げると、他のアプリケーションのためのリソースを増やすことができます。復元の優先度を上げると、復元を実行するアプリケーションに割り当てられるリソースを増やすようにオペレーティング システムに要求することによって、復元の処理速度が上がる場合があります。ただし、その効果は、全体的な CPU の使用率およびディスク入出力速度、ネットワーク トラフィックなどのその他の要素に依存します。

デフォルトの設定 - **[通常]**

復元処理の優先度を指定する手順は、次のとおりです。

次のいずれかを選択します。

- **[低]** - より多くのリソースをコンピュータ上で動作する他のプロセスのために残し、復元処理が占有するリソースを最小限にします。
- **[通常]** - 他のプロセスと同等のリソースを割り当て、標準の速度で復元処理を実行します。
- **[高]** - 他のプロセスからリソースを取り上げることによって、復元の処理速度を最大にします。

## 6 バックアップ データの保存

### 6.1 格納域

格納域とは、バックアップ アーカイブを保存する場所です。格納域は、簡単に使用したり管理したりできるように、アーカイブのメタデータに関連付けられています。このメタデータを参照することにより、格納域に保存されたアーカイブとバックアップの処理をすばやく簡単に行うことができます。

格納域は、ローカル ドライブ、ネットワーク上のドライブ、取り外し可能なメディア、または Acronis Backup & Recovery 11 ストレージ ノードに接続したテープ デバイス上に構成できます。

格納域のサイズまたは格納域内のバックアップの数を制限する設定はありません。クリーンアップを使用して各アーカイブのサイズを制限できますが、格納域に保存するアーカイブの合計サイズはストレージの容量にのみ制限されます。

#### 格納域を作成する理由

バックアップ アーカイブの保存先ごとに格納域を作成することをお勧めします。このことによって、次のように作業が簡単になります。

#### 格納域への迅速なアクセス

アーカイブの保存先となるフォルダのパスを記憶しておく必要はありません。格納域の一覧を使用すると、バックアップ計画またはタスクの作成時にアーカイブまたはアーカイブの保存先を選択する必要がある場合に、フォルダ ツリーをたどることなくすばやくアクセスできます。

#### 簡単なアーカイブ管理

格納域は、**[ナビゲーション]** ペインからのアクセスに使用できます。格納域を選択した後で、そこに保存されたアーカイブを参照して、次のアーカイブ管理操作を実行できます。

- 各アーカイブに含まれているバックアップの一覧を取得する。
- バックアップからデータを復元する。
- バックアップの内容を調べる。
- 格納域内のすべてのアーカイブまたは個々のアーカイブやバックアップをベリファイする。
- バックアップから物理ディスクにファイルをコピーするために、ボリューム バックアップをマウントする。
- アーカイブおよびアーカイブのバックアップを安全に削除する。

格納域を作成しておくことを強くお勧めしますが、必須ではありません。ショートカットを使用せずに、常に保存先のパスを指定することもできます。

格納域を作成すると、**[ナビゲーション]** ペインの **[格納域]** セクションに格納域名が追加されます。

#### **[格納域]** ビュー

 **[格納域]**(ナビゲーション ペイン上): 格納域ツリーの最上部にある要素です。この項目をクリックすると、集中管理用格納域と個人用格納域が表示されます。格納域を操作するには、**[格納域]** ビューの最上部にあるツールバーを使用します。「個人用格納域での操作 (124ページ)」をご参照ください。

 **個人用格納域:**コンソールが管理対象のコンピュータに接続されている場合に有効です。格納域の詳細ビュー (123ページ)を開き、格納域に保存されているアーカイブ (145ページ)およびバックアップ (145ページ)を操作するには、格納域ツリーでいずれかの格納域をクリックします。

## 6.1.1 格納域の使用

ここでは、選択されている格納域の主要な GUI 要素について簡単に説明し、それらの使用方法を示します。

### 格納域に関する情報について

選択されている格納域に関する情報は、選択されている格納域の最上部にあるペインに表示されています。積み重ね棒グラフによって、格納域の負荷を見積もることができます。格納域の負荷は、格納域の空き領域と使用領域の比率です(格納域がテープ ライブラリにある場合には使用できません)。空き領域は、格納域が配置されているストレージ デバイス上の領域です。たとえば、格納域がハード ディスク上に配置されている場合、それぞれのボリュームの空き領域が格納域の空き領域になります。使用領域は、バックアップ アーカイブとそのメタデータ(格納域に配置されている場合)の合計サイズです。

その格納域に保存されているアーカイブおよびバックアップの総計、およびその格納域のフル パスを確認できます。

管理対象の格納域に関してのみ、その格納域を管理するストレージ ノードの名前、暗号化の状態、および重複除外の状態を確認することが可能です。

### 格納域の内容の参照およびデータの選択

格納域の内容を参照し、復元するデータを選択するには、[データ ビュー] タブまたは [アーカイブ ビュー] タブを使用します。

#### データ ビュー

[データ ビュー] タブでは、バージョン(バックアップ日時)ごとにデータを参照および選択できます。[データ ビュー] タブは、データ カタログ (98ページ)と同じ検索機能およびカタログ機能を備えています。

#### アーカイブ ビュー

[アーカイブ ビュー] タブでは、アーカイブごとにバックアップ データが表示されます。格納域に保存されたアーカイブおよびバックアップを操作するには、[アーカイブ ビュー] を使用します。操作に関する詳細については、次をご参照ください。

- 格納域に保存されたアーカイブの操作 (145ページ)。
- バックアップの操作 (145ページ)。
- テーブルの項目のソート、フィルタリング、および設定 (15ページ)。

## 6.1.2 個人用格納域

コンソールを管理対象のコンピュータに直接接続して格納域を作成した場合、この格納域は個人用格納域と呼ばれます。個人用格納域は、管理対象のコンピュータごとに固有です。個人用格納域は、システムにログイン可能なすべてのユーザーに表示されます。個人用格納域にバックアップす

るためのユーザーの権限は、格納域が配置されているフォルダまたはデバイスに対するユーザーのアクセス許可によって決まります。

個人用格納域は、ネットワーク共有、FTP サーバー、取り外し可能なメディア、リムーバブル メディア、Acronis Online Backup Storage、テープ デバイス、またはコンピュータのローカル ハード ディスク ドライブに構成することができます。Acronis セキュア ゾーンは、システムにログイン可能なすべてのユーザーが利用できる個人用格納域と見なされます。個人用格納域は、上記の場所に対してバックアップが実行されると、自動的に作成されます。

個人用格納域は、ローカルのバックアップ計画またはローカル タスクで使用できます。集中管理用バックアップ計画では、Acronis セキュア ゾーン以外の個人用格納域を使用することはできません。

## 個人用格納域の共有

複数のコンピュータで、同じ共有フォルダなどの物理的に同じ場所を参照することができます。しかし、各コンピュータには **[格納域]** ツリーに固有のショートカットがあります。共有フォルダにバックアップするユーザーは、このフォルダに対するアクセス許可に応じて、他のユーザーのアーカイブを表示したり管理したりすることができます。アーカイブを簡単に識別できるように、**[個人用格納域]** ビューの **[所有者]** 列に、各アーカイブの所有者が表示されます。所有者の概念の詳細については、「所有者とログイン情報 (21ページ)」をご参照ください。

## メタデータ

**.meta** フォルダは、バックアップ中にすべての個人用格納域に作成されます。このフォルダには、アーカイブの所有者やコンピュータ名など、格納域に保存されているアーカイブとバックアップに関する追加情報が含まれています。**.meta** フォルダを誤って削除しても、次回格納域にアクセスすると自動的に再作成されます。ただし、所有者名やコンピュータ名などの一部の情報は失われる場合があります。

## 個人用格納域での操作

### アクションにアクセスするには

1. コンソールを管理サーバーに接続します。
2. **[ナビゲーション]** ペインで **[格納域]** > **[個人用]** をクリックします。

ここで説明するすべての操作は、格納域ツールバーで対応するボタンをクリックすると実行されます。これらの操作は、メイン メニューの **[[格納域名] アクション]** 項目から実行することも可能です。

個人用格納域を使用して操作を実行するためのガイドラインを次に示します。

操作目的	操作手順
個人用格納域を作成する	 <b>[作成]</b> をクリックします。 個人用格納域の作成手順については、「個人用格納域の作成 (125ページ)」で詳しく説明しています。
格納域を編集する	1. 格納域を選択します。 2.  <b>[編集]</b> をクリックします。 <b>[個人用格納域の編集]</b> ページでは、格納域の名前、および <b>[コメント]</b> フィールドの内容を編集することができます。

格納域にアクセスするためのユーザー アカウントを変更する	 <b>[ユーザーの変更]</b> をクリックします。 表示されたダイアログ ボックスで、格納域にアクセスするために必要なログイン情報を入力します。
Acronis セキュア ゾーンを作成する	 <b>[Acronis セキュア ゾーンの作成]</b> をクリックします。 Acronis セキュア ゾーンの作成手順については、「Acronis セキュア ゾーンの作成 (127ページ)」で詳しく説明しています。
格納域の内容を参照する	 <b>[参照]</b> をクリックします。 表示された [参照] ウィンドウで、選択した格納域の内容を確認します。
格納域をベリファイする	 <b>[ベリファイ]</b> をクリックします。 この格納域がソースとして既に選択されている [ベリファイ] (131ページ) ページが表示されます。格納域のベリファイでは、この格納域に保存されているすべてのアーカイブが確認されます。
格納域を削除する	 <b>[削除]</b> をクリックします。 削除操作では、フォルダのショートカットだけが <b>[格納域]</b> ビューから削除されます。フォルダ自体はそのまま残されます。フォルダに含まれているアーカイブを保持するか削除するかを選択できます。
格納域のテーブル情報を更新する	 <b>[更新]</b> をクリックします。 格納域の内容の確認中に、アーカイブの格納域への追加、削除、変更を行うことができます。 <b>[更新]</b> をクリックして、格納域の情報を最新の変更内容に更新します。

## 個人用格納域の作成

### 個人用格納域を作成するには

1. **[名前]** フィールドに、作成する格納域の名前を入力します。
2. (オプション)**[コメント]** フィールドに、格納域の説明を追加します。
3. **[パス]** をクリックして、格納域として使用されるフォルダのパスを指定します。個人用格納域は、ネットワーク共有、FTP サーバー、取り外し可能なメディア、Acronis Online Backup Storage、テープ デバイス、またはコンピュータのローカル ハード ディスク ドライブに構成することができます。
4. (オプション)格納域をテープ デバイス上に作成する場合、次の手順を実行します。
  - a. **[ドライブ]** をクリックして、格納域にバックアップする際に使用されるテープ ドライブ(複数可)を指定します。デフォルトでは、使用可能なドライブがすべて使用されます。**[次のドライブのみを使用する]** をクリックして、目的のチェックボックスをオンまたはオフにします。
  - b. **[テープ プール]** をクリックして、格納域によって使用されるテープのプールを指定します。デフォルトでは、**Acronis** プールが選択されます。
5. **[OK]** をクリックします。この結果、作成された格納域が格納域ツリーの **[個人用]** グループに表示されます。

## 個人用格納域の結合と移動

### 既存の格納域をある場所から別の場所に移動する必要がある場合の手順

次の手順に従います。

1. ファイルの移動中に、どのバックアップ計画も既存の格納域を使用しないようにするか、指定した計画のスケジュールを一時的に無効にします。詳細は、「バックアップ計画およびタスクでの操作 (158ページ)」を参照してください。
2. サードパーティ製のファイル マネージャを使用して、格納域フォルダとそのすべての内容を新しい場所に手動で移動します。
3. 新しい格納域を作成します。
4. バックアップ計画とタスクを編集して、保存先を新しい格納域に指定変更します。
5. 現在の格納域を削除します。

## 2 つの格納域を結合する方法

2 つの格納域 A と B を使用しているとします。両方の格納域はバックアップ計画で使用されています。格納域 B だけを残し、そこに格納域 A のアーカイブをすべて移動することにします。

この場合、次の手順に従います。

1. ファイルの移動中に、どのバックアップ計画も格納域 A を使用しないようにするか、指定した計画のスケジュールを一時的に無効にします。詳細は、「バックアップ計画およびタスクでの操作 (158ページ)」を参照してください。
2. サードパーティ製のファイル マネージャを使用して、格納域 A フォルダの内容を、格納域 B に手動で移動します。
3. 格納域 A を使用するバックアップ計画とタスクを編集して、保存先を格納域 B に指定変更します。
4. 格納域ツリーで、格納域 B を選択し、アーカイブが表示されているかどうかを確認します。表示されていない場合は、[更新] をクリックします。
5. 格納域 A を削除します。

## 6.2 Acronis セキュア ゾーン

Acronis セキュア ゾーンは、バックアップ アーカイブを管理対象のコンピュータのディスク領域に保存することができる、セキュリティで保護されたパーティションです。このため、バックアップが保存されている同じディスクからそのディスク自体を復元することができます。

ディスクの物理的な障害が発生すると、そこに配置されたゾーンとアーカイブは失われます。このため、Acronis セキュア ゾーンを唯一のバックアップの保存場所にはしないでください。エンタープライズ環境では、通常の場合が一時的に利用できない場合や、接続チャネルが低速または混雑している状態のときに、バックアップに使用する中間の場所として Acronis セキュア ゾーンを使用できます。

### 利点

Acronis セキュア ゾーン:

- バックアップが置かれているディスク自体からディスクを復元することができます。
- ソフトウェアの誤動作、ウィルス攻撃、オペレータによるエラーからデータ保護するためのコスト効率のよい便利な方法です。
- 内部のアーカイブ ストレージなので、データをバックアップまたは復元するための別のメディアやネットワーク接続が不要になります。このことは、モバイル ユーザーにとって特に便利です。
- バックアップのコピー (70ページ)の使用時に主要バックアップ先として利用できます。

## 制限

- Acronis セキュア ゾーンは、ダイナミック ディスク上に構成できません。

### 6.2.1 Acronis セキュア ゾーンの作成

オペレーティング システムの実行中、またはブータブル メディアから起動して、Acronis セキュア ゾーンを作成することができます。

Acronis セキュア ゾーンを作成する手順は、次のとおりです。

#### 場所とサイズ

ディスク (127ページ)

ゾーンを作成するハード ディスク(複数ある場合)を選択します。Acronis セキュア ゾーンは、未割り当て領域(使用可能な場合)またはボリュームの空き領域を使用して作成されます。

容量 (128ページ)

ゾーンの正確なサイズを指定します。現在アクティブなオペレーティング システムが含まれるボリュームなどのロックされたボリュームを移動またはサイズ変更するには、再起動する必要があります。

#### セキュリティ

パスワード (128ページ)

(オプション)パスワードを使用して Acronis セキュア ゾーンを権限のないアクセスから保護します。セキュア ゾーンに関連する操作を実行すると、パスワードを求めるメッセージが表示されます。

必要な設定を行ったあとで、[OK] をクリックします。[結果の確認] (128ページ) ウィンドウで想定されるレイアウトが表示されたら、[OK] をクリックしてセキュア ゾーンを作成を開始します。

#### Acronis セキュア ゾーン ディスク

Acronis セキュア ゾーンは、任意の固定ハード ディスク ドライブに配置することができます。Acronis セキュア ゾーンは、常にハード ディスクの末尾に作成されます。1 台のコンピュータに Acronis セキュア ゾーンは 1 つしか作成できません。Acronis セキュア ゾーンは、未割り当て領域(使用可能な場合)またはボリュームの空き領域を使用して作成されます。

---

Acronis セキュア ゾーンは、ダイナミック ディスク上に構成できません。

#### Acronis セキュア ゾーンの領域を割り当てるには

1. ゾーンを作成するハード ディスク(複数ある場合)を選択します。最初に列挙されたディスクの全ボリュームから、未割り当ての領域と空き領域がデフォルトで選択されます。Acronis セキュア ゾーンで使用可能な領域の合計が表示されます。
2. より多くの領域をゾーンに割り当てる必要がある場合は、空き領域を使用できるボリュームを選択することができます。選択内容に応じて、Acronis セキュア ゾーンで使用可能な領域の合計がもう一度表示されます。**[Acronis セキュア ゾーンのサイズ]** (128ページ) ウィンドウで正確なゾーンのサイズを設定できます。
3. **[OK]** をクリックします。

## Acronis セキュア ゾーンのサイズ

Acronis セキュア ゾーンのサイズを入力するか、スライダをドラッグしてサイズを選択します。ハード ディスクにもよりますが、最小サイズは約 50MB になります。最大サイズは、ハード ディスクの未割り当て領域と、前の手順で選択したすべてのボリュームの空き領域の合計に等しくなります。

ブート ボリュームまたはシステム ボリュームの領域を使用する必要がある場合は、次の点に注意してください。

- システムの起動元のボリュームを移動またはサイズ変更するには、再起動する必要があります。
- システム ボリュームの空き領域をすべて使用すると、オペレーティング システムの動作が不安定になり、起動できなくなる場合もあります。ブート ボリュームまたはシステム ボリュームを選択する場合は、ゾーンに最大サイズを設定しないでください。

## Acronis セキュア ゾーンのパスワード

パスワードを設定すると、Acronis セキュア ゾーンを権限のないアクセスから保護できます。データのバックアップや復元、アーカイブのベリファイ、ゾーンのサイズ変更や削除などの、ゾーンやゾーン中のアーカイブに関連するすべての操作でパスワードが要求されます。

パスワードを設定する手順は、次のとおりです。

1. [パスワードを使用する]を選択します。
2. [パスワードの入力]フィールドに新しいパスワードを入力します。
3. [パスワードの確認入力]フィールドにパスワードを再入力します。
4. [OK]をクリックします。

パスワードを無効にする手順は、次のとおりです。

1. [使用しない]を選択します。
2. [OK]をクリックします。

## 結果の確認

選択した設定に従って、[結果の確認]ウィンドウに予定されるパーティションのレイアウトが表示されます。レイアウトに問題がない場合は、[OK]をクリックし、Acronis セキュア ゾーンの作成を開始します。

## ユーザー設定の処理方法

ここでは、Acronis セキュア ゾーンを作成する際に、複数のボリュームを持つディスクがどのように変換されるかについて説明します。

- Acronis セキュア ゾーンは、常にハード ディスクの末尾に作成されます。ボリュームの最終的なレイアウトを計算する際には、最初に、末尾にある未割り当て領域が使用されます。
- ディスクの末尾に十分な未割り当て領域がないがボリュームの間に未割り当て領域がある場合は、末尾に未割り当て領域を追加するためにボリュームが移動されます。
- すべての未割り当て領域を集めてもまだ十分ではない場合は、選択したボリュームから空き領域が取得され、それに合わせてボリュームのサイズが縮小されます。ロックされているボリュームのサイズを変更すると再起動が必要になります。
- ただし、オペレーティング システムとアプリケーションが、一時ファイルを作成する場合など、動作できるようにするにはボリュームに空き領域が必要です。空き領域がボリュームの合計サイズの 25% 以下になる場合は、ボリュームのサイズは縮小されません。ディスク上のすべての

ボリュームの空き領域が 25% 以下の場合にのみ、比率に応じてボリュームのサイズが引き続き縮小されます。

これらのことから、使用可能なゾーンを最大サイズに設定することはお勧めできません。ボリューム上に空き領域がなくなると、オペレーティング システムやアプリケーションの動作が不安定になり、起動できなくなることがあります。

## 6.2.2 Acronis セキュア ゾーンの管理

Acronis セキュア ゾーンは、個人用格納域 (187ページ)と見なされます。セキュア ゾーンが管理対象のコンピュータに作成されると、**[個人用格納域]** の一覧に常に表示されます。集中管理されたバックアップ計画では Acronis セキュア ゾーンとローカルの計画を使用できます。

格納域で利用できるアーカイブ管理操作は、Acronis セキュア ゾーンでも適用できます。アーカイブ管理操作の詳細は、「アーカイブおよびバックアップの操作 (144ページ)」を参照してください。

### Acronis セキュア ザーンの拡大

Acronis セキュア ザーンを拡大する手順は、次のとおりです。

1. **[Acronis セキュア ザーンの管理]**ページで、**[拡大]**をクリックします。
2. Acronis セキュア ザーンを拡大するために使用する空き領域が含まれるボリュームを選択します。
3. 次の操作によってゾーンの新しいサイズを指定します。
  - スライダをドラッグし、現在の値と最大値の間の任意のサイズを選択します。最大サイズは、ディスクの未割り当て領域と、選択したパーティションの空き領域の合計に等しくなります。
  - **[Acronis セキュア ザーンのサイズ]**フィールドに正確な値を入力します。

ゾーンのサイズの拡大は、プログラムにより次のように行われます。

- 最初に、未割り当て領域が使用されます。必要に応じて、ボリュームは移動されますが、サイズは変更されません。ロックされたボリュームが移動されると再起動が必要になります。
- 十分な未割り当て領域がない場合は、選択したボリュームから空き領域が取得され、それに合わせてボリュームのサイズが縮小されます。ロックされているパーティションのサイズを変更すると再起動が必要になります。

---

システム ボリュームを最小サイズに縮小すると、コンピュータのオペレーティング システムが起動しなくなることがあります。

---

4. **[OK]**をクリックします。

### Acronis セキュア ザーンの縮小

Acronis セキュア ザーンを縮小する手順は、次のとおりです。

1. **[Acronis セキュア ザーンの管理]**ページで、**[縮小]**をクリックします。
2. 縮小したゾーンの空き領域を受け取るボリュームを選択します。
3. 次の操作によってゾーンの新しいサイズを指定します。
  - スライダをドラッグし、現在の値と最小値の間の任意のサイズを選択します。ハード ディスクにもよりますが、最小サイズは約 50MB になります。
  - **[Acronis セキュア ザーンのサイズ]**フィールドに正確な値を入力します。
4. **[OK]**をクリックします。

## Acronis セキュア ゾーンの削除

Acronis セキュア ゾーンを削除する手順は、次のとおりです。

1. **[Acronis セキュア ゾーン管理]** ページで **[削除]** をクリックします。
2. **[Acronis セキュア ゾーン削除]** ウィンドウで、セキュア ゾーンから解放された領域を追加するボリュームを選択し、**[OK]** をクリックします。

複数のボリュームを選択した場合、領域は各パーティションのサイズに比例して分配されます。  
ボリュームを選択しない場合は、空き領域は未割り当てになります。

**[OK]** をクリックすると、Acronis Backup & Recovery 11 によってゾーンの削除が開始されます。

## 7 アーカイブおよびバックアップの操作

### 7.1 アーカイブとバックアップのベリファイ

ベリファイは、バックアップからデータを復元できるかどうかを確認する処理です。

ファイル バックアップのベリファイでは、バックアップからダミーの復元先に対してすべてのファイルの復元を疑似的に実行します。ディスクまたはボリュームのバックアップのベリファイでは、バックアップに保存されているすべてのデータ ブロックのチェックサムを計算します。両方の処理で、リソースを集中的に使用します。

アーカイブのベリファイでは、アーカイブのすべてのバックアップがベリファイされます。格納域(または場所)のベリファイでは、この格納域(場所)に保存されているすべてのアーカイブがベリファイされます。

ベリファイの成功は復元が成功する可能性が高いことを示しますが、復元処理に影響するすべての要因を確認するわけではありません。オペレーティング システムをバックアップする場合、ブータブル環境から予備のハード ディスク ドライブへの復元テストによってのみ復元の成功が保証されます。少なくとも、ブータブル メディアを使用してバックアップを正常にベリファイできることを確認してください。

#### ベリファイ タスクを作成するさまざまな方法

ベリファイ タスクを作成する最も一般的な方法は、**[ベリファイ]** ページを使用する方法です。このページでは、すぐにベリファイすることも、アクセス許可がある任意のバックアップ、アーカイブ、または格納域に対してベリファイ スケジュールを設定することもできます。

アーカイブまたはそのアーカイブに含まれる最新バックアップのベリファイは、バックアップ計画の一部としてスケジュールできます。詳細については、「バックアップ計画の作成 (33ページ)」をご参照ください。

**[ベリファイ]** ページにアクセスするには、最初にベリファイの対象(格納域、アーカイブ、またはバックアップ)を選択します。

- 格納域を選択するには、**[ナビゲーション]** ペインの **[格納域]** アイコンをクリックし、**[格納域]** ビューで格納域ツリーを展開するか、直接 **[ナビゲーション]** ペインで、格納域を選択します。
- アーカイブを選択するには、格納域を選択してから、**[格納域]** ビューで **[アーカイブ ビュー]** タブを選択して、アーカイブの名前をクリックします。
- バックアップを選択するには、**[アーカイブ ビュー]** でアーカイブを選択し、アーカイブ名の左にある展開ボタンをクリックしてアーカイブを展開してから、バックアップをクリックします。

ベリファイの対象を選択したら、コンテキスト メニューから **[ベリファイ]** を選択します。ソースとしてオブジェクトがあらかじめ選択された状態で、**[ベリファイ]** ページが開きます。必要な作業は、ベリファイの実行時期の指定、およびタスクの名前の指定(オプション)のみです。

ベリファイ タスクを作成する手順は、次のとおりです。

#### ベリファイの対象

##### ベリファイ

ベリファイするオブジェクトを選択します。

**アーカイブ** (138ページ): この場合、アーカイブを指定する必要があります。

**バックアップ** (133ページ): 最初にアーカイブを指定します。次に、そのアーカイブ内の目的のバックアップを選択します。

**格納域** (133ページ): アーカイブをベリファイする場所となる格納域(または他の場所)を選択します。

#### ログイン情報 (133ページ)

(オプション)タスク アカウントがソースに対する十分なアクセス権を持っていない場合は、ソースにアクセスするためのログイン情報を指定します。

### ベリファイの実行時期

#### ベリファイの開始 (134ページ)

ベリファイの実行時期と間隔を指定します。

### タスクのパラメータ

#### タスク名

(オプション)ベリファイ タスクの一意の名前を入力します。わかりやすい名前にすると、容易に他のタスクと区別することができます。

#### タスクのログイン情報 (134ページ)

(オプション)ベリファイ タスクは、タスクを作成したユーザーの代わりに実行されます。タスクのログイン情報は、必要に応じて変更することができます。

#### コメント

(オプション)タスクのコメントを入力します。

必要なすべての設定を変更したら、**[OK]** をクリックしてベリファイ タスクを作成します。

## 7.1.1 アーカイブの選択

### アーカイブの選択

1. アーカイブの保存先のフル パスを **[パス]** フィールドに入力するか、ツリー (97ページ) から目的の場所を選択します。

ブータブル メディアを使用して起動したコンピュータで実行する場合:

- 管理対象の格納域を表示するには、以下の文字列を **[パス]** フィールドに入力します。  
**bsp://node\_address/vault\_name/**
- 管理対象外の集中管理格納域にアクセスするには、格納域のフォルダのフル パスを入力します。

2. ツリーの右側にある表からアーカイブを選択します。この表には、選択した場所に含まれているアーカイブの名前が表示されます。

アーカイブの保存場所の内容を確認しているとき、別のユーザーまたはスケジュール設定された処理によって、アーカイブが追加、削除、または変更されることがあります。**[更新]**を使用すると、アーカイブの一覧を更新できます。

3. **[OK]** をクリックします。

## 7.1.2 バックアップの選択

ベリファイするバックアップを指定する手順は、次のとおりです。

1. 上部のペインで、作成日時によってバックアップを選択します。  
正しいバックアップを見つけることができるように、ウィンドウの下部に、選択したバックアップの内容が表示されます。
2. **[OK]**をクリックします。

## 7.1.3 格納域の選択

格納域または場所を選択するには

1. 格納域(場所)のフルパスを **[パス]** フィールドに入力するか、ツリーから目的の場所を選択します。
  - 集中管理用格納域を選択するには、**[集中管理]** グループを展開し、適切な格納域をクリックします。
  - 個人用格納域を選択するには、**[個人用]** グループを展開し、適切な格納域をクリックします。
  - ローカルフォルダ(CD/DVDドライブ、またはローカル接続のテープデバイス)を選択するには、**[ローカルフォルダ]** グループを展開し、目的のフォルダをクリックします。
  - ネットワーク共有を選択するには、**[ネットワークフォルダ]** グループを展開し、目的のネットワークコンピュータを選択して、共有フォルダをクリックします。ネットワーク共有でアクセスログイン情報が必要な場合は、プログラムによって指定が求められます。
  - NFS共有に保存されたフォルダを選択するには、**[NFSドライブ]** グループを展開し、フォルダをクリックします。
  - **FTP** または **SFTP** サーバーを選択するには、対応するグループを展開し、サーバー上の適切なフォルダをクリックします。

---

FTP仕様の原文に記載されているように、FTPサーバーにアクセスするのに必要なログイン情報は、ネットワーク上をテキスト形式で転送されます。このことは、ユーザー名とパスワードが、パケットスニファを使用した盗聴者によって傍受される可能性があることを意味します。

---

正しい格納域を選択できるように、選択した各格納域に格納されたアーカイブの名前がテーブルに表示されます。アーカイブの保存場所の内容を確認しているとき、別のユーザーまたはスケジュール設定された処理によって、アーカイブが追加、削除、または変更されることがあります。**[更新]**を使用すると、アーカイブの一覧を更新できます。

1. **[OK]** をクリックします。

## 7.1.4 ソースのアクセス ログイン情報

バックアップアーカイブの保存先にアクセスするために必要なログイン情報を指定します。

ログイン情報を指定するには

1. 次のいずれかを選択します。
  - **[タスクのログイン情報を使用する]**  
**[タスクのパラメータ]** セクションで指定されたタスクアカウントのログイン情報を使用して、その場所にアクセスします。

- **[次のログイン情報を使用する]**

ユーザーが指定するログイン情報を使用して、その場所にアクセスします。タスク アカウントがその場所に対するアクセス許可を持っていない場合は、このオプションを使用します。ネットワーク共有またはストレージ ノードの格納域に対しては、特別なログイン情報を指定する必要がある場合があります。

次の項目を指定します。

- **[ユーザー名]** - Active Directory ユーザー アカウントの名前を入力する場合は、ドメイン名(DOMAIN\ユーザー名またはユーザー名@ドメイン)も指定してください。
- **[パスワード]** - アカウントのパスワード。

2. **[OK]**をクリックします。

---

FTP 仕様の原文に記載されているように、FTP サーバーにアクセスするのに必要なログイン情報は、ネットワーク上をテキスト形式で転送されます。このことは、ユーザー名とパスワードが、パケット スニファを使用した盗聴者によって傍受される可能性があることを意味します。

---

## 7.1.5 ベリファイの実行時期

ベリファイは多くのリソースを使用する処理なので、管理対象のコンピュータのピーク時以外にベリファイをスケジュールするのが効果的です。これに対し、データに破損がなく正常に復元できるかどうかをすぐに知りたい場合は、タスクの作成後すぐにベリファイを開始することを検討してください。

次のいずれかを選択します。

- **[今すぐ]** - ベリファイ タスクの作成直後、つまり、[ベリファイ]ページで[OK]をクリックした直後にタスクを開始します。
- **[後で]** - 指定した日時に 1 回だけベリファイ タスクを開始します。  
次のように適切なパラメータを指定します。
  - **[日付と時刻]** - タスクを開始する日付と時刻です。
  - **[このタスクは手動で開始されます(タスクをスケジュールしないでください)]** - 後から手動でタスクを開始する場合は、このチェックボックスをオンにします。
- **[スケジュールに従う]** - タスクをスケジュールします。スケジュール パラメータを構成する方法の詳細については、「スケジュールリング (58ページ)」をご参照ください。

## 7.1.6 タスクのログイン情報

タスクを実行するアカウントのログイン情報を指定します。

ログイン情報を指定する手順は、次のとおりです。

1. 次のいずれかを選択します。

- **現在のログイン情報を使用する**

タスクは、タスクを起動するユーザーがログインしたときのログイン情報を使用して実行されます。スケジュールを設定してタスクを実行する場合は、タスクの作成を完了する際に現在のユーザーのパスワードを入力するよう求められます。

- **次のログイン情報を使用する**

タスクは、手動で開始されるか、スケジュールに従って実行されるかにかかわらず、常にユーザーが指定するログイン情報を使用して実行されます。

次の項目を指定します。

- **[ユーザー名]** - Active Directory ユーザー アカウントの名前を入力する場合は、ドメイン名(DOMAIN\ユーザー名またはユーザー名@ドメイン)も指定してください。
- **[パスワード]** - アカウントのパスワード。

2. **[OK]**をクリックします。

Acronis Backup & Recovery 11 のログイン情報の詳細については、「所有者とログイン情報 (21 ページ)」をご参照ください。

ユーザー権限に応じて使用可能になる操作の詳細については、「管理対象のコンピュータ上のユーザー権限」をご参照ください。

## 7.2 アーカイブとバックアップのエクスポート

エクスポート操作によって、指定した場所に、アーカイブのコピーまたはアーカイブの自己完結型の部分コピーが作成されます。元のアーカイブは変更されません。

エクスポート操作は、次の対象に適用できます。

- **単一のアーカイブ**: まったく同じアーカイブのコピーが作成されます。
- **単一のバックアップ**: 単一の完全バックアップで構成されるアーカイブが作成されます。増分バックアップまたは差分バックアップのエクスポートは、先行するバックアップを最新の完全バックアップへ統合することによって実行されます。
- **1 つのアーカイブに属する各種バックアップの中から選択されたバックアップ**: 作成されるアーカイブには、指定したバックアップのみが格納されます。統合は必要に応じて実行されます。そのため、作成されるアーカイブには、完全、増分、および差分バックアップが混在している場合があります。

### 使用例

エクスポートを使用すると、特定のバックアップを増分バックアップと区別することができます。分けることにより、迅速なリカバリ、リムーバブル メディアや取り外し可能なメディアへの書き込みなどの目的に使用できます。

**例**: 不安定な、または帯域幅の狭いネットワーク接続でリモートの場所にバックアップ データを作成する場合(VPN アクセスの WAN 経由でバックアップするなど)、まず取り外し可能なメディアに初回の完全バックアップを保存します。その後、リモートの場所にメディアを送信します。すると、そのバックアップは、メディアからターゲットのストレージにエクスポートされます。以降の増分バックアップは、通常初回よりもサイズが小さいので、ネットワーク経由で転送できます。

管理対象の格納域を取り外し可能なメディアにエクスポートすると、移動可能な管理対象外の格納域ができます。これは、次のケースに使用できます。

- サイト外に自分の格納域、または最も重要なアーカイブのコピーを保持する
- 別の場所にある支社に、データのみでなく格納域をメディアごと移送する
- ネットワークの問題やストレージ ノードの障害に備えて、そのストレージ ノードにアクセスせずにリカバリする
- ストレージ ノード自体をリカバリする

HDD ベースの格納域からテープ デバイスにエクスポートする方法は、単純なオンデマンド アーカイブと見なされます。

## 作成されるアーカイブの名前

デフォルトでは、エクスポートされたアーカイブは、元のアーカイブの名前を継承します。同じ場所に同じ名前のアーカイブが複数存在することは推奨されないため、デフォルトのアーカイブ名の使用時は、次の操作が無効になります。

- アーカイブの一部を同じ場所にエクスポートする操作
- 同じ名前のアーカイブが存在する場所にアーカイブまたはアーカイブの一部をエクスポートする操作
- アーカイブまたはアーカイブの一部を同じ場所に 2 回エクスポートする操作

前述のいずれの場合でも、エクスポート先のフォルダまたは格納域には一意のアーカイブ名を指定します。同じアーカイブ名を使用してエクスポートをやり直す必要がある場合は、まず、以前のエクスポート操作で作成されたアーカイブを削除します。

## 作成されるアーカイブのオプション

エクスポートされたアーカイブは、暗号化とパスワードを含めて、元のアーカイブのオプションを継承します。パスワード保護されたアーカイブをエクスポートするときには、パスワードの入力を求められます。元のアーカイブが暗号化されている場合、そのパスワードを使用して、作成されるアーカイブの暗号化が行われます。

## エクスポート元とエクスポート先

コンソールが**管理対象コンピュータ**に接続されているときは、そのコンピュータに配置されているエージェントがアクセスできる任意の場所との間で、アーカイブまたはアーカイブの一部を相互にエクスポートすることができます。これには、個人用格納域、ローカル接続のテープ デバイス、リムーバブル メディアが含まれます。製品バージョンがアドバンスド エディションの場合は、管理対象および管理対象外の集中管理用格納域も含まれます。

コンソールが**管理サーバー**に接続されているときは、2 つのエクスポート方法を使用できます。

- **管理対象の格納域**からのエクスポート。エクスポートは、格納域を管理しているストレージ ノードによって実行されます。エクスポート先には、ネットワーク共有またはストレージ ノードのローカル フォルダを指定できます。
- **管理対象外の集中管理用格納域**からのエクスポート。エクスポートは、指定した管理対象コンピュータにインストールされているエージェントによって実行されます。エクスポート先には、管理対象の格納域を含め、エージェントがアクセスできる任意の場所を指定できます。

---

**ヒント:** 重複除外された管理対象の格納域へのエクスポートを設定する場合は、エージェントに対する Deduplication アドオンがインストールされているコンピュータを選択します。そのようにしないと、エクスポート タスクは失敗します。

---

## エクスポート タスクの操作

エクスポート タスクは、設定を完了したすぐ後に開始されます。エクスポート タスクは、その他のタスクと同じ方法で停止または削除することができます。

エクスポート タスクが完了したら、いつでもそのタスクを再実行できます。再実行する前に、以前のタスクの実行によって作成されたアーカイブがエクスポート先の格納域にまだ存在している場合は、それを削除します。そのようにしないと、タスクは失敗します。エクスポート タスクを編集して、エクスポート先アーカイブに別の名前を指定することはできません(これは制限事項です)。

---

**ヒント:** 定期的に、アーカイブの削除タスクを実行してからエクスポート タスクを実行することで、ステージング シナリオを手動で実施できます。

---

## エクスポート タスクを作成する各種方法

エクスポート タスクを作成する最も一般的な方法は、**[エクスポート]** ページを使用する方法です。このページでは、すべてのバックアップ、またはアクセス権限を持つアーカイブをエクスポートできます。

**[エクスポート]** ページは、**[格納域]** ビューからアクセスできます。エクスポートする対象(アーカイブまたはバックアップ)を右クリックし、コンテキスト メニューから **[エクスポート]** を選択します。

**[エクスポート]** ページにアクセスするには、最初にベリファイの対象(アーカイブまたはバックアップ)を選択します。

1. 格納域を選択します。格納域を選択するには、**[ナビゲーション]** ペインの **[格納域]** アイコンをクリックし、**[格納域]** ビューで格納域ツリーを展開するか、直接 **[ナビゲーション]** ペインで、格納域を選択します。
2. アーカイブを選択するには、格納域を選択してから、**[格納域]** ビューで **[アーカイブ ビュー]** タブを選択して、アーカイブの名前をクリックします。
3. バックアップを選択するには、**[アーカイブ ビュー]** でアーカイブを選択し、アーカイブ名の左にある展開ボタンをクリックしてアーカイブを展開してから、バックアップをクリックします。

ベリファイの対象を選択したら、コンテキスト メニューから **[エクスポート]** を選択します。ソースとして対象があらかじめ選択された状態で、**[エクスポート]** ページが開きます。必要な作業は、エクスポート先の指定、およびタスクの名前の指定(オプション)のみです。

アーカイブまたはバックアップをエクスポートするには、次の手順を実行します。

## エクスポートの対象

### エクスポート

エクスポート対象の種類を選択してください。

**アーカイブ:** この場合、アーカイブのみ指定します。

**バックアップ:** 最初にアーカイブを指定してから、そのアーカイブ内の目的のバックアップ(複数可)を選択します。

### 参照

**アーカイブ** (138ページ)または**バックアップ** (138ページ)を選択します。

### アクセス認証の表示 (138ページ)

(オプション)タスク アカウントがソースに対する十分なアクセス権限を持っていない場合は、ソースにアクセスするためのログイン情報を指定します。

## エクスポート先

### 参照 (139ページ)

新しいアーカイブが作成される場所のパスを指定します。

新しいアーカイブにわかりやすい名前、およびコメントを必ず指定してください。

### アクセス認証の表示 (140ページ)

(オプション)タスクのログイン情報がエクスポート先に対する十分なアクセス権限を持っていない場合は、エクスポート先のログイン情報を指定します。

すべての必要な処理を実行したら、**[OK]** をクリックしてエクスポート タスクを開始します。

その結果、**[バックアップの計画およびタスク]** ビューにタスクの**実行状態**が表示されます。タスクが終了すると、**[タスクの情報]** ウィンドウに、タスク実行の最終状態が表示されます。

## 7.2.1 アーカイブの選択

### アーカイブの選択

1. アーカイブの保存先のフル パスを **[パス]** フィールドに入力するか、ツリー (97ページ) から目的の場所を選択します。
2. ツリーの右側にある表からアーカイブを選択します。この表には、選択した場所に含まれているアーカイブの名前が表示されます。  
アーカイブの保存場所の内容を確認しているとき、別のユーザーまたはスケジュール設定された処理によって、アーカイブが追加、削除、または変更されることがあります。**[更新]**を使用すると、アーカイブの一覧を更新できます。
3. **[OK]** をクリックします。

## 7.2.2 バックアップの選択

エクスポートするバックアップを指定する手順は、次のとおりです。

1. ウィンドウの上部で、チェックボックスを選択します。  
正しいバックアップを確実に選択するため、バックアップをクリックし、選択したバックアップに含まれているボリュームが表示された下部のテーブルを調べます。  
ボリュームに関する情報を取得するには、ボリュームを右クリックし、**[情報]**を選択します。
2. **[OK]**をクリックします。

## 7.2.3 ソースのアクセス ログイン情報

ソース アーカイブまたはバックアップの保存先にアクセスするために必要なログイン情報を指定します。

### ログイン情報を指定するには

1. 次のいずれかを選択します。
  - **[現在のユーザーのログイン情報を使用する]**  
現在のユーザーのログイン情報を使用して、その場所にアクセスします。
  - **[次のログイン情報を使用する]**  
ユーザーが指定するログイン情報を使用して、その場所にアクセスします。タスク アカウントがその場所に対するアクセス許可を持っていない場合は、このオプションを使用します。ネットワーク共有またはストレージ ノードの格納域に対しては、特別なログイン情報を指定する必要がある場合があります。  
次の項目を指定します。
    - **[ユーザー名]** - Active Directory ユーザー アカウントの名前を入力する場合は、ドメイン名(DOMAIN\ユーザー名またはユーザー名@ドメイン)も指定してください。
    - **[パスワード]** - アカウントのパスワード。
2. **[OK]**をクリックします。

---

FTP 仕様の原文に記載されているように、FTP サーバーにアクセスするのに必要なログイン情報は、ネットワーク上をテキスト形式で転送されます。このことは、ユーザー名とパスワードが、パケット スニファを使用した盗聴者によって傍受される可能性があることを意味します。

---

## 7.2.4 保存先の選択

エクスポートしたオブジェクトを格納する保存先を指定します。バックアップは同じアーカイブにエクスポートできません。

### 1. エクスポート先の選択

エクスポート先のフル パスを [パス] フィールドに入力するか、ツリーから目的のエクスポート先を選択します。

- 管理対象外の集中管理用格納域にデータをエクスポートするには、[集中管理用格納域] グループを展開し、格納域をクリックします。
- 個人用格納域にデータをエクスポートするには、[個人用格納域] グループを展開し、格納域をクリックします。
- コンピュータ上のローカル フォルダにデータをエクスポートするには、[ローカル フォルダ] グループを展開し、目的のフォルダをクリックします。
- ネットワーク共有にデータをエクスポートするには、[ネットワーク フォルダ] グループを展開し、目的のネットワーク コンピュータを選択して、共有フォルダをクリックします。ネットワーク共有がアクセス ログイン情報を必要とする場合は、それらの情報が要求されます。

---

**Linux ユーザーの場合:** /mnt/share などのマウント ポイントにマウントされている CIFS(Common Internet File System)のネットワーク共有を指定するには、ネットワーク共有そのものではなく、このマウント ポイントを選択します。

---

- **FTP** または **SFTP** サーバーにデータをエクスポートするには、[パス] フィールドにサーバー名またはアドレスを次のように入力します。

**ftp://ftp\_server:<ポート番号>** または **sftp://sftp\_server:<ポート番号>**

ポート番号が指定されていない場合、ポート 21 が FTP 用に、ポート 22 が SFTP 用に使用されます。

アクセス ログイン情報を入力すると、サーバー上のフォルダが使用できるようになります。サーバー上の適切なフォルダをクリックします。

匿名アクセスがサーバーによって許可されている場合、匿名ユーザーとしてサーバーにアクセスすることができます。匿名ユーザーとしてアクセスするには、ログイン情報を入力する代わりに、[匿名アクセスを使用する] をクリックします。

---

FTP 仕様の原文に記載されているように、FTP サーバーにアクセスするのに必要なログイン情報は、ネットワーク上をテキスト形式で転送されます。このことは、ユーザー名とパスワードが、パケット スニファを使用した盗聴者によって傍受される可能性があることを意味します。

---

- ローカル接続したテープ デバイスにデータをエクスポートするには、[テープ ドライブ] グループを展開し、目的のデバイスをクリックします。Acronis Backup & Recovery 11 のスタンドアロン エディションでは、Acronis Backup & Recovery 10 からアップグレードした場合のみテープ デバイスを使用できます。テープの使用方法の詳細については、「テープ デバイス」セクションを参照してください。

## 2. アーカイブ テーブルの使用

正しい保存先を選択できるように、ツリーで選択した各場所に格納されたアーカイブの名前が右側のテーブルに表示されます。

アーカイブの保存場所の内容を確認しているとき、別のユーザーまたはスケジュール設定された処理によって、アーカイブが追加、削除、または変更されることがあります。**[更新]** ボタンを使用すると、アーカイブの一覧を更新できます。

## 3. 新しいアーカイブの名前付け

デフォルトでは、エクスポートされたアーカイブは、元のアーカイブの名前を継承します。同じ場所に同じ名前のアーカイブが複数存在することは推奨されないため、デフォルトのアーカイブ名の使用時は、次の操作が無効になります。

- アーカイブの一部を同じ場所にエクスポートする操作
- 同じ名前のアーカイブが存在する場所にアーカイブまたはアーカイブの一部をエクスポートする操作
- アーカイブまたはアーカイブの一部を同じ場所に 2 回エクスポートする操作

前述のいずれの場合でも、エクスポート先のフォルダまたは格納域には一意のアーカイブ名を指定します。同じアーカイブ名を使用してエクスポートをやり直す必要がある場合は、まず、以前のエクスポート操作で作成されたアーカイブを削除します。

### 7.2.5 復元先のアクセス ログイン情報

作成されたアーカイブの保存先にアクセスするために必要なログイン情報を指定します。名前が指定されたユーザーがアーカイブの所有者と見なされます。

#### ログイン情報を指定するには

1. 次のいずれかを選択します。
  - **[現在のユーザーのログイン情報を使用する]**  
現在のユーザーのログイン情報を使用して、その場所にアクセスします。
  - **[次のログイン情報を使用する]**  
ユーザーが指定するログイン情報を使用して、復元先にアクセスします。タスク アカウントがその復元先に対するアクセス許可を持っていない場合は、このオプションを使用します。  
次の項目を指定します。
    - **[ユーザー名]** - Active Directory ユーザー アカウントの名前を入力する場合は、ドメイン名(DOMAIN\ユーザー名またはユーザー名@ドメイン)も指定してください。
    - **[パスワード]** - アカウントのパスワード。
2. **[OK]**をクリックします。

---

FTP 仕様の原文に記載されているように、FTP サーバーにアクセスするのに必要なログイン情報は、ネットワーク上をテキスト形式で転送されます。このことは、ユーザー名とパスワードが、パケット スニファを使用した盗聴者によって傍受される可能性があることを意味します。

---

## 7.3 イメージのマウント

ディスク バックアップ(イメージ)からボリュームをマウントすると、物理ディスクと同様にボリュームにアクセスできます。同じバックアップに含まれる複数のボリュームは、単一のマウント操作によってマウントできます。マウント操作は、Windows または Linux を実行している管理対象のコンピュータにコンソールが接続されている場合に実行できます。

読み取り/書き込みモードでボリュームをマウントすると、バックアップ コンテンツの変更(ファイルまたはフォルダの保存、移動、作成、削除)、および単一のファイルで構成されている実行可能ファイルの実行を行うことができます。

---

ディスク バックアップが、ローカル フォルダ(リムーバブル メディアを除く)、Acronis セキュア ゾーン、またはネットワーク共有に保存されている場合、ボリュームをマウントできます。

---

### 使用例

- **共有:** マウントされたイメージは、ネットワーク上のユーザーと簡単に共有できます。
- **「バンド エイド」データベース復元ソリューション:** 最近障害が発生したコンピュータの SQL データベースを含むイメージをマウントします。これにより、障害が発生したコンピュータが復元されるまでの、データベースへのアクセスが可能になります。
- **オフラインでのウイルス駆除:** コンピュータが攻撃された場合、管理者はコンピュータをシャットダウンし、ブータブル メディアで起動してイメージを作成します。次に、このイメージを読み取り/書き込みモードでマウントし、ウイルス対策プログラムでスキャンしてウイルスを除去してから、コンピュータを復元します。
- **エラー チェック:** ディスク エラーにより復元に失敗した場合、イメージを読み取り/書き込みモードでマウントします。次に、`chkdsk /r` コマンドを使用して、マウントしたディスクにエラーがないかどうかをチェックします。

イメージをマウントするには、次の手順を実行します。

### ソース

#### アーカイブ (142ページ)

アーカイブの保存先のパスを指定し、ディスク バックアップを含むアーカイブを選択します。

#### バックアップ (143ページ)

バックアップを選択します。

#### アクセス認証 (143ページ)

(オプション)アーカイブの保存先のログイン情報を指定します。

### マウントの設定

#### ボリューム (143ページ)

マウントするボリュームを選択し、すべてのボリュームに対するマウントの設定を構成します。ドライブ文字を割り当てるか、マウント ポイントを入力し、読み取り/書き込みまたは読み取り専用のアクセス モードを選択します。

必要なすべての手順を完了したら、**[OK]** をクリックしてボリュームをマウントします。

## 7.3.1 アーカイブの選択

### アーカイブの選択

1. 場所のフル パスを [パス] フィールドに入力するか、フォルダ ツリーから目的のフォルダを選択します。

- アーカイブが集中管理用格納域に保存されている場合、[集中管理] グループを展開し、格納域をクリックします。
- アーカイブが集中管理用格納域に保存されている場合、[個人用] グループを展開し、格納域をクリックします。
- アーカイブがコンピュータ上のローカル フォルダに保存されている場合、[ローカル フォルダ] グループを展開し、目的のフォルダをクリックします。

---

複数枚の DVD などのリムーバブル メディアにアーカイブがある場合は、まず最後に作成した DVD を挿入し、以降はメッセージに従って 1 枚目のディスクから順に挿入してください。

- アーカイブがネットワーク共有に保存されている場合は、[ネットワーク フォルダ] グループを展開し、ネットワーク上の必要なコンピュータを選択して、共有フォルダをクリックします。ネットワーク共有がアクセス ログイン情報を必要とする場合は、それらの情報が要求されます。

---

**Linux ユーザーの場合:** /mnt/share などのマウント ポイントにマウントされている CIFS(Common Internet File System)のネットワーク共有を指定するには、ネットワーク共有そのものではなく、このマウント ポイントを選択します。

- アーカイブが FTP または SFTP サーバーに保存されている場合は、[パス] フィールドにサーバー名またはアドレスを次のように入力します。

**ftp://ftp\_server:<ポート番号> または sftp://sftp\_server:<ポート番号>**

ポート番号が指定されていない場合、ポート 21 が FTP 用に、ポート 22 が SFTP 用に使用されます。

アクセス ログイン情報を入力すると、サーバー上のフォルダが使用できるようになります。サーバー上の適切なフォルダをクリックします。

匿名アクセスがサーバーによって許可されている場合、匿名ユーザーとしてサーバーにアクセスすることができます。匿名ユーザーとしてアクセスするには、ログイン情報を入力する代わりに、[匿名アクセスを使用する] をクリックします。

---

FTP 仕様の原文に記載されているように、FTP サーバーにアクセスするのに必要なログイン情報は、ネットワーク上をテキスト形式で転送されます。このことは、ユーザー名とパスワードが、パケット スニファを使用した盗聴者によって傍受される可能性があることを意味します。

- ローカル接続したテープ デバイスにアーカイブが保存されている場合は、[テープ ドライブ] グループを展開し、目的のデバイスをクリックします。

ブータブル メディアを使用して起動したコンピュータで実行する場合:

- 管理対象の格納域を表示するには、以下の文字列を [パス] フィールドに入力します。  
**bsp://node\_address/vault\_name/**
- 管理対象外の集中管理用格納域にアクセスするには、格納域のフォルダのフルパスを入力します。

2. ツリーの右側にある表からアーカイブを選択します。この表には、選択した格納域またはフォルダに含まれているアーカイブの名前が表示されます。

アーカイブの保存場所の内容を確認しているとき、別のユーザーまたはスケジュール設定された処理によって、アーカイブが追加、削除、または変更されることがあります。**[更新]**を使用すると、アーカイブの一覧を更新できます。

3. **[OK]** をクリックします。

### 7.3.2 バックアップの選択

バックアップを選択する手順は、次のとおりです。

1. 作成日時によって、いずれかのバックアップを選択します。
2. 正しいバックアップを選択できるように、下部のテーブルには選択したバックアップに含まれているボリュームが表示されます。  
ボリュームに関する情報を取得するには、ボリュームを右クリックし、**[情報]**をクリックします。
3. **[OK]**をクリックします。

### 7.3.3 アクセス ログイン情報

ログイン情報を指定する手順は、次のとおりです。

1. 次のいずれかを選択します。
  - **[現在のユーザーのログイン情報を使用する]**  
現在のユーザーのログイン情報を使用して、その場所にアクセスします。
  - **[次のログイン情報を使用する]**  
ユーザーが指定するログイン情報を使用して、その場所にアクセスします。現在のユーザーアカウントがその場所に対するアクセス許可を持っていない場合は、このオプションを使用します。ネットワーク共有またはストレージ ノードの格納域に対しては、特別なログイン情報を指定する必要がある場合があります。  
次の項目を指定します。
    - **[ユーザー名]** - Active Directory ユーザー アカウントの名前を入力する場合は、ドメイン名(DOMAIN\ユーザー名またはユーザー名@ドメイン)も指定してください。
    - **[パスワード]** - アカウントのパスワード。
2. **[OK]**をクリックします。

---

FTP 仕様の原文に記載されているように、FTP サーバーにアクセスするのに必要なログイン情報は、ネットワーク上をテキスト形式で転送されます。このことは、ユーザー名とパスワードが、パケット スニファを使用した盗聴者によって傍受される可能性があることを意味します。

---

### 7.3.4 ボリュームの選択

マウントするボリュームを選択し、選択した各ボリュームに対するマウント用のパラメータを次のように構成します。

1. マウントを必要とする各ボリュームのチェックボックスをオンにします。
2. 選択したボリュームをクリックして、マウント用のパラメータを設定します。
  - **[アクセス モード]** - ボリュームをマウントする際のモードを次の中から選択します。
    - **[読み取り専用]** - 変更内容をコミットせずにバックアップ内のファイルを参照して開く場合に有効にします。

- **[読み取り/書き込み]** - このモードでは、バックアップの内容が変更されることを前提として、増分バックアップを作成して変更内容を取り込みます。
  - **[ドライブ文字の割り当て](Windows)** - Acronis Backup & Recovery 11 は、マウントされたボリュームに未使用のドライブ文字を割り当てます。必要に応じて、ドロップダウン リストから別のドライブ文字を選択して割り当てます。
  - **[マウント ポイント](Linux)** - ボリュームをマウントするディレクトリを指定します。
3. 複数のボリュームをマウントする場合は、前の手順で説明した要領で、すべてのボリュームをクリックしてマウント用のパラメータを設定します。
  4. **[OK]**をクリックします。

### 7.3.5 マウントされているイメージの管理

ボリュームをマウントすると、ファイル マネージャを使用してバックアップに含まれているファイルとフォルダを選択し、必要なファイルを任意の場所にコピーすることができます。したがって、ボリュームのバックアップから少数のファイルとフォルダだけを取り出す場合は、復元手順を実行する必要はありません。

#### イメージの参照

マウントされているボリュームを参照すると、ボリュームの内容を表示したり変更したりすることができます(読み取り/書き込みモードでマウントされている場合)。

マウントされているボリュームを参照するには、テーブルからボリュームを選択し、 **[参照]**をクリックします。デフォルトのファイル マネージャのウィンドウが開き、マウントされているボリュームの内容を確認できます。

#### イメージのマウント解除

マウントされているボリュームの保守には、かなりのシステム リソースを必要とします。必要な処理が完了した後は、ボリュームのマウントを解除することをお勧めします。手動でマウントを解除しなければ、ボリュームはオペレーティング システムが再起動するまでマウントされたままになります。

イメージのマウントを解除するには、テーブルからボリュームを選択し、 **[マウント解除]**をクリックします。

マウントされているすべてのボリュームのマウントを解除するには、 **[すべてマウント解除]**をクリックします。

## 7.4 格納域で実行可能な操作

格納域を使用することによって、アーカイブおよびバックアップへのアクセス、およびアーカイブの管理操作を簡単に行うことができます。

#### アーカイブおよびバックアップを操作するには

1. **[ナビゲーション]** ペインで、アーカイブを管理する必要がある格納域を選択します。
2. **[格納域]** ビューで、**[アーカイブ ビュー]** タブを選択します。このタブには、選択した格納域に保存されているすべてのアーカイブが表示されます。
3. 次の操作説明に従って続行します。
  - アーカイブの操作 (145ページ)

- バックアップの操作 (145ページ)

## 7.4.1 アーカイブの操作

### アーカイブの操作を実行するには

1. **[ナビゲーション]** ペインで、アーカイブが格納されている格納域を選択します。
2. 格納域の **[アーカイブ ビュー]** タブで、アーカイブを選択します。アーカイブがパスワードで保護されている場合、パスワードの入力を求められます。
3. ツールバーで対応するボタンをクリックすることで、操作を実行します。これらの操作は、メインメニューの **[[アーカイブ名] アクション]** 項目から実行することも可能です。

格納域に保存されているアーカイブを使用して操作を実行するためのガイドラインを次に示します。

操作目的	操作手順
アーカイブをベリファイする	<p> <b>[ベリファイ]</b> をクリックします。</p> <p>ソースとしてアーカイブがあらかじめ選択された状態で、<b>[ベリファイ] (131ページ)</b> ページが開きます。</p> <p>アーカイブのベリファイでは、アーカイブのすべてのバックアップが確認されます。</p>
アーカイブのエクスポート	<p> <b>[エクスポート]</b> をクリックします。</p> <p>ソースとしてアーカイブがあらかじめ選択された状態で、<b>[エクスポート] (135ページ)</b> ページが開きます。アーカイブのエクスポートを実行すると、すべてのバックアップが格納されているアーカイブのコピーが、指定した場所に作成されます。</p>
単一のアーカイブまたは複数のアーカイブを削除する	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 削除するアーカイブを 1 つ以上選択します。</li> <li>2.  <b>[削除]</b> をクリックします。</li> </ol> <p>アーカイブとバックアップそれぞれのチェックボックスがある <b>[バックアップの削除] (147ページ)</b> ウィンドウに選択内容が複製されます。選択内容を見直し、必要に応じて修正して(目的のアーカイブのチェックボックスをオンにします)、削除を確認します。</p>
格納域のすべてのアーカイブを削除する	<p>格納域の一覧にフィルタが適用されている場合、格納域の内容の一部しか表示されないことに注意してください。操作を開始する前に、保持する必要のあるアーカイブが格納域に含まれていないことを確認してください。</p> <p> <b>[すべて削除]</b> をクリックします。</p> <p>アーカイブとバックアップごとにチェックボックスがある、新しいウィンドウに選択内容が複製されます。選択内容を見直し、必要に応じて修正して、削除を確認します。</p>

## 7.4.2 バックアップの操作

### アーカイブの操作を実行するには

1. **[ナビゲーション]** ペインで、アーカイブが格納されている格納域を選択します。
2. 格納域の **[アーカイブ ビュー]** タブで、アーカイブを選択します。次に、アーカイブを展開してから、バックアップをクリックして選択します。アーカイブがパスワードで保護されている場合、パスワードの入力を求められます。
3. ツールバーで対応するボタンをクリックすることで、操作を実行します。これらの操作は、メインメニューの **[[バックアップ名] アクション]** 項目から実行することも可能です。

バックアップを使用して操作を実行するためのガイドラインを次に示します。

操作目的	操作手順
別のウィンドウにバックアップの内容を表示する	 <b>[内容の表示]</b> をクリックします。 <b>[バックアップ内容]</b> ウィンドウでバックアップ内容を確認します。
復元先	 <b>[復元]</b> をクリックします。 ソースとしてバックアップがあらかじめ選択された状態で、 <b>[データの復元]</b> (95ページ) ページが開きます。
バックアップをベリファイする	 <b>[ベリファイ]</b> をクリックします。 ソースとしてバックアップがあらかじめ選択された状態で、 <b>[ベリファイ]</b> (131ページ) ページが開きます。ファイル バックアップのベリファイでは、バックアップからダミーの復元先に対してすべてのファイルの復元を疑似的に実行します。ディスク バックアップのベリファイでは、バックアップに保存されているすべてのデータ ブロックのチェックサムを計算します。
バックアップをエクスポートする	 <b>[エクスポート]</b> をクリックします。 ソースとしてバックアップがあらかじめ選択された状態で、 <b>[エクスポート]</b> (135ページ) ページが開きます。バックアップのエクスポートは、新しいアーカイブと、バックアップの自己完結型のコピーを、指定した場所に作成します。
完全バックアップへの変換	 <b>[完全バックアップへの変換]</b> をクリックして、増分バックアップまたは差分バックアップを、同一時点の完全バックアップに置き換えます。詳細については、「完全バックアップへの変換 (146ページ)」を参照してください。
単一または複数のバックアップを削除する	削除するいずれかのバックアップを選択して、  <b>[削除]</b> をクリックします。 アーカイブとバックアップそれぞれのチェックボックスがある <b>[バックアップの削除]</b> (147ページ) ウィンドウに選択内容が複製されます。選択内容を見直し、必要に応じて修正して(目的のバックアップのチェックボックスを選択します)、削除を確認します。
格納域のすべてのアーカイブとバックアップを削除する	格納域の一覧にフィルタが適用されている場合、格納域の内容の一部しか表示されないことに注意してください。操作を開始する前に、保持する必要があるアーカイブが格納域に含まれていないことを確認してください。  <b>[すべて削除]</b> をクリックします。 アーカイブとバックアップそれぞれのチェックボックスがある <b>[バックアップの削除]</b> (147ページ) ウィンドウに選択内容が複製されます。選択内容を見直し、必要に応じて修正して、削除を確認します。

### 7.4.3 完全バックアップへの変換

アーカイブ内の増分バックアップのチェーンが長くなった場合、1 つの増分バックアップを完全バックアップに変換することで、アーカイブの信頼性を向上できます。ある差分バックアップに依存している増分バックアップがある場合は、その差分バックアップを変換することもできます。

変換中、選択した増分または差分バックアップが、同一時点の完全バックアップによって置き換えられます。チェーン内の過去のバックアップは変わりません。後続のすべての増分および差分バックアップも、直近の完全バックアップまでアップデートされます。最初に新しいバックアップ バージョンが作成された場合にのみ、その後古いバックアップ バージョンが削除されます。そのため、保存先に古いバージョンと新しいバージョンの両方を一時的に保存するための十分な領域が必要です。

変換によって、バックアップのコピーが作成されることはありません。フラッシュ ドライブまたはリムーバブル メディア上のバックアップの自己完結型のコピーを取得するには、エクスポート (135ページ) 操作を行います。

## 例

アーカイブ内に次のバックアップ チェーンが存在しています。

**F1 I2 I3 I4 D5 I6 I7 I8 F9 I10 I11 D12 F13**

**F** は、完全バックアップ、**I** は増分バックアップ、**D** は差分バックアップを示します。

**I4** バックアップを完全バックアップに変換します。**I4**、**D5**、**I6**、**I7**、**I8** バックアップはアップデートされますが、**I10 I11 D12** は変更されないままです。これらのバックアップは、**F9** に依存しているからです。

---

**制限事項:** 完全バックアップへの変換操作は、テープおよび CD/DVD 上のバックアップに対しては実行できません。

---

### 7.4.4 アーカイブとバックアップの削除

**[バックアップの削除]** ウィンドウには、格納域ビューと同じタブが表示されますが、それぞれのアーカイブとバックアップに対するチェックボックスも表示されます。削除するように選択したアーカイブまたはバックアップのチェックボックスはオンになっています。削除するアーカイブまたはバックアップを確認します。他のアーカイブとバックアップを削除する必要がある場合は、それぞれのチェックボックスをオンにして、**[選択項目を削除]** をクリックし、削除を確定します。

#### 増分バックアップまたは差分バックアップのベースとなっているバックアップを削除した場合の動作

アーカイブの一貫性を保持するために、2 つのバックアップが統合されます。たとえば、完全バックアップを削除するが、次の増分バックアップは保持するとします。バックアップは 1 つの完全バックアップに結合され、そのバックアップに増分バックアップの日付が付けられます。チェーンの中間から増分または差分のバックアップを削除すると、結果として残されるバックアップの種類は増分になります。

統合は削除の 1 つの方法に過ぎず、削除に代わる手段ではないことに注意してください。統合した後のバックアップには、削除されたバックアップ内には存在していて、保持された増分バックアップや差分バックアップには存在していなかったデータは含まれません。

統合中に作成される一時ファイルのために使用される格納域には、十分な領域が必要です。統合によって作成されるバックアップには、常に最大限の圧縮が適用されます。

## 8 ブータブル メディア

### ブータブル メディア

ブータブル メディアは、物理メディア(CD、DVD、USB ドライブ、またはコンピュータの BIOS によってブート デバイスとしてサポートされるその他のメディア)です。ブータブル メディアを使用すると、オペレーティング システムを使用せずに、任意の PC 互換コンピュータから Linux ベースの環境または Windows プレインストール環境(WinPE)を起動して、Acronis Backup & Recovery 11 エージェントを実行できます。ブータブル メディアは次の状況で最も多く使用されます。

- 起動できないオペレーティング システムの復元
- 破損したシステム内に残存するデータへのアクセスとバックアップ
- ベア メタル状態のディスクへのオペレーティング システムの配置
- ベア メタル状態のディスクへのベーシック ボリュームまたはダイナミック ボリュームの作成
- サポートされていないファイル システムを使用しているディスクのセクタ単位のバックアップ
- アクセス制限、アプリケーションの実行による連続的なロック、またはその他の原因のためにオンラインでバックアップできないデータのオフライン バックアップ

コンピュータは、物理メディアを使用するか、Acronis PXE サーバー、Windows 展開サービス(WDS)、またはリモート インストール サービス(RIS)からネットワーク ブートを使用して、上記の環境で起動することができます。アップロードされたブータブル コンポーネントを含むこれらのサーバーは、ブータブル メディアの一種と考えることもできます。同じウィザードを使用して、ブータブル メディアを作成したり、PXE サーバーまたは WDS/RIS を設定できます。

### Linux ベースのブータブル メディア

Linux ベースのメディアには、Linux カーネルを基にした Acronis Backup & Recovery 11 ブータブル エージェントが含まれています。このエージェントは、ベア メタル状態のディスクや、破損していたりサポートされていないファイル システムを使用しているコンピュータを含め、任意の PC 互換ハードウェアから起動でき、操作を実行することができます。この操作は、管理コンソールを使用して、ローカルでまたはリモートから設定および制御できます。

### PE ベースのブータブル メディア

PE ベースのブータブル メディアには、Windows プレインストール環境(WinPE)と呼ばれる最小限の Windows システム、および Acronis Backup & Recovery 11 エージェントをプレインストール環境で実行できるように変更された、WinPE 用 Acronis プラグインが含まれています。

WinPE は、異種のハードウェアが混在する大規模な環境では、最も便利なブータブル ソリューションであることが証明されています。

#### 利点:

- Windows プレインストール環境で Acronis Backup & Recovery 11 を使用すると、Linux ベースのブータブル メディアを使用するときに比べ、より多くの機能を利用できます。PC 互換ハードウェアを WinPE で起動すると、Acronis Backup & Recovery 11 エージェントだけでなく、PE コマンドと PE スクリプトおよび PE に追加したその他のプラグインも使用できます。
- PE ベースのブータブル メディアを使用すると、特定の RAID コントローラのサポートや RAID アレイの特定のレベルのみのサポートなど、一部の Linux 関連のブータブル メディア

の問題を解決できます。Windows Vista または Windows Server 2008 のカーネルである PE 2.x に基づくメディアでは、必要なデバイス ドライバを動的に読み込むことができます。

#### 制限事項:

PE ベースのブータブル メディアは、UEFI をサポートしません。

## 8.1 Linux ベースのブータブル メディア

メディア ビルダを使用する際は、次の項目を指定する必要があります。

1. (オプション)Linux カーネルのパラメータ。複数のパラメータは、スペースで区切って入力します。  
たとえば、メディアを起動するたびにブータブル エージェントのディスプレイ モードを選択できるようにするには、次のように入力します。**vga=ask**  
パラメータの一覧については、「カーネル パラメータ (150ページ)」を参照してください。
2. メディアに配置する Acronis ブータブル コンポーネント。  
メディアを作成するコンピュータに Acronis Backup & Recovery 11 Universal Restore がインストールされている場合は、Universal Restore が有効になります。
3. (オプション)ブート メニューのタイムアウト時間と、タイムアウトしたときに自動的に起動するコンポーネント。
  - 設定されていない場合は、オペレーティング システム(存在する場合)または Acronis コンポーネントを起動するかどうかをユーザーが選択するまで、Acronis ロードは待機します。
  - たとえば、**10 秒**とブータブル エージェントを設定すると、メニューが表示されてから 10 秒後にブータブル エージェントが起動します。これにより、PXE サーバーまたは WDS/RIS から起動するときに、無人のオンサイト操作を実行できます。
4. (オプション)リモート ログオン設定。
  - エージェントへの接続時にコンソール側で入力するユーザー名とパスワード。これらのフィールドを空白のままにすると、プロンプト ウィンドウに任意の文字を入力するだけで接続できます。
5. (オプション)ネットワーク設定 (151ページ)。
  - コンピュータのネットワーク アダプタに割り当てる TCP/IP 設定です。
6. (オプション)ネットワーク ポート (152ページ)。
  - ブータブル エージェントが受信接続をリッスンする TCP ポートです。
7. 作成するメディアの種類。次の操作を実行できます。
  - ハードウェア BIOS で CD、DVD、またはリムーバブル USB フラッシュ ドライブなどのその他のブータブル メディアからの起動が許可されている場合は、そのブータブル メディアの作成。
  - 後で空のディスクに書き込むための、ブータブル ディスクの ISO イメージの作成。
  - Acronis PXE サーバーへの選択したコンポーネントのアップロード。
  - WDS/RIS への選択したコンポーネントのアップロード。
8. (オプション)Acronis Universal Restore で使用する Windows ドライバ。このウィンドウは、Acronis Universal Restore アドオンがインストールされていて、PXE または WDS/RIS 以外のメディアが選択された場合のみ表示されます。
9. メディア ISO ファイルのパスか、PXE や WDS/RIS の名前または IP とログイン情報。

## 8.1.1 カーネル パラメータ

このウィンドウでは、Linux カーネル パラメータを 1 つ以上指定できます。パラメータは、ブータブル メディアの起動時に自動的に適用されます。

これらのパラメータは、一般的に、ブータブル メディアの操作中に問題が発生すると使用されます。通常は、このフィールドは空のままにできます。

ブート メニューで F11 を押して、いずれかのパラメータを指定することも可能です。

### パラメータ

複数のパラメータを指定する場合、パラメータをスペースで区切ります。

#### acpi=off

Advanced Configuration and Power Interface(ACPI)を無効にします。特定のハードウェア構成で問題が発生した場合、このパラメータを使用します。

#### noapic

Advanced Programmable Interrupt Controller(APIC)を無効にします。特定のハードウェア構成で問題が発生した場合、このパラメータを使用します。

#### vga=ask

ブータブル メディアのグラフィカル ユーザー インターフェイスによって使用されるビデオ モードを要求するメッセージが表示されます。**vga** パラメータを指定しない場合、ビデオ モードは自動的に検出されます。

#### vga=mode\_number

ブータブル メディアのグラフィカル ユーザー インターフェイスによって使用されるビデオ モードを指定します。モード番号は、mode\_number に 16 進数で指定します。たとえば、**vga=0x318** のように指定します。

モード番号に対応する画面の解像度と色数は、コンピュータによって異なる場合があります。最初に **vga=ask** パラメータを使用して、mode\_number の値を選択することをお勧めします。

#### quiet

Linux カーネルが読み込まれる際のスタートアップ メッセージの表示を無効にして、カーネルが読み込まれた後に管理コンソールを開始します。

このパラメータは、ブータブル メディアの作成時に自動的に指定されますが、ブート メニューで削除することができます。

このパラメータを指定しない場合、コマンド プロンプトが表示される前に、すべてのスタートアップ メッセージが表示されます。コマンド プロンプトから管理コンソールを開始するには、**/bin/product** コマンドを実行します。

#### nousb

USB(Universal Serial Bus)サブシステムの読み込みを無効にします。

#### nousb2

USB 2.0 のサポートを無効にします。このパラメータを指定しても、USB 1.1 デバイスは動作します。このパラメータを指定すると、USB 2.0 モードでは動作しない一部の USB ドライブを USB 1.1 モードで使用できます。

## **nodma**

すべての IDE ハード ディスク ドライブの Direct Memory Access(DMA)を無効にします。一部のハードウェアでカーネルがフリーズするのを防ぎます。

## **nofw**

FireWire(IEEE1394)インターフェイスのサポートを無効にします。

## **nopcmcia**

PCMCIA ハードウェアの検出を無効にします。

## **nomouse**

マウスのサポートを無効にします。

## **module\_name=off**

module\_name に指定した名前のモジュールを無効にします。たとえば、SATA モジュールの使用を無効にするには、**sata\_sis=off** と指定します。

## **pci=bios**

ハードウェア デバイスに直接アクセスせず、PCI BIOS を強制的に使用します。コンピュータに非標準の PCI ホスト ブリッジが存在している場合は、このパラメータを使用します。

## **pci=nobios**

PCI BIOS の使用を無効にします。ハードウェアへの直接アクセスのみを許可します。BIOS が原因でブータブル メディアを起動できない場合など、このパラメータを使用します。

## **pci=biosirq**

PCI BIOS の呼び出しを使用して、割り込みルーティング テーブルを取得します。カーネルが、割り込み要求(IRQ)を割り当てられなかったり、マザーボード上のセカンダリ PCI バスを検出できなかったりする場合、このパラメータを使用します。

これらの呼び出しは、一部のコンピュータで正しく動作しない可能性があります。しかし、この呼び出し以外に割り込みルーティング テーブルを取得する方法はありません。

## **8.1.2 ネットワークの設定**

Acronis ブータブル メディアを作成するときに、ブータブル エージェントで使用するネットワーク接続をあらかじめ設定することができます。次のパラメータをあらかじめ設定することができます。

- IP アドレス
- サブネット マスク
- ゲートウェイ
- DNS サーバー
- WINS サーバー

コンピュータでブータブル エージェントが起動すると、コンピュータのネットワーク インターフェイスカード(NIC)に設定が適用されます。設定があらかじめ構成されていない場合は、エージェントは DHCP 自動構成を使用します。コンピュータでブータブル エージェントを実行しているときに、手動でネットワーク設定を構成することもできます。

## 複数のネットワーク接続の事前設定

最大で 10 個のネットワーク インターフェイス カードの TCP/IP 設定をあらかじめ設定できます。それぞれの NIC に適切な設定が割り当てられるようにするには、メディアをカスタマイズするサーバー上でメディアを作成します。ウィザード ウィンドウで既存の NIC を選択すると、メディアに保存する NIC の設定が選択されます。既存の NIC それぞれの MAC アドレスもメディアに保存されます。

MAC アドレス以外の設定を変更したり、必要に応じて、存在しない NIC の設定を構成することもできます。

サーバーでブータブル エージェントが起動すると、エージェントは使用可能な NIC の一覧を取得します。この一覧は、NIC が占有するスロット別に、プロセッサに最も近い側から順に並べ替えられます。

ブータブル エージェントは、既知の NIC それぞれに適切な設定を割り当て、MAC アドレスによって NIC を識別します。既知の MAC アドレスで NIC を設定した後、残りの NIC には、上位の未割り当て NIC から順に、存在しない NIC に対して作成した設定が割り当てられます。

メディアを作成したコンピュータだけでなく、任意のコンピュータ用のブータブル メディアをカスタマイズできます。これを行うには、そのコンピュータのスロットの順序(NIC1 はプロセッサに最も近いスロットを占有し、NIC2 はその次のスロットを占有するなど)に従って NIC を設定します。そのコンピュータでブータブル エージェントが起動した際に、既知の MAC アドレスを持つ NIC が見つからない場合は、カスタマイズしたときと同じ順序で NIC が設定されます。

### 例

ブータブル エージェントは、運用ネットワークを経由して管理コンソールと通信するためのネットワーク アダプタの 1 つを使用できます。自動構成でこの接続用の設定を行うことができます。復元用の大きなデータは、静的な TCP/IP 設定を使用するバックアップ専用のネットワークに接続された、2 番目の NIC を経由して転送できます。

## 8.1.3 ネットワーク ポート

ブータブル メディアを作成するときに、ブータブル エージェントが受信接続をリッスンするネットワーク ポートをあらかじめ設定しておくことができます。次のいずれかを選択できます。

- デフォルトのポート
- 現在使用中のポート
- 新しいポート(ポート番号を入力)

ポートがあらかじめ設定されていないときは、エージェントはデフォルトのポート番号(9876)を使用します。このポートは、Acronis Backup & Recovery 11 管理コンソールもデフォルトとして使用します。一時的なポート設定を使用できます。コンソールをエージェントに接続している間、URL 表記 <エージェントの IP>:<ポート> を使用して、特定のセッションのポートを指定します。

## 8.2 メディアから起動したコンピュータへの接続

ブータブル メディアからコンピュータが起動すると、コンピュータ端末にスタートアップ ウィンドウが表示され、DHCP から取得したか、あらかじめ構成された値に設定された IP アドレスが表示されます。

## リモート接続

リモートからこのコンピュータに接続するには、コンソール メニューの[接続]→[リモート コンピュータの管理]を選択し、コンピュータの IP アドレスの 1 つを指定します。ブータブル メディアを作成する際にユーザー名とパスワードを設定した場合は、そのユーザー名とパスワードを指定します。

## ローカル接続

Acronis Backup & Recovery 11 管理コンソールは、ブータブル メディアに必ず用意されています。コンピュータ端末に物理的にアクセスできる場合は、誰でもこのコンソールを実行して接続できます。ブータブル エージェントのスタートアップ ウィンドウで[管理コンソールの実行]をクリックするだけで接続できます。

## 8.3 ブータブル メディア使用時の操作

ブータブル メディアを使用して起動したコンピュータでの操作は、オペレーティング システムでのバックアップと復元によく似ています。両者の違いは次のとおりです。

1. Windows スタイルのブータブル メディアで表示されるディスクのドライブ文字は、Windows で識別されるドライブと異なる場合があります。たとえば、起動用ユーティリティにおける D: ドライブが、Windows では E: に対応することがあります。

---

注意！安全のために、各ボリュームに一意的な名前を割り当てておくことをお勧めします。

---

2. Linux スタイルのブータブル メディアでは、ローカル ディスクとボリュームがマウント解除 (sda1, sda2...)として表示されます。
3. ブータブル メディアを使用して作成したバックアップの名前は、簡易ファイル名 (54ページ)です。標準の名前がバックアップに割り当てられるのは、それらのバックアップが標準ファイル名前付けが使用されている既存のアーカイブに追加される場合か、保存先で簡易ファイル名がサポートされていない場合のみです。
4. Linux 形式のブータブル メディアでは、バックアップを NTFS 形式のボリュームに書き込むことはできません。Windows 形式に切り替える必要があります。
5. ブータブル メディアの形式を Windows と Linux で切り替えるには、[ツール] > [ボリューム表記の変更] を選択します。
6. メディア GUI には [ナビゲーション] ツリーはありません。ビューの間を移動するには、[ナビゲーション] メニューを使用します。
7. タスクのスケジュールは設定できない。つまり、タスクはまったく作成されません。操作を繰り返す必要がある場合は、操作手順を最初から設定します。
8. ログは、現在のセッションの期間内だけ有効です。ログ全体またはフィルタ処理されたログ エントリをファイルに保存できます。
9. [アーカイブ] ウィンドウのフォルダ ツリーには、集中管理用格納域は表示されません。管理対象の格納域を表示するには、以下の文字列を [パス] フィールドに入力します。  
**bsp://node\_address/vault\_name/**  
管理対象外の集中管理格納域にアクセスするには、格納域のフォルダのフル パスを入力します。  
アクセス ログイン情報を入力すると、格納域に配置されているアーカイブの一覧が表示されます。

### 8.3.1 ディスプレイ モードの設定

メディアから起動されたコンピュータでは、ディスプレイ ビデオ モードはハードウェア構成(モニターおよびグラフィック カードの仕様)に基づいて自動的に検出されます。何らかの原因で、正しくないビデオ モードが検出された場合は、次の操作を行います。

1. ブート メニューで[F11]を押します。
2. コマンド プロンプトに「**vga=ask**」というコマンドを追加し、起動を続行します。
3. サポートされているビデオ モードの一覧から、該当する数字(**318** など)を入力して適切なモードを 1 つ選択し、[Enter]を押します。

メディアから起動する度に、提示されたハードウェア構成からモードを選択する手順を繰り返したくない場合は、**[カーネル パラメータ]**ウィンドウで適切なモード番号(**vga=0x318** など)を入力して、ブータブル メディアを再作成します(詳細については、「ブータブル メディア ビルダ (149ページ)」をご参照ください)。

### 8.3.2 iSCSI デバイスと NDAS デバイスの構成

ここでは、ブータブル メディアから起動して操作する場合の、iSCSI(Internet Small Computer System Interface)デバイスと NDAS(Network Direct Attached Storage)デバイスの設定方法について説明します。

これらのデバイスは、ネットワーク インターフェイスを通してコンピュータに接続され、ローカル接続のデバイスのように表示されます。ネットワーク上では、iSCSI デバイスは IP アドレスによって識別され、NDAS デバイスはデバイス ID によって識別されます。

iSCSI デバイスは、iSCSI ターゲットとも呼ばれます。コンピュータと iSCSI ターゲットの間の対話機能を提供するハードウェアまたはソフトウェア コンポーネントは、iSCSI イニシエータと呼ばれます。通常、iSCSI イニシエータの名前は、デバイスをホストするサーバーの管理者によって定義されます。

**iSCSI デバイスを追加する手順は、次のとおりです。**

1. ブータブル メディア(Linux ベースまたは PE ベース)で、管理コンソールを実行します。
2. **[iSCSI/NDAS デバイスの構成]**(Linux ベースのメディア)または**[iSCSI セットアップの実行]**(PE ベースのメディア)をクリックします。
3. iSCSI デバイスのホストの IP アドレスおよびポートと、iSCSI イニシエータの名前を指定します。
4. ホストで認証が必要な場合は、認証用のユーザー名とパスワードを指定します。
5. **[OK]**をクリックします。
6. 一覧から iSCSI デバイスを選択し、**[接続]**をクリックします。
7. 認証情報の入力を求められた場合、iSCSI デバイスにアクセスするためのユーザー名とパスワードを指定します。

**NDAS デバイスを追加する手順は、次のとおりです。**

1. Linux ベースのブータブル メディアで、管理コンソールを実行します。
2. **[iSCSI/NDAS デバイスの構成]**をクリックします。
3. **[NDAS デバイス]**で、**[デバイスの追加]**をクリックします。
4. 20 文字のデバイス ID を指定します。

5. デバイスへのデータの書き込みを許可するには、5 文字の書き込みキーを指定します。このキーを指定しなければ、デバイスは読取専用モードで使用できます。
6. [OK]をクリックします。

## 8.4 Linux ベースのブータブル メディアで使用できるコマンドとユーティリティの一覧

Linux ベースのブータブル メディアには、次のコマンドとコマンド ライン ユーティリティが用意されています。これらは、コマンド シェルを実行する際に使用できます。コマンド シェルを起動するには、ブータブル メディアの管理コンソールで Ctrl+Alt+F2 キーを押します。

### Acronis コマンド ライン ユーティリティ

- `acrocmd`
- `acronis`
- `asamba`
- `lash`

### Linux のコマンドとユーティリティ

<code>busybox</code>	<code>ifconfig</code>	<code>rm</code>
<code>cat</code>	<code>init</code>	<code>rmmod</code>
<code>cdrecord</code>	<code>insmod</code>	<code>route</code>
<code>chmod</code>	<code>iscsiadm</code>	<code>scp</code>
<code>chown</code>	<code>kill</code>	<code>scsi_id</code>
<code>chroot</code>	<code>kpartx</code>	<code>sed</code>
<code>cp</code>	<code>ln</code>	<code>sg_map26</code>
<code>dd</code>	<code>ls</code>	<code>sh</code>
<code>df</code>	<code>lspci</code>	<code>sleep</code>
<code>dmesg</code>	<code>lvm</code>	<code>ssh</code>
<code>dmraid</code>	<code>mdadm</code>	<code>sshd</code>
<code>e2fsck</code>	<code>mkdir</code>	<code>strace</code>
<code>e2label</code>	<code>mke2fs</code>	<code>swapoff</code>
<code>echo</code>	<code>mknod</code>	<code>swapon</code>
<code>egrep</code>	<code>mkswap</code>	<code>sysinfo</code>
<code>fdisk</code>	<code>more</code>	<code>tar</code>
<code>fsck</code>	<code>mount</code>	<code>tune2fs</code>
<code>fxload</code>	<code>mtx</code>	<code>udev</code>
<code>gawk</code>	<code>mv</code>	<code>udevinfo</code>

```
gpm      pccardctl  udevstart
grep     ping       umount
growisofs pktsetup   uuidgen
grub     poweroff  vconfig
gunzip   ps        vi
halt     raidautorun zcat
hexdump  readcd
hotplug  reboot
```

## 8.5 Acronis スタートアップ リカバリ マネージャ

Acronis スタートアップ リカバリ マネージャはブータブル エージェント (186ページ)を修正したもので、Windows のシステム ディスク内または Linux の /boot パーティション内にあり、起動時に F11 キーを押すと実行されるように構成されています。これにより、ブータブル レスキュー ユーティリティを起動するための別のメディアまたはネットワーク接続が不要になります。

Acronis スタートアップ リカバリ マネージャは、モバイル ユーザーにとって特に役に立ちます。エラーが発生した場合は、コンピュータを再起動し、「Acronis スタートアップ リカバリ マネージャを起動するには、F11 を押してください」というメッセージが表示されたら F11 キーを押します。プログラムが開始され、復元を実行できます。

ユーザーは、移動中に Acronis スタートアップ リカバリ マネージャを使用してバックアップすることもできます。

GRUB ブート ローダーがインストールされているコンピュータでは、F11 キーを押す代わりに、ブート メニューから Acronis スタートアップ リカバリ マネージャを選択します。

### アクティブ化

アクティブ化することで、起動時に [Acronis スタートアップ リカバリ マネージャを起動するには、F11 を押してください] というメッセージが有効になるか (GRUB ブート ローダーがない場合)、[Acronis スタートアップ リカバリ マネージャ] という項目が GRUB のメニューに追加されます (GRUB がある場合)。

---

Acronis スタートアップ リカバリ マネージャを有効にするには、システム ディスク (Linux の場合は /boot パーティション) の空き容量が少なくとも 100 MB 必要です。

---

GRUB ブート ローダーを使用しておらず、また GRUB ブート ローダーがマスタ ブート レコード (MBR) 内にインストールされていない場合、Acronis スタートアップ リカバリ マネージャをアクティブ化すると、そのブート コードで MBR が上書きされます。したがって、サードパーティ製のブート ローダーがインストールされている場合は、再度アクティブ化する必要がある場合があります。

Linux で GRUB 以外のブート ローダー (LILO など) を使用する場合は、Acronis スタートアップ リカバリ マネージャをアクティブ化する前に、MBR ではなく Linux のルート (またはブート) パーティションのブート レコードにブート ローダーをインストールすることを検討してください。または、アクティブ化した後に手動でブート ローダーを再設定してください。

## アクティブ化しない

起動時の「Acronis スタートアップ リカバリ マネージャを起動するには、F11 を押してください」というメッセージ(または GRUB のメニュー項目)を無効にします。Acronis スタートアップ リカバリ マネージャが無効の状態、システムの起動に失敗した場合、システムを復元するには次のいずれかを実行する必要があります。

- 別のブータブル メディアからコンピュータを起動する。
- Acronis PXE サーバーまたは Microsoft リモート インストール サービス(RIS)からネットワーク ブートを使用する。

## 9 管理対象のコンピュータの管理

ここでは、管理対象のコンピュータに接続されているコンソールのナビゲーション ツリーで使用できるビューと、各ビューの使用方法について説明します。

### 9.1 バックアップの計画およびタスク

**[バックアップの計画およびタスク]** ビューには、常に指定したコンピュータのデータ保護に関する情報が表示されます。これにより、バックアップ計画とタスクを監視および管理できます。

バックアップ計画によってコンピュータで現在実行されている処理を特定するには、バックアップ計画の実行状態 (161ページ)を確認します。バックアップ計画の実行状態は、計画の最新アクティビティの状態を累積したものです。バックアップ計画のステータス (161ページ)によって、データが正常に保護されたかどうかを確認できます。

タスクの現在の進行状況を追跡するには、タスクの状態 (162ページ)を調べます。タスクの結果を確認するには、タスクのステータス (162ページ)を確認します。

#### 一般的なワークフロー

- フィルタを使用して、バックアップ計画テーブルから目的のバックアップ計画(タスク)を表示します。デフォルトでは、管理対象のコンピュータのすべての計画が名前順にテーブルに表示されます。不要な項目を非表示にしたり、非表示の項目を再表示したりすることもできます。詳細については、「テーブル項目の、並べ替え、フィルタ処理、および設定 (15ページ)」を参照してください。
- バックアップ テーブルで、バックアップ計画(タスク)を選択します。
- ツールバーのボタンを使用して、選択した計画(タスク)の操作を行います。詳細は、「バックアップ計画およびタスクでの操作 (158ページ)」を参照してください。
- 選択した計画(タスク)の詳細情報を確認するには、ウィンドウ下部の情報パネルを使用します。ペインはデフォルトでは折りたたまれています。パネルを展開するには、矢印(▲)をクリックします。このペインの内容は、**[計画の詳細]** (168ページ) ウィンドウと **[タスクの詳細]** (169ページ) ウィンドウにもそれぞれ重複して表示されます。

#### 9.1.1 バックアップ計画およびタスクでの操作

バックアップ計画およびタスクを使用して操作を実行するためのガイドラインを次に示します。

##### 制限事項

- コンピュータの管理者権限を持たないユーザーは、他のユーザーが所有する計画またはタスクを実行または変更することはできません。
- 実行中のバックアップ計画またはタスクを変更または削除することはできません。
- 集中管理用バックアップ計画またはタスクは管理サーバー側でのみ変更または削除することができます。

操作目的	操作手順
新しいバックアップ	 <b>[新規作成]</b> をクリックし、次のいずれかを選択します。

操作目的	操作手順
計画またはタスクの作成	<ul style="list-style-type: none"> <li>▪ バックアップ計画 (33ページ)</li> <li>▪ 復元タスク (95ページ)</li> <li>▪ ベリファイ タスク (131ページ)</li> </ul>
計画またはタスクの詳細の表示	<p> <b>[詳細]</b> をクリックします。</p> <p>それぞれの <b>[計画の詳細]</b> (168ページ) ウィンドウまたは <b>[タスクの詳細]</b> (169ページ) ウィンドウで計画またはタスクの詳細を確認します。</p>
計画またはタスクのログの表示	<p> <b>[ログ]</b> をクリックします。</p> <p><b>[ログ]</b> (169ページ) ビューが開かれ、ログ エントリの一覧が、計画/タスク関連のアクティビティでグループ化されて表示されます。</p>
計画またはタスクの実行	<p><b><u>バックアップ計画</u></b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1.  <b>[実行]</b> をクリックします。</li> <li>2. ドロップダウン リストで、実行する計画のタスクを選択します。</li> </ol> <p>バックアップ計画を実行すると、その計画から選択したタスクがスケジュールや条件にかかわらず直ちに開始されます。</p> <p><b><u>タスク</u></b></p> <p> <b>[実行]</b> をクリックします。</p> <p>タスクは、スケジュールや条件にかかわらず直ちに実行されます。</p>
計画またはタスクの停止	<p> <b>[停止]</b> をクリックします。</p> <p><b><u>バックアップ計画</u></b></p> <p>実行中のバックアップ計画を停止すると、そのタスクがすべて停止されます。したがって、すべてのタスク処理は中断されます。</p> <p><b><u>タスク</u></b></p> <p>タスクを停止すると、その処理(復元、ベリファイ、エクスポート、変換など)が中断されます。タスクは<b>アイドル</b>状態になります。タスクのスケジュール(作成されている場合)は、引き続き有効です。処理を完了するには、タスクを再実行する必要があります。</p> <p><b>復元タスクを停止した場合の動作</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>▪ ディスクの復元: 中断された処理によって、ターゲット ディスクが変更される可能性があります。タスクの実行から経過した時間によっては、ターゲット ディスクが初期化されていない場合、ディスクの領域が割り当てられていない場合、または、復元されたボリュームと復元されていないボリュームが混在する場合などがあります。ディスク全体を復元するには、タスクを再実行してください。</li> <li>▪ ボリュームの復元: ターゲット ボリュームは削除され、その領域は未割り当てになります。復元が正常終了しなかった場合も同じ結果になります。「失われた」ボリュームを復元するには、タスクを再実行してください。</li> <li>▪ ファイルまたはフォルダの復元: 中断された処理によって、復元先のフォルダが変更される可能性があります。タスクの実行から経過した時間によっては、復元されたファイルと復元されていないファイルが混在する場合があります。すべてのファイルを復元するには、タスクを再実行してください。</li> </ul>

操作目的	操作手順
計画またはタスクの編集	 <b>[編集]</b> をクリックします。 バックアップ計画の編集は、次の <b>制限事項</b> を除いて、作成 (33ページ)と同じ方法で実行します。 作成されたアーカイブが空ではない(つまり、バックアップが含まれる)場合は、バックアップ計画を編集する際に、すべてのバックアップ スキームのオプションを使用できないことがあります。 1. バックアップ スキームを GFS(Grandfather-Father-Son)またはハノイの塔に変更できません。 2. ハノイの塔スキームを使用すると、レベル数を変更できません。 他のすべての場合は、バックアップ スキームの変更が可能で、既存のアーカイブが新しいバックアップ スキームで作成されているかのように機能します。空のアーカイブでは、すべての変更が可能です。
バックアップ計画のクローン作成	 <b>[クローン]</b> をクリックします。 元のバックアップ計画のクローンは「<元の計画名>のクローン」というデフォルト名で作成されません。クローン作成された計画はその直後に無効になるため、元の計画と同時に実行されることはありません。クローン作成された計画を有効にする前に、その設定を編集できます。
計画を有効にする	 <b>[有効にする]</b> をクリックします。 以前に無効になったバックアップ計画が、再びスケジュールどおりに実行されます。
計画を無効にする	 <b>[無効にする]</b> をクリックします。 バックアップ計画が、スケジュールどおりに実行されなくなります。ただし、手動で開始することはできます。手動で実行した後は、その計画は無効のままになります。再び有効にすると、計画は通常どおり実行されます。
計画をエクスポートする	 <b>[エクスポート]</b> をクリックします。 作成するファイルのパスおよび名前を指定します。詳細については、「バックアップ計画のエクスポートとインポート (163ページ)」を参照してください。
計画をインポートする	 <b>[インポート]</b> をクリックします。 以前にエクスポートした計画を含むファイルのパスと名前を指定します。詳細については、「バックアップ計画のエクスポートとインポート (163ページ)」を参照してください。
計画またはタスクの削除	 <b>[削除]</b> をクリックします。

## 9.1.2 バックアップ計画およびタスクの状態およびステータス

### バックアップ計画の実行状態

バックアップ計画の状態は、計画のタスク/アクティビティの状態を累積したものです。

	状態	判断方法	対処方法
1	[ユーザーによる操作が必要]	少なくとも 1 つのタスクでユーザーによる操作が必要です。 それ以外の場合は、2 をご参照ください。	ユーザーによる操作が必要なタスク(必要な操作が表示されます)を特定します。次に、タスクを停止するか、タスクが実行できるようにします(メディアの交換、格納域への領域の追加、読み取りエラーの無視、不足している Acronis セキュア ゾーンの作成など)。
2	[実行中]	少なくとも 1 つのタスクが実行中です。 それ以外の場合は、3 をご参照ください。	操作は必要ありません。
3	[待機中]	少なくとも 1 つのタスクが待機中です。 それ以外の場合は、4 をご参照ください。	条件が満たされるのを待機している場合は、この状況は正常ですが、バックアップの遅延が長くなると、危険性が高まります。この場合の解決策は、タスクが強制的に開始されるまでの最大遅延時間を設定するか (93ページ)、条件を強制的に満たすことです(ユーザーへのログオフの指示、必要なネットワーク接続のアクティブ化)。 別のタスクによってロックされている必要なリソースを待機している場合は、タスクの開始が遅れたり、特定の理由によってタスクの実行が通常より大幅に長引いて、別のタスクが開始できなくなると、一時的な待機が発生することがあります。障害となっているタスクが終了すると、この状況は自動的に解決します。あるタスクに時間がかかりすぎているために次のタスクが開始できないときは、そのタスクを停止することを検討してください。 計画が正しくスケジュールされていないために、タスクがいつまでも重複している可能性があります。この場合は、計画を編集することで解決します。
4	[アイドル]	すべてのタスクがアイドルです。	操作は必要ありません。

### バックアップ計画のステータス

バックアップ計画のステータスは、エラー、警告、OK のいずれかです。

バックアップ計画のステータスは、その計画のタスク/アクティビティの最後の実行結果から導かれます。

	ステータス	判断方法	対処方法
1	エラー	少なくとも 1 つのタスクが失敗しました。	失敗したタスクを特定します。次に、タスクのログを確認して失敗の原因を特定してから、次の 1 つ以上の操作を行います。

		それ以外の場合は、2 をご参照ください。	<ul style="list-style-type: none"> <li>▪ 失敗の原因を除去します。必要に応じて、失敗したタスクを手動で開始します。</li> <li>▪ ローカルの計画が失敗していた場合は、今後失敗しないようにローカルの計画を編集します。</li> <li>▪ 集中管理用計画が失敗していた場合は、管理サーバーで集中管理用バックアップ計画を編集します。</li> </ul>
2	<b>警告</b>	少なくとも 1 つのタスクが警告を伴って正常終了しました。  それ以外の場合は、3 をご参照ください。	ログを表示して警告を確認します。必要に応じて、今後の警告や失敗を防止するための操作を実行します。
3	<b>OK</b>	すべてのタスクが正常に完了しました。	操作は必要ありません。バックアップ計画のどのタスクもまだ開始されていない場合にバックアップ計画が OK になっていることがあります。

## タスクの状態

タスクの状態は、**[アイドル]**、**[待機中]**、**[実行中]**、**[ユーザーによる操作が必要]** のいずれかです。タスクの初期状態は、**[アイドル]** です。

タスクを手動で開始するか、スケジュールで指定されたイベントが発生すると、タスクの状態は **[実行中]** または **[待機中]** になります。

### [実行中]

スケジュールで指定されたイベントが発生し、バックアップ計画で設定されたすべての条件が満たされ、必要なリソースをロックする他のタスクが実行されていない場合は、タスクの状態は **[実行中]** に変化します。この状況では、タスクの実行を妨げるものは何もありません。

### [待機中]

タスクを開始しようとして、同じリソースを使用する別のタスクが既に実行中の場合は、タスクの状態は **[待機中]** に変化します。特に、複数のバックアップ タスクを 1 台のコンピュータ上で同時に実行することはできません。また、バックアップ タスクと復元タスクが同じリソースを使用している場合、それらのタスクを同時に実行することもできません。他のタスクによってリソースのロックが解除されると、待機中のタスクの状態は **[実行中]** になります。

スケジュールで指定されたイベントが発生したが、バックアップ計画で設定された条件が満たされない場合も、タスクの状態が **[待機中]** に変化することがあります。詳細については、「タスクの開始条件 (93ページ)」を参照してください。

### [ユーザーによる操作が必要]

実行中のタスクにより、メディアの交換、読み取りエラーの無視などでユーザーによる操作が必要になると、タスクの状態が「**ユーザーによる操作が必要**」に変化することがあります。タスクの次の状態は、**[アイドル]**(ユーザーがタスクの停止を選択した場合)、または**[実行中]**(無視、再試行、または再起動など、タスクの状態を **[実行中]** に移行する別の操作を選択した場合)になります。

## タスクのステータス

タスクのステータスは、**[エラー]**、**[警告]**、**[OK]** のいずれかです。

タスクのステータスは、そのタスクの前回の実行結果から導かれます。

	ステータス	判断方法	対処方法
1	エラー	前回の結果が「失敗」	失敗したタスクの特定: タスクのログを確認して失敗の原因を特定してから、次の 1 つ以上の操作を行います。 <ul style="list-style-type: none"> <li>失敗の原因の除去: 必要に応じて、失敗したタスクを手動で開始します(オプション)。</li> <li>今後失敗ないように失敗したタスクを編集します。</li> </ul>
2	警告	前回の結果が「警告を伴って正常終了」、またはタスクが停止	ログを表示して警告を確認する: 必要に応じて、今後の警告や失敗を防止するための操作を実行します(オプション)。
3	OK	前回の結果が「正常終了」、または「停止」	「停止」という状態は、タスクが開始されていないか、タスクが開始されたがまだ終了していないために結果が不明であることを意味します。タスクが今まで開始されなかった理由を解明する必要がある場合があります。

### 9.1.3 バックアップ計画のエクスポートとインポート

エクスポート処理が実行されると、バックアップ計画の完全な設定が格納されたファイルが作成されます。そのファイルを別のコンピュータにインポートして、エクスポートされたバックアップ計画を再使用することができます。

集中管理されたバックアップ計画は、管理サーバーからエクスポートして、管理サーバーにのみインポートできます。計画は、インポート時またはインポート後に Acronis Backup & Recovery 11 グラフィカル ユーザー インターフェイスで編集することができます。バックアップ計画は .xml ファイルにエクスポートされるので、テキスト エディタでバックアップ計画のエクスポート ファイルを編集 (164ページ) することができます。パスワードは、エクスポート ファイル内で暗号化されます。

#### 使用例

- **エージェントの再インストール**

エージェントを再インストールする前にバックアップ計画をエクスポートし、再インストール後にインポートします。

- **複数のコンピュータへのバックアップ計画の配置**

セキュリティ上の制限などにより、Acronis Backup & Recovery 11 管理サーバーを使用できない環境があります。それにもかかわらず、複数のコンピュータ上で同一のバックアップ計画を使用する必要があります。これらのコンピュータの 1 つからこの計画をエクスポートし、他のコンピュータにその計画をファイルとして配置 (166ページ) します。

#### ログイン情報の調整

スケジュールされた計画に、その計画のタスクが実行されるユーザー アカウントのログイン情報が含まれています。計画が、同じログイン情報を持つユーザー アカウントが存在しないコンピュータでは開始されません。このような状況を避けるには、次のいずれかの手順を実行します。

- 同じログイン情報を持つアカウントを 2 台目のコンピュータにも作成します。
- エクスポート ファイル内のログイン情報を編集した後に、インポートします。詳細については、「エクスポート ファイルの編集 (164ページ)」を参照してください。
- 計画をインポートした後にログイン情報を編集します。

手動で開始するバックアップ計画を作成する場合、[計画のパラメータ] > [タスクのログイン情報、コメント、ラベルの表示..] の [現在のユーザーで実行] 設定は変更しないでください。この設定により計画のタスクは常に、タスクを開始したユーザーのアカウントで実行されます。

## 実行する手順

### バックアップ計画をエクスポートするには

1. [バックアップの計画およびタスク] ビューで、バックアップ計画を選択します。
2.  [エクスポート] をクリックします。
3. エクスポート ファイルのパスおよび名前を指定してください。
4. 選択内容を確認入力します。

### バックアップ計画をインポートするには

1. [バックアップの計画およびタスク] ビューで  [インポート] をクリックします。
2. エクスポート ファイルのパスおよび名前を指定してください。
3. Acronis Backup & Recovery 11 によって、[バックアップ計画の編集] ページが表示されます。ほとんどの場合、バックアップ先に対する計画のログイン情報およびアクセス ログイン情報をアップデートする必要があります。必要な変更を実行し、[保存] をクリックします。アップデートしない場合、[キャンセル] をクリックします。計画がそのままインポートされます。

## エクスポート ファイルの編集

エクスポート ファイルは .xml ファイルであり、テキスト エディタで編集できます。

ここでは、有用な変更を行う方法について説明します。

### ログイン情報の変更方法

エクスポート ファイルでは、<login> タグにはユーザー名が含まれ、<password> タグにはユーザー パスワードが含まれています。

ログイン情報を変更するには、対応するセクションで <login> および <password> タグを変更します。

- 計画のログイン情報: <plan><options><common\_parameters> セクション
- バックアップされたデータのログイン情報へのアクセス: <plan><targets><inclusions> セクション
- バックアップ先のログイン情報へのアクセス: <plan><locations> セクション

特に <password> タグの変更に注意してください。暗号化されたパスワードが含まれているタグは、<password encrypted="true">...</password> となります。

### 暗号化されたパスワードを変更するには

1. コマンド ラインで、acronis\_encrypt ユーティリティを実行します。

```
acronis_encrypt UserPassword#1
```

(UserPassword#1 は 暗号化したいパスワードです)

2. ユーティリティによって文字列が出力されます。たとえば、「XXXYYYZZZ888」などです。
3. この文字列をコピーし、次のようにタグに貼り付けます。

```
<password encrypted="true">XXXYYYZZZ888</password>
```

acronis\_encrypt ユーティリティは Acronis Backup & Recovery 11 管理コンソールがインストールされているすべてのコンピュータで使用できます。ユーティリティへのパスは次のとおりです。

- %ProgramFiles%/Common Files/Acronis/Utils: 32 ビット版 Windows
- %ProgramFiles(x86)%/Common Files/Acronis/Utils: 64 ビット版 Windows
- /usr/sbin: Linux

### バックアップ計画でエージェントのログイン情報が使用されるようにする方法

エクスポート ファイルをインポートまたは配置する前に、目的の `<login>` タグの値を削除します。これにより、インポート済みまたは配置済み計画で、エージェント サービスのログイン情報が使用されるようになります。

#### 例

バックアップ計画がエージェントのログイン情報で実行されるようにするには、`<login>` タグ (`<plan><options><common_parameters>` セクション)を検索します。タグの形式は次のとおりです。

```
<login>
  Administrator
</login>
<password encrypted="true">
  XXXYYYZZZ888
</password>
```

`<login>` タグの値を削除すると次のようになります。

```
<login>
</login>
<password encrypted="true">
  XXXYYYZZZ888
</password>
```

### バックアップするアイテムの変更方法

#### 直接指定されたアイテムを、直接指定された別のアイテムで置き換える

`<plan><targets><inclusions>` セクションで、次の手順を実行します。

1. `<ID>` タグを削除します。
2. `<Path>` タグの値を編集します。この値には、バックアップするデータに関する情報が含まれています。たとえば、「C:」を「D:」で置き換えます。

#### 直接指定されたアイテムを、選択テンプレートで置き換える

`<plan><options><specific><inclusion_rules>` セクションで、次の手順を実行します。

1. 必要なテンプレートの種類に応じて、`<rules_type>` タグに値「disks」または「files」を追加します。
2. `<rules>` タグを追加します。
3. `<rules>` タグに、`<rule>` と必要なテンプレートを追加します。テンプレートは、直接指定されたアイテムに対応する必要があります。たとえば、指定されたアイテムの値が「disks」である場合、[SYSTEM]、[BOOT]、および [Fixed Volumes] テンプレートは使用できますが、[All Files] または [All Profiles Folder] テンプレートは使用できません。テンプレートの詳細については、「ボリュームの選択ルール」および「ファイルおよびフォルダの選択ルール」を参照してください。

4. 別のテンプレートを追加するには、手順 3 を繰り返します。

## 例

次の例は、直接指定されたアイテムを選択テンプレートで置き換える方法を示しています。

元のセクション:

```
<specific>
  <backup_type>
    disks
  </backup_type>
  <disk_level_options />
  <file_level_options />
  <inclusion_rules />
</specific>
```

選択テンプレートを適用した後のセクション:

```
<specific>
  <backup_type>
    disks
  </backup_type>
  <disk_level_options />
  <file_level_options />
  <inclusion_rules>
    <rules_type>
      disks
    </rules_type>
    <rules>
      <rule>
        [BOOT]
      </rule>
      <rule>
        [SYSTEM]
      </rule>
    </rules>
  </inclusion_rules>
</specific>
```

### 9.1.4 バックアップ計画のファイルとしての配置

何らかの理由によりお使いの環境で Acronis Backup & Recovery 11 管理サーバーを実行できず、複数のコンピュータに対して同一のバックアップ計画を適用する必要があるとします。望ましい選択は、1 つのコンピュータからバックアップ計画をエクスポートして、他のすべてのコンピュータに配置することです。

#### 仕組み

配置済みの計画を保存するための専用フォルダが、エージェントがインストールされるすべてのコンピュータに存在します。エージェントは、専用フォルダ内の変更を追跡します。新しい .xml ファイルが専用フォルダ内に作成されると同時に、エージェントは、そのファイルからバックアップ計画をインポートします。専用フォルダ内の .xml ファイルを変更(または削除)すると、エージェントによって、適切なバックアップ計画が自動的に変更(または削除)されます。

## エクスポート ファイルの編集

以上のようにインポートされたバックアップ計画は、グラフィカル ユーザー インターフェイスでは編集できません。配置の前または後に、テキスト エディタを使用してエクスポート ファイルを編集 (164ページ) できます。

配置の前にファイルを編集する場合、その変更内容は、計画が配置されるすべてのコンピュータに反映されます。テンプレート([SYSTEM] や [All Profiles Folder] など)を使用して、バックアップするアイテムのディレクトリ(C: や C:\Users など)を変更してもよいでしょう。テンプレートの詳細については、「ボリュームの選択ルール」および「ファイルおよびフォルダの選択ルール」を参照してください。

計画によって使用されるログイン情報を変更する必要がある場合もあります。

### バックアップ計画をファイルとして配置するには

1. コンピュータの 1 つにバックアップ計画を作成します。
2. バックアップ計画を xml ファイルにエクスポートします (163ページ)。
3. (オプション)エクスポート ファイルを編集します。詳細については、「エクスポート ファイルの編集 (164ページ)」を参照してください。
4. この .xml ファイルを専用フォルダに配置します。

専用フォルダのパス

### Windows の場合

専用フォルダへのデフォルト パスは、**%ALLUSERSPROFILE%\Acronis\BackupAndRecovery\import** です。

パスは、レジストリ キー

**HKEY\_LOCAL\_MACHINE\SOFTWARE\Acronis\MMS\Configuration\Import\folderPath** に保存されています。

キーが存在しない場合、エージェントによって専用フォルダは監視されていません。

パスを変更するには、キーを編集します。変更内容は、エージェントを再起動すると反映されます。

### Linux の場合

専用フォルダへのデフォルト パスは **/usr/lib/Acronis/BackupAndRecovery/import** です。

パスは、ファイル **/etc/Acronis/BackupAndRecovery.config** に保存されています。

パスを変更するには、次のタグで、**/usr/lib/Acronis/BackupAndRecovery/import** 値を編集してください。

```
<key name="Settings">
...
  <value name="ImportFolderPath" type="TString">
    "/usr/lib/Acronis/BackupAndRecovery/import"
  </value>
...
</key>
```

変更内容は、エージェントを再起動すると反映されます。

タグが存在しない場合、エージェントによって専用フォルダは監視されていません。

## 9.1.5 バックアップ計画の詳細

**[バックアップ計画の詳細]** ウィンドウには、選択したバックアップ計画のすべての情報が集約されます(**[情報]** ペインにも重複して表示されます)。

計画の実行に対してユーザーによる操作が必要な場合は、それらのメッセージがタブの上部に表示されます。メッセージには、問題に関する簡単な説明、および適切な操作を選択したり、計画を停止したりする操作ボタンが含まれます。

### 詳細

**[バックアップ計画およびタスク]** タブには、選択した計画に関する次の一般的な情報が表示されます。

- **[名前]:** バックアップ計画の名前です。
- **[場所]:** 計画がコンピュータに直接されたのか(ローカルの場所)、管理サーバーからコンピュータに配置されたのか(集中管理用の場所)を示します。
- **[実行状態]:** バックアップ計画の実行状態 (161ページ)を示します。
- **[ステータス]:** バックアップ計画のステータス (161ページ)です。
- **[コンピュータ]:** バックアップ計画が存在しているコンピュータの名前です(集中管理用バックアップ計画の場合のみ)。
- **[スケジュール]:** タスクがスケジュールされているのか、手動で起動するように設定されているのかを示します。
- **[前回の開始時刻]:** 前回の計画またはタスクが開始してからの経過時間を示します。
- **[配置の状態]:** バックアップ計画の配置状態のことです(集中管理用バックアップ計画の場合のみ)。
- **[前回の完了時刻]:** 前回の計画またはタスクが終了してからの経過時間を示します。
- **[前回の結果]:** 前回の計画またはタスクの実行結果を示します。
- **[種類]:** バックアップ計画またはタスクの種類を示します。
- **[所有者]:** 計画を作成したユーザーまたは最後に変更したユーザーの名前を示します。
- **[次回の開始時刻]:** 計画またはタスクが次回開始される時刻を示します。
- **[コメント]:** 計画の説明です(ある場合)。

### タスク

**[タスク]** タブには、選択したバックアップ計画のすべてのタスクの一覧が表示されます。選択したタスクの詳細を表示するには、**[詳細]** をクリックします。

### 進行状況

**[進行状況]** タブには、選択したバックアップ計画の実行中アクティビティ、または実行開始待機中のアクティビティがすべて一覧表示されます。

### 履歴

**[履歴]** タブでは、バックアップ計画におけるすべての実行済みアクティビティの履歴を確認できます。

### バックアップの対象

**[ソース]**タブには、バックアップ対象に選択されたデータに関する次の情報が示されます。

- **[ソースの種類]** - バックアップ対象に選択されたデータの種類。
- **[バックアップする項目]** - バックアップ対象に選択された項目とそのサイズ。

### バックアップ先

**[保存先]** タブに表示される情報は次のとおりです。

- **[名前]**: アーカイブの名前です。
- **[場所]**: アーカイブが保存される格納域の名前またはフォルダへのパス。
- **[アーカイブのコメント]**: アーカイブに対するコメント(表示される場合)。
- **[2 番目のロケーション]**、**[3 番目のロケーション]**、**[4 番目のロケーション]**、**[5 番目のロケーション]**: アーカイブのコピー先または移動先の名前(バックアップ計画で指定されている場合)。

### 設定

**[設定]** タブに表示される情報は次のとおりです。

- **[バックアップ スキーム]**: 選択されたバックアップ スキームと、スケジュールでのそのすべての設定。
- **[ベリファイ]**(選択された場合): ベリファイの実行前後のイベントとベリファイのスケジュール。ベリファイが設定されていない場合、**[なし]** が表示されます。
- **[バックアップ オプション]**: デフォルト値に対して変更されるバックアップ オプション。

## 9.1.6 タスクアクティビティの詳細

**[タスクアクティビティの詳細]** ウィンドウ(**[情報]** パネルにもコピーされます)には、選択したタスクまたはアクティビティに関するすべての情報が、複数のタブに集約されます。

タスクまたはアクティビティに対してユーザーによる操作が必要な場合は、メッセージと操作ボタンがタブの上に表示されます。メッセージには、問題に関する簡単な説明が含まれます。ボタンを使用して、タスクやアクティビティを再試行または停止できます。

## 9.2 ログ

ローカル イベント ログには、コンピュータ上で Acronis Backup & Recovery 11 によって実行された処理の履歴が記録されます。

ログ エントリの単純な一覧を表示するには、**[表示]** ドロップダウン リストで **[イベント]** を選択し、アクティビティごとにグループ化されたログ エントリを表示するには、**[アクティビティ]** を選択します。選択したログ エントリまたはアクティビティの詳細は、**[ログ]** ビューの下部にある **[情報]** パネルに表示されます。

テーブルに目的のアクティビティおよびログ エントリを表示するには、フィルタを使用します。不要な項目を非表示にしたり、非表示の項目を再表示したりすることもできます。詳細については、「テーブル項目の、並べ替え、フィルタ処理、および設定 (15ページ)」を参照してください。

ログ エントリを操作するには、アクティビティまたはログ エントリを選択します。詳細については、「ログ エントリでの操作 (170ページ)」および「ログ エントリの詳細 (171ページ)」をご参照ください。

## 9.2.1 ログ エントリの操作

次に説明するすべての操作は、ログのツールバーで対応する項目をクリックすると実行されます。また、すべての操作は、コンテキスト メニュー(ログ エントリまたはアクティビティを右クリックして表示します)からも実行できます。

ログ エントリの操作を実行するためのガイドラインを次に示します。

操作目的	操作手順
単一のアクティビティの選択	<p><b>[表示]</b> ドロップダウン リストで <b>[アクティビティ]</b> を選択して、アクティビティをクリックします。</p> <p><b>[情報]</b> ペインに選択されたアクティビティのログ エントリが表示されます。</p>
単一のログ エントリの選択	該当するログ エントリをクリックします。
複数のログ エントリの選択	<ul style="list-style-type: none"> <li>▪ エントリが連続していない場合: <b>Ctrl</b> キーを押しながら、ログ エントリを 1 つずつクリックします。</li> <li>▪ エントリが連続している場合: ログ エントリを 1 つ選択し、次に <b>Shift</b> キーを押しながら別のエントリをクリックします。最初に選択したログ エントリと最後に選択したログ エントリの間にあるすべてのログ エントリが選択されます。</li> </ul>
ログ エントリの詳細の表示	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. ログ エントリを 1 つ選択します。</li> <li>2. 次のいずれかを実行します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>▪ 選択したログ エントリをダブルクリックします。</li> <li>▪  <b>[詳細]</b> をクリックします。</li> </ul> </li> </ol> <p>ログ エントリの詳細が表示されます。ログ エントリの操作の詳細は、「ログ エントリの詳細」を参照してください。</p>
選択したログ エントリのファイルへの保存	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. <b>[アクティビティ]</b> を表示してアクティビティを選択するか、または <b>[イベント]</b> を表示してログ エントリを選択します。</li> <li>2.  <b>[選択項目をファイルに保存]</b> をクリックします。</li> <li>3. 開いたウィンドウで、ファイルのパスと名前を指定します。</li> </ol> <p>選択したアクティビティまたは選択したログ エントリのすべてのログ エントリは、指定したファイルに保存されます。</p>
すべてのログ エントリのファイルへの保存	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. フィルタが設定されないようにします。</li> <li>2.  <b>[すべてをファイルに保存]</b> をクリックします。</li> <li>3. 開いたウィンドウで、ファイルのパスと名前を指定します。すべてのログ エントリは指定したファイルに保存されます。</li> </ol>
フィルタ処理されたすべてのログ エントリのファイルへの保存	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. フィルタを設定して、フィルタ条件を満たすログ エントリの一覧を取得します。</li> <li>2.  <b>[すべてをファイルに保存]</b> をクリックします。</li> <li>3. 開いたウィンドウで、ファイルのパスと名前を指定します。</li> </ol> <p>リスト内のすべてのログ エントリは指定したファイルに保存されます。</p>
すべてのログ エントリの削除	<p> <b>[ログの消去]</b> をクリックします。</p> <p>すべてのログ エントリがログから削除され、新しいログ エントリが作成されます。このログ エントリには、ログ エントリを削除したユーザーと日時に関する情報が含まれま</p>

す。
----

## 9.2.2 ログ エントリの詳細

選択したログ エントリに関する詳細情報が表示され、詳細をクリップボードにコピーすることができます。

次または前のログ エントリの詳細を表示するには、適宜、下向き矢印ボタンまたは上向き矢印ボタンをクリックします。

詳細をコピーするには、[クリップボードにコピー] ボタンをクリックします。

### ログ エントリのデータ フィールド

ログ エントリには、次のデータ フィールドがあります。

- **[種類]:** イベントの種類(エラー、警告、情報)です。
- **[日付と時刻]:** イベントが発生した日付と時刻です。
- **[バックアップ計画]:** イベントに関連するバックアップ計画です(ある場合)。
- **[タスク]:** イベントに関連するタスクです(ある場合)。
- **[コード]:** 空白、またはイベントの種類がエラーのときはプログラム エラー コードが示されます。エラー コードは、アクロニスのサポート サービスが問題を解決するために使用する整数です。
- **[モジュール]:** 空白、またはエラーが発生したプログラム モジュールの番号が示されます。アクロニスのサポート サービスが問題を解決するために使用する整数です。
- **[所有者]:** バックアップ計画の所有者 (21ページ)のユーザー名です。
- **[メッセージ]:** イベントのテキストによる説明です。

日時の形式は、ロケールの設定によって異なります。

## 9.3 アラート

アラートとは、実際の問題または潜在的な問題に関して警告するメッセージです。[アラート] ビューでは、現在のアラートを監視し、アラートの履歴を表示することによって問題を素早く特定および解決できます。

### アクティブ アラートと非アクティブ アラート

アラートは、アクティブと非アクティブのどちらかの状態となります。アクティブ状態は、アラートの原因となった問題がまだ存在していることを示します。アラートの原因となった問題が手動または自動で解決すると、アクティブ アラートは非アクティブになります。

---

**注意:** 常にアクティブとなるアラートの種類が 1 つあります。「バックアップが作成されていません」です。これは、このアラートの原因が解決され、その後、バックアップが正常に作成されたとしても、当初はバックアップが作成されなかったという事実は変わらないからです。

---

## アラートの原因となった問題の修正

アラートの原因となった問題を発見および修正するには、**[問題の修正]** をクリックします。対応するビューが表示されます。このビューで、問題を調査し、解決するうえで必要な手順を実行することができます。

必要に応じて、**[詳細の表示]** をクリックして、選択したアラートに関する詳細を表示することができます。

## アラートの受け入れ

デフォルトでは、**[現在のアラート]** テーブルに、受け入れられなかったアクティブ アラートおよび非アクティブ アラートの両方が一覧表示されます。アラートを受け入れるには、そのアラートを選択してから、**[受け入れ]** をクリックします。アラートを受け入れることによって、このアラートを認め、そのアラートに対して責任を持つことに同意します。

**[受け入れられたアラート]** テーブルには、受け入れられたアラートの履歴が保存されます。この表で、アラートを受け入れたユーザーと、受け入れられた時間が分かります。手動(**[削除]** および **[すべて削除]** ボタンを使用します)、または自動で、両方の状態の受け入れられたアラートをテーブルから削除できます。このセクションの「アラートの設定」を参照してください。

テーブルの内容をすべて \*.txt または \*.csv ファイルにエクスポートするには、**[すべてをファイルに保存]** をクリックします。

## アラートの設定

アラートを設定するには、**[アラート]** ビューの上部にある次のオプションを使用します。

- **[アラートの表示/非表示]** (18ページ): **[アラート]** ビューに表示するアラートの種類を指定します。
- **[通知]** (175ページ): アラートに関する電子メール通知を設定します。
- **[設定]** (173ページ): 非アクティブなアラートを **[受け入れられたアラート]** テーブルに自動的に移動するかどうかを指定し、**[受け入れられたアラート]** テーブルにおける受け入れられたアラートの保持期間を設定します。

## 9.4 システム情報の収集

システム情報収集ツールは、管理コンソールが接続されているコンピュータの情報を収集し、それをファイルに保存します。このファイルは、Acronis テクニカル サポートにお問い合わせになるときに、テクニカル サポートに提供することができます。

このオプションは、ブータブル メディア、およびエージェント for Windows、エージェント for Linux、または Acronis Backup & Recovery 11 管理サーバーがインストールされているコンピュータで使用できます。

システム情報を収集するには、次の手順に従います。

1. 管理コンソールで、**[ヘルプ]** > [**<コンピュータ名> からシステム情報を収集する**] を選択します。
2. システム情報のファイルを保存する場所を指定します。

## 9.5 コンピュータのオプション調整

管理対象のコンピュータで動作するすべての Acronis Backup & Recovery 11 エージェントの一般的な動作はコンピュータ オプションによって定義されるため、これらのオプションはコンピュータ固有と見なすことができます。

コンピュータ オプションにアクセスするには、管理対象のコンピュータにコンソールを接続し、トップメニューから **[オプション]** > **[コンピュータ オプション]** を選択します。

### 9.5.1 カスタマ エクスペリエンス プログラム

このオプションは、コンピュータが Acronis カスタマ エクスペリエンス プログラム(ACEP)に参加するかどうかを定義します。

**[ACEP に参加する]** を選択すると、ハードウェア構成、使用頻度の最も高い機能と最も低い機能、および問題に関する情報が自動的にコンピュータから収集されて、定期的に Acronis に送信されます。最終的に、Acronis ユーザーのニーズをよりの確に満たすことができるように、ソフトウェアの改善および機能向上に役立てられます。

Acronis は、個人データを収集しません。ACEP の詳細については、Acronis の Web サイトまたは製品 GUI の参加条件をご参照ください。

オプションは、Acronis Backup & Recovery 11 エージェントのインストール時に設定されます。この設定は、製品 GUI(**[オプション]** > **[コンピュータ オプション]** > **[カスタマ エクスペリエンス プログラム]**)を使用していつでも変更できます。オプションは、グループ ポリシー インフラストラクチャを使用して設定することもできます。グループ ポリシーによって定義された設定は、コンピュータ上でグループ ポリシーを無効にしない限り、製品 GUI では変更できません。

### 9.5.2 アラート

#### アラート管理

**次より古い「受け入れられたアラート」のアイテムは削除する:**

このオプションによって、**[受け入れられたアラート]** テーブルから受け入れられたアラートを削除するかどうか定義します。

デフォルトの設定は、**[無効]** です。

有効にすると、受け入れられたアラートの保存期間を指定できます。この期間より古い受け入れられたアラートは、自動的にテーブルから削除されます。

**アクティブでないアラートを自動的に「受け入れられたアラート」に移動する:**

このオプションによって、非アクティブになるアラートをすべて受け入れて、それらのアラートを自動的に **[受け入れられたアラート]** テーブルに移動するかどうかを定義します。

デフォルトの設定は、**[無効]** です。

有効にすると、このオプションを適用するアラートの種類を指定できます。

## 時刻ベースのアラート

### 前回のバックアップ

このオプションは、コンソールが管理対象のコンピュータ (188ページ) または管理サーバー (187ページ) に接続されている場合に有効です。

このオプションでは、管理対象のコンピュータで一定期間バックアップが実行されなかった場合に警告するかどうかを定義します。ビジネスにとって問題と見なす期間を設定できます。

デフォルトの設定では、前回コンピュータで成功したバックアップが完了してから 5 日以上経過している場合に警告します。

アラートは、[ナビゲーション] ペインの [アラート] ビューに表示されます。コンソールが管理サーバーに接続されている場合、各コンピュータの [前回のバックアップ] 列の値のカラー スキームも、この設定により制御されます。

### 前回の接続

このオプションは、コンソールが管理サーバーまたは登録済みのコンピュータ (191ページ) に接続されている場合に有効です。

このオプションでは、登録済みのコンピュータと管理サーバーの間で一定時間接続が確立されなかった場合に、そのコンピュータへのネットワーク接続の失敗などによって、コンピュータが集中管理されていない可能性があることを警告するかどうかを定義します。問題であると見なす時間の長さを設定できます。

デフォルトの設定では、コンピュータが管理サーバーに前回接続したときから 5 日以上経過している場合に警告します。

アラートは、[ナビゲーション] ペインの [アラート] ビューに表示されます。コンソールが管理サーバーに接続されている場合、各コンピュータの [前回の接続] 列の値のカラー スキームも、この設定により制御されます。

## 9.5.3 電子メールによる通知

このオプションによって、電子メールによる通知を設定できます。

デフォルトの設定は、[無効] です。

電子メールによる通知を設定する手順は、次のとおりです。

1. [SMTP サーバー] フィールドに、SMTP サーバーの名前を入力します。
2. [ポート] フィールドに、SMTP サーバーのポートを設定します。デフォルトでは、ポートは 25 に設定されます。
3. [ユーザー名] フィールドに、ユーザー名を入力します。
4. [パスワード] フィールドにパスワードを入力します。
5. [その他の電子メール パラメータ...] をクリックして、次に示す、その他の電子メール パラメータを設定してから、[OK] をクリックします。
  - [差出人]: メッセージの送信元となるユーザーの電子メール アドレスを入力します。このフィールドが空白の場合、差出人アドレスには宛先アドレスが使用されます。

- **[暗号化を使用する]**: メール サーバーへの暗号化された接続を選択できます。SSL 暗号化または TLS 暗号化のいずれかの種類を選択できます。
- 一部のインターネット サービス プロバイダでは、送信が許可される前に受信メール サーバーによる認証が要求されます。その場合は、**[受信メール サーバーへのログオン]** チェック ボックスをオンにして POP サーバーを有効にし、次の設定を行います。
  - **[受信メール サーバー(POP)]**: POP サーバーの名前を入力します。
  - **[ポート]**: POP サーバーのポートを設定します。デフォルトでは、ポートは 110 に設定されます。
  - **[ユーザー名]**: ユーザー名を入力します。
  - **[パスワード]**: パスワードを入力します。

6. **[OK]** をクリックします。

## アラート通知

Acronis Backup & Recovery 11 では、ユーザーに対して電子メールによってアラートに関する通知を行うことができます。

このオプションを使用することによって、特定の種類のアラートに関する通知を受信するタイミングおよび頻度を指定できます。

デフォルトの設定は、**[無効]** です。

---

**注意:** アラート通知を設定する前に、「電子メールによる通知 (174ページ)」に従い、SMTP サーバーの設定を指定します。

---

### アラート通知を設定するには

1. **[電子メールによる通知を送信する]** チェック ボックスをオンにします。
2. **[電子メール アドレス]** フィールドに、通知の送信先の電子メール アドレスを入力します。複数のアドレスをセミコロンで区切って入力することもできます。
3. **[件名]** フィールドに、通知の件名を入力するか、デフォルト値のままにします。
4. 目的の通知方法を選択します。
  - アラートごと: 新しいアラートが発生すると同時に通知が送信されます。  
**[アラートが表示された後すぐに]** チェック ボックスをオンにします。  
**[アラートの種類を選択...]** をクリックして、受信する通知のアラートの種類を指定します。
  - スケジュールに従う: 特定の期間中に発生したすべてのアラートを含む通知です。スケジュールに従って通知を受信するには  
**[スケジュールに従う]** チェック ボックスをオンにします。  
**[アラートの種類を選択...]** をクリックして、受信する通知のアラートの種類を指定します。  
**[通知スケジュール]** をクリックして、通知の頻度とタイミングを設定します。
5. **[OK]** をクリックします。
6. **[テスト メールを送信中]** をクリックし、設定が正しいかどうかを確認します。

## 9.5.4 イベントトレース

管理対象のコンピュータで動作するエージェントが生成するイベントを、指定した SNMP マネージャに送信できます。イベントトレース オプションをここ以外で変更していなければ、ローカルのすべてのバックアップ計画およびこのコンピュータ上で作成されるすべてのタスクに対してこの設定が有効になります。

ここでの設定は、バックアップ中または復元中に発生するイベントについてのみ上書きできます(「デフォルトのバックアップ オプションおよび復元オプション」を参照)。この場合、ここでの設定は、アーカイブのベリファイまたはクリーンアップなどの、バックアップと復元以外の処理に対して有効になります。

デフォルトのバックアップ オプションと復元オプションの設定は、バックアップ計画や復元タスクを作成するときに、さらに上書きすることができます。この場合、取得する設定は、計画に固有またはタスクに固有のものになります。

### SNMP 通知

このオプションは、Windows および Linux オペレーティング システムの両方で有効です。

このオプションは、ブータブル メディアから起動した場合には使用できません。

このオプションでは、管理対象のコンピュータで動作するエージェントが、イベントを指定した簡易ネットワーク管理プロトコル(SNMP)マネージャに送信する必要があるかどうかを定義します。送信するイベントの種類を選択できます。

ここでの設定は、バックアップ中または復元中に発生するイベントについてのみ、デフォルトのバックアップ オプションおよび復元オプションで、上書きすることができます。この場合、ここでの設定は、アーカイブのベリファイまたはクリーンアップなどの、バックアップと復元以外の処理に対して有効になります。

デフォルトのバックアップ オプションと復元オプションの設定は、バックアップ計画や復元タスクを作成するときに、さらに上書きすることができます。この場合、取得する設定は、計画に固有またはタスクに固有のものになります。

Acronis Backup & Recovery 11 での SNMP の使用の詳細については、「SNMP のサポート (31ページ)」を参照してください。

デフォルトの設定 - オフ

**SNMP メッセージの送信を設定する手順は、次のとおりです。**

1. **[SNMP サーバーにメッセージを送信する]** チェックボックスをオンにします。
2. 次のように適切なオプションを指定します。
  - **[送信するイベントの種類]** - **[すべてのイベント]**、**[エラーと警告]**、または **[エラーのみ]** から、送信するイベントの種類を選択します。
  - **[サーバー名/IP]** - メッセージの送信先となる SNMP 管理アプリケーション実行ホストの名前または IP アドレスを入力します。
  - **[コミュニティ]** - SNMP 管理アプリケーション実行ホストと送信元コンピュータの両方が所属する SNMP コミュニティの名前を入力します。一般的なコミュニティは "public" です。**[テスト メッセージを送信する]** をクリックし、設定が正しいかどうかを確認します。

SNMP メッセージの送信を無効にするには、**[SNMP サーバーにメッセージを送信する]** チェックボックスをオフにします。

メッセージは、UDP 経由で送信されます。

次のセクションには、受信コンピュータの SNMP サービスの設定 (177ページ)に関する追加情報が含まれます。

## 受信コンピュータでの SNMP サービスの設定

### Windows

Windows を実行するコンピュータに SNMP サービスをインストールする手順は、次のとおりです。

1. **[スタート]**→**[コントロール パネル]**→**[プログラムの追加と削除]**→**[Windows コンポーネントの追加と削除]**を選択します。
2. **[管理とモニタ ツール]**を選択します。
3. **[詳細]**をクリックします。
4. **[簡易ネットワーク管理プロトコル(SNMP)]**チェックボックスをオンにします。
5. **[OK]**をクリックします。

オペレーティング システムのインストール ディスクにある Immib2.dll が必要になる場合があります。

### Linux

Linux を実行するコンピュータで SNMP メッセージを受け取るには、net-snmp(RHEL と SUSE 用)または snmpd(Debian 用)パッケージをインストールする必要があります。

SNMP は、**snmpconf** コマンドを使用して設定できます。デフォルトのコンフィギュレーション ファイルは、`/etc/snmp` ディレクトリにあります。

- `/etc/snmp/snmpd.conf` - Net-SNMP SNMP エージェントのコンフィギュレーション ファイル
- `/etc/snmp/snmptrapd.conf` - Net-SNMP トラップ デーモンのコンフィギュレーション ファイル

## 9.5.5 ログのクリーンアップ ルール

このオプションでは、Acronis Backup & Recovery 11 エージェント ログをクリーン アップする方法を指定します。

このオプションでは、エージェント ログ フォルダ(Windows XP/2003 Server では、`%ALLUSERSPROFILE%\Application Data\Acronis\BackupAndRecovery\MMS\LogEvents`)の最大サイズを定義します。

**[最大ログ サイズ]** のデフォルトの設定は **50 MB** です。クリーンアップでは、**最大ログ サイズの 95%** を維持します。

このオプションが有効になっている場合、100 件のログ エントリが記録されるたびに、実際のログ サイズと最大サイズが比較されます。最大ログ サイズを超えた場合、最も古いログ エントリが削除されます。保持するログ エントリの量を選択できます。デフォルト設定の 95% では、ログの大部分が保持されます。最小値の 1% では、ログがほぼクリアされた状態で維持されます。

またこのパラメータは、Acronis 管理用テンプレートを使用して設定できます。

## 10 用語集

### A

#### Acronis Active Restore

システムの復元の開始直後にシステムをオンラインにする Acronis 独自のテクノロジー。システムはバックアップ (183ページ) から起動して、コンピュータが使用可能になり、必要なサービスを提供できるようになります。要求された処理に必要なデータが最高の優先度で復元され、それ以外のすべてのデータはバックグラウンドで復元されます。制限事項:

- バックアップは、ローカル ドライブ(ネットワーク ブート以外の BIOS 経由で使用可能なデバイス)に置かれている必要があります。
- Linux イメージでは動作しません。

#### Acronis Universal Restore

異なるハードウェアまたは仮想コンピュータ上で Windows または Linux の起動を支援する Acronis 独自のテクノロジー。Universal Restore は、ストレージ コントローラ、マザーボード、チップセットなどのオペレーティング システムの起動にとって重要なデバイスの相違に対応します。

次の場合は Universal Restore を使用できません。

- 復元するイメージが Acronis セキュア ゾーン (178ページ)にある場合または
- Acronis Active Restore (178ページ) を使用する場合

いずれの機能も主に同じコンピュータ上での簡単なデータ復元を目的としているためです。

#### Acronis スタートアップ リカバリ マネージャ(ASRM)

ブータブル エージェント (186ページ)の改訂版。システム ディスクに常駐し、起動時に [F11] キーを押すと起動するように設定されています。Acronis スタートアップ リカバリ マネージャを使用すると、ブータブル レスキュー ユーティリティを起動するためのブータブル メディアまたはネットワーク接続が不要になります。

Acronis スタートアップ リカバリ マネージャは、モバイル ユーザーにとって特に役に立ちます。障害が発生した場合、ユーザーはコンピュータを再起動し、[Press F11 for Acronis Startup Recovery Manager...] というプロンプトに対して [F11] キーを押して、通常のブータブル メディアと同じ方法でデータ リカバリを実行します。

制限事項: Windows ローターと GRUB 以外のローダーは、再起動が必要です。

#### Acronis セキュア ゾーン

管理対象のコンピュータ (188ページ)内にあるバックアップ アーカイブ (179ページ)を保存するための安全なボリューム。利点:

- 同じディスクに保存したバックアップからディスクを復元することができます。
- ソフトウェアの誤動作、ウィルス攻撃、オペレータによるエラーからデータ保護するためのコスト効率のよい便利な方法を提供します。

- データをバックアップまたは復元するための別のメディアやネットワーク接続が不要になります。このことは、モバイル ユーザーにとって特に便利です。
- さらにバックアップをコピーする場合の主要なコピー元として使用できます。

制限事項: Acronis セキュア ゾーンはダイナミック ディスク (182ページ) 上に構成できません。

Acronis セキュア ゾーンは、個人用格納域 (188ページ) と見なされます。

## G

### GFS (Grandfather-Father-Son; 祖父-父-息子)

バックアップ アーカイブ (184ページ) のサイズと使用できる復元点 (191ページ) の数の最適なバランスを保つことを目的としてよく使用されるバックアップ スキーム (184ページ)。GFS を使用すると、直近の数日間については日単位のバックアップから復元し、直近の数週間については週単位のバックアップから復元し、そして過去の任意の時点については月単位のバックアップから復元することができます。

詳細については、「GFS バックアップ スキーム」をご参照ください。

## W

### Windows プレインストール環境(WinPE)

次のいずれかのカーネルを基にした最小限の Windows システム。

- Windows XP Professional Service Pack 2(PE 1.5)
- Windows Server 2003 with Service Pack 1(PE 1.6)
- Windows Vista(PE 2.0)
- Windows Vista SP1 および Windows Server 2008(PE 2.1)
- Windows 7(PE 3.0)

WinPE は一般的に、配置、テスト、診断、およびシステム修復のために OEM および企業によって使用されます。PXE、CD-ROM、USB フラッシュ ドライブ、またはハード ディスクを使用してコンピュータで WinPE を起動できます。WinPE 用 Acronis プラグイン (179ページ) を使用して、Acronis Backup & Recovery 11 エージェント (180ページ) をプレインストール環境で実行することができます。

### WinPE 用 Acronis プラグイン

Acronis Backup & Recovery 11 エージェント for Windows のプレインストール環境版。このプラグインは、ブータブル メディア ビルダを使用して WinPE (179ページ) イメージに追加することができます。結果のブータブル メディア (186ページ) を使用すると、任意の PC 互換コンピュータを起動して、オペレーティング システムを使用せずにほとんどの(ある程度の制限がありますが)直接管理 (190ページ) 操作を実行することができます。GUI を使用してローカルで、またはコンソール (181ページ) を使用してリモートから操作を設定および制御することができます。

### アーカイブ

「バックアップ スキーム (184ページ)」をご参照ください。

## アクティビティ

ユーザーの目的達成のために Acronis Backup & Recovery 11 によって実行されるアクション。例: バックアップ、復元、バックアップのエクスポート、格納域のカタログ作成。アクティビティは、ユーザーまたはソフトウェア自体によって開始されます。タスク (183ページ)を実行すると必ず 1 つ以上のアクティビティが発生します。

## イメージ

ディスク バックアップ (183ページ)と同じです。

## インデックス付け

バックアップ (184ページ)が非重複化された格納域 (190ページ)に保存された後で、ストレージ ノード (181ページ)によって実行されるアクティビティ (179ページ)。

インデックス付け中に、ストレージ ノードによって次の操作が実行されます。

- データ ブロックをバックアップから格納域内の専用ファイルに移動します。このファイルは重複除外データ ストアと呼ばれます。
- バックアップ内で、移動したブロックをフィンガープリント(ハッシュ)と置き換えます。
- 重複除外データを「構築」するために必要なハッシュおよびリンクを重複除外データベースに保存します。

インデックス付けは、バックアップ処理 (185ページ)中にエージェント (180ページ)によって実行される「ソースにおける重複除外」とは反対の「ターゲットにおける重複除外」と考えることができます。ユーザーは、インデックス付けを一時停止および再開することができます。

## エージェント(Acronis Backup & Recovery 11 エージェント)

データのバックアップと復元を実行し、タスク管理やハード ディスクの操作などの他の管理操作をコンピュータ (181ページ)上で実行できるようにするアプリケーション。

バックアップできるデータの種類はエージェントの種類によって異なります。Acronis Backup & Recovery 11 には、ディスクとファイルをバックアップするためのエージェント、および仮想化サーバー上に存在する仮想コンピュータをバックアップするためのエージェントが含まれています。

## エクスポート

アーカイブ (184ページ)のコピーまたはアーカイブの自己完結部分のコピーを指定した場所に作成する処理。エクスポート処理は、単一アーカイブ、単一バックアップ (184ページ)、または同一アーカイブの選択したバックアップに適用できます。コマンド ライン インターフェイスを使用すれば、格納域 (187ページ)全体をエクスポートできます。

## カタログ作成

バックアップ (184ページ)をカタログ作成すると、バックアップの内容がデータ カタログ (184ページ)に追加されます。バックアップは作成するとすぐにエージェント (180ページ)によって自動的にカタログ作成されます。ユーザーは、オプションで自動カタログ作成をオフにし、適宜手動で開始することができます。この場合、ストレージ ノード (181ページ)に保存されているバックアップがノードによってカタログ作成されます。

## クリーンアップ

古いバックアップを破棄するため、またはアーカイブが特定のサイズを超えないようにするために、バックアップ アーカイブ (184ページ)からバックアップ (184ページ)を削除することです。

クリーンアップには、

## コピー

バックアップ (184ページ)を別の場所にコピーします。デフォルトでは、バックアップは、作成後すぐにコピーされます。ユーザーは、コピーの非作業期間を設定することによって、バックアップのコピーを延期することができます。

この機能は、Acronis Backup & Recovery 10 で提供されていたバックアップ保存先の二重化の機能を置き換えて拡張するものです。

## コンソール(Acronis Backup & Recovery 11 管理コンソール)

Acronis エージェント (180ページ)および Acronis Backup & Recovery 11 管理サーバー (187ページ)にリモートまたはローカルでアクセスするためのツールです。

管理者は、コンソールを管理サーバーに接続すると、集中管理されたバックアップ計画 (189ページ)を設定したり、他の管理サーバーの機能にアクセスしたりできます。つまり集中管理 (189ページ)を実行できます。管理者は、コンソールとエージェントの直接接続を使用すると直接管理 (190ページ)を実行できます。

## コンピュータ

オペレーティング システムのインストールによって一意に識別される物理コンピュータまたは仮想コンピュータ。複数のオペレーティング システムがインストールされたコンピュータ(マルチブート システム)は、複数のコンピュータと見なされます。

## ストレージ ノード(Acronis Backup & Recovery 11 ストレージ ノード)

企業データの保護に必要となる各種リソースの使用を最適化するためのサーバー。これは、管理対象の格納域 (188ページ)を作成することによって達成されます。管理者はストレージ ノードによって次のことを実現できます。

- 管理対象の格納域に保存されたデータの単一の集中管理されるカタログ (184ページ)を使用する。
- バックアップ アーカイブ (184ページ)に対するクリーンアップ (180ページ)、ベリファイ (186ページ)、および他の操作を実行することによって管理対象のコンピュータ (188ページ)の不要なCPU 負荷を軽減する。管理者が実行しない場合これらはエージェント (180ページ)によって実行されます。
- 重複除外 (190ページ)を使用して、バックアップ トラフィックおよびアーカイブ (184ページ)によって使用されるストレージ領域を大幅に削減する。
- 暗号化された格納域 (187ページ)を使用して、ストレージ メディアが盗まれたり、悪意を持つ人物がアクセスしたりした場合でも、バックアップ アーカイブへのアクセスを防止します。

## ダイナミック グループ

管理者が指定したメンバシップ条件に従って管理サーバー (187ページ)が自動的に追加するコンピュータ (181ページ)のグループです。Acronis Backup & Recovery 11 には、次のメンバシップ条件があります。

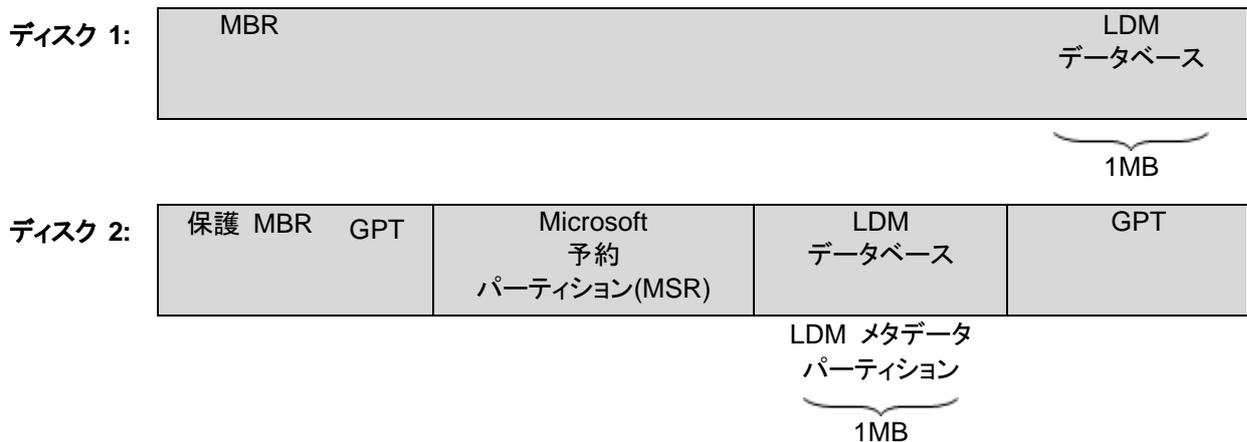
- オペレーティング システム
- Active Directory の組織単位(OU)
- IP アドレス範囲
- .txt/.csv file に記載

コンピュータは、コンピュータがグループの条件を満たす限りダイナミック グループ内に残ります。ただし、管理者は例外を指定することで、特定のコンピュータが条件を満たしていてもダイナミックグループから除外することができます。

## ダイナミック ディスク

Windows 2000 以降から提供されている論理ディスク マネージャ(LDM)によって管理されるハードディスク。LDM を使用すると、ストレージ デバイス上でより柔軟にボリュームを割り当てることができるようになり、フォールト トレランスとパフォーマンスが向上し、ボリューム サイズを大きくすることができます。

ダイナミック ディスクではマスタ ブート レコード(MBR)または GUID パーティション テーブル(GPT)パーティション スタイルを使用できます。MBR または GPT に加えて、各ダイナミック ディスクには LDM がダイナミック ボリュームの設定を保存する隠しデータベースがあります。各ダイナミック ディスクにはディスク グループ内に存在するすべてのダイナミック ボリュームに関する完全な情報が保持され、これによりストレージの信頼性が向上します。このデータベースは、MBR ディスクの最後の 1MB を占有します。GPT ディスク上で、Windows は Microsoft 予約パーティション(MSR)から領域を取得して、専用の LDM メタデータ パーティションを作成します。



MBR(ディスク 1)と GPT (ディスク 2)ディスク上に作成されたダイナミック ディスク。

ダイナミック ディスクの詳細については、次の Microsoft サポート技術情報の記事をご参照ください。

Disk Management (Windows XP Professional Resource Kit) <http://technet.microsoft.com/en-us/library/bb457110.aspx>

816307 Windows Server 2003 ベースのコンピュータでのダイナミック ディスクの使用に関する推奨事例 <http://support.microsoft.com/kb/816307/ja>

## ダイナミック ボリューム

ダイナミック ディスク (182ページ)またはより正確にはディスク グループ (183ページ)上にあるボリューム。ダイナミック ボリュームは複数のディスクに分散することができます。ダイナミック ボリュームは通常、次のような目的に応じて設定されます。

- ボリューム サイズを増やす(スパン ボリューム)
- アクセス時間を短縮する(ストライプ ボリューム)
- 冗長性を導入することでフォールト トレランスを実現する(ミラーおよび RAID-5 ボリューム)

## タスク

Acronis Backup & Recovery 11 によって特定の時間またはイベント時に実行されるアクションのセット。アクションは、人間が判読できないサービス ファイルに記述されます。時間またはイベント(スケジュール)は、保護されたレジストリ キー(Windows)またはファイル システム(Linux)に保存されます。

## ディスク グループ

一般的な設定データを LDM データベースに保存して一括管理できるようにする、複数のダイナミック ディスク (182ページ)。通常、同じコンピュータ (181ページ)内で作成されたすべてのダイナミック ディスクは、同じディスク グループのメンバになります。

LDM または別のディスク管理ツールによって最初のダイナミック ディスクが作成されるとすぐに、ディスク グループ名がレジストリ キー  
HKEY\_LOCAL\_MACHINE\SYSTEM\CurrentControlSet\Services\dmio\Boot Info\Primary Disk Group\Name に設定されます。

次に作成またはインポートされるディスクは同じディスク グループに追加されます。少なくとも 1 つのメンバが存在している限り、そのグループは存在します。最後のダイナミック ディスクが切断されるかベーシック ディスクに変換されると、そのグループは使用が中止されますが、その名前は上記のレジストリ キーに保持されます。ダイナミック ディスクが作成または再接続されると、1 つ多い番号を付加した名前のディスク グループが作成されます。

別のコンピュータに移動した場合、ディスク グループは「外部」と見なされ、既存のディスク グループにインポートするまで使用することはできません。インポートによって、ローカル ディスクと外部ディスクの両方の設定データが更新され、1 つのエントリになります。コンピュータ上にディスク グループが存在していない場合、外部グループはそのままの状態(元の名前)でインポートされます。

ディスク グループの詳細については、次の Microsoft サポート技術情報の記事をご参照ください。

222189 Description of Disk Groups in Windows Disk Management <http://support.microsoft.com/kb/222189/ja/>

## ディスク バックアップ(イメージ)

ディスクまたはボリュームのセクタ ベースのコピーをパッケージした形式のバックアップ (184ページ)。通常は、データを含むセクタのみがコピーされます。Acronis Backup & Recovery 11 では、

すべてのディスク セクタをそのままコピーするオプションが用意されています。これにより、サポートされていないファイル システムのイメージ作成が可能になります。

## データ カタログ

データ カタログを使用すると必要なバージョンのデータを簡単に見つけて復元対象として選択することができます。管理対象のコンピュータ (188ページ) 上で、ユーザーは、このコンピュータからアクセス可能な任意の格納域 (187ページ) 内のデータを表示および検索することができます。管理サーバー (187ページ) 上で使用可能な集中管理されるカタログには、ストレージ ノード (181ページ) に保存されているすべてのデータが含まれています。

物理的には、データ カタログはカタログ ファイルに保存されます。すべての格納域で、通常は格納域に直接置かれる専用のカタログ ファイルのセットを使用します。テープ ストレージなど、カタログ ファイルのセットを使用できない場合、カタログ ファイルは管理対象のコンピュータまたはストレージ ノードのローカル フォルダに保存されます。さらに、ストレージ ノードは、高速にアクセスできるようにするためにリモート格納域のカタログ ファイルもローカルに保存します。

## バックアップ

バックアップは、バックアップ処理 (185ページ) を 1 回実行した結果です。物理的には、特定の日にバックアップされたデータのコピーを含むファイルまたはテープのレコードです。Acronis Backup & Recovery 11 によって作成されたバックアップの拡張子は TIB です。バックアップをエクスポート (180ページ) または統合 (191ページ) した結果である TIB ファイルもバックアップと呼ばれます。

## バックアップ アーカイブ(アーカイブ)

バックアップ計画 (184ページ) によって作成および管理されるバックアップ (184ページ) のセット。1 つのアーカイブに、複数の完全バックアップ (187ページ) だけでなく、増分バックアップ (190ページ) と差分バックアップ (188ページ) も格納できます。同じアーカイブに属するバックアップは、常に同じ場所に保存されます。バックアップ計画にコピー (181ページ) またはバックアップの複数の場所への移動が含まれている場合は、各場所にあるバックアップが別々のアーカイブを形成します。

## バックアップ オプション

バックアップの前後に実行するコマンド、バックアップ ストリームに割り当てるネットワークの最大帯域幅、データ圧縮レベルなどのバックアップ操作 (185ページ) の設定パラメータ。バックアップ オプションはバックアップ計画 (184ページ) の一部です。

## バックアップ スキーム

バックアップ スケジュール、保持のルール(オプション)、およびクリーンアップ (180ページ) スケジュールが含まれているバックアップ計画 (184ページ) の一部です。たとえば、毎月の末日の午前 10 時に完全バックアップ (187ページ) を実行し、日曜日の午後 10 時に増分バックアップ (190ページ) を実行します。3 か月経過したバックアップは削除されます。バックアップ操作が完了するたびに削除するバックアップが確認されます。

Acronis Backup & Recovery 11 では、GFS やハノイの塔のような、一般的な最適化バックアップ スキームを使用したり、カスタム バックアップ スキームを作成したり、データを 1 度にバックアップしたりすることが可能です。

## バックアップ計画(計画)

特定のコンピュータ上で特定のデータを保護する方法を指定したルールのセット。バックアップ計画では次のものを指定します。

- バックアップするデータ
- バックアップ アーカイブ (184ページ)の名前と場所
- バックアップ スキーム (184ページ)これには、バックアップ スケジュールとオプションの保持ルール (191ページ)が含まれます。
- (オプション)バックアップに対して実行する追加の操作(コピー (181ページ)、ベリファイ (186ページ)、仮想コンピュータへの変換)
- バックアップ オプション (184ページ)

たとえば、バックアップ計画には次の情報を含めることができます。

- ボリューム C: をバックアップする(計画によって保護されるデータ)。
- アーカイブに MySystemVolume という名前を付けて \\server\backups\ に保存する(バックアップ アーカイブ名と場所)。
- 月末の日の午前 10 時に月単位の完全バックアップを実行し、日曜日の午後 10 時に増分バックアップを実行する。3 カ月経過したバックアップを削除する(バックアップ スキーム)。
- 最新のバックアップを作成直後にベリファイする(ベリファイ ルール)。
- アーカイブをパスワードで保護する(オプション)。

物理的には、バックアップ計画は管理対象のコンピュータ (188ページ)上で実行されるタスク (183ページ)の集まりです。

バックアップ計画は、コンピュータ上で直接作成するか別のコンピュータからインポートするか(ローカル計画)、管理サーバーからコンピュータに伝達することができます(集中管理用計画 (189ページ))。

## バックアップ操作

特定の日時のデータを復元するためにコンピュータ (181ページ)のハード ディスク上に存在するデータのコピーを作成する処理。

## ハノイの塔

バックアップ アーカイブ (184ページ)のサイズと使用できる復元点 (191ページ)の数の最適なバランスを保つことを目的としてよく使用されるバックアップ スキーム (184ページ)です。復元単位が3つのレベル(日単位、週単位、月単位)のみの GFS (179ページ) スキームとは異なり、ハノイの塔スキームは、バックアップの世代数が増えるにつれて、復元点間の時間間隔が短くなります。これにより、バックアップ ストレージを非常に効率よく使用することができます。

詳細については、「ハノイの塔バックアップ スキーム (46ページ)」をご参照ください。

## ビルトイン グループ

管理サーバー (187ページ)上に永続的に存在するコンピュータのグループ。

ビルトイン グループは削除することも、他のグループに移動することも、手動で変更することもできません。ビルトイン グループ内にカスタム グループを作成することはできません。管理サーバーか

らコンピュータを削除する以外に、ビルトイン グループからコンピュータを削除する方法はありません。

## ブータブル エージェント

Acronis Backup & Recovery 11 エージェント (180ページ)のほとんどの機能を含むブータブル レスキュー ユーティリティ。ブータブル エージェントは Linux カーネルが基になっています。コンピュータ (181ページ)は、ブータブル メディア (186ページ)または Acronis PXE サーバーを使用してブータブル エージェントを起動できます。GUI を使用してローカルで、またはコンソール (181ページ)を使用してリモートから操作を設定および制御することができます。

## ブータブル メディア

ブータブル メディア (186ページ)または WinPE 用 Acronis プラグイン (179ページ)がインストールされた Windows プレインストール環境(WinPE) (179ページ)を格納する、物理的なメディア (CD、DVD、USB フラッシュ ドライブ、またはコンピュータ (181ページ)によってブート デバイスとしてサポートされるその他のメディア)。Acronis PXE サーバーまたは Windows 展開サービス (WDS)からネットワーク ブートを使用して、前述の環境でコンピュータを起動することも可能です。ブータブル コンポーネントがアップロードされたこれらのサーバーは、ブータブル メディアの一種と考えることもできます。

ブータブル メディアは次の状況で最も多く使用されます。

- 起動できないオペレーティング システムの復元
- 破損したシステム内に残存するデータへのアクセスとバックアップ
- ベア メタル状態のディスクへのオペレーティング システムの配置
- ベア メタル状態のディスクへのベーシック ボリュームまたはダイナミック ボリューム (183ページ)の作成
- サポートされていないファイル システムを使用しているディスクのセクタ単位のバックアップ
- アクセス制限、アプリケーションの実行による連続的なロック、またはその他の原因のためにオンラインでバックアップできないデータのオフライン バックアップ

## ベリファイ

バックアップ (184ページ)からデータを復元できるかどうかを確認する処理です。

ファイル バックアップのベリファイでは、バックアップからダミーの復元先に対してすべてのファイルの復元を疑似的に実行します。ディスク バックアップのベリファイでは、バックアップに保存されているすべてのデータ ブロックのチェックサムを計算します。両方の処理で、リソースを集中的に使用します。

ベリファイの成功は復元の成功の可能性が高いことを示しますが、復元処理に影響するすべての要因を確認するわけではありません。オペレーティング システムをバックアップする場合、ブータブル メディアから予備のハード ディスク ドライブに復元テストを実行した場合にのみ将来の復元が保証されます。

## メディア ビルダ

ブータブル メディア (186ページ)を作成するための専用のツール。

## ローカル タスク

直接管理 (190ページ)を使用して管理対象のコンピュータ (188ページ)上で作成されるタスク (183ページ)。

## ローカルのバックアップ計画

直接管理 (190ページ)を使用して管理対象のコンピュータ (188ページ)上に作成されたバックアップ計画 (184ページ)。

# 漢字

## 暗号化されたアーカイブ

AES(Advanced Encryption Standard)に従って暗号化されたバックアップ アーカイブ (184ページ)。アーカイブの暗号化オプションとパスワードをバックアップ オプション (184ページ)で設定すると、そのアーカイブに属する各バックアップは、エージェント (180ページ)によって暗号化されてから保存先に保存されます。

## 暗号化された格納域

すべての読み書きが、ストレージ ノード (181ページ)によって透過的に暗号化および暗号化解除される管理対象の格納域 (188ページ)。暗号化キーはノードに保存された格納域専用の暗号化キーを使用します。ストレージ メディアが盗まれたり権限のない人物によってアクセスされた場合でも、格納域の内容はストレージ ノードにアクセスしなければ、暗号化解除することはできません。暗号化されたアーカイブ (187ページ)の暗号化は、エージェント (180ページ)によって実行されます。

## 仮想コンピュータ

Acronis Backup & Recovery 11 管理サーバー (187ページ)では、コンピュータにエージェント (180ページ)をインストールせずに、そのコンピュータを仮想ホストからバックアップできる場合、コンピュータ (181ページ)は仮想コンピュータと見なされます。このようなコンピュータは、**[仮想コンピュータ]** セクションに表示されます。エージェントがゲスト システムにインストールされた場合、コンピュータは **[エージェントがインストールされているコンピュータ]** セクションに表示されます。

## 格納域

バックアップ アーカイブ (184ページ)を保存する場所。格納域はローカル ドライブ、ネットワーク上のドライブ、または外部 USB ドライブなどの取り外し可能なメディア上に作成することができます。格納域のサイズまたは格納域内のバックアップの数を制限する設定はありません。クリーンアップ (180ページ)を使用して各アーカイブのサイズを制限できますが、格納域に保存するアーカイブの合計サイズはストレージのサイズによってのみ制限されます。

## 完全バックアップ

バックアップ用に選択されたすべてのデータを含む、それ自体で完結したバックアップ (184ページ)。完全バックアップからデータを復元する場合は、他のバックアップにアクセスする必要はありません。

## 管理サーバー(Acronis Backup & Recovery 11 管理サーバー)

企業ネットワーク内のデータ保護を管理する中央のサーバー。Acronis Backup & Recovery 11 管理サーバーは、管理者に次の機能を提供します。

- Acronis Backup & Recovery 11 インフラストラクチャへの単一のエントリ ポイント
- 集中管理されるバックアップ計画 (189ページ)とグループを使用して、多数のコンピュータ (181ページ)上のデータを簡単に保護する方法
- 全社規模の監視およびレポート機能
- 全社のバックアップ アーカイブ (184ページ)を保存するための集中管理用格納域 (189ページ)を作成する機能
- ストレージ ノード (181ページ)を管理する機能
- ストレージ ノードに保存されるすべてのデータが集中管理されるカタログ (184ページ)

ネットワーク上に複数の管理サーバーがある場合、それらのサーバーは独立して動作し、異なるコンピュータを管理し、異なる集中管理用格納域を使用してアーカイブを保存します。

## 管理対象のコンピュータ

少なくとも 1 つの Acronis Backup & Recovery 11 エージェント (180ページ)がインストールされている物理コンピュータまたは仮想コンピュータ (181ページ)。

## 管理対象の格納域

ストレージ ノード (181ページ)によって管理される集中管理用格納域 (189ページ)。管理対象の格納域内のアーカイブ (184ページ)には次の方法でアクセスできます。

```
bsp://node_address/vault_name/archive_name/
```

物理的には、管理対象の格納域は、ネットワーク共有、SAN、NAS、ストレージ ノードのローカルハード ディスク ドライブ、またはストレージ ノードにローカル接続されたテープ ライブラリに置くことができます。ストレージ ノードは、管理対象の格納域に保存される各アーカイブをクリーンアップ (180ページ)およびベリファイ (186ページ)します。管理者は、ストレージ ノードが実行するその他の処理(重複除外 (190ページ)、暗号化)を指定することができます。

## 管理対象外の格納域

管理対象の格納域 (188ページ)ではないすべての格納域 (187ページ)。

## 計画

「バックアップ計画 (184ページ)」をご参照ください。

## 個人用格納域

直接管理 (190ページ)を使用して作成されたローカルまたはネットワーク上の格納域 (187ページ)。個人用格納域が作成されると、管理対象のコンピュータの **[格納域]** 一覧に個人用格納域へのショートカットが表示されます。複数のコンピュータで、ネットワーク共有などの物理的に同じ場所を個人用格納域として使用できます。

## 差分バックアップ

差分バックアップは、前回の完全バックアップ (187ページ)に対するデータの変更点を保存します。差分バックアップからデータを復元するには、対応する完全バックアップにアクセスする必要があります。

## 災害復旧計画(DRP)

バックアップされたデータ アイテムの一覧およびバックアップからそれらの項目を復元する方法に関する詳細な指示を含む電子メール メッセージ。

対応するバックアップ オプション (184ページ)が有効になっている場合、バックアップ計画によって最初に正常に実行されたバックアップの後、およびデータ アイテムまたは DRP パラメータの一覧に変更があるたびに、DRP が指定された電子メール アドレスに送信されます。

## 集中管理

Acronis Backup & Recovery 11 管理サーバー (187ページ)と呼ばれる集中管理ユニットを使用した Acronis Backup & Recovery 11 インフラストラクチャの管理。集中管理操作には次のものが含まれます。

- 登録されたコンピュータ (191ページ)およびコンピュータのグループ用の集中管理用バックアップ計画 (189ページ)の作成
- コンピュータ (181ページ)の静的グループ (190ページ)およびダイナミック グループ (181ページ)の作成と管理
- コンピュータ上に存在するタスク (183ページ)の管理
- アーカイブを保存する集中管理用格納域 (189ページ)の作成と管理
- ストレージ ノード (181ページ)の管理
- Acronis Backup & Recovery 11 コンポーネントのアクティビティの監視、レポートの作成、集中管理のログの表示など

## 集中管理されたバックアップ計画

管理サーバー (187ページ)から管理対象のコンピュータ (188ページ)に配置されるバックアップ計画 (184ページ)。この計画は、管理サーバー上で元のバックアップ計画を編集する場合にのみ変更できます。

## 集中管理タスク

管理サーバー (187ページ)からコンピュータに伝達されるタスク (183ページ)。このタスクは、管理サーバー上で元のタスクまたは集中管理用バックアップ計画 (189ページ)を編集する場合にのみ変更できます。

## 集中管理用格納域

管理サーバー (187ページ)の管理者によって、バックアップ アーカイブ (184ページ)のストレージとして機能させるために割り当てられるネットワーク接続された場所。集中管理用格納域は、ストレージ ノード (181ページ)によって管理することも管理対象外にすることもできます。集中管理用格納域に保存されるアーカイブの合計数とサイズは、ストレージのサイズによってのみ制限されます。

管理サーバーの管理者が集中管理用格納域を作成するとすぐに、サーバーに登録されているコンピュータ (191ページ) すべてに格納域名と格納域のパスが配布されます。格納域のショートカットは、**格納域**の一覧に記載されているコンピュータ上に表示されます。ローカルの計画を含むコンピュータに存在するすべてのバックアップ計画 (184ページ) で集中管理用格納域を使用することができます。

管理サーバーに登録されていないコンピュータ上では、集中管理用格納域にバックアップする権限を持つユーザーが格納域のフル パスを指定することで、バックアップを実行できます。格納域が管理対象である場合は、格納域に保存される他のアーカイブと同様に、ユーザーのアーカイブがストレージ ノードによって管理されます。

## 重複除外

重複して出現する同一情報は一度だけ保存する方法。

Acronis Backup & Recovery 11 では、ストレージ ノード (181ページ) に保存されているバックアップ アーカイブ (184ページ) に重複除外テクノロジーを適用することができます。これにより、アーカイブによって使用されるストレージ領域、バックアップ トラフィック、およびバックアップ中のネットワークの使用量が最小限に抑えられます。

## 重複除外された格納域

重複除外 (190ページ) が有効になっている管理対象の格納域 (188ページ)。

## 静的グループ

管理サーバー (187ページ) の管理者が、手動でグループにコンピュータを追加することによって構成するコンピュータのグループ。コンピュータは、管理者がグループまたは管理サーバーからコンピュータを削除するまで静的グループ内に残ります。

## 増分バックアップ

前回のバックアップに対するデータの変更点を保存するバックアップ (184ページ)。増分バックアップからデータを復元するには、同じアーカイブ (184ページ) の他のバックアップにアクセスする必要があります。

## 直接管理

管理対象のコンピュータ (188ページ) 上でコンソール (181ページ) とエージェント (180ページ) の直接接続を使用して実行される操作(これに対し、操作が管理サーバー (187ページ) 上で構成され、サーバーによって管理対象のコンピュータに伝達されるのが集中管理 (189ページ) です)。

直接管理操作には次のものが含まれます。

- ローカル バックアップ計画 (187ページ) の作成と管理
- 復元タスクなどのローカル タスク (186ページ) の作成と管理
- 個人用格納域 (188ページ) およびそこに保存されるアーカイブの作成と管理
- コンピュータ上に存在する集中管理タスク (189ページ) の状態、進行状況、およびプロパティの表示
- エージェントの処理ログの表示および管理

- ディスクのクローン作成、ボリュームの作成、ボリュームの変換などのディスク管理操作  
ブータブル メディア (186ページ)を使用した操作も、直接管理の一種です。

## 登録

管理対象のコンピュータ (188ページ)を管理サーバー (187ページ)に追加する処理。

登録は、コンピュータ上に存在するエージェント (180ページ)とサーバーの間に信頼関係を設定します。登録中に、コンソールは管理サーバーのクライアント証明書を取得してエージェントに渡し、エージェントはそれを使用して接続を試みるクライアントを認証します。これにより、信頼されるプリンシパル(管理サーバー)になりすましてネットワーク攻撃者が偽造した接続を確立することを防止できます。

## 登録済みのコンピュータ

管理サーバー (187ページ)によって管理されるコンピュータ (181ページ)。コンピュータは、一度に1つの管理サーバーに対してのみ登録できます。コンピュータは登録 (191ページ)処理を行うと、登録済みになります。

## 統合

同じアーカイブ (184ページ)に属する複数のバックアップ (184ページ)を1つのバックアップに結合すること。

統合は、手動によってまたはクリーンアップ (180ページ)中にバックアップを削除するときに必要な場合があります。たとえば、保持ルールのために、完全バックアップ (187ページ)が期限切れになり削除する必要があっても、この完全バックアップの次の増分 (190ページ)バックアップは保持しなければならない場合があります。この場合、これらのバックアップは1つの完全バックアップに結合され、そのバックアップに増分バックアップの日付が付けられます。統合には多くの時間とシステム リソースが必要になることがあるため、保持ルールでは、依存関係のあるバックアップを削除しないオプションが提供されています。この例では、増分バックアップが期限切れになるまで完全バックアップも保持されます。両方のバックアップが期限切れになった時点で、両方とも削除されます。

## 復元点

バックアップされたデータを復元することができる日時。

## 保持ルール

バックアップ計画によって作成されたバックアップ (184ページ)を削除または移動するタイミングと方法を指定するバックアップ計画 (184ページ)の一部。

## 補充可能プール

必要なときに**空きテープ** プールからテープを取得できるテープ プールです。

## 論理ボリューム

この用語には文脈に応じて2つの意味があります。

- ボリュームとは、拡張パーティション テーブルに保存された情報です(これに対してプライマリボリュームは、マスター ブート レコードに保存された情報です)。
- Linux カーネル用の LVM(論理ボリュームマネージャ)を使用して作成されるボリューム。LVMを使用すると、管理者が大きなストレージ領域を必要に応じて再配分したり、ユーザー サービスを中断させることなく新しい物理ディスクを追加したり古い物理ディスクを取り外したりできるので柔軟性が高くなります。Acronis Backup & Recovery 11 エージェント (180ページ) for Linux では、Linux with 2.6.x カーネルまたは Linux ベースのブータブル メディア (186ページ)での実行時に、論理ボリュームのアクセス、バックアップ、および復元を行うことができます。